七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡

県道能登島和倉線改良工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

1982

石川県立埋蔵文化財センター

七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡

県道能登島和倉線改良工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

1982

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1、本書は県道能登島和倉線改良工事に係る七尾市奥原町地内に所在する、奥原縄文遺跡、奥原遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2、本遺跡の試掘調査、発掘調査は石川県立埋蔵文化財センターが実施した。試掘調査は昭和56年3月11日から3月13日まで行ない、中島俊一、谷内尾晋司（主事）が担当した。本調査は昭和56年4月22日から8月5日まで行ない、平田天秋（保存技術係長）、西野秀和、福島正実、浜野伸雄（主事）、土上正男（嘱託）が担当した。

3、発掘調査及び整理作業にあたって次の諸氏の御教示を受けた。（敬称略）

浜岡賢太郎（県立七尾高校長）、荒木繁行（石川考古学研究会副会長）、四柳嘉章（宇出津水産高校）

4、石器類の石質鑑定には、金沢大学教授　藤　則雄博士の御教示・玉稿を受けた。

5、発掘調査の実施にあたっては、石川県七尾土木事務所、七尾市教育委員会、七尾市シルバー人材センター、（株）野桑組、（株）在沢組、イソライト工業（株）の他、次の各氏の協力を受けた。

加富栄吉、津田耕吉、土肥富士夫、村井伸行、高田則晃、今井淳一、浦部常寿、宮下栄仁

6、本遺跡出土の整理作業は、石川県埋蔵文化財協会に委託し、荒木繁行（同事務局長）の他、次の各氏が復元、実測、トレースを行なった。

宮本洋子、浅野豊子、松田智恵子、浦　照子。

7、本遺跡の測量は、現地形を㈱七尾測量が、遺構実測は㈱セントラル航業が航空測量で行なった。

8、本書の執筆と編集は、橋本澄夫（県立埋蔵文化財センター次長）、平田、西野が担当した。

9、本遺跡の出土遺物および諸記録は、当センターが一括して保存管理にあたっている。

10、本書の遺構、遺物挿図の指示は次のとおりであるが、適宜変更したものについては、挿図に明示した。

(1)　挿図の縮尺

竪穴式住居址－1／80、土坑実測図－1／60、土器実測図及び拓影－1／3、石器実測図－1／3

(2)　方位は全て磁北を表示する。（磁針方位西偏約7°10′—1973年現在）

(3)　水準は海抜高で表示する。

(4)　写真図版の遺物の縮尺は任意である。

(5)　住居址内ピットの（　）は深さを示す。

11、本遺跡の所在する丘陵に含まれる和倉駅貝層の調査は、金沢大学　藤　則雄が担当し、七尾市教育委員会、及び地元研究者の協力を受けた。

目　　次

第１章　遺跡の環境……（平田天秋）… 1
　第１節　地理的環境…… 1
　第２節　歴史的環境…… 1
第２章　調査に至る経緯と経過……（西野秀和）… 5
　第１節　調査に至る経緯…… 5
　第２節　調査日誌…… 6
第３章　検出された遺構と遺物…… 8
　第１節　奥原縄文遺跡……（平田）… 8
　　1　遺跡の状況と調査の状況　2　遺構　3　出土遺物
　第２節　奥原遺跡……（平田、西野）… 28
　　1　遺構の配置と層序、2　第１号住居址、3　第２号住居址、4　第３号住居址、
　　5　第４号住居址、6　第６号住居址、7　第７号住居址、8　第１号土坑、
　　9　第２号土坑、10　包含層の出土遺物、11、近世火葬墓
第４章　考　　察…… 84
　第１節　奥原縄文遺跡の遺構と遺物……（平田、藤　則雄）… 84
　第２節　奥原遺跡の遺構と遺物……（西野）… 86
　第３節　能登邑知地溝帯とその周辺の弥生文化……（橋本澄夫）… 92
第５章　和倉駅貝層……（藤　則雄）…105

挿図目次

第１図　遺跡の位図…… 2
第２図　奥原縄文遺跡地形図（1／600）…… 8
第３図　発掘区土層断面図…… 9
第４図　遺構配置図（1／300）…… 10
第５図　第２号土坑（１／30）…… 10
第６図　第３号土坑（１／30）…… 11
第７図　第３号土坑出土土器（１／３）…… 12
第８図　縄文土器（１）（１／３）…… 13
第９図　縄文土器（２）（１／３）…… 15
第10図　縄文土器（３）（１／３）…… 16
第11図　縄文土器（４）（１／３）…… 18
第12図　縄文土器（５）（１／３）…… 19

第13図　縄文土器（６）（１／３）……21
第14図　縄文土器（７）（１／３）……22
第15図　縄文土器（８）（１／３）……23
第16図　石器（１）（１／３）……25
第17図　石器（２）（１／３）……26
第18図　石器（３）（１／２）……26
第19図　奥原遺跡地形図（1／600）……29・30
第20図　遺構配置図（1／400）……31・32
第21図　土層断面図（１）（１／80）……33
第22図　土層断面図（２）（１／80）……34
第23図　土層断面図（３）（１／80）……35
第24図　土層断面図（４）（１／80）……36
第25図　第１号住居址（１／80）……38
第26図　第１号住居址出土土器（１）（１／３）……39
第27図　第１号住居址出土土器（２）（１／３）……41
第28図　第２号住居址（１／80）……42
第29図　第２号住居址出土土器（１）（１／３）……44
第30図　第２号住居址出土土器（２）（１／３）……45
第31図　第２号住居址出土土器（３）（１／３）……46
第32図　鉄器（１／２）……47
第33図　第３号住居址（１／80）……48
第34図　第３号土坑（１／40）……49
第35図　第３号住居址出土土器（１）（１／３）……50
第36図　第３号住居址出土土器（２）（１／３）……51
第37図　管玉（１／２）……52
第38図　第４号住居址（１／80）……53
第39図　第４号住居址出土土器（１／３）……54
第40図　第６号住居址（１／80）……56
第41図　第６号住居址出土土器（１／３）……57
第42図　第７号住居址（１／80）……58
第43図　第７号住居址出土土器（１）（１／３）……60
第44図　第７号住居址出土土器（２）（１／３）……61
第45図　第１号土坑（１／60）……62
第46図　第２号土坑（１／60）……63
第47図　第２号土坑出土土器（１／３）……63
第48図　包含層からの出土遺物（１）（１／３）……65

第49図　包含層からの出土遺物（２）（１／３）…… 66
第50図　包含層からの出土遺物（３）（１／３）…… 69
第51図　包含層からの出土遺物（４）（１／３）…… 70
第52図　包含層からの出土遺物（５）（１／３）…… 73
第53図　包含層からの出土遺物（６）（１／３）…… 74
第54図　包含層からの出土遺物（７）（１／３）…… 75
第55図　包含層からの出土遺物（８）（１／３）…… 76
第56図　包含層からの出土遺物（９）（１／３）…… 77
第57図　土師器（１／３）…… 80
第58図　土錘（１／３）…… 80
第59図　管玉（１／２）…… 80
第60図　須恵器（１／３）…… 81
第61図　須恵器・中世陶（１／３）…… 83
第62図　近世火葬墓（１／30）…… 84
第63図　土師質土器（１／３）…… 84
第64図　古銭拓影（１／２）…… 84
第65図　中島町小牧・外遺跡出土の柴山出村式土器…… 95
第66図　県立七尾高校敷地内出土の有段石斧…… 96
第67図　七尾市細口源田山遺跡出土の櫛描文土器…… 98
第68図　七尾市細口源田山遺跡の方形周溝墓群…… 99
第69図　金沢市吉原七ツ塚遺跡の方形周溝墓群……100
第70図　宇ノ気町鉢伏茶臼山の高地性集落跡……103

図版目次

巻頭図版　奥原遺跡全景（セントラル航業㈱撮影）
図版　1　航空写真（セントラル航業㈱撮影）
図版　2　奥原縄文遺跡航空写真（セントラル航業㈱撮影）
図版　3　遺跡近景（南からのぞむ）　調査風景（北からのぞむ）
図版　4　遺跡全景（北からのぞむ）　第３号土坑
図版　5　縄文土器（１）
図版　6　縄文土器（２）
図版　7　縄文土器（３）
図版　8　縄文土器（４）
図版　9　縄文土器（５）
図版　10　縄文土器（６）
図版　11　石器（石鏃・石槍・石核・磨製石斧）
図版　12　石器（打製石斧・磨石・凹石・敲石・石皿）

図版　13　奥原遺跡全景（セントラル航業㈱撮影）　遺跡遠景（東からのぞむ）
図版　14　遺跡遠景（西からのぞむ）　遺跡近景（西からのぞむ）
図版　15　遺跡近景（北をのぞむ）　遺跡近景（北からのぞむ）
図版　16　発掘風景
図版　17　発掘風景（ピットの発掘）　発掘風景（住居址の発掘）
図版　18　第１号住居址　同土器出土状況
図版　19　第２号住居址　同土器出土状況
図版　20　ピット群全景
図版　21　第３号住居址全景
図版　22　第３号住居址土器出土状況
図版　23　第４号住居址全景
図版　24　第４号住居址土器出土状況　同外郭溝断面　同土器出土状況
図版　25　第６号住居址全景　同土器出土状況
図版　26　第７号住居址全景
図版　27　第７号住居址調査風景　同床面検出状況
図版　28　第７号住居址外郭溝内土器出土状況
図版　29　第１号土坑　第２号土坑
図版　30　近世の火葬墓検出状況
図版　31　調査の記録（器材搬入　丘陵裾部試掘トレンチ　表土除去）
図版　32　調査の記録（遺構検出　住居址発掘　航空測量）
図版　33　出土土器　（甕　台付壺）
図版　34　出土土器　（甕　壺）
図版　35　出土土器　（鉢）
図版　36　出土土器　（鉢　器台）
図版　37　出土土器　（高坏　スタンプ文）　管玉　土錘
図版　38　須恵器　珠洲焼

第１章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

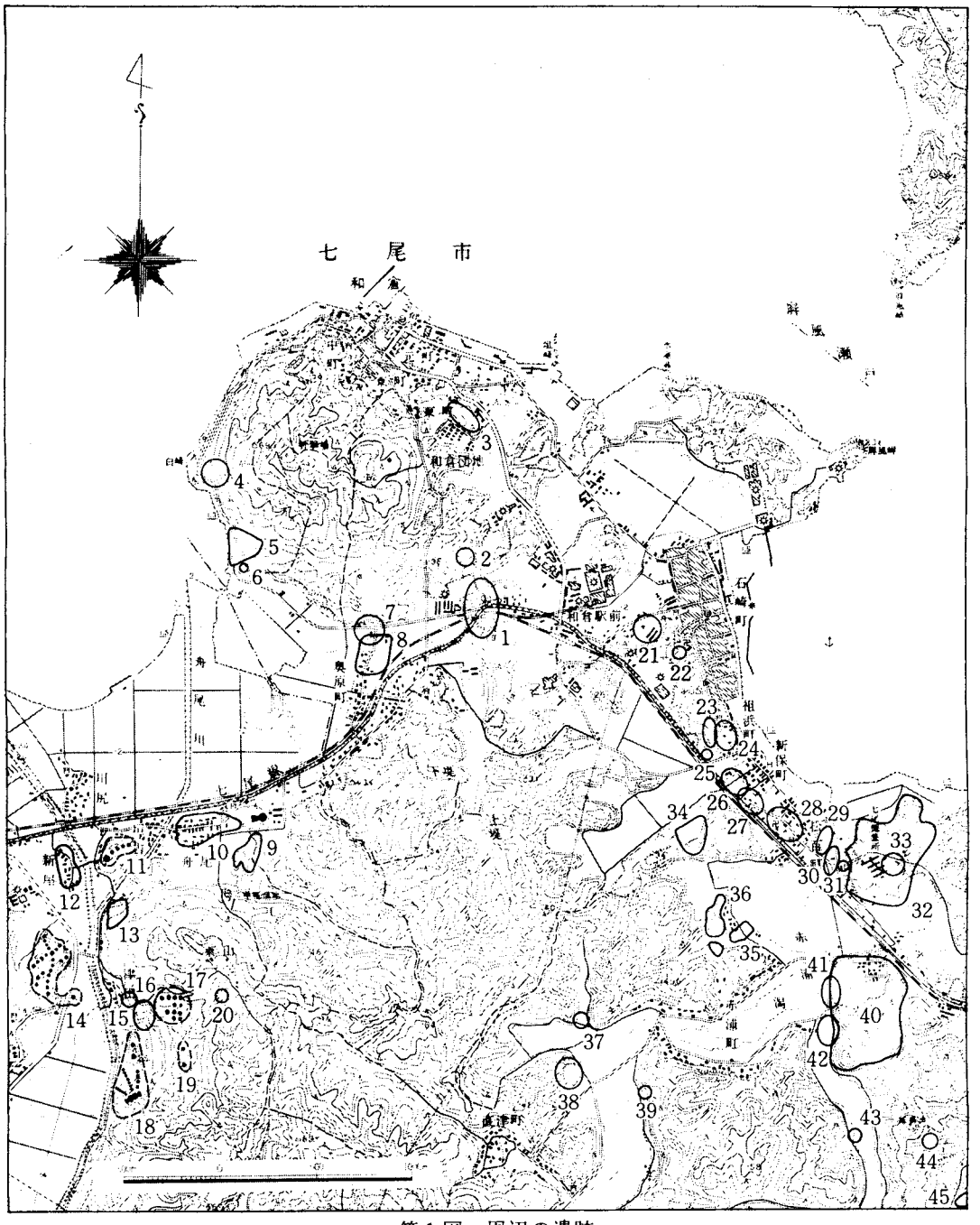
七尾市奥原町(通称オハエ）に所在する。七尾市は能登半島の中央部東海岸側に位置し、市中央部より北西約６㎞の海岸線に面して名泉和倉温泉がある。その和倉温泉の入口西側の丘陵上に本遺跡はある。本遺跡の占地する台地は本来、和倉温泉後背の山系と直津の山系とがヤセ尾根で続いていたと思われるが、調査区南側では国道249号線、国鉄七尾線のために分断され、南側では10～20ｍの急崖となっている。国鉄七尾線和倉駅より北西約500ｍの距離にある。周辺を見渡すと北方には七尾西湾を経て能登島(西島)、東側には石動山系、さらに天気のよい日には立山連峰が眺められる。一方西側では区界を接する田鶴浜町、中島町が望まれる。近くでは眼下（東約１㎞）に沿岸漁業を主とした七尾湾内での漁業の中心地石崎町がある。また反対側（西側）奥原町地内は古くから低湿地を埋め立て、湿田ではレンコンの栽培が盛んである。また、埋め残された入江には小規模なカキの養植が行われている。台地上から近隣を眺めるといたる所の山肌が削り取られ、黄褐色の生々しい崖面が露出し旧地形はかなり変貌している。と言うのも和倉、奥原地区には良質の和倉含珪藻泥岩層（ケイソウ土）が広く分布しており、昭和に入ってから珪藻土工業が発達したためである。耐熱レンガ、コンロ、火鉢などを生産する工場の煙突が林立している。

周辺は赤浦潟に代表されるように、小さい入江がヒトデ状に入り組み、また低湿の沼が多くあり、永年の間に後背の山地を削り埋め立てられ、また、低湿なるがゆえに荒地として残されたままの地域もある。また、周囲の山系も20～60ｍ級の低平なるがゆえに河川に恵まれず、あちらこちらに所在する谷水田の灌漑用水は谷がしらを堰止めた溜池にたよらざるを得ない。

第２節　歴史的環境

(1)　縄文時代

先ず周辺の遺跡を縄文時代に属するものから概観していくと、同一山系地内（標高69.3ｍ）では現在の所、唯一のものとして近年津田耕吉、桜井憲弘両氏（石川考古学研究会員）の踏査により発見された東町干場遺跡がある。本遺跡よりは真北約800ｍの和倉団地後背の台地上で畑地となっている。採集される遺物としては石器類が多く、石斧、石鏃、石錘、石ヒなどがあるが、土器類については細片が多く時期を明らかにできるものはない。本遺跡を含む和倉後背の山系は未踏査の部分が多く東町干場遺跡が唯一のもので赤浦潟周辺の状況に頼らずを得ない。赤浦潟を望む20～50ｍ級の低丘な台地上あるいは縁辺には多くの縄文時代遺跡が群在する。数次に亘る発掘調査が実施され近年報告書の刊行をみた赤浦遺跡は、本遺跡の南東約3,000ｍにある。能登では有数の規模と内容をあわせもつ遺跡であった。周辺の台地を構成する土砂は埋立用の土砂として最適のものであり、早くより土砂採集が進行し、遺跡の破壊、発掘調査のくりかえしでそのほとんど



第１図　周辺の遺跡

1　奥原遺跡、2　奥原縄文遺跡、3　東町干場遺跡（縄文）、4　奥原新遺跡、5　奥原Ｂ遺跡、6　奥原古墳、7　奥原Ａ遺跡、8　奥原館跡、9　舟尾古墳群、10　舟尾遺跡（仮称）、11　垣吉古墳群
12　新屋遺跡（仮称）、13　垣吉遺跡（仮称）、14　北側中世古墳群、15　垣吉Ａ遺跡、16　垣吉Ｂ遺跡、17　東山古墳群、18、高田古墳群、19、垣吉古墳群、20　東山遺跡、21　石崎遺跡、22　石崎古墳　23　祖浜イシノボリ遺跡、24　祖浜遺跡、22　祖浜バス停裏遺跡、26　新保Ｂ遺跡、27　新保Ｃ遺跡、28　松百Ｃ遺跡
29　松百Ａ遺跡、30　松百Ｂ遺跡、31　松百遺跡、32　松百上野砦跡、33　松百Ｄ遺跡、34　新保Ａ遺跡、35　赤浦古墳群、36　赤浦遺跡、37　赤浦やまと遺跡、38　直津いまはな遺跡、39　赤浦Ｂ遺跡、40　赤浦遺跡（縄文）、41　赤浦遺跡（古墳）、42　赤浦かくちだ遺跡、43　赤浦大割遺跡、44　小島池底遺跡、45　小島十三塚遺跡

が消え失せてしまった。土器類では中期前葉から後期前葉までの多くの遺物を出土し、貝塚、住居址等の多くが検出され、打製石斧、磨製石斧、石皿、石鏃、土偶、石製装飾品などの多くの遺物と貝塚からは骨製品（骨牙製穿孔品、尖頭器など）のほか動物遺存体が検出されている。中期前葉から後期前葉の長期間、間断なく営まれた集落でありまた面積の広大なことから言っても県内の代表的遺跡と言える。また南東1,600mの赤浦潟北辺には新保A、新保B遺跡が所在する。両遺跡は昭和41年橋本澄夫氏の率いる七尾高等学校郷土研究クラブの発見によるものである。新保A（県No.2953）遺跡は潟を望む低丘な台地上に占地し通称ドウダにある。前期後半の遺跡で縄文式土器、磨製石斧、凹石、石鏃などが出土している。国鉄七尾線をはさんで250mの通称イチバンクリには後期後半～晩期前半に属する新保B遺跡がある。本遺跡では小規模な試掘が実施されており土坑状のピット内から土偶一点の検出があった。また他には縄文式土器の他、打製石斧、磨製石斧、石錘などが出土している。また近辺では祖浜イシノボリ遺跡（県No.2959）がある。中期末葉の時期に比定され縄文式土器、磨製石斧、石鏃、凹石などが出土している。他に縄文時代のものとしては赤浦潟周辺での縄文遺跡の他皆無に近い。他には内容の不鮮明なものとして松百遺跡（県No.2948、縄文中期）、赤浦A遺跡（県No.6296）、赤浦B遺跡（県No.6295）、祖浜バス停裏遺跡（県No.2957）などがあり本遺跡より西方では舟尾川流域に東山遺跡（県No.3118、田鶴浜町）が唯一存在する。諏訪開拓団地開墾の際に遺物が出土したと伝えられるが内容等については不明である。

(2) 弥生時代

一方弥生時代に属する遺跡は極めて少ないと言える。南東約4kmの七尾南湾に突出する大杉崎先端近く、海岸に望む低地（通称ウスギ）の畑地に弥生式土器が散布している。周辺の山地、台地上の分布調査が遅れていることもあり唯一の弥生期(中期)の遺跡ではあるが発掘調査等は実施されておらず詳細については不明である。現在その遺跡については不明であるが秋田喜一氏の報文橋本澄夫氏の報文によれば現在その遺物は七尾市矢田町の泉龍寺に保管されているもので地文には縄文が施こされ、口縁に平行する半隆起線の間を上下交互に三角状に彫去し波状文帯をつくりだした東北地方に類例の求められる天王山式に対比されているものである。

(3) 古墳時代

古墳時代については、山地裾部にかなりの土師器の散布を見るようになる。津向大杉崎B遺跡赤浦遺跡、祖浜遺跡、新保B遺跡等で古墳時代の土器が採集される。大杉崎遺跡については昭和40年8月に一部緊急調査を実施している（加富栄吉、松浦五郎、田川捷一、橋本澄夫の各氏）。ブルドーザーによる表土除去中の発見になるもので、住居址もかろうじて約⅓が遺存する状態であった。一辺が4mを呈する隅円方形を呈するものであった。住居址中央部には焼土は認められたが、柱穴の検出はなかった。出土遺物には土師器の甕、高坏などがあり古墳時代前期のものと見られる。また、祖浜遺跡は（県No.2960）先の縄文時代の項でもふれた祖浜イシノボリ遺跡の北東に隣接して所在している。昭和44年には一部遺跡状況を見極めるための試掘調査（1.5×5m）を実施している。包含層も1m程度と厚く、上層では平安時代・古墳時代後期の土師器、須恵器が出土し、下層につれて古墳時代前期の土師器が出土するが調査地区では土層の攪乱のため明瞭な層序ではなかったと言う。当初製塩土器の層序の確認に意を注いでいたのであるが上述したように確認は

ならなかったが砂丘上に立地する長期の複合遺跡と言える。新保Ｂ遺跡は縄文時代の所で述べたがそれと同一地点である。“く„の字口縁の甕、壺、高坏などが出土しており後期古墳時代の所産と考えられるものである。古墳の築造は南西約３kmの二宮川下流域の田鶴浜町、舟尾、垣吉、津田周辺に群をなしてみられるようになる。そのほとんどは後期古墳と推定される。赤浦潟周辺でも近年、津田耕吉氏により６基以上の後期古墳群が発見されている。（赤浦古墳群県No.6297）

一方古墳時代以降の生産遺跡としては七尾湾に面する海岸線及び狭小な入江に望んで製塩遺跡が多く本地域の特徴と言えるであろう。また、かなり奥に入り込んだ地点にも見い出すこともできる。近くでは西側600ｍの丘陵裾から水田にかけ通称タチノカクテで広範に製塩土器の散布がみられる。細片が多く、時期等については判然としない（尖底）。また、同遺跡より和倉方向へ約800ｍ程度進んだ通称クマノカミでも台付製塩土器を出土する奥原Ｂ遺跡（県No.2966）他にも石崎小学校々庭、祖浜遺跡、新保Ｃ遺跡（台付式）、赤浦やまと遺跡（台付式、尖底式）などが所在するが不明の点が多い。なお、昭和47年には赤浦かくちだ遺跡が調査され良好な資料と調査結果が得られている。

(4)　奈良・平安時代

律令期の集落遺跡は近隣では発見されていないが、低地の製塩遺跡などと複合している可能性が非常に高い。

(5)　中　　世

一方中世になると西側約600ｍの丘陵裾には奥原Ａ遺跡（製塩）と複合する形で奥原館跡が存在する。奥原斉藤氏の館跡と推定されている。一部は集落と重複しており、付近には館の垣内（タチノカクチ）、一番屋敷、二番屋敷、丸垣内、垣内田などの地名が残されている。七尾と田鶴浜を結ぶ交通の要衝の地にあたりもっともの占地と思われる。

以上で本遺跡の周辺の状況を概観してきたのであるが、赤浦湯周辺の縄文遺跡、新保、祖浜周辺では弥生時代・古墳時代の遺跡が多く、低地及び山裾には製塩遺跡が点在しているがいずれの遺跡についても本格的な発掘調査は実施されておらず詳細の点については不明である。

（平田天秋）

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

能登島は東西約14km・南北約７km・周囲約71km・面積47.21km²の規模を持ち、七尾湾の東西に横たわり、北、南、西湾の三つに分ける島である。能登島は沈降により半島と分離したため複雑な海岸地形をなし、七尾港から南岸の須曽まで約6.5kmをはかるが、北西部の通鼻から中島町長浦の間は365mと最も近い距離をはかる。昭和41年から七尾港から佐波までフェリーボートが運航しているが、昭和57年春の完成をめざして能登島和倉線を建設中で、屏風崎と七尾市石崎町をむすぶ能登島大橋が架橋する事となっている。

奥原縄文遺跡は戦前、戦後の畑地耕作の際に縄文土器片が採集された事から知られていたのであるが、戦後の荒廃した山林と珪藻土の採掘とにより地形が大きく変化し、正確な遺跡所在地をつかめない状況にあった。なお、奥原遺跡は試掘調査の結果、新発見となったものである。

昭和55年４月12日付で道路建設課長から埋蔵文化財センターに、県道能登島和倉線改良工事にともなう七尾市奥原地内の分布調査依頼が提出された。有料道路能登島大橋へぬける取り付け道路で、国道159号線と交叉する道路の新設工事に伴なうものであった。昭和55年５月27～28日にかけて、予定路線内を踏査し、奥原縄文遺跡（県遺跡No.6298）が工事予定地内に含まれる事が判明したが、現国道との取り付け部分約4.000m²についても地形等から埋蔵文化財が所在する可能性が高いと判断され、試掘調査を含む確認調査が必要であるとの回答を伝えた。それと同時に、奥原縄文遺跡の発掘調査は、能登縦貫自動車道の調査日程がつまっている事から年度内での実施は困難である旨を伝えている。

昭和56年２月17日に七尾土木事務所との協議を埋蔵文化財センターで持った。工事計画の関係から３月初旬の段階で、分布調査を実施してほしいとの要請があり、センターから職員２名が昭和56年３月11日から３月13日までの３日間、現地での試掘調査を実施した。

試掘調査は国道取り付け部分にあたる標高24～25mの丘陵地形の頂上平坦面約3.000m²の範囲に、任意の試掘溝７本を設定して行なった。試掘溝は幅１mで、長さは３mから26mの間で、調査面積は約80m²である。試掘は遺物包含層、遺構の有無について行ない、７本の試掘溝のうち５本からピット、土坑、溝等の遺構、包含層から弥生式土器片、管玉、須恵器片を得た。層位は比較的単純であるが、暗褐色を呈する表土と暗赤褐色を呈する包含層とは漸移的に変化するため区分がむずかしく、地山は赤褐色粘質土であるが遺構覆土に炭化物粒を含む程度で検出の困難さをうかがわせた。また、地表をおおっているクマザサの根の除去にも多大の労力が必要と考えられた。以上の結果から、丘陵地全体が弥生時代後期の墳墓群あるいは集落址の可能性が高いとの回答を提出し、遺跡の立地と性格から相当量の人員と期間が必要とすると考えられ、充分な協議を行なうように要請した。

昭和56年４月９日付けで道路建設課長より埋蔵文化財センターに、奥原縄文、奥原遺跡の調査

依頼があり、4月22日から現地調査を開始し、8月5日に現地作業を終了した。

発掘調査を進めるにあたって、七尾土木事務所、七尾市シルバー人材センター、㈱野桑組、㈱在沢組、七尾市教育委員会等の協力を受けた他、次の各氏の協力があった。（順不同）

三野三郎、角三吉造、嶋田幸作、須原喜久松、大窪すずい、谷内ふみ、竹森キメ、武内喜男、此内明治、加納敬太郎、野田健太郎、山本辰夫、杉田杉吉、森山惣次郎、室木祐成、広瀬久太郎、広瀬はつ、吉田はつゑ、隅谷盛一、竹内能一、今村俊明、輪島芳雄、津田しげ、橋本ヤヨ子、井上元人、鰻目祐徳、山本キミ、金井　清、野田あきの、盛本　誠、宮本儀一、岡田才一、山崎キヨ子、谷内みどり、石垣とよ、石垣しげの、石垣きく、石垣すえの、石垣きくの、石垣初江、戸澗みす、藤　吉間、行谷あい、本田たみ、長田伊之助、山口藤一、皆平勝太郎、宮西与一、石中栄松、坂井保茂、岩崎正子、松瀬貴太郎、宮本勇太郎、沢田政吉、辻井佐一、蓑川弥右エ門、留木きよ、平野清二郎、今井あき、村上　源、里野タツエ、坂井　扇、武内喜孝、広沢市次郎、藤重吉二、田中安喜、深田　富、山原太一郎、平塚喜作、坂口三松、川谷内ふよ、堀小一郎、大岡シサ子、平野栄次、道坂春次、松本健次郎、林　一二、泉　清之進、坂本勇助、竹森きみ子、中田健一、田渕正次、坂口フサノ、片倉健治、小林舛太郎、黒崎清二、鈴木ハナ、沢田カズエ、松山ハギノ、木下一子、水長はつえ、石井春次、高木勇吉、平山徳一、田中一雄、（七尾市シルバー人材センター）、大岡良二（鳥屋町）、館　清秀、大畠義雄（志賀町）、道端丈夫、久保武次佐藤関太郎、山下久松、佐藤与一、久保彦英、山本利枝、山本助保、家本澄子、室谷久美子、山本静枝、池田　伸、吉間ふよ、宮下幸子（野桑組）、富山広司、宮本近右エ門（在沢組）

第2節　調査日誌（抄録）

4月22日　現場仮設小屋3棟分（事務所、休憩所、器材保管所）、および発掘器材、ベルトコンベアー、発電機、ローリングタワーを丘陵上へ運搬する作業。風が強く、ササの切り株等で作業は困難であったが、発足まもない七尾市シルバー人材センターの初めての大量動員で、作業は順調に進展した。

4月23日、24日、27日、28日、30日　道路予定地のセンター杭を起点として10mメッシュを丘陵上にかぶせ、さらに4分割して遺物のとり上げを細かくし、10mごとに土層観察用の畦畔をおく事とした。排土の置き場を確保するために、丘陵西方の傾斜面に試掘溝をもうけて遺跡のひろがり具合を確かめた。傾斜面上には遺構はなく、排土置き場として作業を進めた。クマザサと強風になやまされる表土除去作業が続く。

5月1日、2日、6日、8日、9日　現国道に面する東西約70m、南北約25m、面積約1,750㎡の範囲にわたる各グリッドの表土除去作業。表土層を3回程度に分層して、掘り下げてゆく。

5月11～15日　各グリッドの表土除去、一部遺構検出にとりかかる。

5月18～23日　各グリッドの表土除去、10、11E、10、11Fの遺構検出作業。七尾市山王小学校歴史クラブ見学。

5月25～30日　発掘区西地区の第1・2号住居址を検出、掘り下げをはじめる。中央部平坦地の遺構検出作業。地山と遺構覆土の差がつかめず苦労する。

6月1、2日　第1・2号住居址の床面精査、9Ｉ・Ｊ、10Ｉ・Ｊの遺構検出作業。

6月3～6日　第3・4号住居址の発掘をはじめる。第1・2号住居址写真撮影。第2号住居址は崖際まで発掘を拡げる。14・15Ｈ、11～15Ｉ、11Ｊ・Ｋの表土除去および遺構検出。

6月8～13日　第1～4 号住居址の発掘を続ける。土層断面図の作図。13～15Ｈ、13～15Ｉの表土除去および遺構検出作業。発掘区東端部で第6号住居址を検出する。

6月16～20日　第3・4・6号住居址の発掘を続ける。第1・2号土坑の発掘。13～15Ｊ、13～15Ｉ各グリッドの表土除去作業。発掘区北端で第7号住居址を検出する。

6月22～26日　第6号住居址の精査、発掘区南区の写真撮影。降雨が多く作業停滞する。

6月30～7月2日　各住居址出土土器の平面実測、発掘区中央部のピットの精査と遺物の取り上げ。和倉小学校、七尾市社会科研究会一行の見学。

7月4・6～11日　南区の航測。強風のため、ヘリコプターの機体があおられ1回目は不充分だったので撮りなおす。各住居址内の土器の取り上げ。3～15Ｈの表土除去。第7号住居址の発掘。山王小学校、門前町櫛比小学校一行見学。

7月13～18日　第7号住居址の発掘、15・16Ｈの遺構発掘、北地区の写真撮影、ピット内の遺物取り上げ。奥原縄文遺跡の下草刈り。

7月20～25日　発掘区北地区には航測のために、散水作業を継続する。先週より好天が続く。縄文遺跡の表土除去。重機によって削平された地区と盛り土された部分がある。土が固く乾燥しているため作業は難渋する。七尾市和倉小学校5・6年生見学。

7月27～8月1日、北地区の航空測量は無事に終了する、遺物のとり上げ。縄文遺跡では3基の土坑が検出された。傾斜面に土器多数出土する。平面、断面実測を終え、器材の撤去を一部はじめる。中島町文化教室30名が見学。

8月5日　器材および現場仮設小屋の撤去。本日にて現地作業終了する。

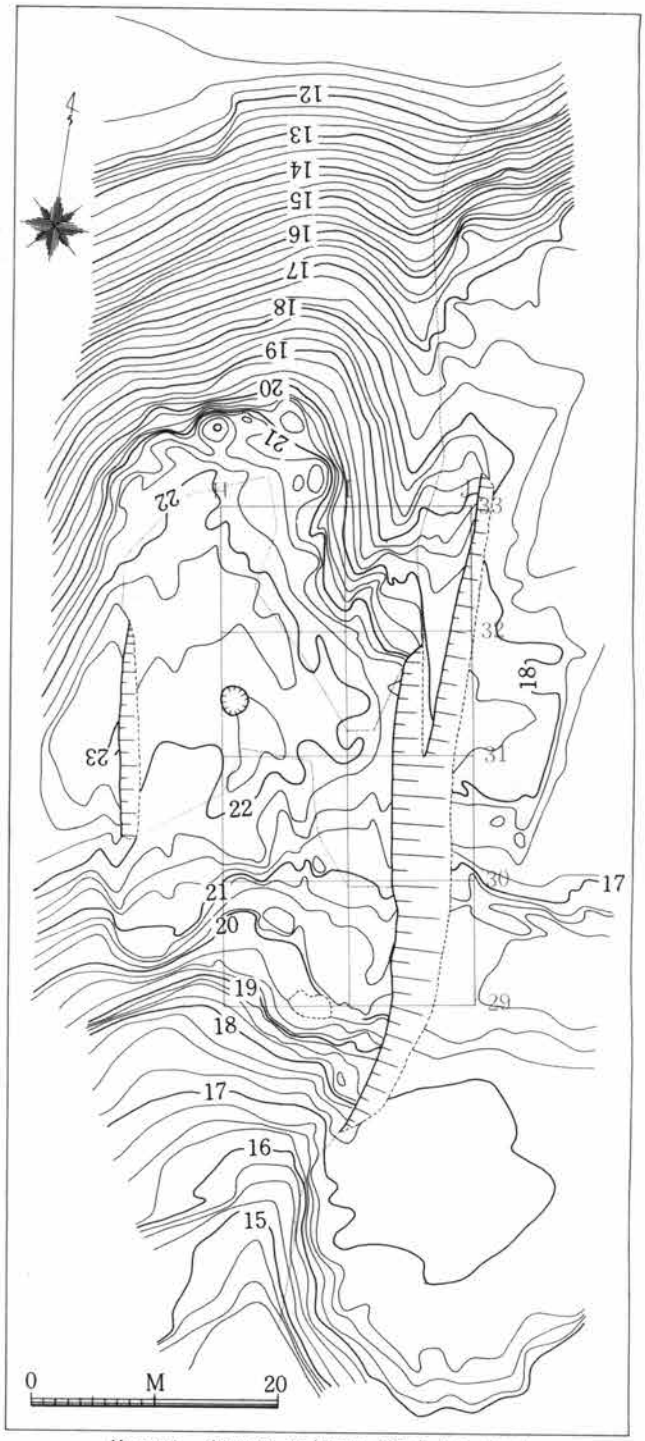
（西野秀和）

第３章　検出された遺構と遺物

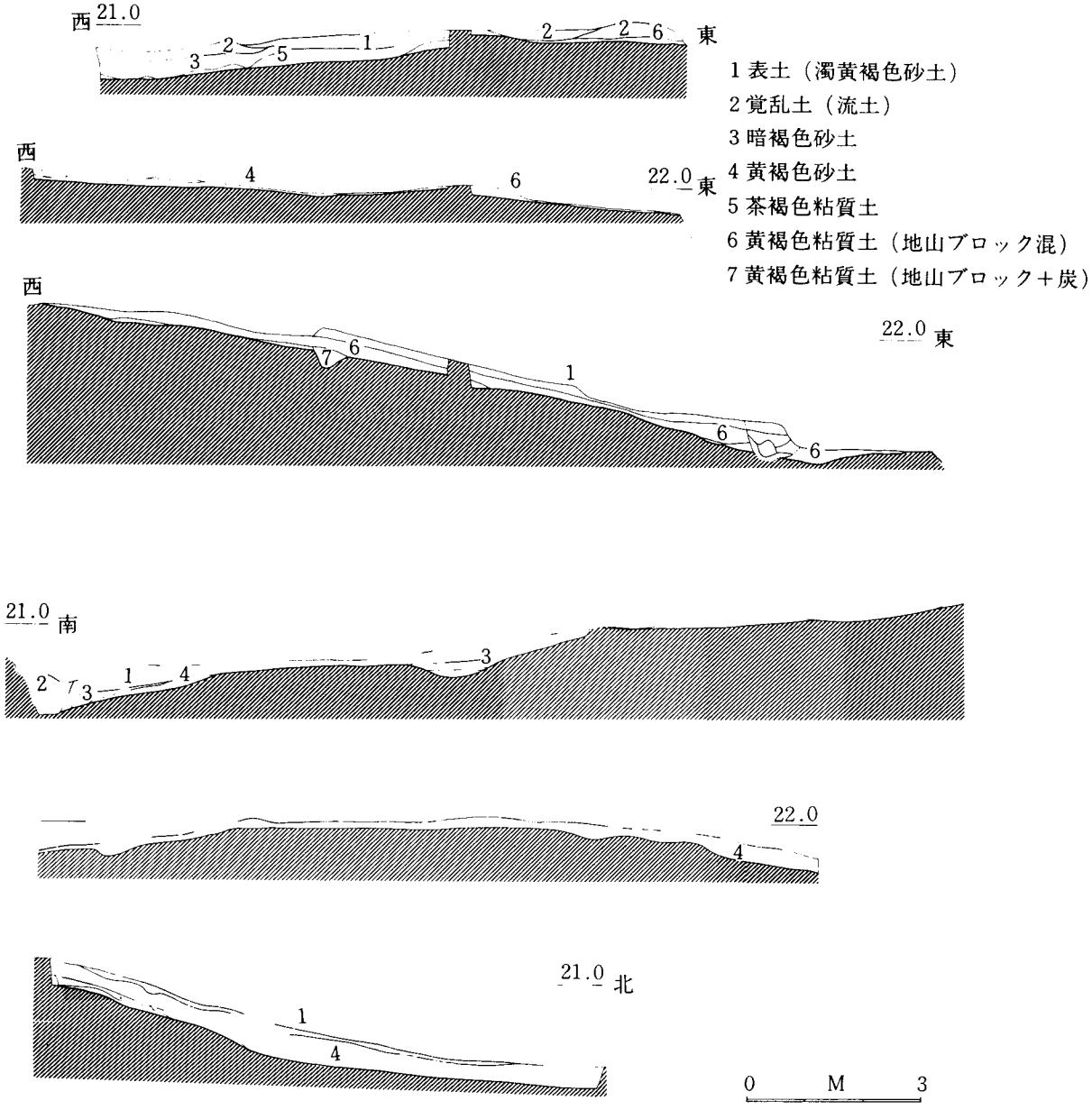
第１節　奥原縄文遺跡

１、遺跡の状況と調査の状況

前半に調査した（４～７月）奥原遺跡の北120ｍの狭小な尾根上に存する本遺跡は海抜22.5ｍを測り、水田との比高約20ｍを測る。本遺跡の大半は、先の地理的環境でも述べたとおりイソライト用の採土および、その準備作業としての表土の重機による排土のために大半は旧状を失っている。調査区東域の東側では採土の結果３～５ｍの急崖となっており、その際に出土したと思われる遺物が残土の中に見受けられる。これらが本遺跡を津田耕吉氏（石川考古学研究会々員）が発見する端緒ともなったのである。北、南側では鞍部が入り込む西から東に延びる痩尾根（最大巾20ｍ程度）の上に営まれた遺跡であった。今回調査を実施した区域も上面の表土およびそれ以上の採土がみられ、やや深目の遺構がかろうじて遺存していたと言う状況で、北側斜面では旧状を保ち、包含層の流出による堆積がみられ、今回報告する遺物の大半は北側斜面よりのものである。尾根上にはもはや包含層が存在しないまで、いやそれ以上に削平されていた。旧状を保っているとみられる西側については、永年手の入いらない雑木、熊笹の繁茂が甚しく遺物等の発見は困難である。この西側についても数10ｍで鞍部が入り込み、さらに主

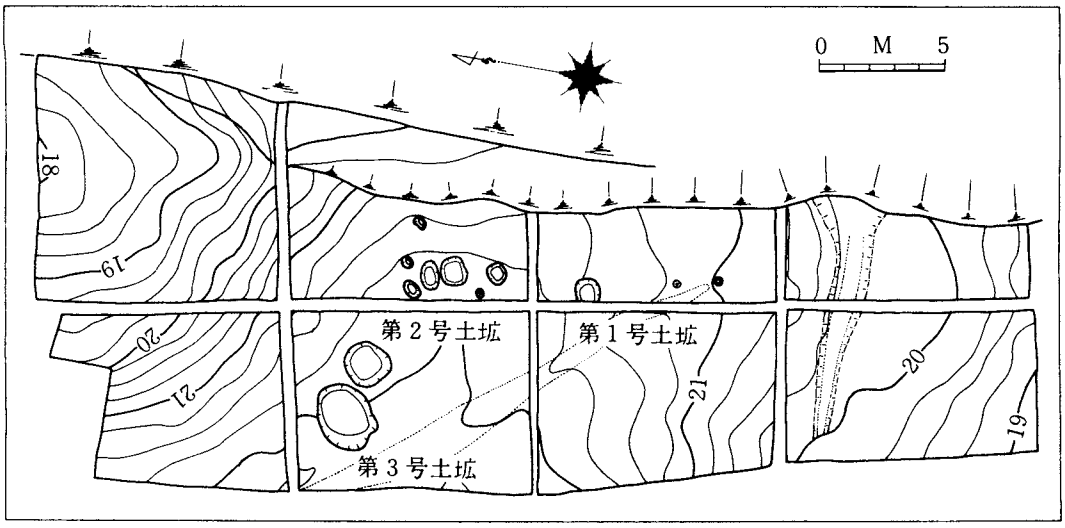


第２図　奥原縄文遺跡地形図（１/600）



第３図　発掘区土層断面図

峰に続くのであるが、縄文遺跡の西端についてはこの鞍部を一応の目途としてよいのではないかと思われる。なお南側では畑地の段と思われるものが残っており以前には開墾され畑地となっていたことが伺われる。鞍部には包含層の流出による堆積がややみられ、この地点においても少量の遺物を検出している。Ａ―１区では、径１ｍ程度の土坑一基を検出した。Ｃ―１区では不整形なピット、土坑などが検出されたが、概して浅く皿状のものが多く遺物も発見されなかった。抜根等によるものが多いものと思われる。Ｃ―２区では、土坑二基（土坑２、３）を検出した。以下検出した遺構について述べることとする。



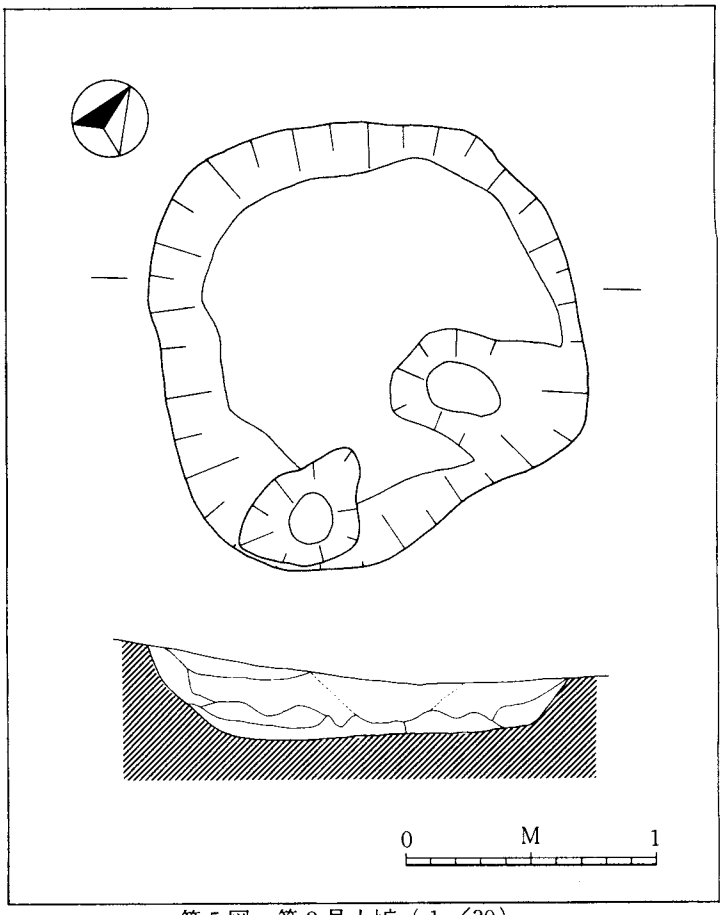
第4図　遺構配置図（1／300）

2、遺構

1でも述べたとおり遺存状態が良くなく土坑三基を検出したのみである。

土坑1　径1.0 mのほぼ円形を呈するプランで深さ20cmを測り皿状を呈するものである。中央部において磨石一点を検出した。（第17図）

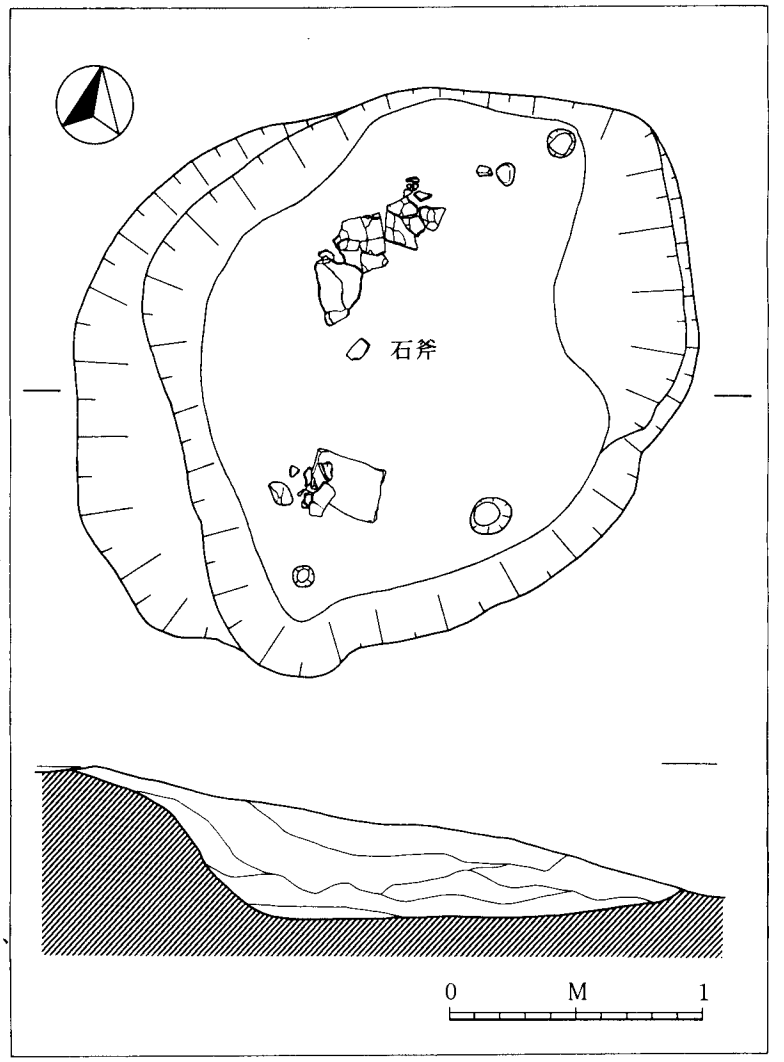
土坑2　平面プラン170×170cmのほぼ隅円方形を呈する。上面は削平されているとみられるが現存深度は北側で23.1cm、南側では21.3cm、東側30.8cm、西側20.8cmを測る。また南隅には径45cm、坑底面よりの深度22.8cmのピットと東側にも径40cm坑底よりの深度10cmのピットがそれぞれある。土坑底面はほぼ水平に近いがやや北から南側に傾斜している。覆土は遺構検出面（地山）の茶褐色粘質土に近く、底面近くのIII～V層にはそれぞれ地山土のブロッ



第5図　第2号土坑（1／30）

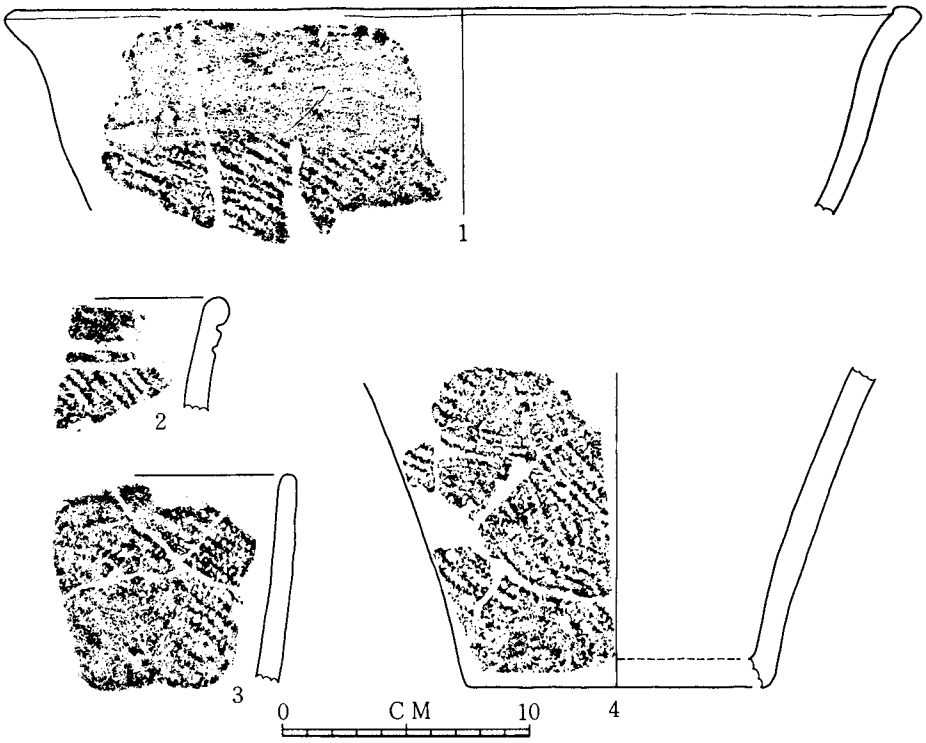
クが混じる状況で早くに埋められた可能性が高い。遺物は三点伴出しているがいずれも器表の荒れた細片である。一点は縄文を施したもの、一点は無文のおのおの胴部片、もう一点は口縁部片とみられるが磨耗が甚しく施文方法などは判然としない。半截竹管による平行隆線がわずかにうかがえる。

土坑3　平面プランは南北20.5cm、東西25.2cmを測り長楕円形を呈する。西側では二段掘がみられ、底面はほぼ水平に近くやや北東側に傾斜している。南西隅南東隅、北東隅にピットが存しそれぞれ、径9cm、深さ4cm、径17cm、深さ10cm、径11cm、深さ7cmを測る。底北側では縄文深鉢一個体分（第7図）、磨製石斧一点、南側でも30×20cmの長方形の厚さ3～6cmを測る板状の凝灰岩の周辺でも縄文土器を検出した。覆土は上層で黄褐色砂質土、中層は炭化物を含む赤褐色砂質土、坑底近くは貼り床に近い状態で地山ブロック混じりの茶褐色粘質土がみられ、ほとんどの遺物はこの層の下部にある。底面上西側半分位は炭化物の混入が甚しかった。



第6図　第3号土坑（1／30）

出土遺物（第7図1～4）　検出時においては、一個体分に復元可能なものと思われたが、器肉が非常に脆く、採りあげ後の復元は不可能であった。図示できたのは四点のみにとどまった。1と4は同一個体の可能性がある。1は口径が胴径を越える深鉢である。胸部よりゆるやかに外反し口縁端部が肥厚するものである。口縁帯は無紋で残され胴部は粗い縄文を施す。器表があれて判然とはしがたいが、無文帯は先端の丸い棒状具により横位に削りとっているようである。2は口縁帯に半截竹管による半隆起線をす。3は縄文のみと思われるが器表、特に口縁部のあれがひどく不明である。内面は良く研磨されている。また、床面近くで検出した磨製石斧は、いわゆる定角式のものである。刃部をやや欠損する。幅5cm、長さ10.6cm、厚さ1.8cm、現存重量222g



第７図　第３号土坑出土土器（１／３）

を測り、流紋岩質である。（第16図３）

３、出土遺物

土器

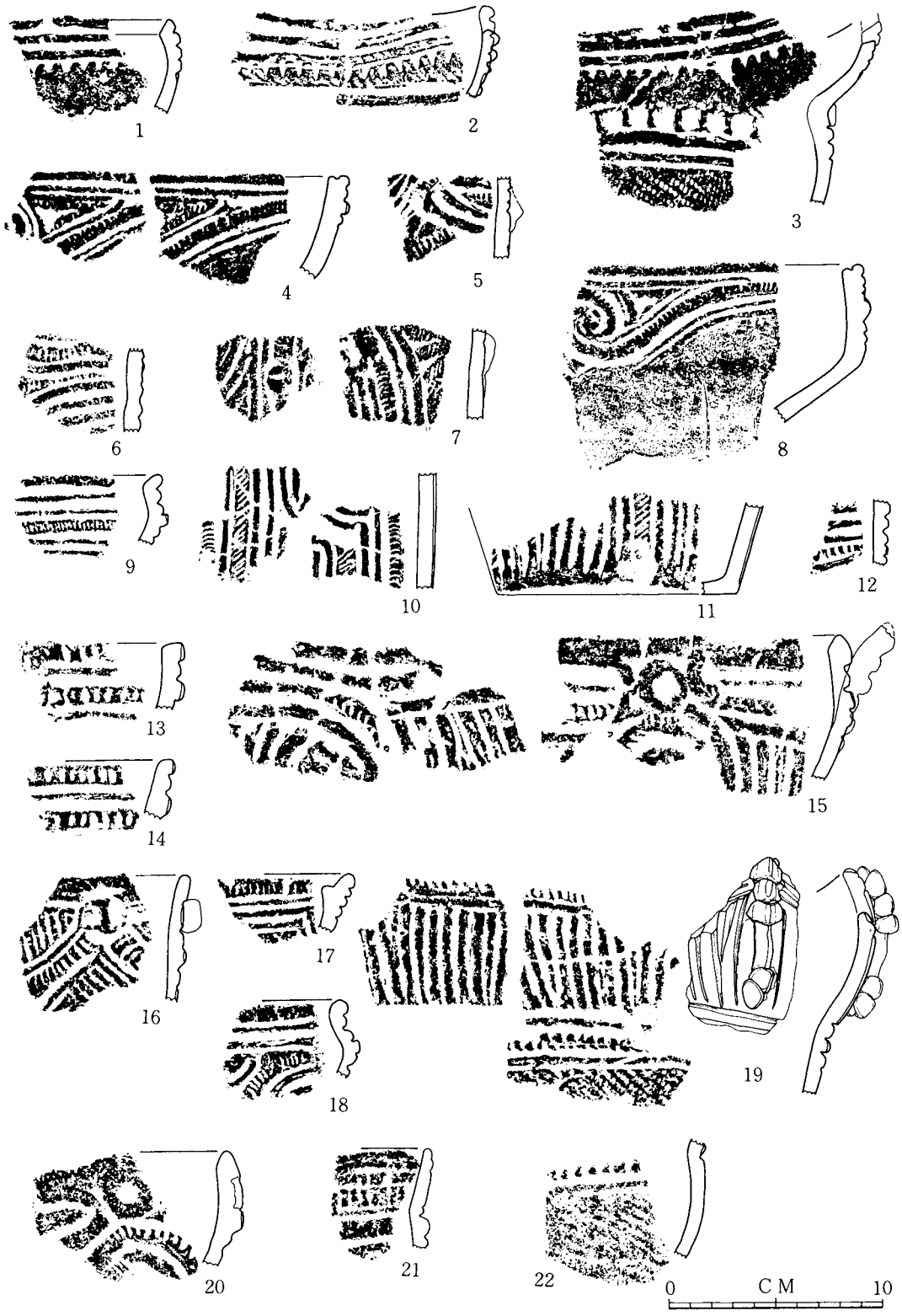
先の遺跡の状況の項でも述べたとおり、遺構（土坑三基）に伴うものは数点に過ぎず、他は北側斜面と南側斜面からの検出である。以下に、おおまかな分類に従って諸特徴について記すこととする。

Ⅰ　楔形刻目文を有するもの（第８図１～３）

第８図１～３はともに波状口縁となる深鉢形土器で、キャリパー形を呈するものとみられる。口縁部に平行な二条の半隆起線を引き、その下端に刻目文を施すものである。意匠的には蓮華状文の残影に近いものと思われる。施文方法は半截竹管状具をやや下より連続して刺突施文したものとみられる。３はくびれ部（頸部）に粘土紐を貼り付け、その上を指頭か、棒状具でも先の丸い工具による連続文を施し、さらに一条の半隆起線、胴部は縄文のみであるらしい。いずれも、胎土には長石を含み、３は特に脆い。２は焼成良く堅緻で茶褐色を呈する。３の内部には炭化物の附着が認められる。

Ⅱ　刻目文を有するもの（第８図４～15）

４は、器表の磨耗の甚しいものであるが、口唇部に一条の沈線を施し、半隆起線上面に箆先状具により連続した刻目文を施す。半隆起線は渦巻状を呈するものとみられるが、破片のため断定はできない。また、隆線間に生じた間には三角形彫去文が施される。茶褐色を呈し、胎土には砂粒



第８図　縄文土器（１）（１／３）

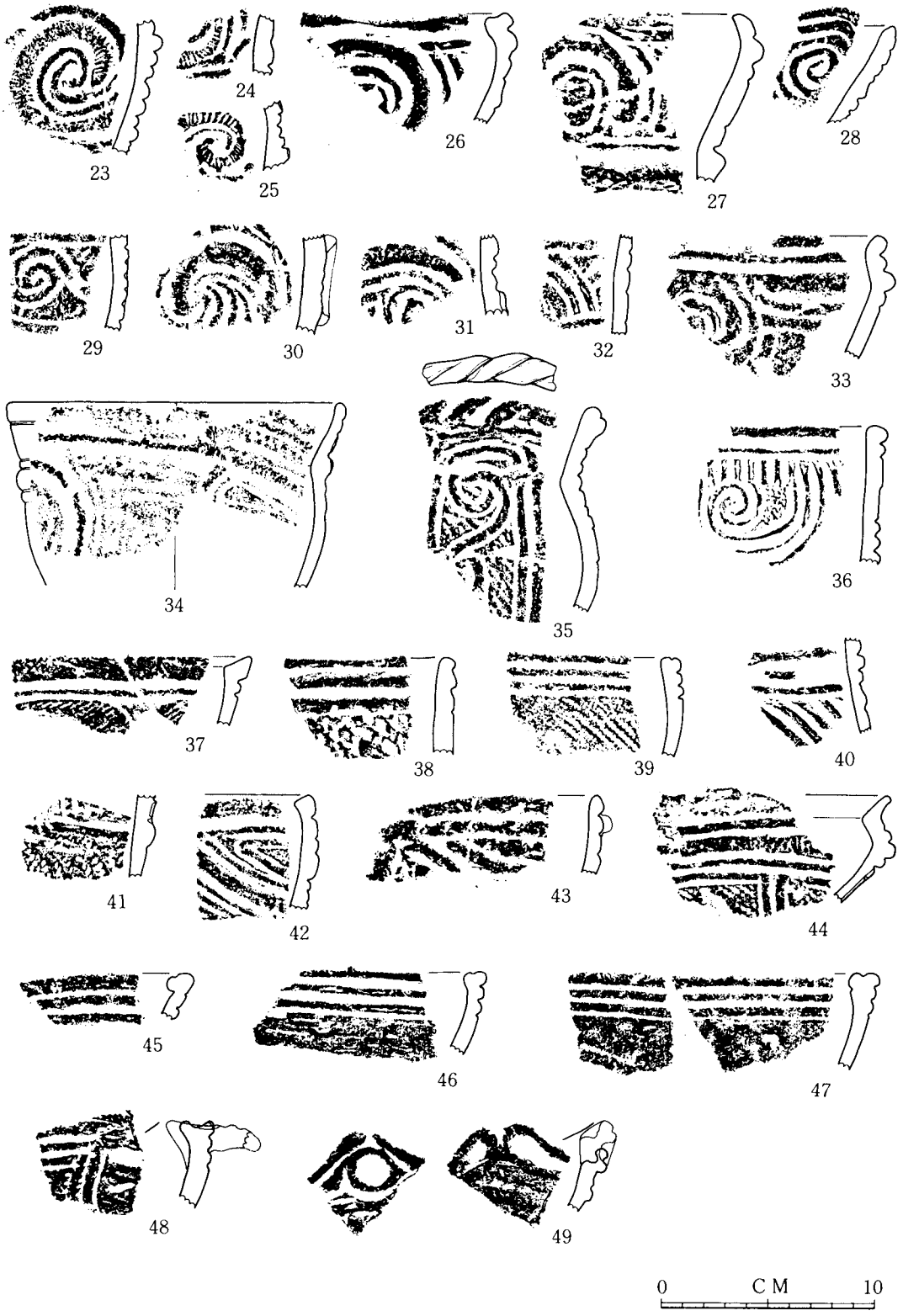
を含み、焼成は良くない。5は細片であるが、波状口縁を呈する深鉢形土器で波頂部に粘土紐を貼付した装飾のみられるものである。波頂部を基点とする孤線により区画された内部に篦先により連続刺突を施す。6、7も4と同様、篦先による刻目文、三角形彫去文を施すものである。器形等は知り得ないが、深鉢形土器の胴部文様であるか。8は、浅鉢形土器で、渦巻状を呈する半隆起線上に篦先による刻目文を施すものである。また、渦巻状文と口縁部沈線との間には三角形彫去文を施す。他は器表を磨いた無文のままである。黒褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を混じ焼成は脆い。9は外傾した頸部より強く屈曲して立上り、口縁端面がせり出す深鉢形土器である。口縁に平行する半隆起線に篦先による刻目文を施すものである。10、11は胴部片であるが、10は垂下する平行隆線間に生じた無文帯に篦先による刻目文と半隆線上に半截竹管による爪形文を施す。11は胴底部にかけての破片であるが、10と同様に無文帯部分に篦先による刻目文を施す。10は黄茶褐色を呈し、胎土、焼成ともによく、内面も良く研磨される。13、14は、口縁帯平行半隆線に粗い篦刻目を施すものである。くの字口縁をなす深鉢形土器とみられる。15は、口縁帯が内湾するキャリパー形を呈する深鉢形土器であると思われる。口縁に平行なやや太目の半隆起線を施し、粘土紐貼付の円形浮文を基点とし、左右に粘土紐を貼付し、さらにその基点下には、渦巻状文を施すものとみられるが、左右に分かれ施した貼付隆線、渦心帯とみられる半隆起線に篦先刻目が施される。渦巻状文と渦巻状文とにより生ずる区画には縦位の半截竹管による平行半隆起線文を充塡する。赤褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含み、焼成はややあまい。

Ⅲ　爪形文を有するもの

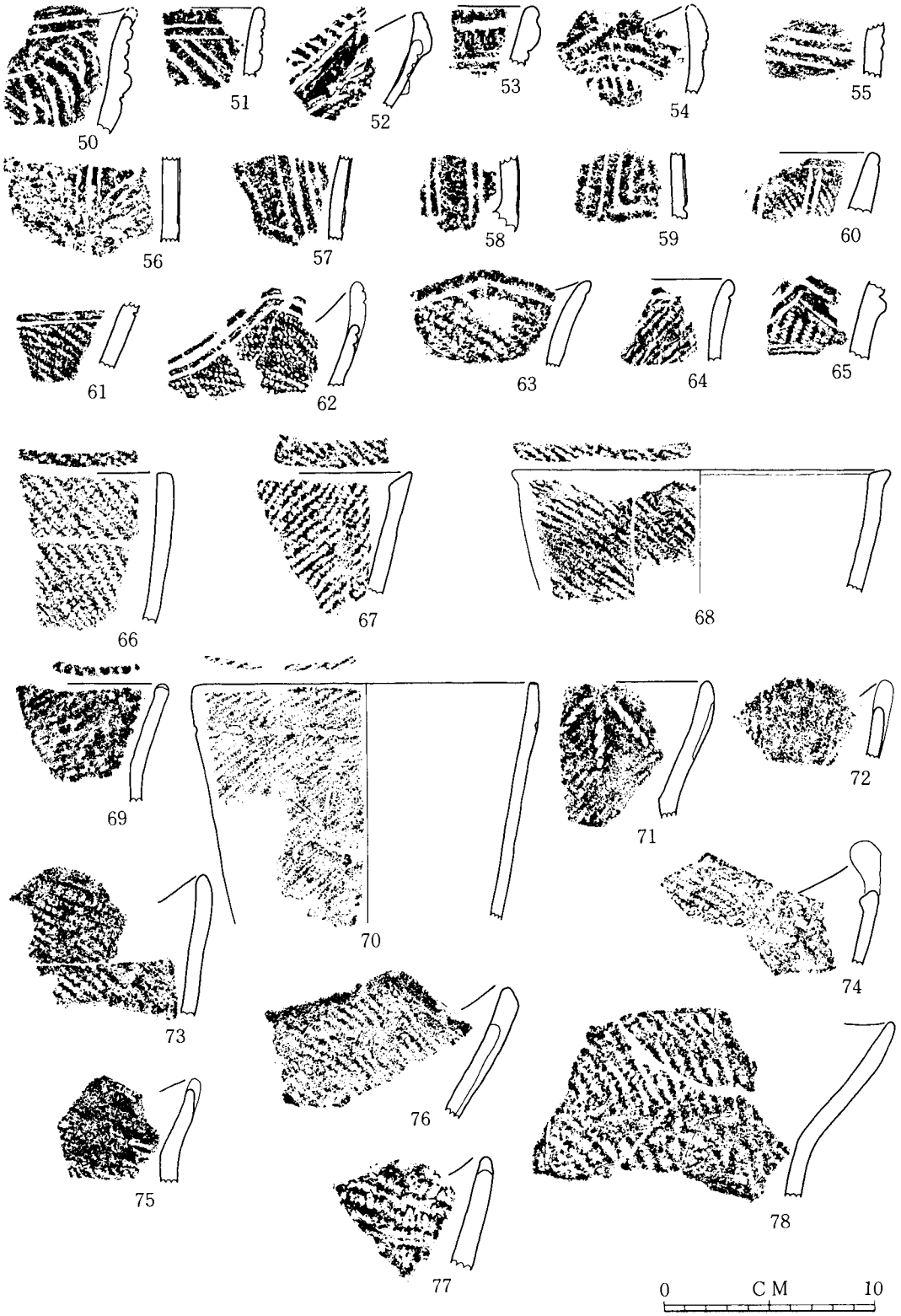
16は、基点に粘土紐を貼付し、それより半隆起線による三角形の区画を作り、その区画内には半截竹管による半隆起線を充塡する。また、三角形を区画する半隆起線には半截竹管による連続刺突文を施す。18は9と同様の器形をなすものとみられる。口縁部には、二条の半隆起線を引き、その下には渦巻状文を施すものとみられる。渦心帯をなすと思われる半隆起線に連続爪形文を施す。9も器表が磨耗しているために判然としないのであるが爪形文の可能性がある。19は、波頂部に粘土紐の複雑な貼付による装飾のある波状口縁をなし内湾する深鉢形土器である。口唇部、くびれ部の半隆起線には連続爪形文を施す。波頂部の貼付文と口唇部、くびれ部の爪形文により区画される長方形内部には縦位の半截竹管による密な平行半隆起線を施している。くびれ部以下は縄文を施す。茶褐色を呈し、胎土には多くの長石を含み、焼成はやや脆い。口縁外面の一部と器内面に炭化物の附着が認められる。20は15に近く円形浮文を基点とし、その下部に半隆起線による渦巻状文を配するようである。その渦心帯をなすとみられる半隆起線に篦先か、半截竹管による粗い刻目文を施している。器表は磨耗が甚しく、茶褐色を呈し、胎土には多くの砂粒を含み、焼成もあまい。

Ⅳ　玉抱き三叉文を有するもの（第9図48、49）

48は口唇部に玉抱き三叉文を有するものである。二条の平行半隆起線による区画をつくるが、その内部については不明である。半隆起線の内側には径2㎜程度の丸い列点文を施す。口唇部外面には半截竹管による爪形文を施すようであるが磨耗のため判然としない。内外面ともに良く研磨されている。茶褐色を呈し、胎土には砂粒をやや含むが、焼成は良い。49は、波状口縁をなす


23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
CM
10

第９図　縄文土器(2)（１／３）



第10図　縄文土器(3)（１／３）

器形の波項部のみの破片であるが、波項部にいわゆる玉抱き三叉文を施す。他については不明である。波項部内面にも同様に扶りとりによる八の字状文を施している。暗茶褐色を呈し、胎土にはやや砂粒を含むが、焼成は良い。

Ⅴ　渦巻状文を有するもの（第９図23～36）

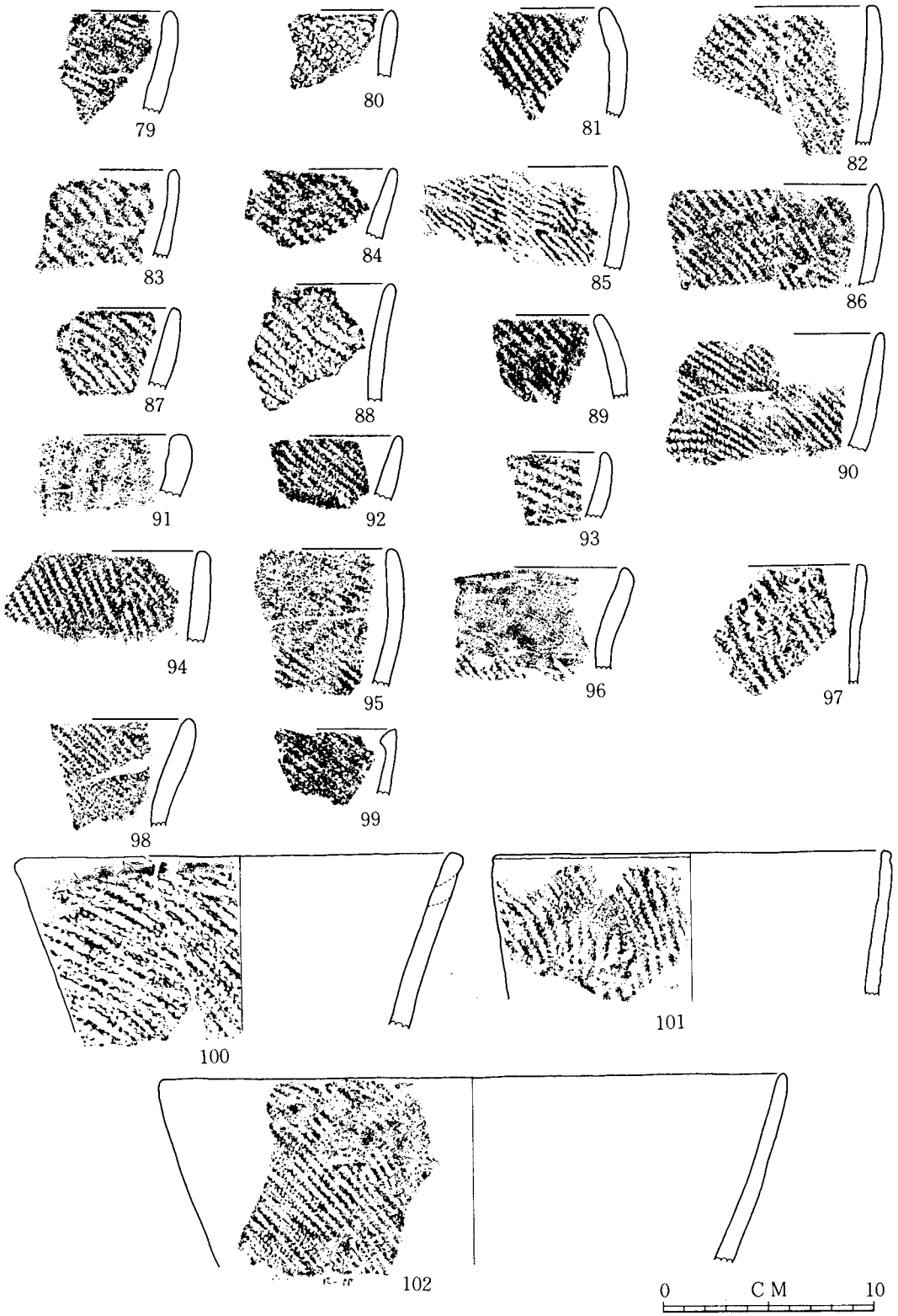
23、24、25渦心帯は貼付隆線で箆先刻目文を施している。いずれも細片であり渦巻の全形を知り得るものはない。ともに砂粒を含み、焼成もあまい。26、27は渦巻と言うよりは同心円にちかいものと思われる。やや太目の貼付隆線と半截竹管による半隆起線とにより構成される。渦巻文により残された区画には縦位の平行半隆起線を施している。ともに茶褐色を呈し、胎土には多くの長石を含み、焼成は良い。同一個体の可能性もある。26、27は渦心帯を持たない半截竹管による渦巻状文を施す。28は波項部に渦巻状文を配置する波状口縁深鉢形土器である。30は貼付隆起線内に放射状に近い渦巻を半截竹管で施文するものである。31は渦巻の中心部に貼付文を有するものである。半隆起線には刻目文が施こされるようであるが、磨耗が甚しく不明である。32、33も渦心帯を持たない渦巻状文とみられる。34は口縁帯に箆先刻目文を有する鉢形土器である。器表の磨耗が甚しく、不明な点が多いが、胴部では地文に縄文を施し貼付隆線と半截竹管による半隆起線とにより渦巻文を有するものと思われる。35は粘土紐をねじりあわせ口唇部とする鉢形土器である。地文に縄文を施し、くびれ部から胴部にかけては、縦位に半截竹管により長方形の区画を設け、その区画内には、渦巻状文が施される。茶褐色を呈し、胎土にはやや砂粒を含み、焼成は普通である。36は平縁の深鉢形土器である。地文には縄文を施し、半隆起線による渦巻状文を施す。他は半隆起線を平行に施す。茶褐色を呈し、胎土、焼成ともに良い。

Ⅵ　平行半隆起線を有するもの（第９図37～47）

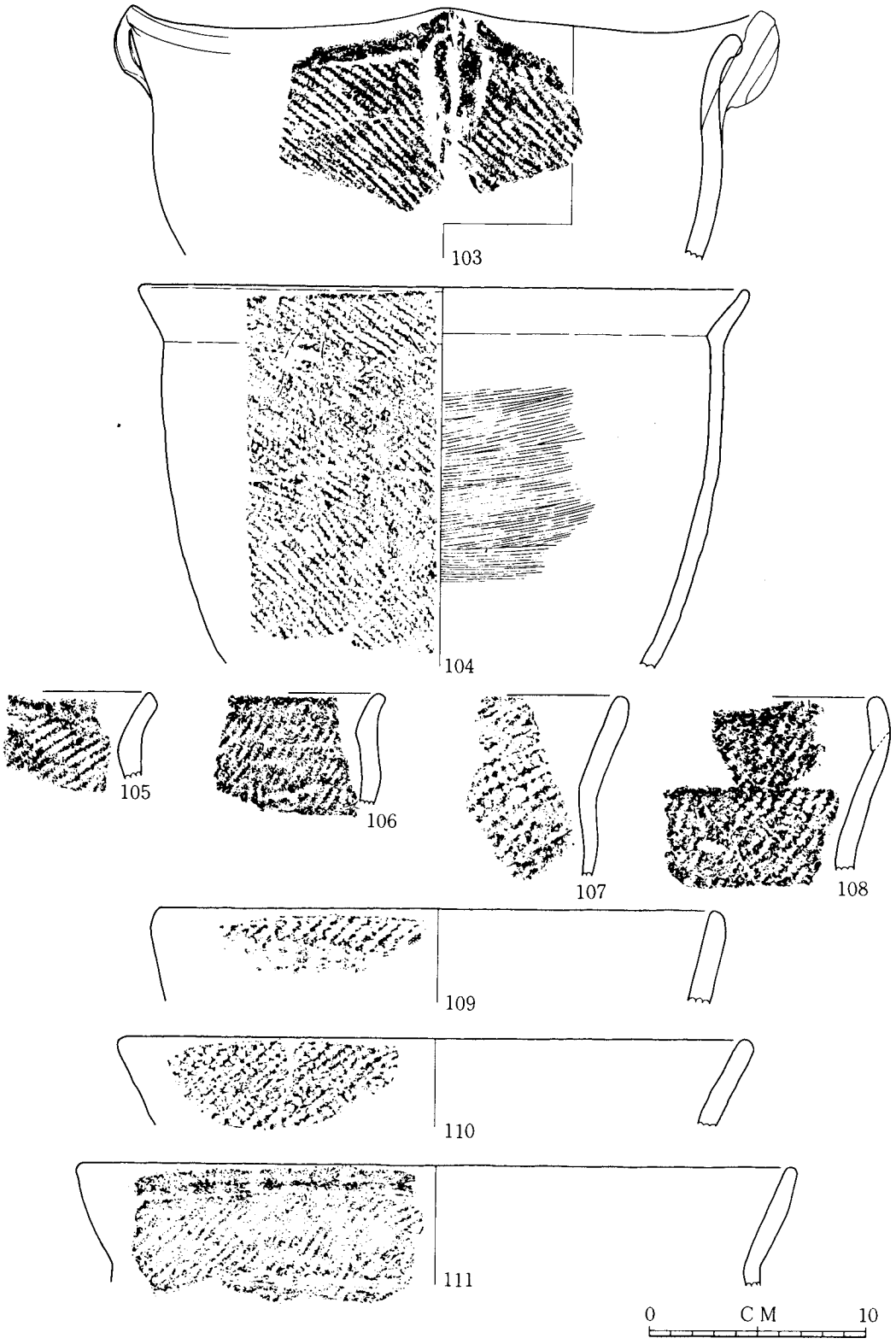
38は口縁に二条の半隆起線をもつ平縁の深鉢形土器である。地文には半截竹管の背を利用したとみられる押引きによる列点文（？）がある。39も同様に口縁に二条の半隆起線を施し、胴部には縄文を施文する。42、43は半隆起線により三角形の区画を設け、その内部を平行半隆起線により充塡施文する。43の三角形の基点には粘土紐の貼付がある。44は、口縁に三条以上の平行半隆起線を巡らし、胴部では半截竹管による半隆起線で長方形の区画をつくり、地文には縄文を施す。口縁部の半隆起線には半截竹管爪形文を施すものとみられるが、磨耗のため不明である。内面はよく磨かれている。茶褐色を呈し、砂粒を含むが焼成は良い。45は内面肥厚し口縁には二条の平行隆起線を施す。内面には炭化物の附着がある。46、47は無文地の口縁にのみ二条の半隆起線を施すものである。内外面ともによく研磨されている。黄茶褐色を呈し、胎土にはやや多くの砂粒を含むが、焼成は良い。50～59は細片であり、器表の磨耗も甚しく不明の点が多いのであるが、おおむね半截竹管による半隆起線を施すものである。56～59は地文は不明であるが、いずれも胴部より底部にかけてのもので縦位の半隆起線を施すものである。

Ⅶ　地文に縄文を施すもの（第10図60～65）

いずれも地文には縄文（ＲＬ、ＬＲ）を施し、口縁帯に半截竹管による半隆起線が施される。62、63は波状口縁深鉢形土器である。62には口唇部近くに半截竹管半隆起線を巡らす。63、64は箆先による一条の沈線を施す。65は貼付半隆起線による三角形区画内の地文となっている。



第11図　縄文土器(4)（１／３）



第12図　縄文土器（５）（１／３）

Ⅷ　縄文を有するもの（第10図66～111）

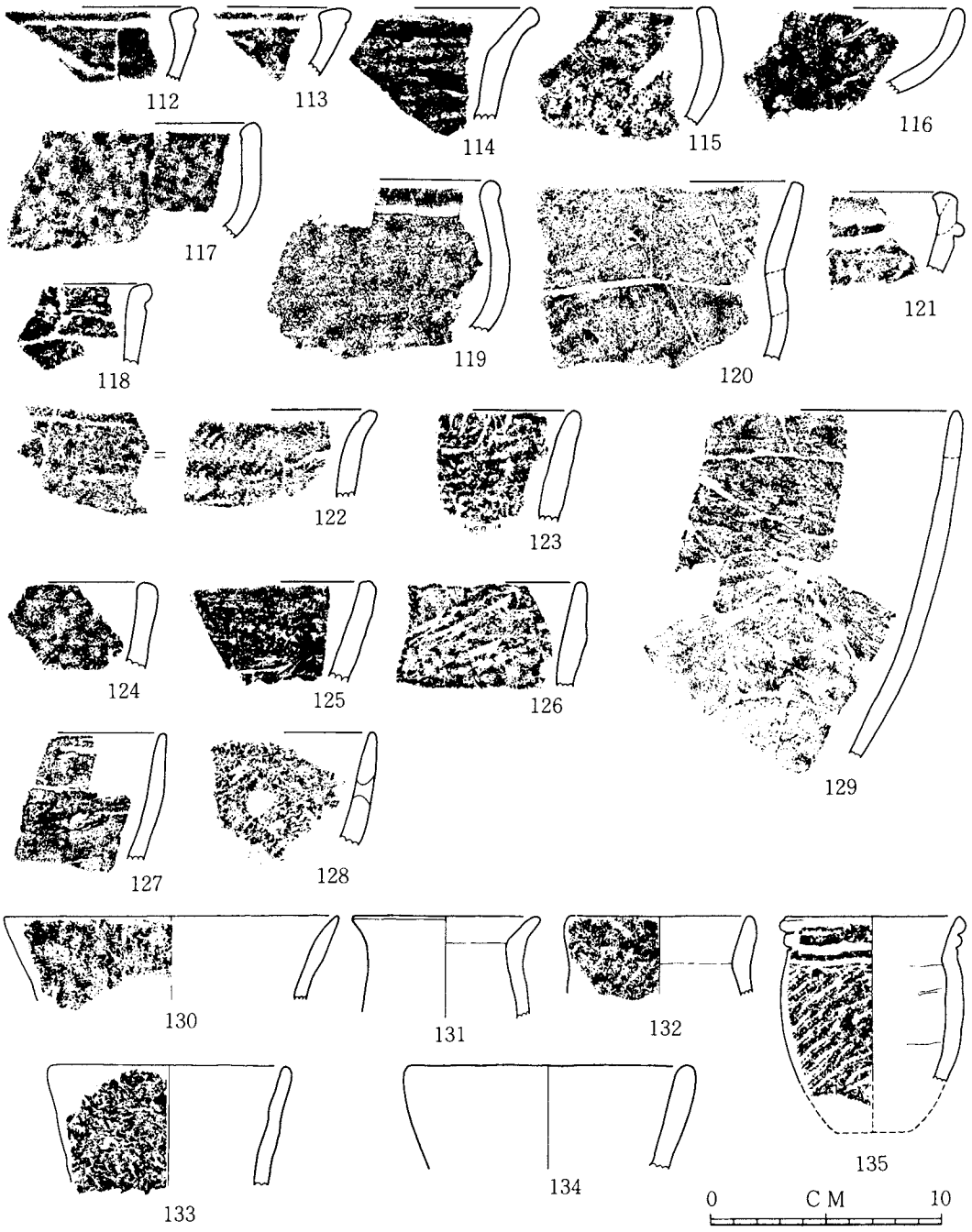
66～68、70は口唇部にも縄文を有する。口唇部の施文も同一原体を用いるものである。69は口唇部に箆先による刻目文を有する。70、91は、ともに胴部の縄文体に縄文の押捺がある。70は口径16.1cmを測る小形の鉢である。口縁帯で平行に一条の縄文を押捺する。茶褐色を呈し、胎土にはやや砂粒を含むが、焼成は良く、内面は良く磨かれる。71は、くびれ部より口縁部にかけて、やや外反する深鉢形土器であろう。口縁帯近くに、矢印状の縄文押捺がある。70、71ともに地文の縄文原体とは異原体とみられる。72～78は波状口縁なす深鉢形土器である。79～104 はおおむねＲＬの斜縄文である。口縁帯の形状でさらに細分類可能と思われるが、直立するもの、内湾するもの外反するもの、内面肥厚するものなどある。96は口縁帯を無文で残し、内面には炭化物の附着がある。100は口径20.5cm、101は18.5cmを測る小形の鉢形土器である。いずれも、茶褐色を呈し胎土、焼成ともに良い。内面は良く研磨される。103は四個の波項部をもつ、波状口縁深鉢形土器である。対角線の波項部には、それぞれ同様手法による施文がある。一は一本の粘土紐を把手状に貼り付け、もう一つは、部厚い粘土紐を貼付し、その中央部は両側からの押えで縦位の沈線をなす。104は、口縁くの字状を呈する鉢形土器である。内面は、巾広な工具で良く研磨されている。外面には、炭化物の附着がある。暗茶褐色を呈し、胎土には、やや砂粒を含むが焼成は良い。105～111は、おおむねＬＲの縄文を施すものである。口径は109で25.6cm、110で26.8cm、111は32.6cmを測り、器内外面に炭化物の附着が認められ、暗茶褐色を呈し、焼成は普通である。

Ⅸ　無文のもの（第13図112～135）小形土器

全体的に器表面の磨耗が甚しい。119は、口縁部が内湾する浅鉢形土器とみられるが、口縁端部外面に粘土紐輪積み痕を残す。内外面ともに、良く研磨（横位）される。暗茶褐色を呈し、胎土にはやや砂粒を含むが、焼成は良い。126の器外面には粗い条痕状の擦痕が認められる。127は、深鉢形土器の口縁部片であるが、内外面ともに、やや左下りの削りが施される。暗茶褐色を呈し胎土にやや砂粒を含むが、焼成は良い。129も同様に深鉢形土器であるが、内外面ともに粗い削り（研磨）が施される。茶褐色を呈し、砂粒をやや含み、焼成は普通である。130～135は小形の土器である。131は、口径８cmで、くの字口縁をなすものである。口縁端部には粘土紐輪積痕が認められるが、内外面ともに研磨される。135は、口径7.6cm、器高９cm前後に復元できるものである。口縁部に、一条の半截竹管による半隆起線を巡らす。地文には、Ｌ $\left\{\begin{matrix}R\\L\end{matrix}\right.\left|\begin{matrix}R\\R\\R\\R\end{matrix}\right.$（直前段合撚）の斜縄文を施す。本例のような縄文は、唯一のものである。赤褐色を呈し、胎土には、やや砂粒を含み焼成は普通である。

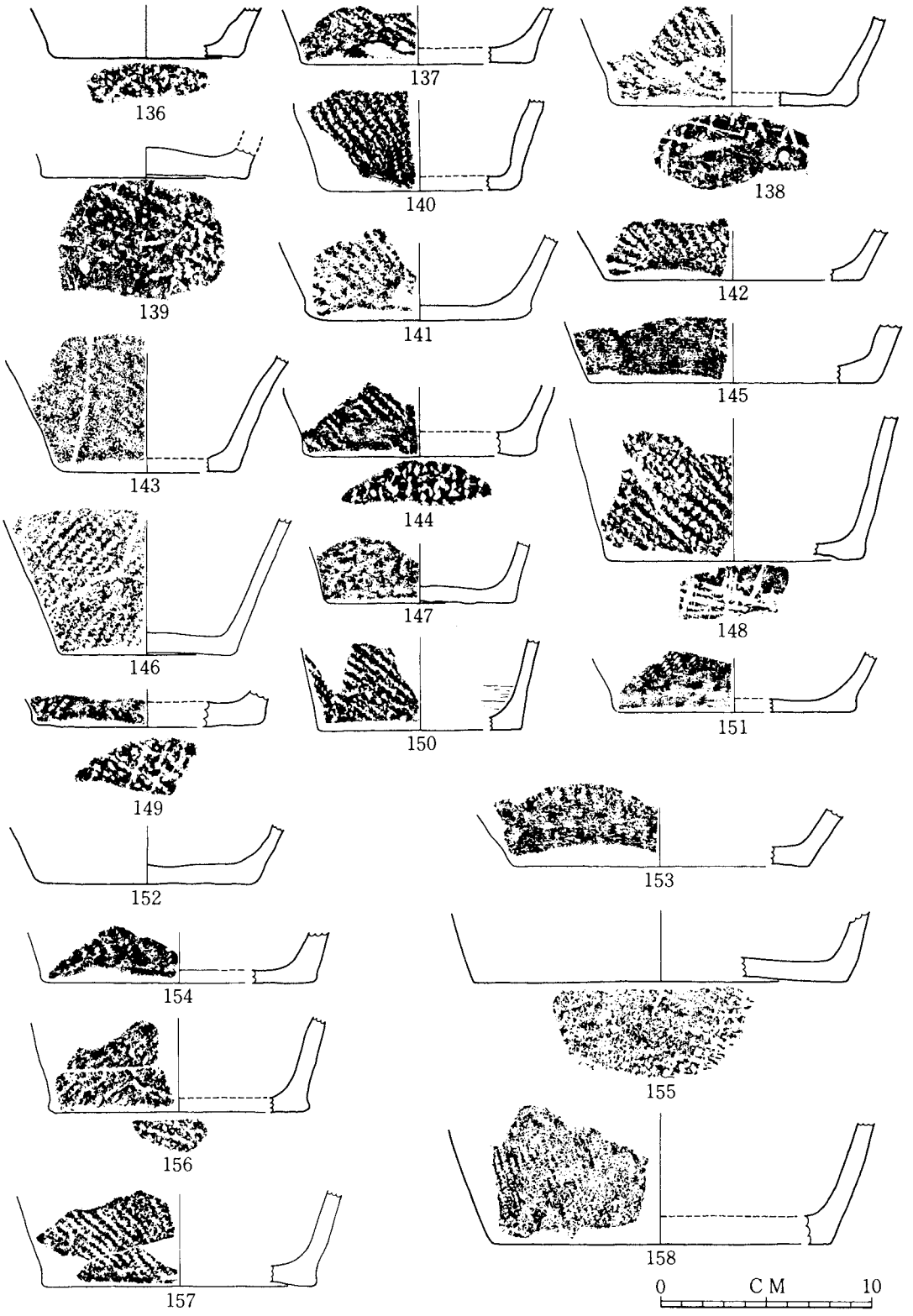
Ⅹ　底部（第14図136～158、第15図159～184）

本遺跡出土の底部も、口縁部、胴部のものと同様に器表面の磨耗が甚しく、底部圧痕なども判別できるものは極めて少ない。また、その大半は平底であり台付底部、丸底は少数である。第10図136～158は底部径８cmから18cmを測るもので、おおむね深鉢形土器の底部と推定される。136の底部には網代圧痕が認められるが、磨耗のため判然とし難いが、二本越え、二本潜り、一本送りの編み方とおもわれる。138は簾状圧痕を有するもので、縄文（撚糸）との組み合せがみられるものである。139は136と同様の網代圧痕（二本越え、二本潜り、一本送り）の圧痕を有するものと

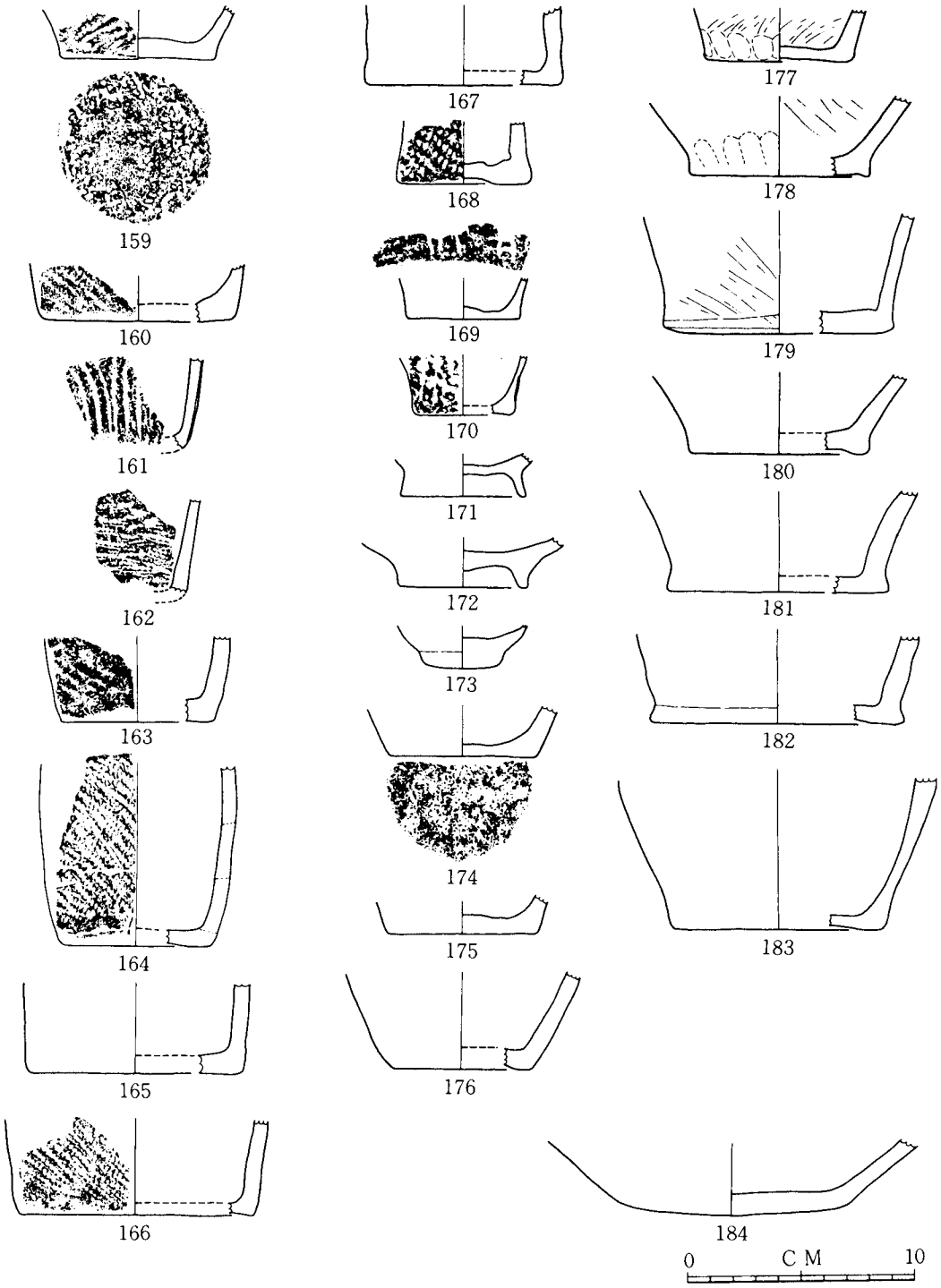


第13図　縄文土器(6)（１／３）

みられる。144も同様である。148は簾状圧痕を有し、縄文との組み合せがみられるものである。149も同様、簾状圧痕である。145、156の網代圧痕は、二本越え、二本潜り、一本送りである。159は底径6.8cmを測り、底部には網代圧痕（一本越え、一本潜り、一本送り）がある。第15図159～184は比較的底径の小さいもの、台付のもの、丸底のもの、また器外面の調整の不明のものを集めた。162は胴径４cm前後の土器であるが、胴部にはL{R|RR / L|RRR（直前段合撚）が施され、第13図



第14図　縄文土器（７）（１／３）



第15図　縄文土器(8)（１／３）

135と同様の小形土器であろう。本遺跡出土土器の中では二例のみである。163は底径6.5cmを測り、胴部には斜縄文（ＲＬ）を施すコップ形の小形土器である。茶褐色を呈し、胎土にはやや砂粒を含むが焼成は良い。167は底径6.0cmを測り、やや内傾する小形土器の底部である。底部中央部がへこむ凹底である。器外面は斜縄文（ＲＬ）である。170、171は底径5.5cm、5.7cmを測る台付底部である。いずれも器面の磨耗が甚しいが、底部は手捏ね風につくられる。台付底部は少ない。172は丸底に近いものである。本例も非常に少ない。173～183は器面の磨耗が甚しいために表面の観察が難しいが、ほとんどが無文のものとみられる。184は、浅鉢形の底部である。内外面ともに良く研磨されている。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含むが焼成は良い。

石器

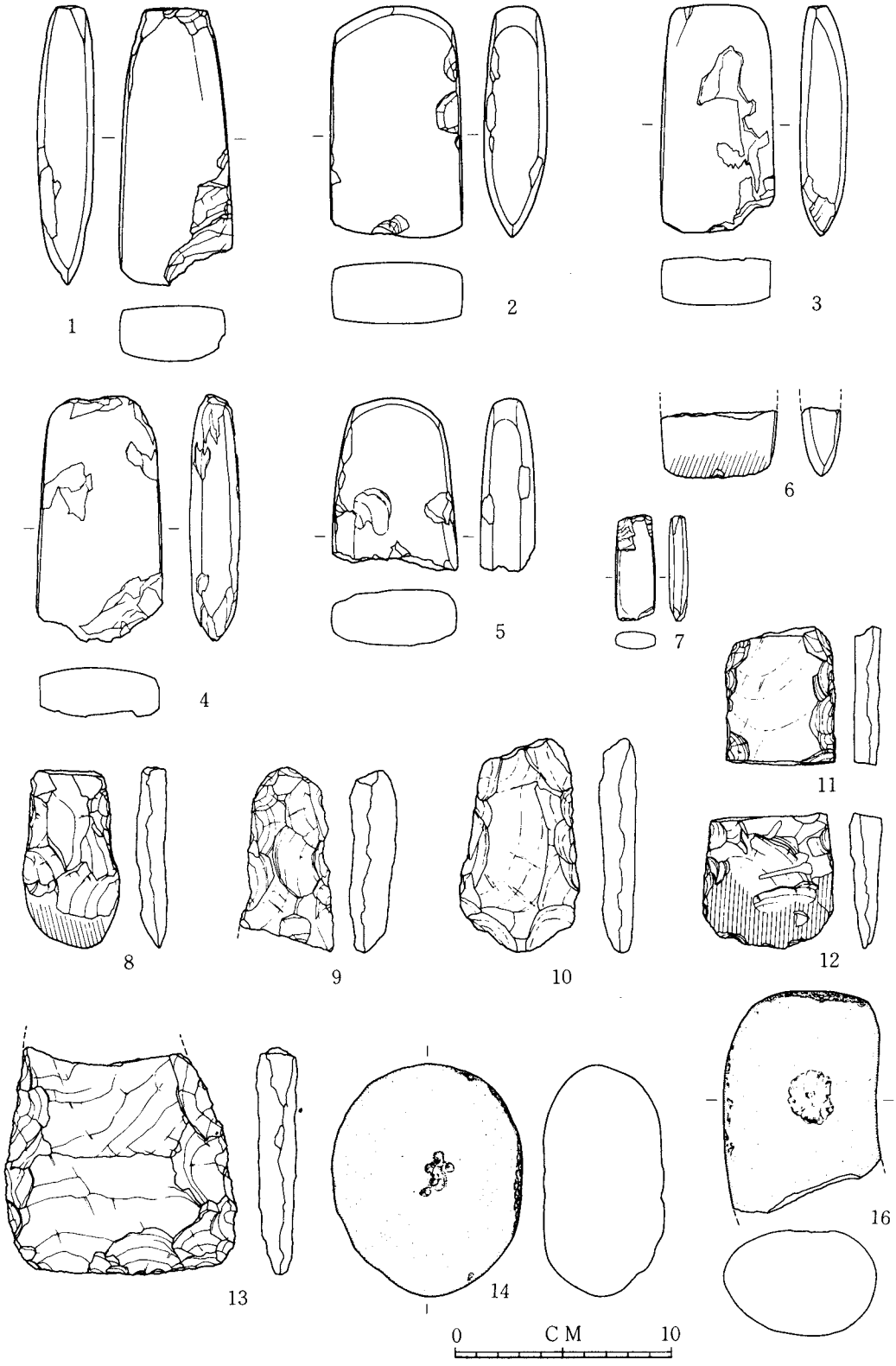
出土した石器の総数は26点である。その内訳は、打製石斧６点、磨製石斧７点（小形のもの１点を含む）、石皿１点、凹石３点、磨石３点、敲石２点、石鏃２点、石槍１点、石核１点である。このうち奥原遺跡からは、打製石斧１点、石皿１点、凹石１点、磨石１点、敲石１点、石鏃２点の計７点が出土している。凹石は２号住居跡、石鏃は３号住居跡のそれぞれ覆土より出土している。他は、調査区に散ばった状態で、それぞれ表土層よりの検出である。残りの14点は奥原縄文遺跡からの出土である。第１号土坑からは、敲石１点、第３号土坑からは磨製石斧１点が出土しているが、他はすべて北側斜面鞍部の堆積包含層から検出した。以下、両遺跡の石器を合せ器種別に分類して簡単に説明する。なお、石器類の石質鑑定は金沢大学教授藤　則雄博士にお願いした。

打製石斧（第16図８～13）

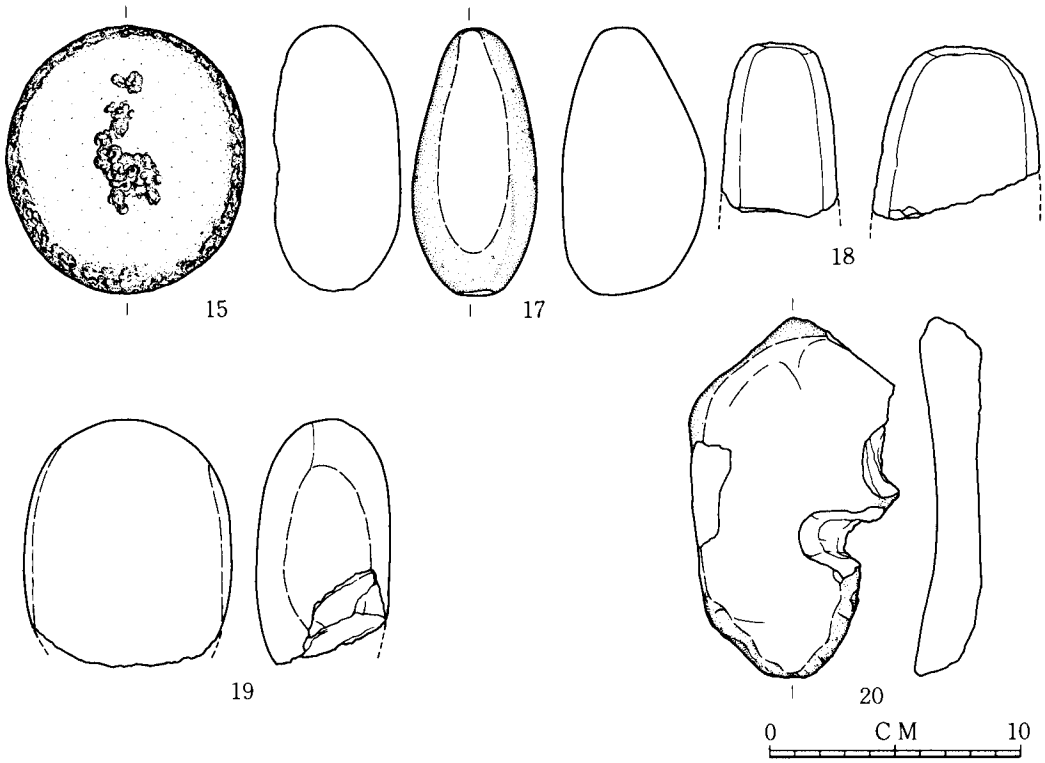
総数で６点を数えるが、完形品がないため全形を知り得るものはない。いわゆる短冊形、揆形に近い形状をなすものと思われる。８は、基部を欠損する。側縁には調整打痕を施しているが、刃部は、再加工（磨石として使用か）の為に不明である。現存重量56ｇを測る。７は、刃部を欠損する。両側縁に調整打痕を施し、基部は粗い打痕調整である。10は、基部一部を欠損する。両面に自然面を残す比較的薄い、いわゆる短冊形を呈するものである。両側縁に、調整打痕を施す。現存長10cm、現存重量88ｇを測る。11は、刃部、基部ともに欠損する。両面には自然面を残し、両側縁には、粗い調整打痕を施す。10と同様、比較的薄く、現存巾4.9cmを測る。12は、基部を欠損し刃部のみのものである。両側縁、刃部には調整打痕が施されるが、刃部は使用か風化のために磨耗している。13は、基部を欠損し刃部のみのものである。刃部先端近くで最大幅（10.4cm）をもつ、いわゆる撥形に近い器形をなすものとみられる。両側縁には、粗い調整打痕が加えられる。現存重量266ｇを測り、本遺跡において唯一の大形品である。以上、６点の打製石斧はともに輝石安山岩質である。かなり風化の度合も甚しく、使用痕など詳しい観察は難しい。

磨製石斧（第16図１～７）

７点出土しているが、第３号土坑に伴って出土した３を除けば、すべて北側斜面の堆積包含層から出土したものである。１は、刃部、基部を一部欠損するが、ほぼ全形を知り得るものである。基部幅３cm以上、刃部で最大幅となり5.2cm、長さ12.8cm、厚さ2.5cm、重量306ｇを測る流紋岩質のものである。２は、幅6.1cm、長さ10.6cm、厚さ2.9cm、重量346ｇを測り流紋岩質のものであ



第16図　石器(1)（1／3）

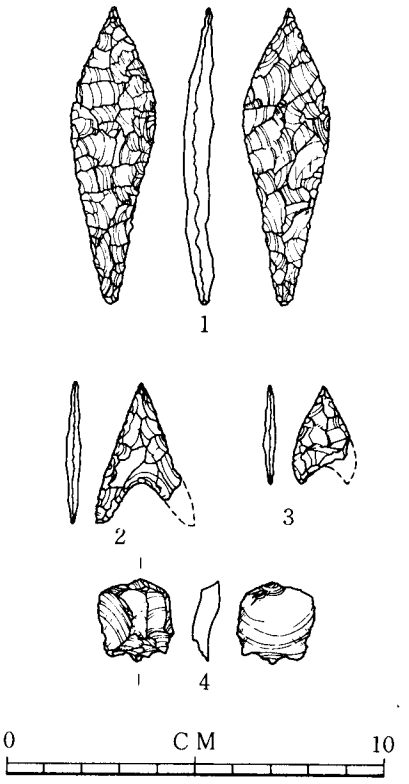


第17図　石器(2)（１／３）

る。基部、刃部幅がほぼ同じ数値を示す。基部頭部には敲打痕が認められる。４は、刃部をやや欠損する。基部幅4.7cm、刃部幅5.7cm、現存長11.2cm、現存重量 253 g を測る粘板岩質のものである。片面は風化のため剝離が甚しい。５は、刃部を欠損するものである。基部は孤線を描き、現存長 7.8cmを測る流紋岩質のものである。６は、幅 4.9 cmを測る刃部の破片である。軽石混り緑色凝灰岩質である。７は小形のものである。基部と刃部を欠損する。基部幅1.5cm、刃部幅1.7cm厚さ 8.5 cm、現存長 4.9cm、現存重量120 g を測る輝石安山岩質である。以上の７点が、本遺跡からの出土であるが、基部幅より刃部幅の方が広いタイプと、基部幅、刃部幅の同一のものと両方のタイプが存する。後者は、２の一点のみで他は前者である。

石皿（第17図20）

奥原遺跡から一点出土している。調査区西側の頂部平坦部から斜面に変換する部位にあたり、表土下より検出



第18図　石器(3)（１／２）

したものである。片面を少し欠くが、全長14.7cm、幅約9cm程度のものであろう。表面はよく磨かれ周縁帯がなく凹んでいる。残存する側面も磨かれている。裏面も磨かれ表面に比して浅いが凹む。中粒砂岩で、現存重量308gを測るものである。

凹石（第16図14～16）

三点出土しているが、それぞれ凹穴は判然としない。14は長径10.8cm、短径8.8cm、重量672gを測り長楕円形を呈する。表面に浅い凹穴を一個を有する。輝石安山岩質である。15は、長径10.6cm、短径9.5cmを測るほぼ円形に近い形状をなす。表面には、浅い凹穴がみられる。裏面は全面に磨痕がある。重量772gを測る花崗岩である。16は、長円形をなすものであるが、端面の一部を欠く。表面のみに凹穴一個を有する。端面には敲打痕が認められる。端面を除き全面に磨き痕がある。花崗岩質細粒砂岩である。

磨石（第17図17～19）

17は、上下端面には敲打痕を有し、他には良く磨痕が認められ、粗粒砂岩である。18は、全形を知り得ないが、やや長円形をなすものとみられる。風化のため、所々に磨痕が残る。粗粒砂岩である。19は、長径約11.5cm、短径8.2cmを測る長円形のものである。全面にわたって磨痕が認められる。粗粒砂岩で668gを測る。

敲石

1は、両端に敲打痕を有するが、他は全面に磨痕も認められ磨石としても使用されたことが伺える。花崗岩質細粒砂岩で374gを測る。もう一点は、第1号土坑から出土したものである。長径10cm、短径6.6cm、厚さ2.9cm、重量299gを測る輝石安山岩である。両面に良く磨痕が残るが、両側端には敲打痕が認められる。

石鏃（第18図2、3）

二点出土しているが、いずれも奥原遺跡第3号住居跡の覆土からのものである。いずれも平面形態は三角形鏃に属するものである。2は、基部のわたくりが深く、両側縁部も直線的である。3は、基部のわたくりは浅いものと思われる。両側縁はゆるやかなカーブを描くものである。いずれも輝石安山岩で重量1.9g、0.8gを測る。

石槍（第18図1）

定形品である。月桂樹葉形を呈し、両側縁には丁寧な調整を施す。側縁はゆるく孤線を描く。長さ7.9cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重量9.9gを測り、フリント質である。

石核（第18図4）

一点出土している。黒曜石で重さ2.25gを測るものである。

（平　田）

第２節　奥原遺跡

１、遺構の配置と層序

遺跡の所在する丘陵は、最高地点で標高26ｍを測る低丘陵で、南方向の直津町付近から派生してきた丘陵が和倉駅裏付近で東西方向で幅約200ｍの細長い丘陵となり和倉の安山岩質の丘陵にとりつく。七尾南湾の石崎地区と七尾西湾の奥原地区を分けてブリッジ状に伸びる鞍部の一角に占地しているのが本遺跡である。

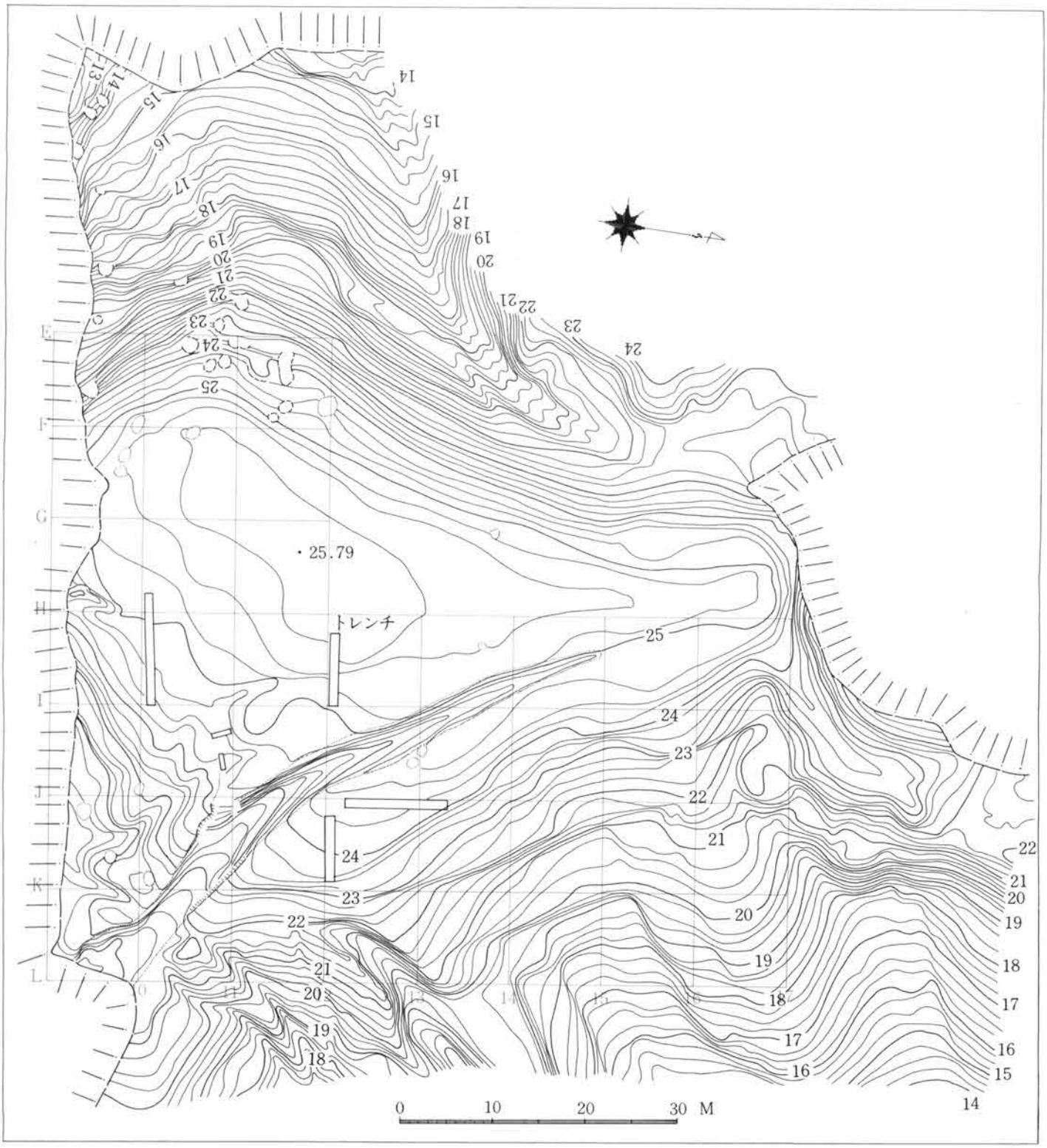
本遺跡の範囲は確認調査を行っていないので丘陵の復元から推定しなければならない。遺跡北東方向および東、西方向は、今回の調査によって範囲を確定する事ができるが、南方向は国道159号線と国鉄七尾線が丘陵を切り通した形で走っており、範囲をきめる事ができない。　国道の切り通し崖面に津田耕吉氏が今回の発掘で得たものと同時期と見られる良好な土器資料を採集している。以上の事から遺跡は南方向に大きくのびているものと推定され、東西約70ｍ、南北約150ｍ、面積約10,000㎡程度と考えておきたい。丘陵そのものは北側から若干高度を下げて伸びていたものであろう。

発掘区は南北方向に細長く伸び、東西方向の南端がひろがる三角形状に近くなるが、崖際での等高線の流れから幅を減じてゆくものと推定できる。東方の七尾南湾をのぞむ傾斜面は、等高線が直線的に流れ、耕作による削平という事も考えられたが、黒色土の包含層の遺存状態は良好で小さな埋積谷を内含している事が判明した。七尾西湾をのぞむ西側の傾斜面は旧状に近いものと見られた。北方部分のイソライト工業㈱原石採掘場は大きく穿削されて巨大な穴となって旧地形をとどめていないが、発掘北端部の状況から尾根幅を減じ、小さな鞍部をおいて次の丘陵へ伸びていったものと想像された。地表面はクマザサと小雑木におおわれ、所々に抜根をした攪乱が見られた他に硅藻土採掘のためと見られる大きな穴が、発掘区東方に２ヶ所認められた。なお、発掘区東南隅から最大幅約５ｍの山路と考えられる溝が等高線に沿うようにして北方へ伸びているのが認められた。

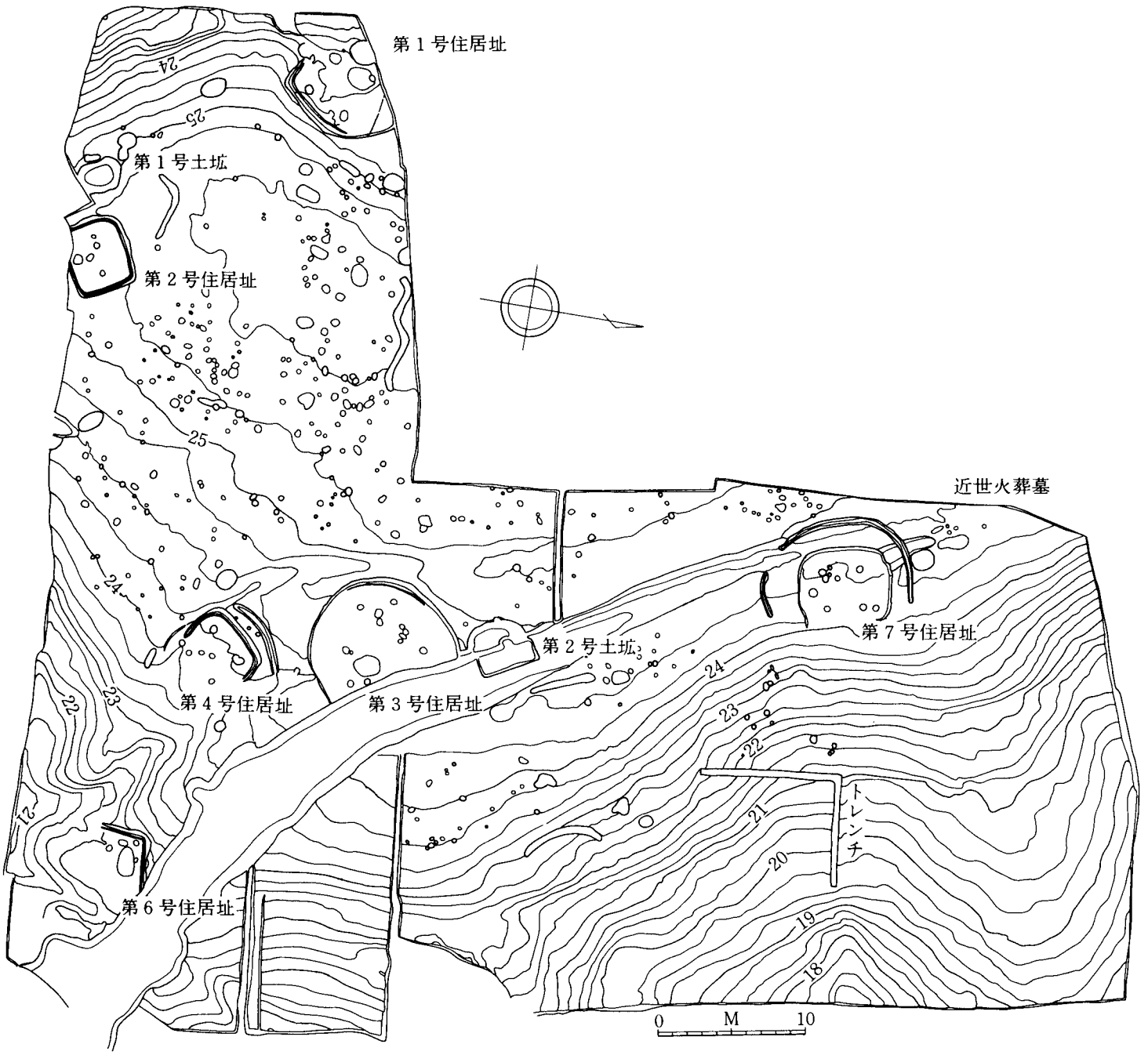
発掘調査にはいるにあたっては、道路建設により削平を受ける部分全面を予定していたが、道路敷以外が民有地であり排土の処理がきわめて困難と判断されたので、西方傾斜面に幅２ｍ、長さ20ｍの試掘溝をもうけて状況を把握する事とした。傾斜変換線上には弥生式土器の散布が認められたが、裾には包含層、遺構とも検出する事はできず、遺構が及んでいないと判断して排土置き場とした。また、北方地区については、イソライト工業㈱の御厚意により一時的に排土を処理させていただいた。

調査グリッドは、道路センター杭に準じて区画をとった。No.106＋10を11Ｊとし、南北方向にアルファベッドを、東西方向にアラビア数字をとり南西隅の杭をグリッド標示とした。10ｍメッシュのグリッドとしたのは、試掘調査時において遺物出土が極めて少ない事から判断したもので、出土量の多いグリッドに関しては、さらに５ｍ角の４区画に区切って取り上げを行った。

検出できた遺構は、竪穴式住居址６基、土坑３基と多数のピットである。住居址で外郭溝を有

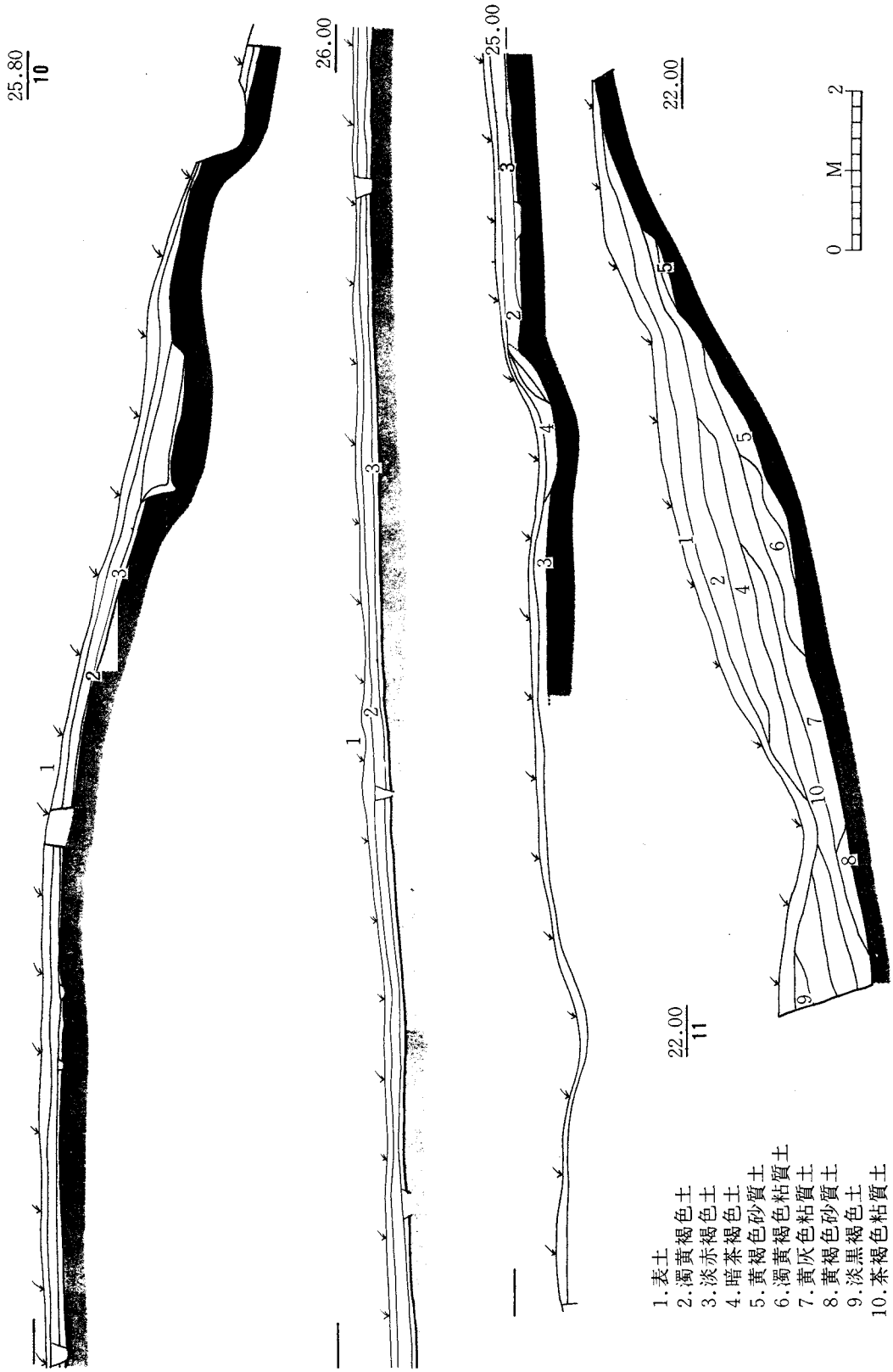


第19図　奥原遺跡地形図（1/600）

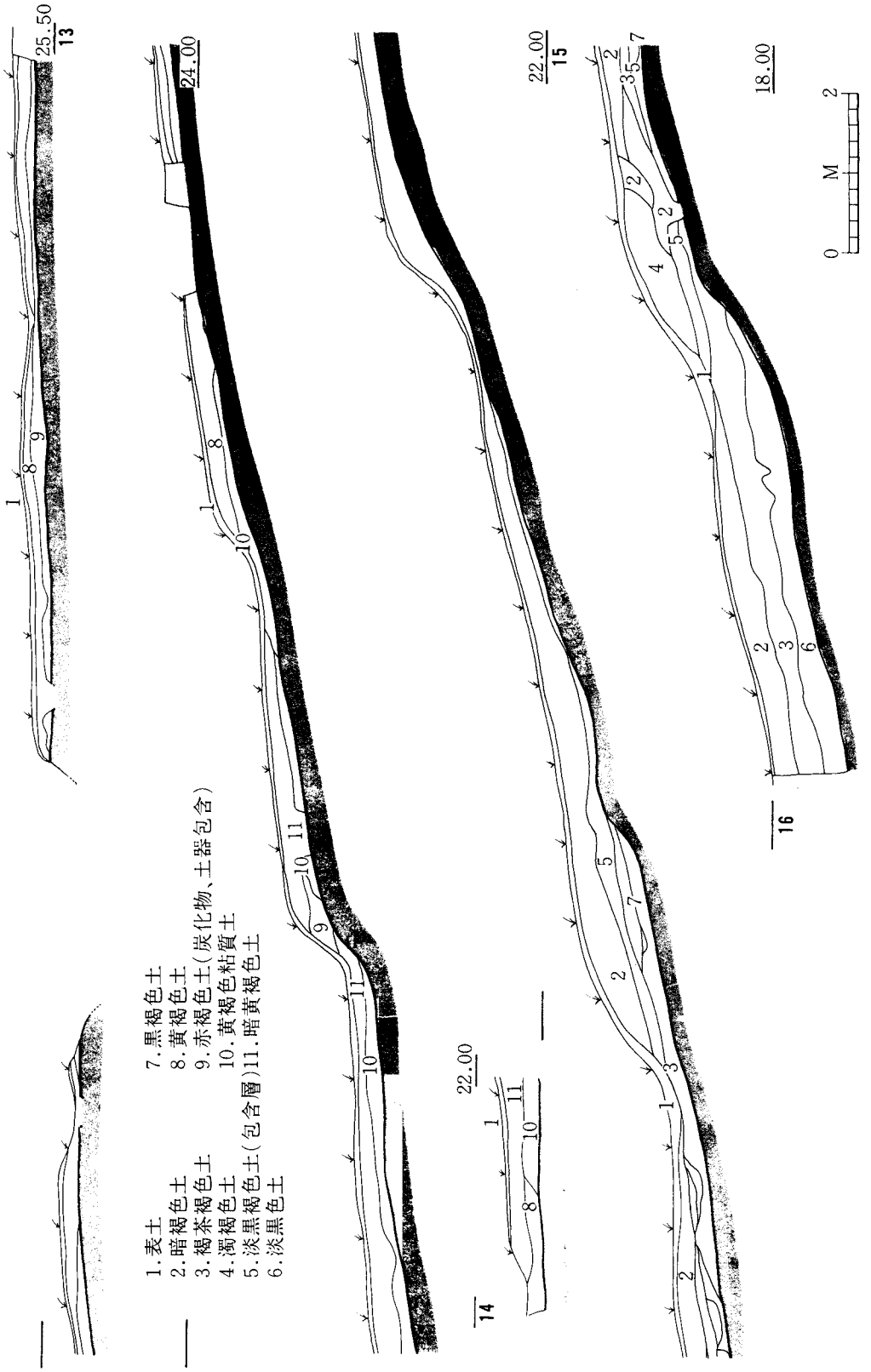


第20図　遺構配置図（１／400）

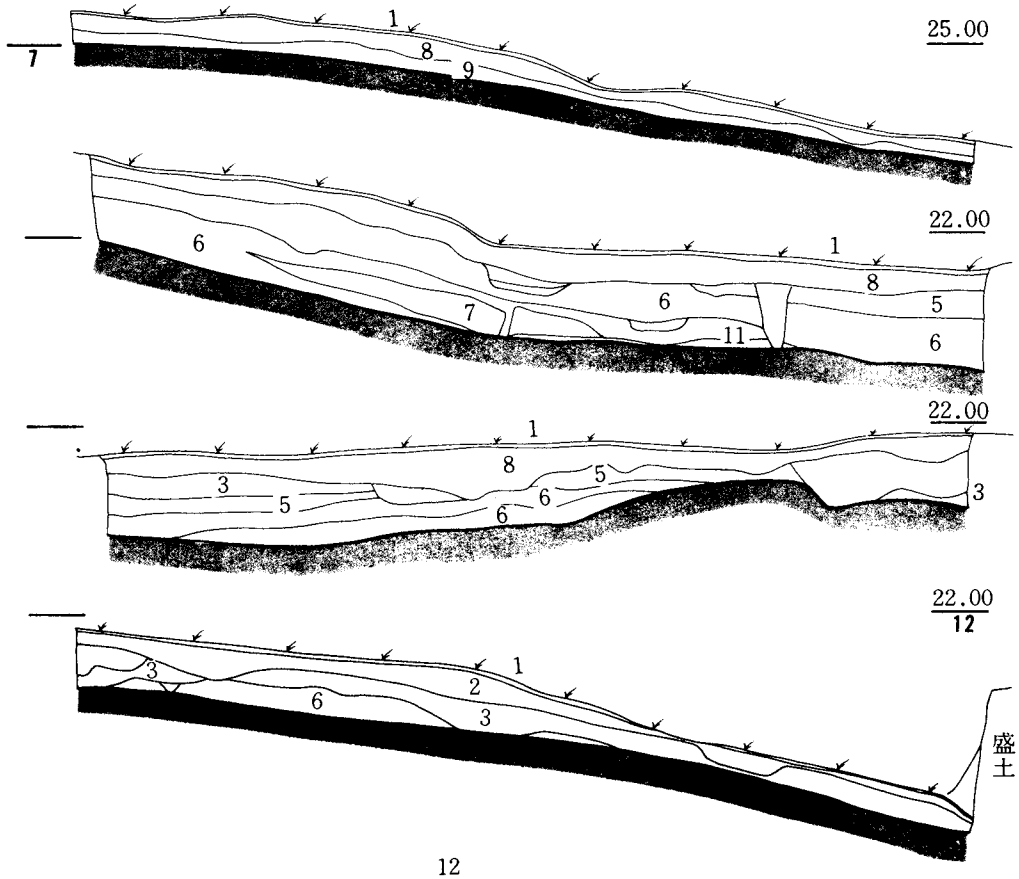
第21図　土層断面図(1)(1／80)

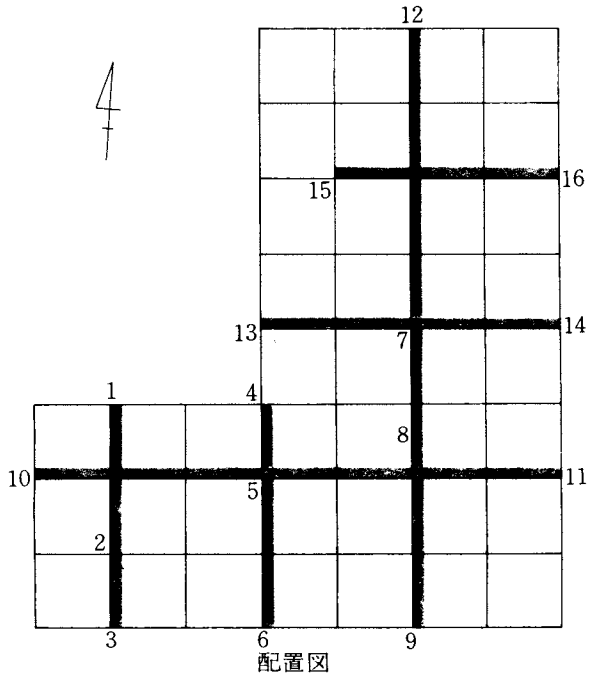


第22図　土層断面図(2)（1／80）

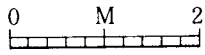


第23図　土層断面図(3)(1／80)





配置図



1.表土
2.暗褐色土
3.濁茶褐色土
4.濁褐色土
5.淡黒褐色土（包含層）
6.淡黒色土
7.黒褐色土
8.黄褐色土
9.赤褐色土（炭化物、土器包含）
10.黄褐色土粘質土
11.暗黄褐色土

第24図　土層断面図（4）（1/80）

するものは２基である。住居址は検出順で番号を送っていった。丘陵は発掘区の西側が最も高く平坦面を持っているが、５基の住居址は標高24～25ｍ前後に選地し、最高点から0.5～１ｍ低い位置にあたる。残る１基はさらに２ｍ程度高度を下げた所に位置している。

遺跡の層序は比較的単純なものであったが、調査地区全域を20ｍごとに区切り東西方向３本、南北方向３本の土層断面図を作成している。

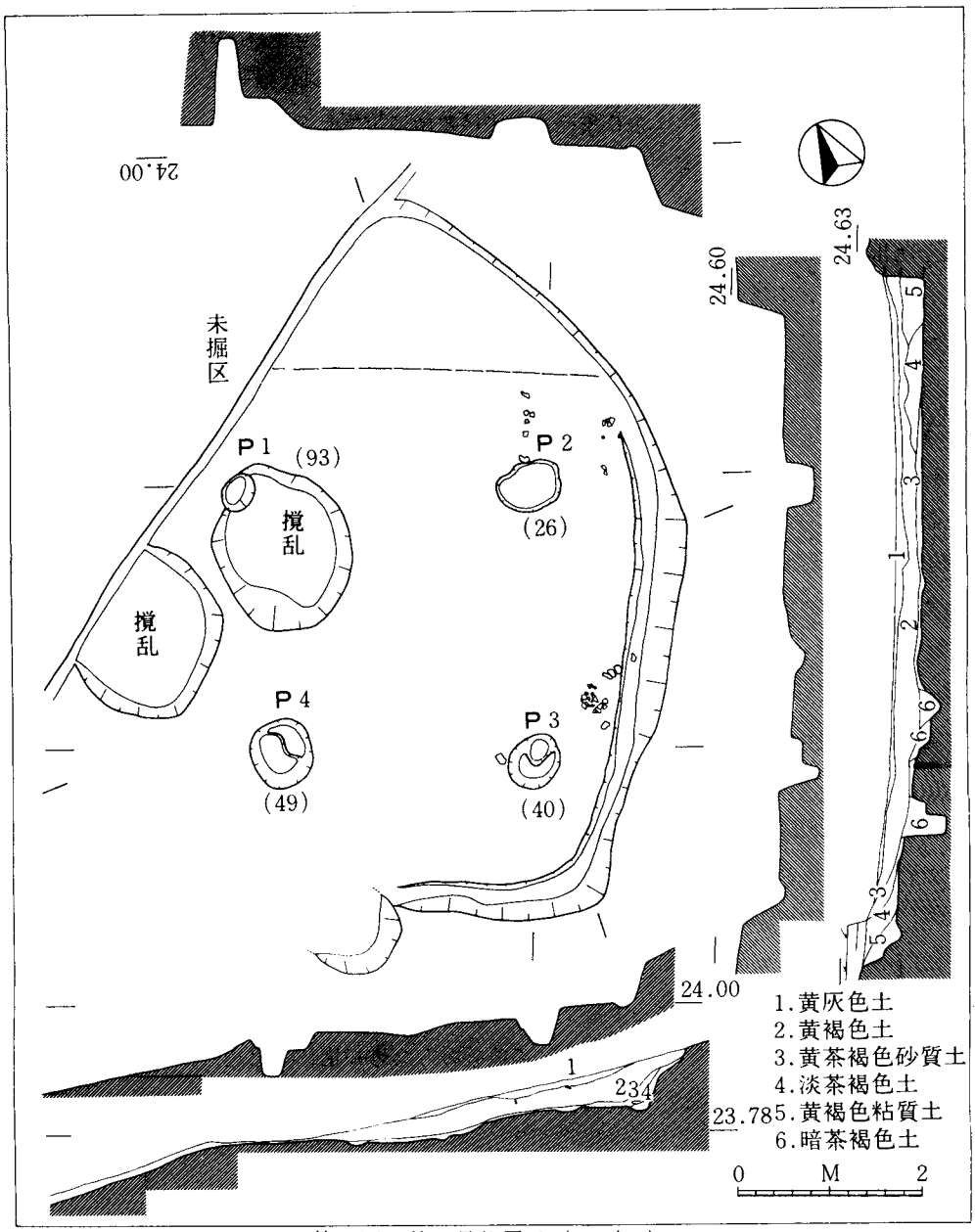
丘陵の尾根に近い地区の層序は、表土層が10～25cm、第２層の濁黄褐色土層が８～15cm程度で、赤褐色を呈する粘質土層地山面が露呈する。第21図の１～３地点、４～６地点が代表的な層序と考えられる。８～９地点は傾斜が強いことから、灰褐色土、黒褐色土が裾部に堆積していて、地山の地質も変わり、小砂利を夾在させる砂層となっている。この砂層は洪積世後期下末吉期に対比される砂層で、３層に区分されている。下部の貝層を含む泥質相までには至らないが、上部の粗粒砂相および中位の中粒砂相を見る事ができる。砂質の地山面は丘陵の裾部分全ての地区において確認している。発掘終了後の地形図で見ると、標高約22ｍより下のレベルにおいて顕著であり、発掘区北東隅においては砂粒も小さくきめがこまかくなっているのが見られた。第22図10～11地点までの東西方向の断面図では、尾根筋は基本層序に変化は認められないが、東端の10数ｍの範囲では層厚が１ｍを越える程に厚くなる。遺物の出土は肩部付近に散発的に認められるが、２層目にあたる濁黄褐色土が包含層であり、それより下層位においては認められず、弥生時代の集落形成以前の層位と見なされる。第23図は発掘区北部の東西方向の土層断面図である。第７号住居址付近から東へむけて急傾斜で落ち込んでゆき、比高は６ｍを越えていた。遺物包含層は５層とした淡黒褐色土層で、それより下位にあたる６層の淡黒色土には含まれてはおらず、遺跡形成以前のものと判断された。第24図は同地区の南北方向の土層断面図であるが、プライマリーな包含層としての淡黒色土の範囲は比較的少ない事が知られる。第７号住居址の東際を１つの頂点とする楕円形を呈し、東西約20ｍ、南北約15ｍの範囲である。土器はこの層の近辺からも散発的に出土していて南北方向の範囲は、少しく広くなるようである。なお、出土土器の大半はこの地区から出土しているが、包含層出土遺物として項をあらため一括して報告した。この傾斜面をとりまく、第３・４・７号住居址からの廃棄がその大部分を占めているものと推定されよう。

２、第１号住居址

検出状況（第25図、図版18）

発掘区の西端部、丘陵部平坦面が終り傾斜が強くなった斜面に位置している。11Ｅグリッドで大部分が検出できたが、南隅の一部が10Ｅグリッドにかかる。また、北西部分は工事区域外であるため発掘は行なわなかった。南東方向約14.5ｍで第２号住居址、東方約30ｍで第３号住居址の竪穴上端に達する。

調査にはいる以前は、抜根跡と考えられる大きな攪乱が表土面から幾つか確認され、一部は地山面にまで達していた。発掘は北西隅をのこして、ほぼ完掘したかたちとなった。平面プランは隅丸方形を呈するものと判断され、北端の住居址がせり出すようになったコーナーは攪乱土にま

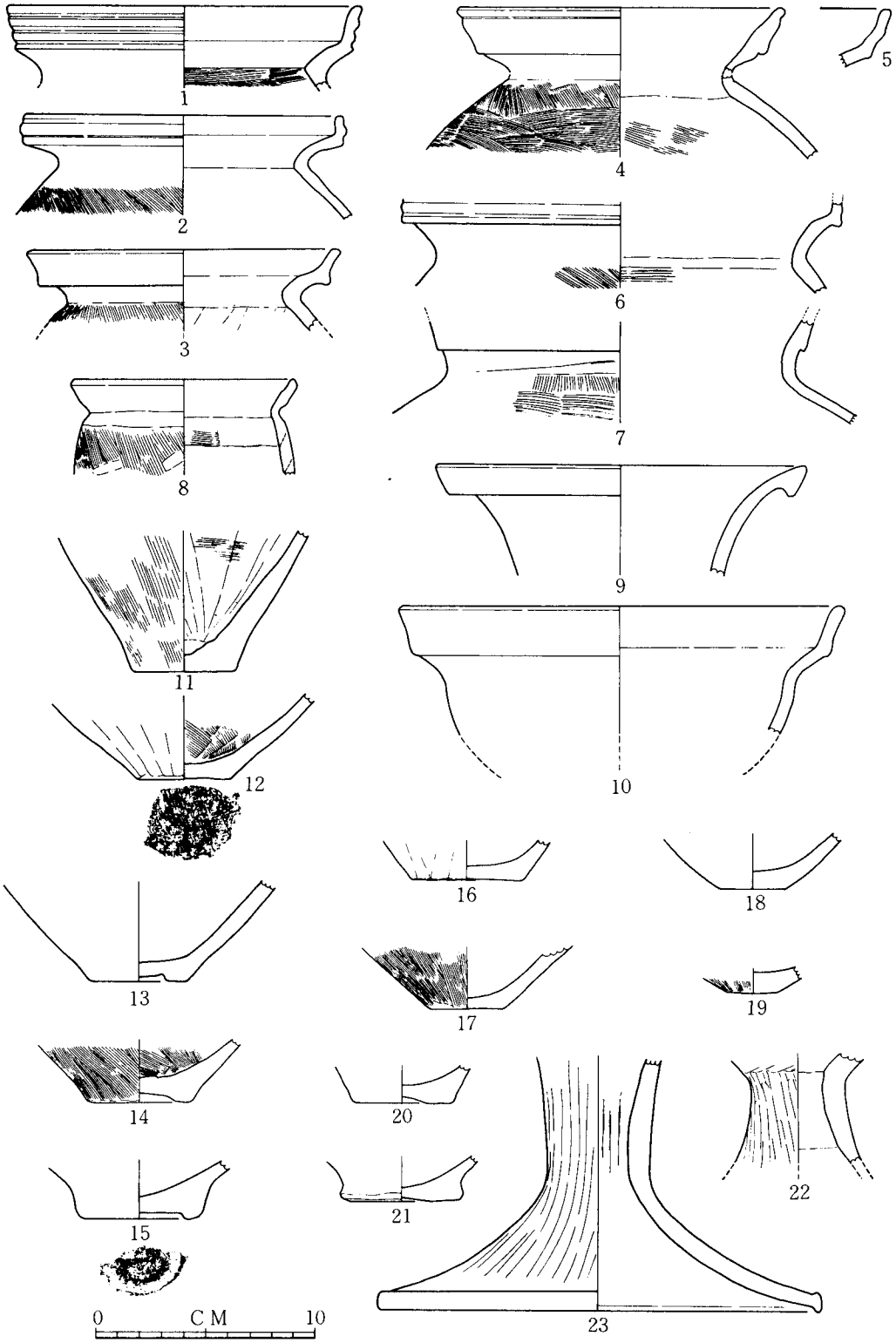


第25図　第１号住居址（１／80）

どわされて深掘りしてしまった地点であり、図上の破線で示した位置より内側が、住居址の北辺となるものであろう。

検出した周壁は、南辺が約2.3m、東辺約６ｍが確実とされる範囲で、南東隅は立ち上がり端部で角度約110度をはかる。以上から推定すれば、一辺が約６ｍ程度の隅丸方形プランを呈するものであろう。周壁の高さは斜面に占地している事もあって、東辺では60～70cmをはかる。

壁溝は東辺と南辺の一部で検出されたが、北辺に沿うと見られる地点では検出できなかった。壁溝の幅は約20cm前後で、深さは５～６cmと浅いものであるが、溝床面は起伏が大きく小ピット状をなすものもあった。



第26図　第１号住居址出土土器（１）（１／３）

床面は奥原砂層があらわれ、傾斜の強い事もあって南西方向はほとんど水平面を保持してはいなかった。床面には焼土その他特別の施設は見られない。床面は少しく傷んでいたが、主柱穴と推定できる４個のピットを検出している。Ｐ１～４までがそれで、ピット掘り方は不整形でＰ１とＰ２の間は255cm、心々間300cm、Ｐ２とＰ３の距離は246cm、心々間290cm、Ｐ３とＰ４の距離は220cm、心々間300cm、Ｐ４とＰ１の距離は230cm、心々間300cm、ピットの深さは床面から93cm 26cm、40cm、49cmをはかる。ピットの心々間を結ぶと一辺を除いて300cmの正方形に近い形が想定できる。

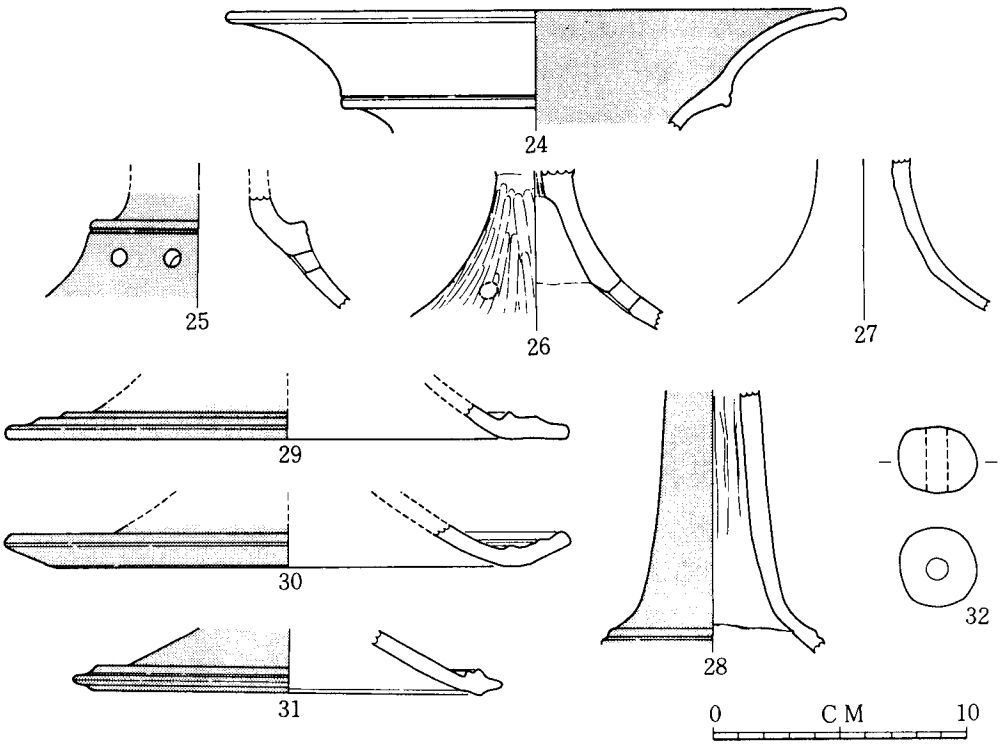
覆土は黄褐色の砂を多く含んだ土が厚く堆積し、包含層を形成していて、上層から須恵器双耳瓶およびそれに伴なう土師器が出土している。全体として出土量は少なく、床面近くに在った土器も小片となるものが多かった。

出土遺物（第26・27図）

覆土上層からは須恵器を含む律令期の土器が得られているが、節をあらためて記述する。下層から得られた土器が大部分で、床面に近いレベルに位置していたのは、第26図３・５・10・11・20、第27図27・28の７点で、他の土器は覆土第２層から出土したものである。

甕は６点の出土があった。１・２は有段口縁で凹線を持つⅠ類に分類したタイプで、１はくの字状に折れる口頸部内面に刷毛ナデが施されているのが見られ、他の部分はナデ調整が施される。内外面橙味褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。２は口縁部が短かく内屈気味に立ち上がり、２条の凹線が引かれている。口縁の一部に煤の付着が見られる。内外面とも褐色を呈し、胎土には0.5～３㎜の砂粒を含むが、焼成は良好である。３はⅡ類Ｅに分類した有段口縁の甕で、口径14.8cmを測る。幅の狭い口縁部は外反して立ち上がるもので、口縁部は素文である。内面にはヘラケズリと見まちがえる程の強いナデが施されていた。口縁部は横ナデを入れる。色調は内外面とも橙味褐色を呈し、胎土には0.5～２㎜の砂粒を多く含むが、焼成は良好。４と８は甕Ⅴ類に含めたもので、４はくの字状に折れて立ち上がる口縁部の外側に、粗雑に粘土をつけ有段口縁に似せているタイプで、口径14.4cmを測る。口縁内外面は横ナデ、体部には縦の刷毛調整のあと横方向に調整を施している。色調は内外面とも橙褐色を呈している。８は小型の甕で口径9.9cm、現器高4.4cmを測る。肩部がほとんど目立たず、口縁部が大きく外反するもので、粘土紐の継ぎ目を明瞭に想定する事ができる。体部には刷毛ナデ調整のあと、指頭によるナデを見る。色調は内外面とも褐色を呈し、1.0㎜前後の砂粒を胎土に含む。焼成は良好。５は有段口縁の甕破片で、口縁部の中央に稜線が走るもので、明橙褐色を呈している。

壺器形と見られる土器は３点の出土である。６・７は壺Ⅵ類に分類したもので、口径が推定で20cmに近くなる大型品である。ともに口縁端部を欠いているが、６は直立する口縁部に凹線を持つ有段口縁で、７は外反して大きく伸びる形状が想定される。色調は暗赤褐色を呈し、焼成は良好。９は壺Ⅲ類に分類したもので、広口の長頸壺であろう。大きく外反して伸びる口縁端部が大きく肥厚し、断面三角形の口縁帯を形成するもので、口径16.4cmを測る。内外面とも剝落が激しく調整を知る事はできない。色調は内外面とも赤褐色を呈し、0.5～1.0㎜前後の砂粒を胎土に含む。



第27図　第１号住居址出土土器（２）（１／３）

10は鉢II類に分類したが、深くなる器形や口縁がさほど伸びない点から、甕II類Bとも考えられるものである。床面上から出土しているが、内外面とも磨耗が著しく調整を見る事はできない。弱く外反して立ち上がり、頸部で強く外展して伸び、口縁部は肥厚気味に外反して立つ。口径は19.8cm、色調は橙味褐色を呈し、胎土に微砂粒を多く含むが良好で、焼成も良い。

底部は11点の出土があった。甕・壺につくものであるが、同一個体と判断できるものは、３にともなうと見られる21の１点だけであった。11は床面上の出土品で、底径4.6cm、現高6.5cmを測る。外面は刷毛ナデ、内面はヘラナデが施されている。12は外周に強いヘラナデが入れられている。拓本は底面の刷毛ナデ痕を採拓した。15は同様の手法を残すものである。13～15・20は明確に底面がくぼむものである。19は底径2.2cmの最小径の底部であった。底部の色調は暗灰褐色から橙色までの幅をもつが、褐色を呈するものが多い。胎土には1.0～2.0mmまでの砂粒を含有するものが多く、焼成はおおむね良好である。

器台は３点の出土である。22は脚最小径4.2cmを測るもので、受部の器壁が厚くなるところから上下を判断した。外周には縦方向のヘラミガキを施す。23は器台Ｉ類に分類されたタイプの脚部と考えられる。脚端部をつまみだして、立ち上がりをつくる。脚径は19.3cmを測る。外周にはヘラミガキが施され、内面にはシボリによるスジが見られる。乳白色を呈し、胎土には1.0mm前後の砂粒を多く含むが良好で、焼成も良い。27も器台の脚と想定される。22と共に器台II・III類にともなうものであろう。

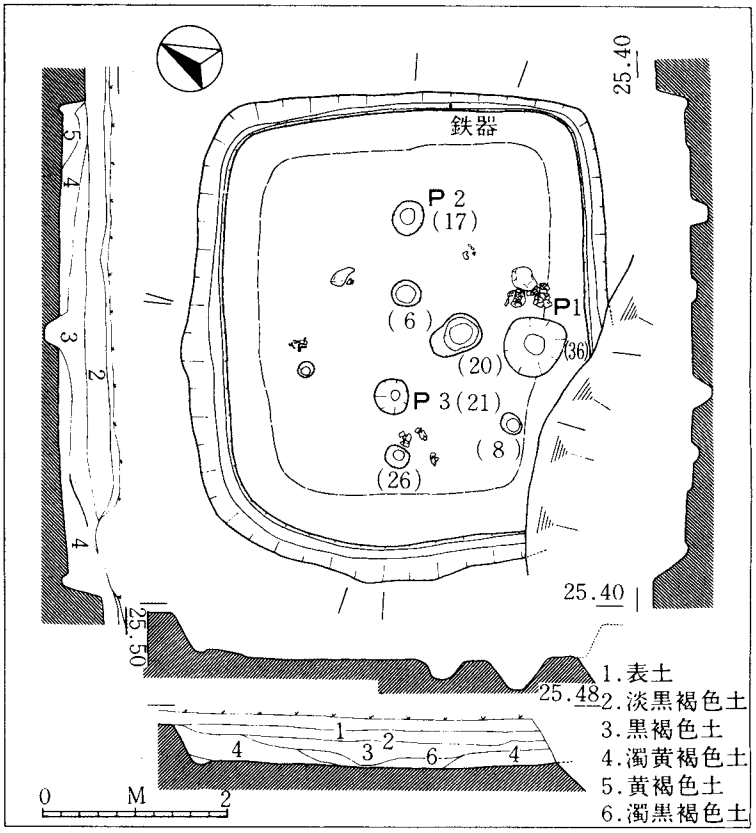
高坏は７点の出土があった。24は床面上から出土したもので、外湾する口縁部下端に１条の沈線をめぐらし、口縁端部は丸く肥厚するのが大きな特徴で、高坏Ⅳ類に分類した。口径24.2cmを測り、内外面とも丁寧なヘラミガキを行う。内面には赤彩痕が見られる。25・26・28は高坏の脚部と見られる土器で、25は筒状胴の脚柱を持ち有段の台部を持つもので、台部に１条の沈線と２個１対の穿孔を入れる。内外面乳白色から明橙褐色までの色調を持ち、磨耗が著しい。26は受部との境界までを見る脚部で、ヘラ研磨を施し透孔を入れているが、破片であるため全体で幾つであるかは不明である。色調は橙褐色を呈し、胎土に微砂粒を多く含むが精選されていて、焼成は良好である。28は筒状胴の脚柱で、ゆるやかに外反して台部に移る所に沈線をめぐらす。外周は丁寧なヘラミガキを施し、明瞭な赤彩痕を見る。明橙色を呈し、胎土・焼成とも良好である。29～31は高坏の台部下端と判断したが、器台の台部とも考えられる。29は床面上から出土したもので、29と同様に２つの段を形成する。31は口径17.2cmを測るもので、端部に貼り付けた突帯を持つ。以上３点は内面の磨耗が著しいが、外周はヘラミガキ、赤彩痕を見る。

32は楕円形をなす土錘で、横3.2cm、高さ2.6cm、径0.8cm、重さ20.5ｇを測る。一部を欠いているだけで、色調濁黄褐色、胎土には砂粒は少なく焼成も良い。

３、第２号住居址

検出状況（第28図、図版19）

発掘区の南西端、国鉄七尾線をのぞむ崖際に位置している。９Ｆグリッドに大部分が含まれ、９Ｇ、10Ｆに一部の壁がかかる。崖にのぞむ南西隅の一部をのぞいて、隅丸方形プランの住居址を完掘した。10ｍごとの畦畔をのこして、各グリッドを掘り下げていった段階で黒色土の円形にめぐる落ち込みを検出。第１号住居址と同形プランのものと想定したために、歪つな形での土層観察用の畦畔の位置となってしまった。北東方向14.5ｍで第１号住居址、東方向22.7



第28図　第２号住居址（１／80）

mで第4号住居址の掘り込み上端に達する。

丘陵平坦面上に位置しているところから、床面の高さは6棟の住居址のなかで一番高いレベルに位置している。長軸方位は北65度東に置く。

竪穴の遺存状況は極めて良好で、東西長辺5.2m、南北短辺4.4m、深さ45cmの隅丸長方形の平面プランを持つ。検出された掘り込み角度は、北西側がやや鈍角で、南東側が鋭角的な角度を示している。また、掘り込み上端のプランも北西側と南東側で異なる。

壁溝は全周して検出された。幅10～15cm、深さ5cm程度のもので、土器片および鉄器片が出土している。

床面は壁溝から40～55cm内側にはいった位置で、住居址プランを縮小したような隅丸方形プランを持って2～3cm程度落ち込んでいた。東西長辺3.65m、南北短辺で3.5mを測る。床面には炉を示す焼土等の痕跡は認められなかった。ピットは南辺の壁近くに径60～65cm、深さ31cmの不整形プランのものと、長軸ラインにのるP2・P3が検出された。P2とP3の距離は155cm、心々間では190cmを測る。床面からの深さは19cm、21cmであった。

床面上には他の住居址に比較して土器の出土量は多く、特にP1の東方に置かれていた石のそばには全形をうかがう事のできる資料の検出もあった。9の鉢、13の台付装飾壺がそれである。

覆土は上層に淡黒褐色土があり、床面に近づくにつれて黄褐色土の含まれる割合が高くなる、いわゆるレンズ状の堆積を示していた。土器を多数包含していたのは、3層と4層の濁黄褐色土層であった。

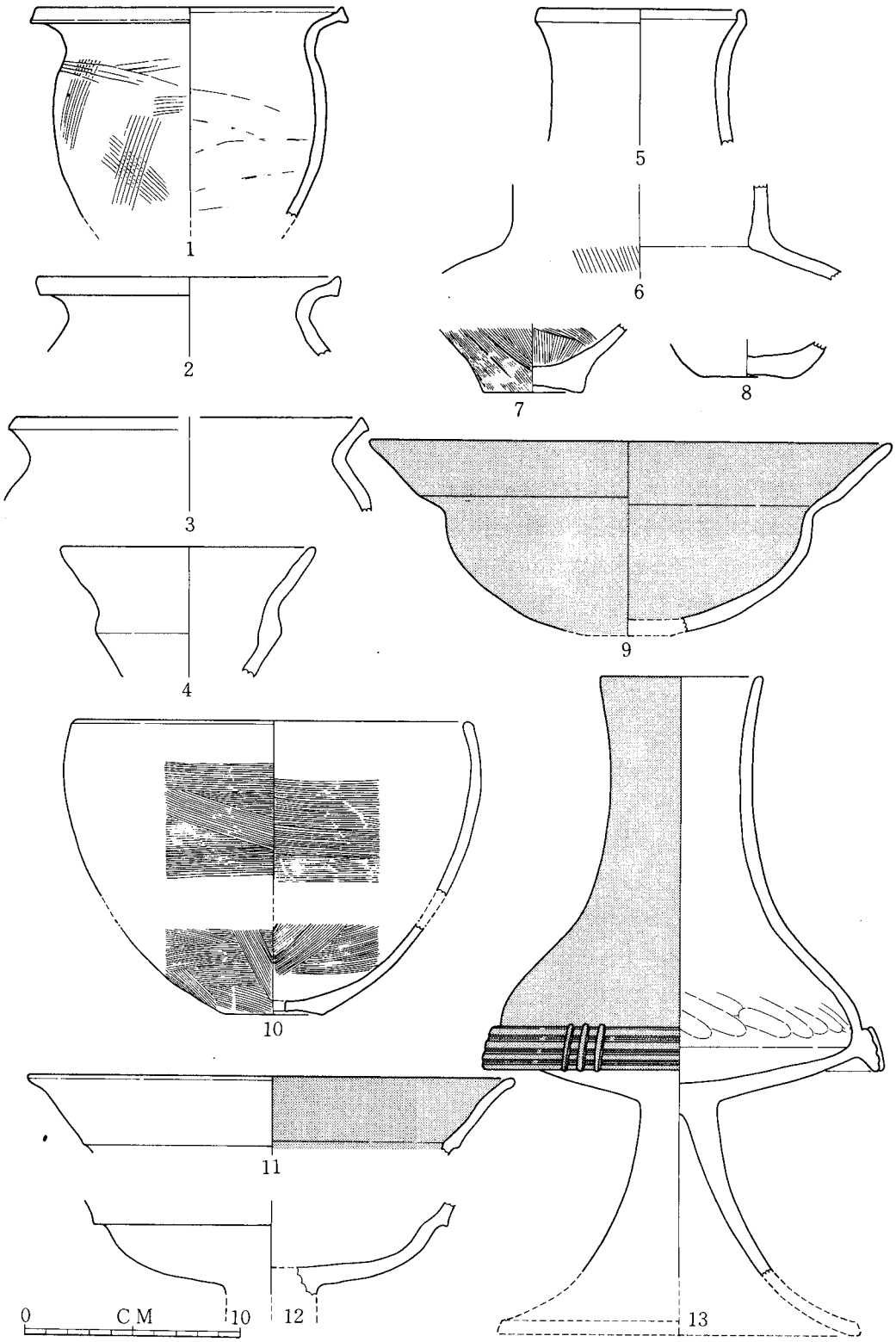
出土遺物（第29～32図）

床面上から得られた土器は第29図に示したもの13点がある他、覆土からも多数得られた。床面上の土器を先に記述してゆく。

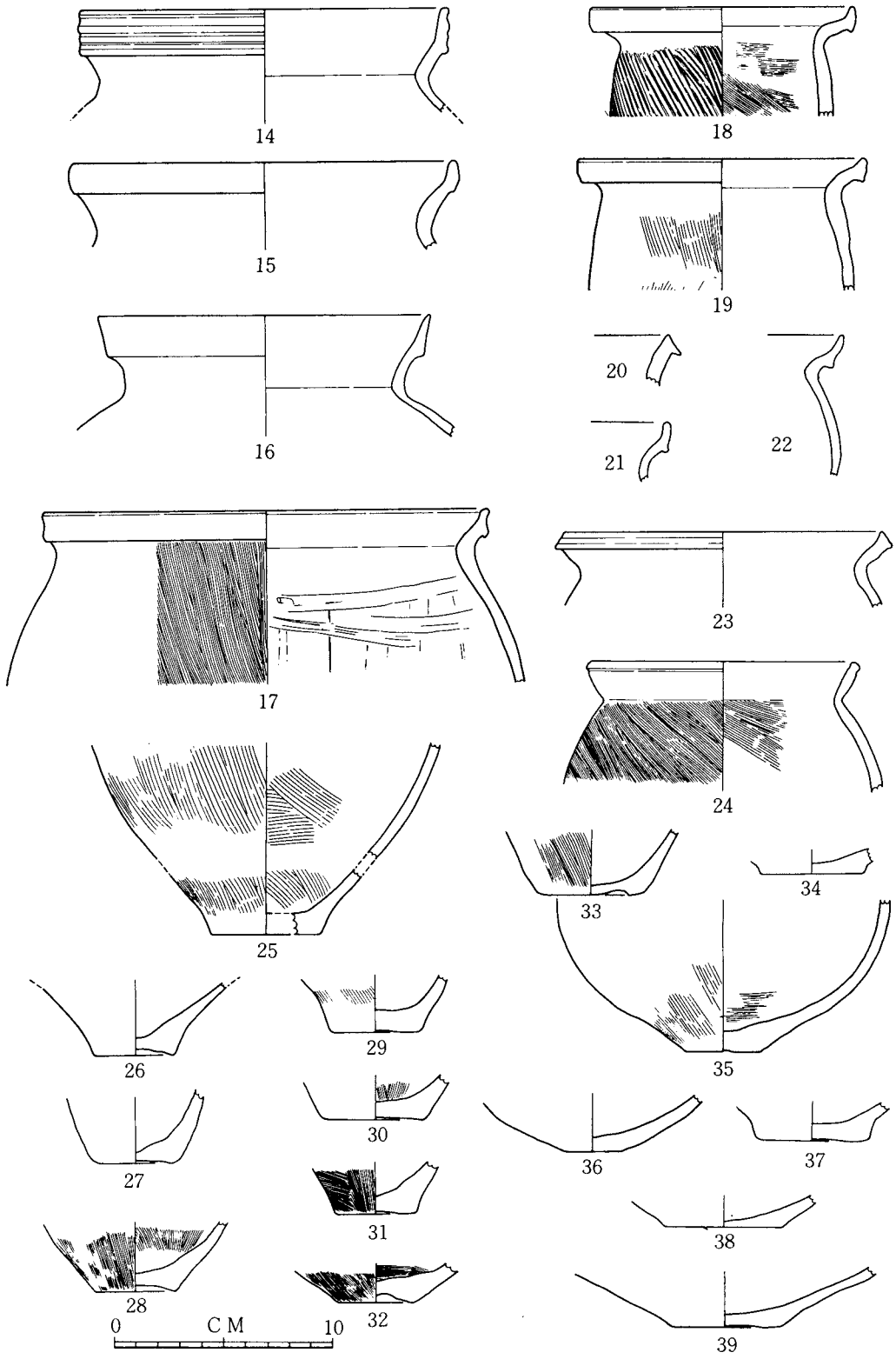
甕形態は3例の出土があり、それぞれ口縁端部に平坦面をつくり出すもので、甕II類Fに分類された。1は口径14.2cm、現高9.7cmを測る肩のほとんど張らない甕で、強く外湾する口縁部を持ち、口縁端部で平坦面をつくり出し上下に幅をひろげる。色調は内外面とも灰褐色を呈し、胎土には1～2.5mmの砂粒を多く含む。外周は荒い刷毛ナデ、内面は砂粒が移動する程の強いナデ調整を入れる。2は1と相似する器形で、口縁径14.2cmを測り、橙味褐色を呈し砂粒を多く含む。3は小片のため、口径は不明である。色調、胎土とも上記2点と似ている。4は小型の甕としたが、胴部がとびだし頸部でわずかにくびれ、長い口縁部を持つ特異な器形である。口径11.8cm、現器高6.0cmを測る。

壺は2点の出土がある。5は口縁端部が内屈する長頸壺で、壺IV類に含まれる。口径9.4cm、現器高6.1cmを測る。内外面とも磨耗のために調整痕を見る事はできない。6は壺の頸部片である。口頸部径12.0cmを測り、肩部に刷毛ナデの痕を見る。内面は不明。色調はともに褐色を呈し、胎土に0.5～1.8mmの砂粒を若干含む程度で、焼成は良好である。

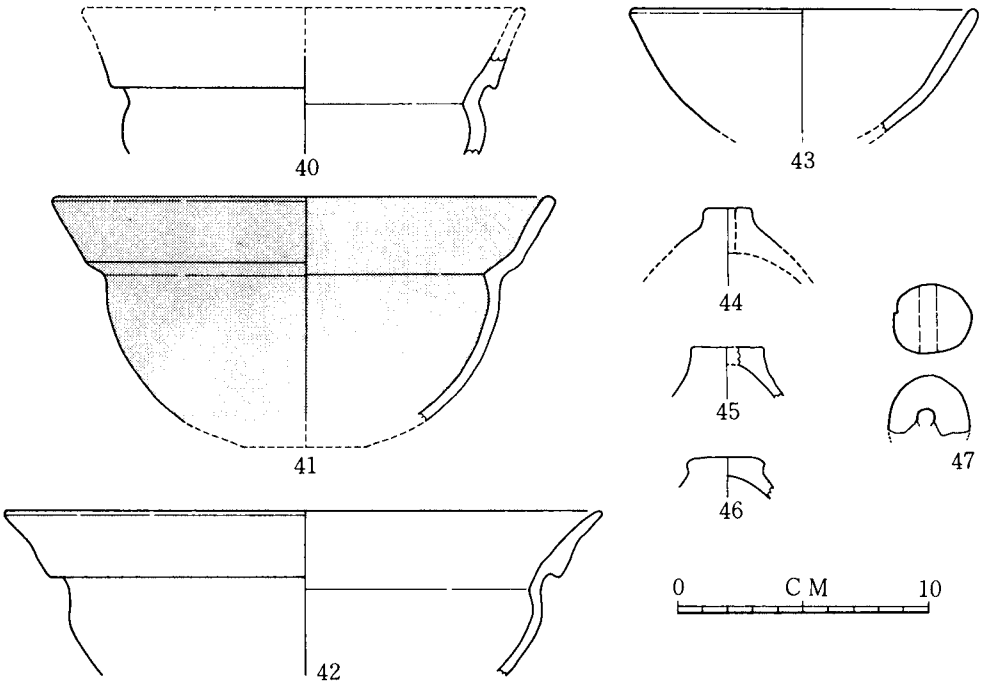
底部は2点が得られ、7は底径4.6cmで外周に煤が付着しているところから、甕につくものであろう。底部III類に含まれる。8は底径4.6cmを測る。褐色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。調整は粗いナデ調整で終えている。



第29図　第２号住居址出土土器（１）（１／３）



第30図　第２号住居址出土土器（２）（１／３）



第31図　第２号住居址出土土器（３）（１／３）

９の鉢は口径24.2cm、器高8.8cmを測る、全面に赤彩を施したものである。外反して立ちがる胴部が肩部でわずかにくびれ、長い口縁部をつける鉢II類に分類された。

甑で全形を知るのは、10の１点だけで底部に穿孔を施した例３点を上げるにとどまる。口径17.7cm、器高は想定で約13cmである。底部径が4.5cmで中央に径1.1cmの孔を１個うがつ。口縁は内屈気味におさめ、内外周とも横方向の刷毛ナデを入れる。褐色を呈し、胎土に0.5～3.0mmの砂粒を含むが、焼成は良好である。

高坏は２点の出土があり、口径22.6cmの11は高坏II類に、12は高杯IIないしIII類に分類される。

台付装飾壺は13の例を含めて３点の出土があるだけであった。台部立ち上がりをのぞいて復元する事ができた。口径7.5cm、胴部最大径16.6cm、壺部器高19.8cmで、台部を想定した器高は約30cmを越える。胴部外周に2.1cmの突帯をつけ、凹線３条をめぐらし、３個で１組の棒状浮文を３組突帯上にはりつけている。口縁および体部は入念なヘラ磨きを入れ、赤彩を施す。内面の胴部下端には指頭によるナデ圧痕が認められる。台部は磨耗のため細部調整は不明。色調は内面橙褐色を呈し、胎土は精選されている。

覆土から出土した土器は甕形態が大部分であった。14は口径17.2cmで凹線３条を持つ甕I類に分類したもので、底径3.6cmの26がつくものと想定される。14の外周には煤が付着している。15は甕II類Cに分類したもので、16と21は甕II類Dに、17は甕II類Gに分類した。口径20.4cmを測る大型品で、短かい口縁部から肩の張らない胴部が下がる。口縁部は横ナデ、外周は縦方向の刷毛調整で、内面はやはり縦方向が卓越する砂粒が移動するような強いナデ調整が入れられている。色調は外面黒褐色、内面橙味褐色を呈し、胎土に２～５mmの砂粒を多く含むが、焼成は良好。18

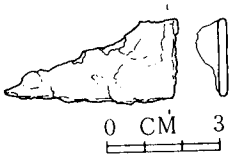
・19は甕II類Fに分類した。18は口径12cmの口縁が外湾して直立するもので、口縁内面に段が形成される。口縁内外面横ナデ調整、外周は幅のある刷毛状工具で強く引きおろす調整を施す。内面は刷毛ナデを入れる。19と共に色調は褐色を呈し、胎土に0.2～2.0mmの砂粒を混和させている。焼成は良好。23は口径14.5cmの口縁端部に面取りを入れるもので、口唇が三角形となるのが特徴で、20とともに甕III類に分類した。24は上層中から得られ、口径12.2cm、器高5.7cmを測るくの字状に折れる口縁をつくる。内外面とも斜め方向に刷毛調整が入る。色調は外面橙味褐色、内面暗灰色を呈し、胎土は普通で焼成は良好である。甕V類に分類した。

底部片は15点が出土していて、甕類につくものが大半であった。38・39は鉢につくものであろう。32は底面に器表面と同じ工具で、ナデ調整が入れられている。色調は橙味褐色から黒褐色までの幅を見るが、褐色を呈しているものが多い。

鉢は4点の出土がある。40は口縁部を弱く外反させたが、さらに大きく外反する可能性がある。41は口径20.2cm、現器高8.9cmで、内外面に赤彩を施している。地色は橙味褐色で、胎土に砂粒は少なく精良で焼成も良い。40・42は鉢I類、41はII類に分類した。42は口径24.0cm、現器高6.6cmを測る。外反する口縁部下端がわずかに伸びて段をつける。内面には口縁と体部との境に稜線がつけられる。調整は不明、胎土・焼成は良好。43は小型の鉢で、口径13.8cm、現器高5.0cmを測る。内外面とも入念なナデ調整を入れる。

蓋は3点が得られた。発掘区全体で6点の出土であるから、希少な資料である。全形をうかがえる土器はなく、つまみの部分でそれと判断した。44は穿孔が入れられ、立ち上がりの急な器形となる。45のつまみ径は2.8cmを測る。つまみ部には指頭によるおさえが見られる。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。

47は円形の土錘で、約3分の1を欠いている。横3.2cm、高さ2.7cm、孔径0.5cmをはかる。



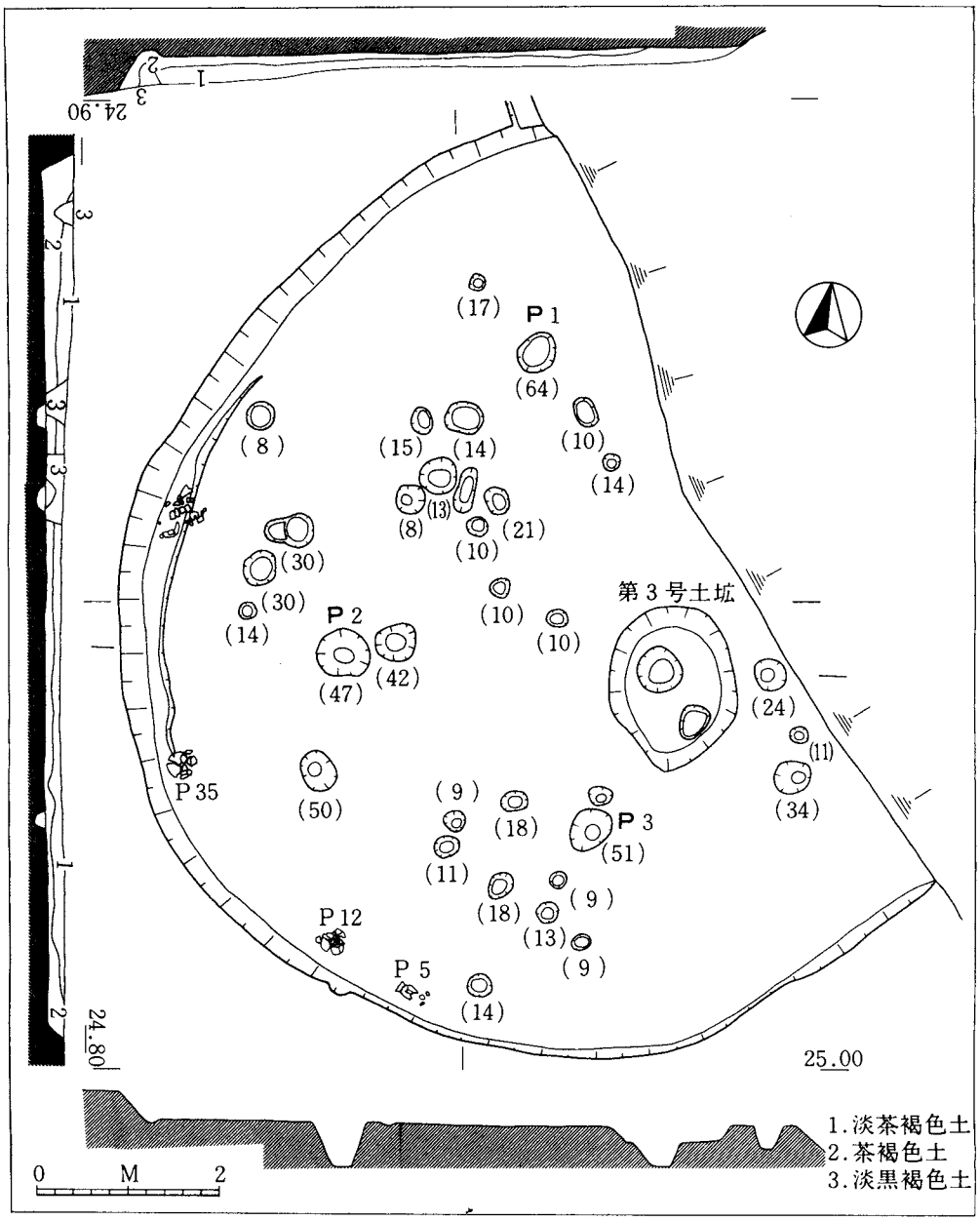
第32図　鉄器（1／2）

第32図は壁溝から出土した鉄器片である。明確に刃の部分を認めるのは難しいが、直線となる2辺は旧状を保っているものと想定される事から、鉄斧の一部と推定されよう。長さ4.35cm、幅2.11cm、厚さ0.32cm、重さ6.34gを測る。

4、第3号住居址

検出状況（第33図、図版21）

発掘区の中央地区、丘稜平坦面が東方向へ傾斜を強めてゆく肩部に位置している。11H・12H、11I・12Iの4つのグリッドにまたがり、大部分は11Iグリッドに含まれていた。住居址の北東部分は9Kグリッドから伸びてくる溝状の落ち込みによって削平を受け、3分の1近くの床面は検出できなかった。表土および包含層を下げてゆく初めの段階で、濁黒褐色土の落ち込みが見られ、径10cm前後の不規則な配置を持つピット数個と古墳時代後期の須恵器坏身を検出した。その後、第1・2号住居址の発掘経過から平面円形プランの住居址については、さらに綿密に掘り込



第33図　第３号住居址（１／80）

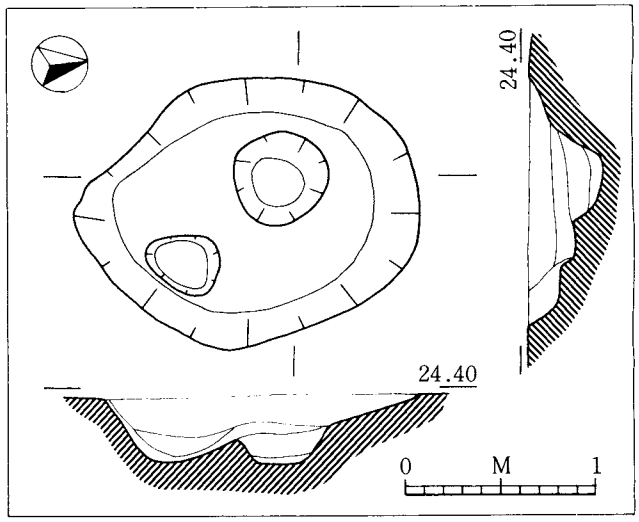
み面を押えねばならないと判断し、注意深く掘り下げていった。覆土の堆積は比較的単純なもので、基本的には淡茶褐色粘質土層と下層位にある茶褐色粘質土層の２層であり、遺物の包含は上層位のものに多く見られた。南方約２ｍで第４号住居址外郭溝に、南東15.5ｍで第６号住居址に、北方約20.8ｍで第７号住居址外郭溝に、丘陵平坦面をはさんで西方約30ｍに第１号住居址に到達する。

竪穴は平面プラン楕円形を呈し、南北方向に長軸を持つ。検出した３本の主柱穴から想定すると、長軸10.3ｍ、短軸9.6ｍであり、本遺跡最大規模の住居址であった。主軸方位は北21度東に置

いている。

検出した周壁は緩斜面に位置しているところから、西側が約34cmと深く、東側が約14cmと浅くなっていた。また周壁の立ち上がりは、西側では強くなるようだ。

壁溝は丘陵平坦面側である西方部分でのみ検出された。幅は15～30cmの幅があり、深さは２～５cm程度と浅いものであった。延長は約4.5ｍである。壁溝と重複している一括土器は、覆土下層位のもので直接的には壁溝出土とは言えない。なお、一括土器周辺からは、管玉の未製品２点が得られている。



第34図　第３号土坑（１／40）

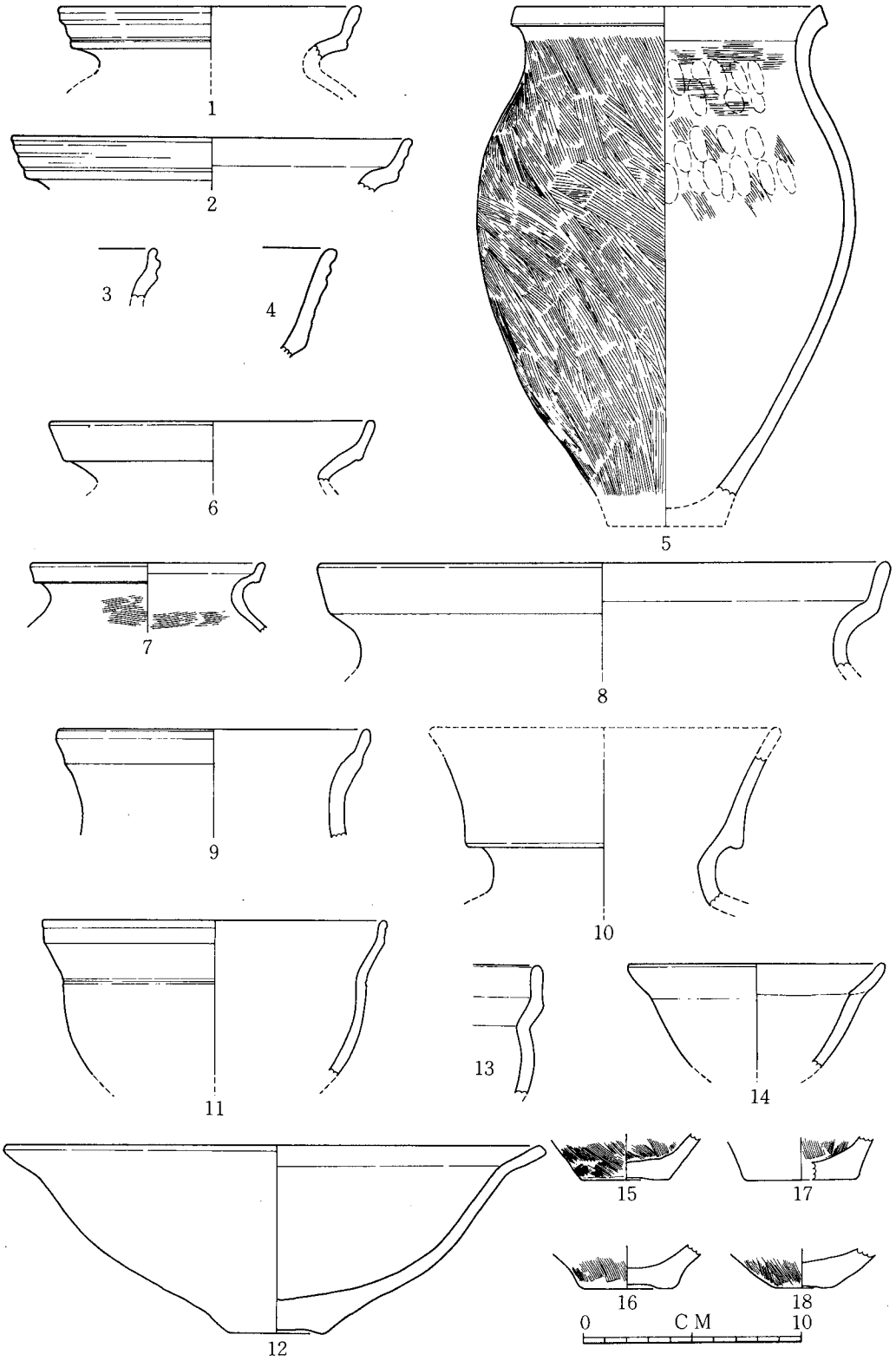
床面の検出は比較的容易で、固くしまった面を見ることができた。床面は大規模な住居址ではあるが、全体的に水平面を保持している。床面には大小30個以上のピットが散在していて、床面からの深さが45cmを越えるもの４個があり、うち１個をのぞいて４本柱の主柱穴と想定される。平面楕円形を呈し径が40～55cmを測るＰ１～３までがそれで、心々間でＰ１とＰ２が４ｍ、Ｐ２とＰ３が3.3ｍの距離を持つ。

床面の東寄りで第３号土坑を検出している。平面楕円形を呈し、長径183cm、短径142cmを測る。壁はゆるやかに傾斜し２個の小ピットが床に見られる。床面からの深さは38cmであった。覆土は炭化物・土器片を含む淡茶褐色粘質土が上層にあり、黒灰色粘質土が下層にレンズ状に堆積しており、２つのピットには切り合い関係は見られず同時に開口していたものと理解できる。

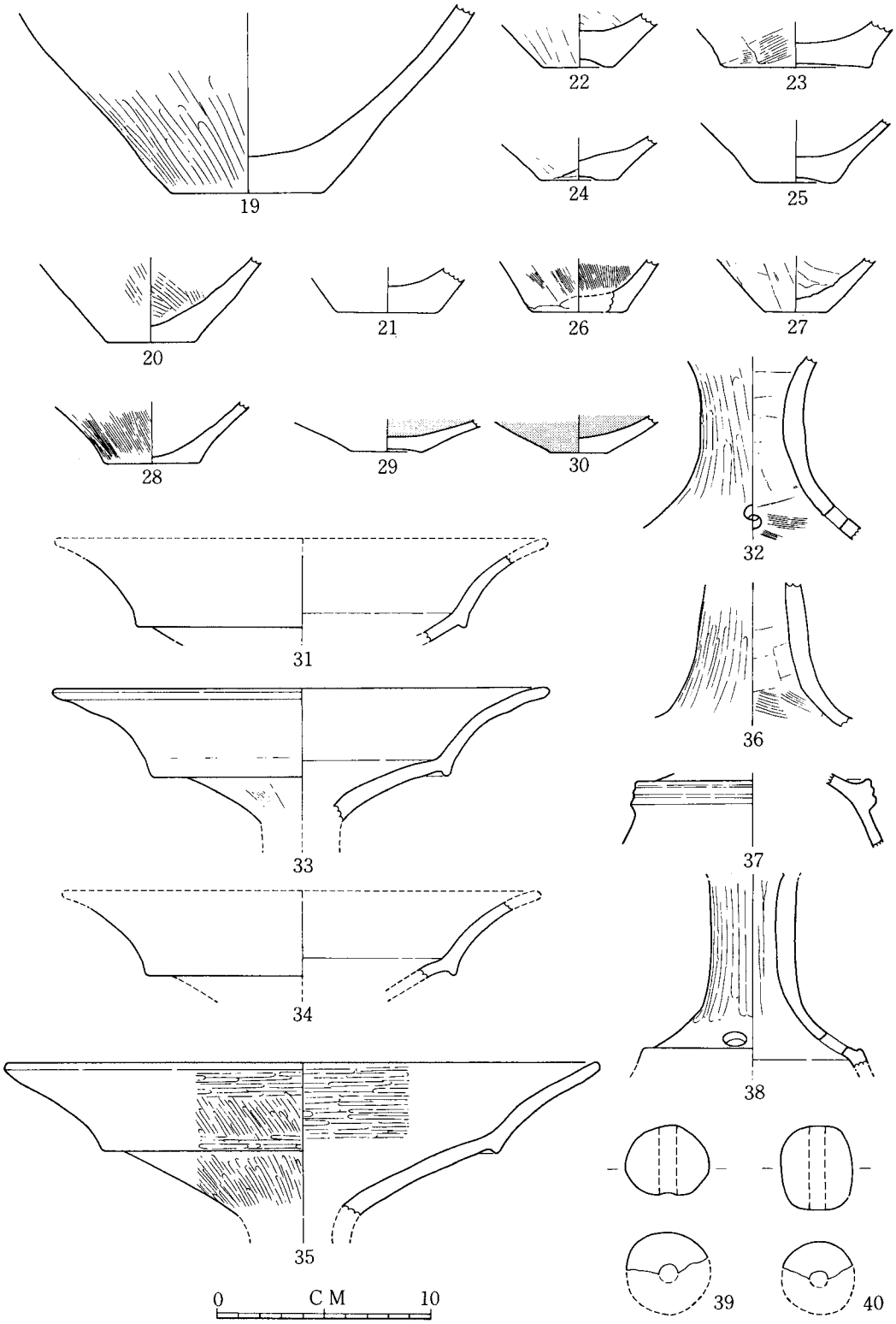
出土遺物（第35～37図）

一括遺物として出土したものは、５・12・35の３点で、第３号土坑からは31・38の器台が出土しているのみで、床面上には図示にたえる遺物は得られなかった。

甕器形のものは８点が出土している。１～３は甕Ｉ類に分類したもので、１は口径13.5cmを測り橙褐色を呈している。２は口径18.4cmを測り、外反してゆく口縁に３条の凹線が入れられる。褐色を呈している３は狭い口縁部に２条の凹線が引かれる。４は大型甕の口縁部で、上端部に２条の凹線が引かれる。暗黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良である。５は甕III類に分類した土器で、底部を除いて復元できた。口径14cm、胴部最大径17.3cm、現器高22.5cmを測る。肩部は張らずに頸部がわずかにくびれ、ゆるく外反して口縁端部に平坦面をつくり出す。外表は刷毛ナデ調整、内面の口頸部は指頭圧調整のあと横方向の刷毛調整、胴部上部は指頭圧調整のあと斜めに刷毛ナデを入れる。内外面とも橙褐色を呈し、0.5～１mmの粗砂粒を若干含むが、焼成は良好である。口縁から胴部下半に煤が、内面には底部近くに炭化物が付着していた。６～８は甕II類Ｂに分類した。６は口径14.6cm、７は10.4cm、８は26.0cmを測る。色調は灰褐色から褐色を呈し、胎土・



第35図　第３号住居址出土土器（１）（１／３）



第36図　第３号住居址出土土器（２）（１／３）

焼成は良である。11は甕II類Bに分類したもので、口径15.5cmを測る浅い器形を持ち、頸部に沈線をつける。内外面とも剝離が著しく、口縁部の横ナデを見る事ができるだけである。13も同じような器形を持つものと想像される。橙褐色を呈し、胎土・焼成とも良であった。

壺型土器は2点の出土である。9は口縁端が外反する壺IV類の長頸壺で、口縁径14.0cmを測る。10は壺V類に分類した口縁が長く伸びるタイプで、推定口縁径約16cmである。いずれも胎土は精選され、焼成は良好、色調は橙味褐色を呈する。

鉢型土器は1点の出土があった。復元完形となった土器で、口縁径25cm、器高8.9cmを測る。底部径4.3cmから外反して立ち上がり、口縁部がさらに外反する。底部は高坏型土器と同様の手法をとってつくり出しているのが大きな特色である。橙味褐色を呈し、0.5～2.0mmの砂粒を混和している。14は小型鉢で、口縁径11.8cmをはかる。内外面ともナデ調整が入れられる。

底部片は16点が出土している。15～18は底径2.5～5.0cmで内外面に刷毛ナデが入る。19は底径8.0cmの大型品で、現器高8.3cmをはかる。内外面に幅の広い工具でヘラナデが入れられている所から、壺型土器につくものであろう。27の外周は強いハケナデが入れられ砂粒が少し移動していた。29・30は赤彩が施され、入念なヘラ磨きが入る。色調は褐色を呈するものが多い。

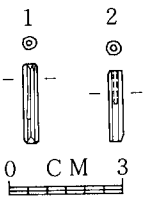
器台型土器は受部3点、脚部3点を得た。受部3点はともに器台III類に分類できるもので、33は口縁径22.6cm、現器高6.4cmを測る。長く外反する口縁の下端が下へ伸びるのが本類の特徴で、外周は斜めのヘラナデ、内面は横方向のヘラナデが入れられる。35は口径27.8cmでひとまわり大きくなるタイプで、脚部から口縁へ直線的に伸びる口縁を持つ。外周は斜めのヘラミガキのあと、上端と下端に横方向のヘラミガキ、内面には横方向のヘラミガキが入る。褐色を呈し焼成は良好。32・36・38は脚柱部分で、32は最小脚径4.8cmで4方透し孔をつける。

31と38は第3号土坑から得られた。受部内面が内湾するところから高坏と想像される。38は台部上方に透し孔を穿つ。紅味褐色を呈し、胎土は精良で焼成も良好である。

37は高坏型土器に伴なうと見られる台部分で、剝離が著しいがかろうじて凹線を見る事ができる。明黄褐色を呈している。

39・40は土錘で、円形と楕円形をなしている。いずれも全体の半分以上を欠いていた。濁茶褐色、褐色を呈し、胎土焼成とも良い。

住居址覆土から2点の管玉が出土した。いずれも石質はフリント質のもので、濃紅色を呈している未製品である。1は長さ2.1cm、径3.6～4mmで11面体をなしていて、穿孔は片側だけで貫通していない。2は長さ1.9cm、径3.8～4mmで11面体の面を見る。穿孔は片方だけで径0.85mmを測る。貫通はしていない。



第37図　管玉（1／2）

5、第4号住居址

検出状況（第38図、図版23）

発掘区の中央部、丘陵平坦面の東はじに位置している。10Iグリッドに大部分が含まれ、11I・11H・10Hに壁の一部と外郭溝がかかる。外郭溝から北方約2mで第3号住居址、南東約10m

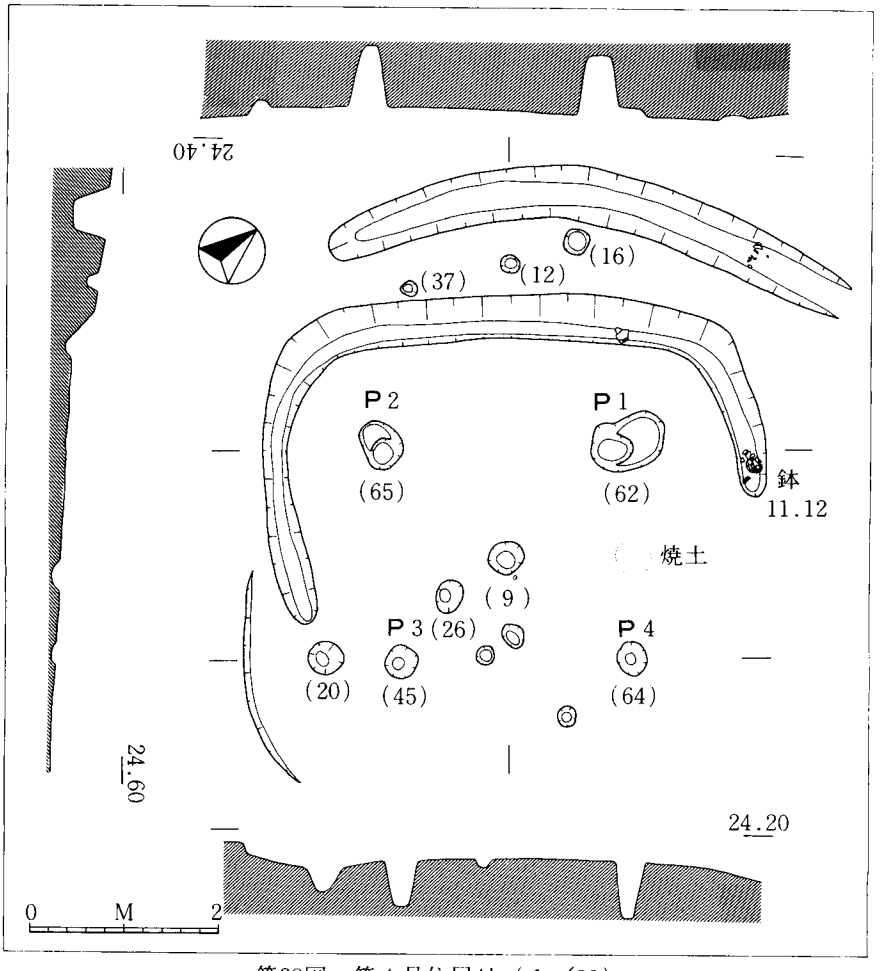
で第6号住居址の外縁にとどく。

調査にはいる前は、発掘区の中央を斜めによぎる攪乱溝と平行するような形で自然溝が見られた。9Ⅰグリッドの北東隅から本住居址の西側をかすめ、第3号住居址の西辺のわきをぬけて等高線の落ち込みが認められた。これは平坦地から派生する小さな谷と考えることができ、集落が営まれた時期より新しいものと想定される。

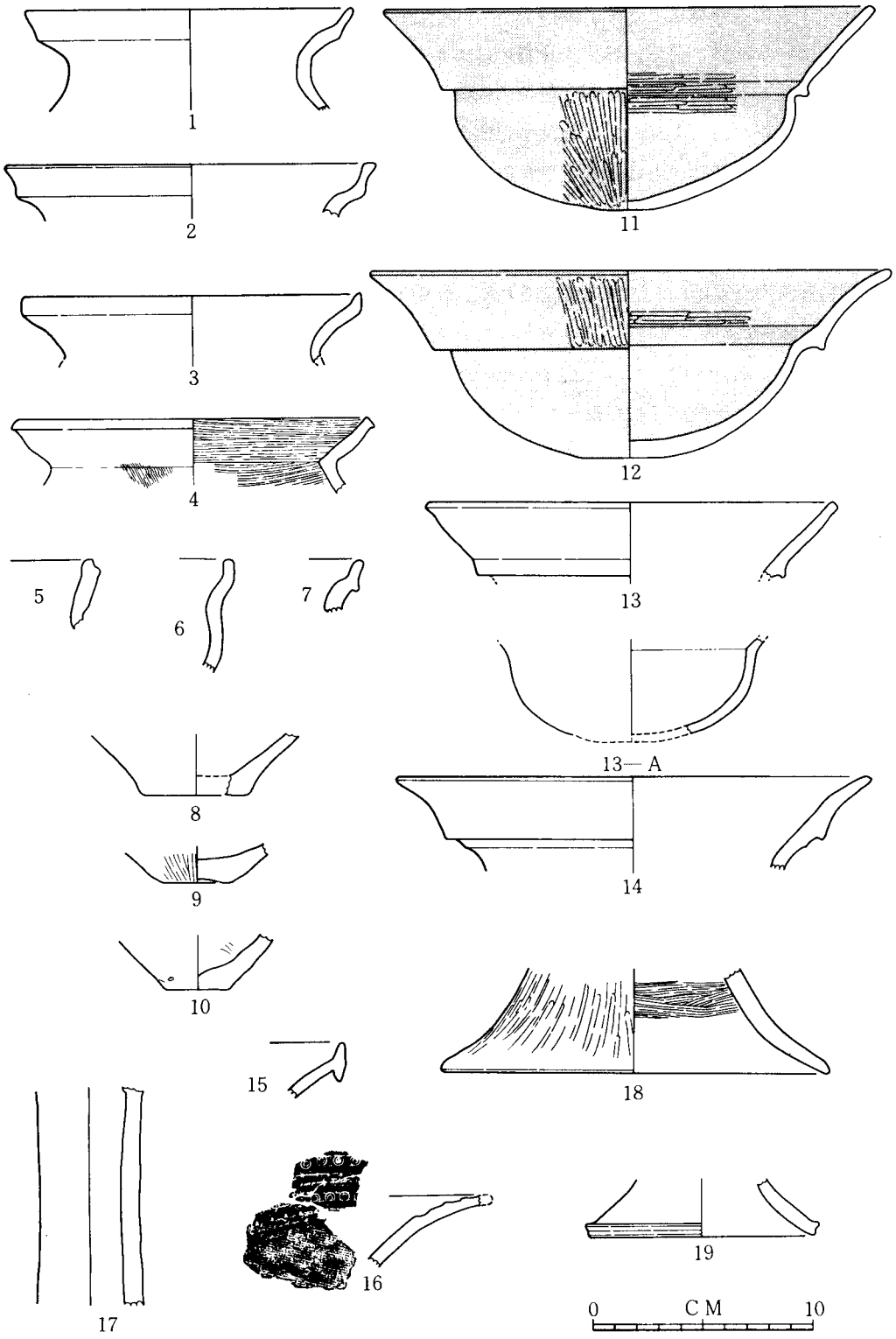
検出できたのは、平面プラン隅丸方形を呈する住居址の北半部分と、その北方約50～80cmの距離をおいて孤状にのびる外郭溝である。住居址の1辺は約5mを測り、検出できた4本の主柱穴から南北方向の一辺は約5.50mと想定される。長軸方位は北47度西に置いている。

周壁は東側約1.8m、西側約3.3mであった。掘り込みは平坦地側の北側が深く約30cmを測るが、傾斜の強くなる東方へ向けて浅くなり、そのため東南辺を検出することができなかった。

壁溝は掘り込みが検出された部分の全体にわたって認められたが、壁と同様に東半部は傾斜が強くなるため検出できなかった。壁溝の幅は30～40cmで、深さは床面側から4～8cm程である。溝の床面は比較的平坦にならされていて、北東部分には何点かの土器片を包含していた。特に壁溝の検出ができた北東端部には鉢型土器2個体が重ねられたように出土している。



第38図　第4号住居址（1／80）



第39図　第４号住居址出土土器（１／３）

床面は北西半分が生きているが、南東半分が自然傾斜面となっている。生きている面で見ると床面は中央部分が若干くぼむようになっているのが知られる。

主柱穴は4個が認められた。おのおのの遺存状態はよく、平面プラン円形ないし楕円形を呈し径30～85cmの規模を持ち、深さは45～65cmとなっている。Ｐ１とＰ２の心々間は250cm、Ｐ２とＰ３は220cmを測り、南北方向がわずかに長くなっている。

床面の北東側に焼土面が検出できた。主柱穴であるＰ１とＰ４を結ぶ線上の中央付近に位置し、径約40cmの平面円形をなしている。

住居址の覆土は２層に分割でき、淡黄褐色粘質土と床面上の淡茶褐色粘質土の約10cmと約８cmの層厚を測り、下層位に土器の包含が多かった。

外郭溝は長さ560cm、幅55cm、深さ35cmを測る。床面の高さは住居址床面とほぼ同じレベルで、床面の傾斜はほとんど変化なく平坦にならされている。覆土は２層に分かれ、淡茶褐色粘質土（炭化物少量混入）約20cmの下に、炭化物を多量に含む淡黄褐色粘質土12cmが堆積している。土器片は下層位に多く検出された。

出土遺物（第39図）

周溝から出土した遺物には、11・12があり、ピットから出土したものには６がある。外郭溝から出土したのは３・７～９・14が上げられる。その他は覆土第２層から出土したものである。

甕の１と３は口縁部が薄くなるタイプで、甕II類Ｄに分類される。１で口縁径14.8cmを測る。２は口唇部に平坦面をつくり出す甕II類Ｅに分類され、口径16.8cmで褐色を呈し、胎土に砂礫を混和している。焼成はやや悪い。４はくの字状におれ端面を平坦にする甕III類に含まれ、口径16.6cmで口縁外周はナデ調整が入れられる一方、内面は刷毛調整を入れたままとなっている。甕の底部は３点が得られた。８は底径4.8cmを測り、他の２点と同様に外へひらく体部を持つものと想定できる。色調は橙味褐色から褐色を呈し、砂粒を若干混和させる。焼成は良く、８には煤の付着を見る。

鉢器形は３点が得られ、うち２点は復元する事ができた。外反する口縁部の下端が伸びる鉢Ｉ類に分類したもので、径２～3.5cmの小振りの底部が付く。11・12は口径22.4cm、23.8cm、器高9.2cm　8.6cmを測り、内外面とも丁寧にヘラ研磨が入れられ赤彩が施されていた。 地色は橙褐色を呈し、胎土に1.5mm程の砂粒を混和するが選良で、焼成も良い。 13・13Ａは同一個体と考えられるもので、前２点に比べ小振りの鉢である。口径18.8cmを測り、色調は橙味褐色を呈し胎土・焼成とも普通。

14は壺口縁に想定したもので、口径21.8cmを測り壺Ｖ類に分類した。

15は器台の口縁部分と想定されるもので、口縁端を上下に拡張して作った口縁帯の中央に稜が引かれる。暗褐色を呈し、胎土は精選されている。

16は高坏の坏部口縁部片で、内外面とも赤彩されている。口縁内面に段をつくり同心円文と鋸歯文がスタンプされている。胎土は精良で焼成も良い。

17は脚径4.5cm、現器高9.8cmを測る大型品で、暗褐色を呈し胎土は良好であった。磨耗のため調整等は不明である。上端部の内面で粘土のはみ出しが見える事から高坏の脚が推定される。

18の底径は16.7cmで、器表面はヘラ研磨、内側はナデと刷毛ナデ調整が見られる。

6、第6号住居址

検出状況（第40図、図版25）

発掘区の南東端、丘陵傾斜面上に立地している。丘陵の傾斜が南北方向から東西方向へ変換する地点にあたり、小規模な谷地形をさけるようにして傾斜面を切り下げている。10Jグリードに大部分が含まれ、南辺の一部が9Jグリッドにかかる。北西隅の掘り込み面から第4号住居址までの距離は約11mを測る。

調査当初の観察では、斜面上を下る小さな谷による突出部分と理解していたが、淡黒褐色土と土器の検出によって住居址と判断した。

発掘できたのは、平面プラン方形を呈すると見られるコーナーの一角だけである。北辺部分で約4m、西辺部分で約3.5mの壁と壁溝を検出し、1辺が約5mの規模を持つものと推定した。しかし、コーナーの角度は約100度を見るところから多角形を呈する事も考えられよう。周壁の掘り込みはコーナーが最も深く約50cmを測る。

壁溝は周壁部分全体にわたって知られ、幅約30cm、深さ約10cmを測る、比較的丁寧に掘り込まれていた。壁溝のコーナー近くでは土器の出土がある。

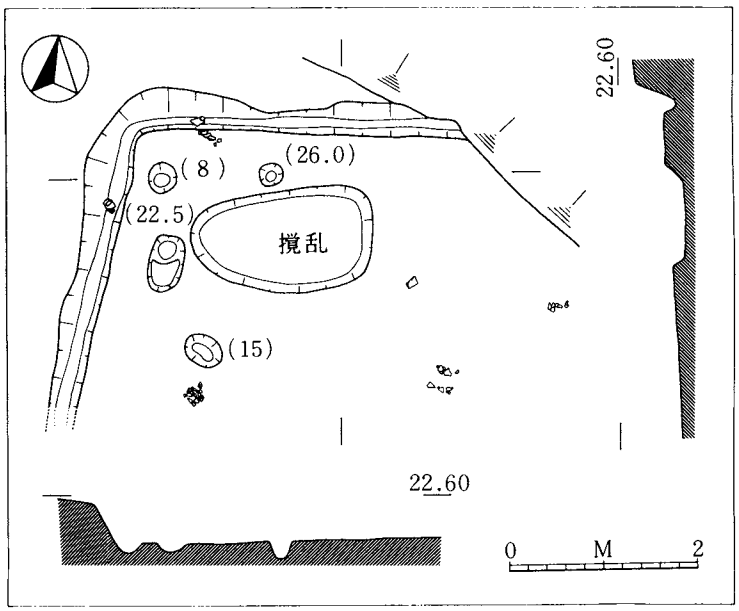
床面は若干の傾斜をつけて自然地形へと変化している。東西方向で壁から約4.4m、南北方向で壁から約3mの範囲は比較的平坦である。コーナーにおいては明黄褐色砂層の奥原砂層がひろがるが、大部分の床面は丘陵平坦面上と同様の濁赤褐色粘質土が見られた。

覆土は砂質土層が卓越し、床面上には炭化物、土器を包含する淡黒灰色砂層がブロック状になって堆積している上の層に、濁黄褐色土が約10cm程見られた。表土から床面までの深さは30～50cmを測った。

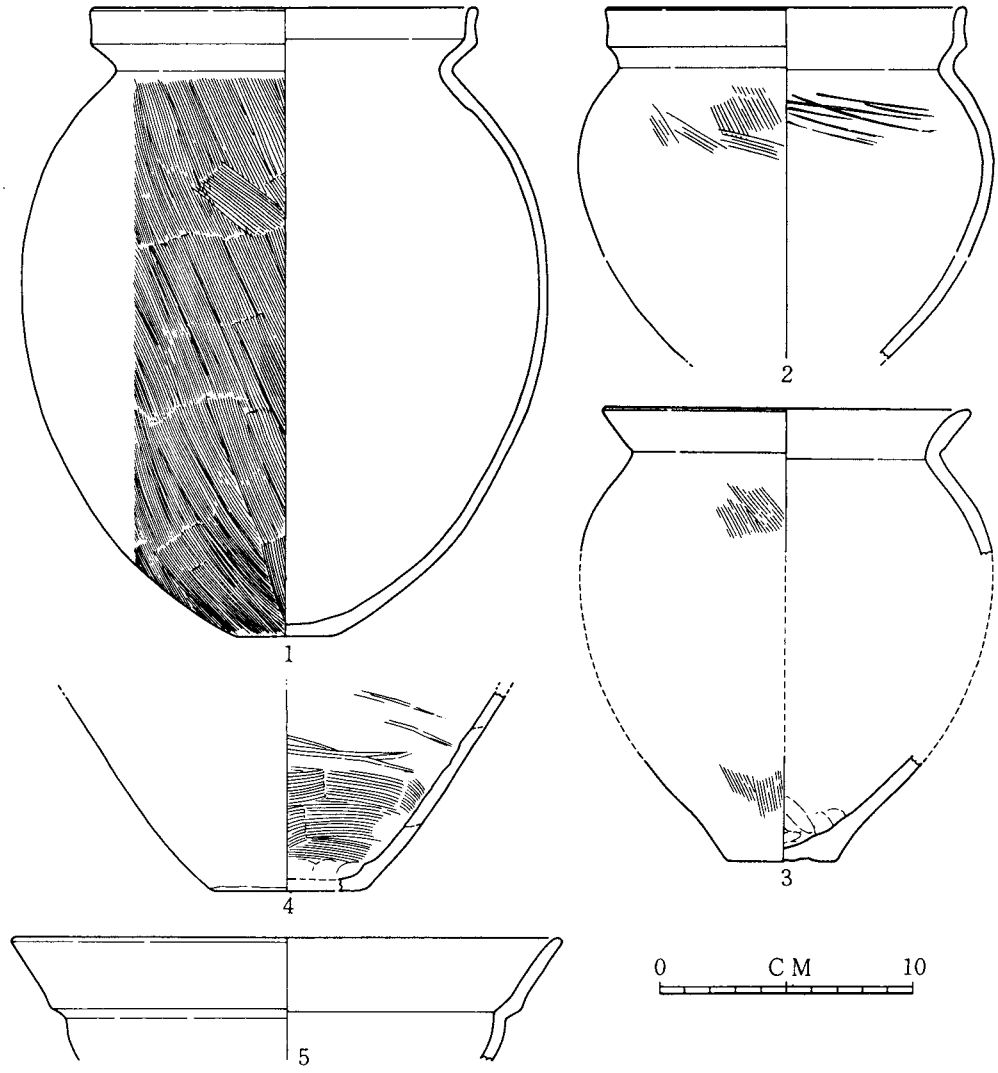
主柱穴および炉址は検出できなかった。

出土遺物（第41図）

図示した土器は全てが床面上で検出されたもので、覆土中からの土器は図示できなかった。甕は4点が得られ、図上復元を行った。1と2は口頸部がくの字状に折れて直立気味に立ち上がる素文の口縁部を持つ甕II類Aに分類するもので、1は口径15.0cmを測る。口縁部分は内外面とも横ナデ



第40図　第6号住居址（1／80）



第41図　第６号住居址出土土器（１／３）

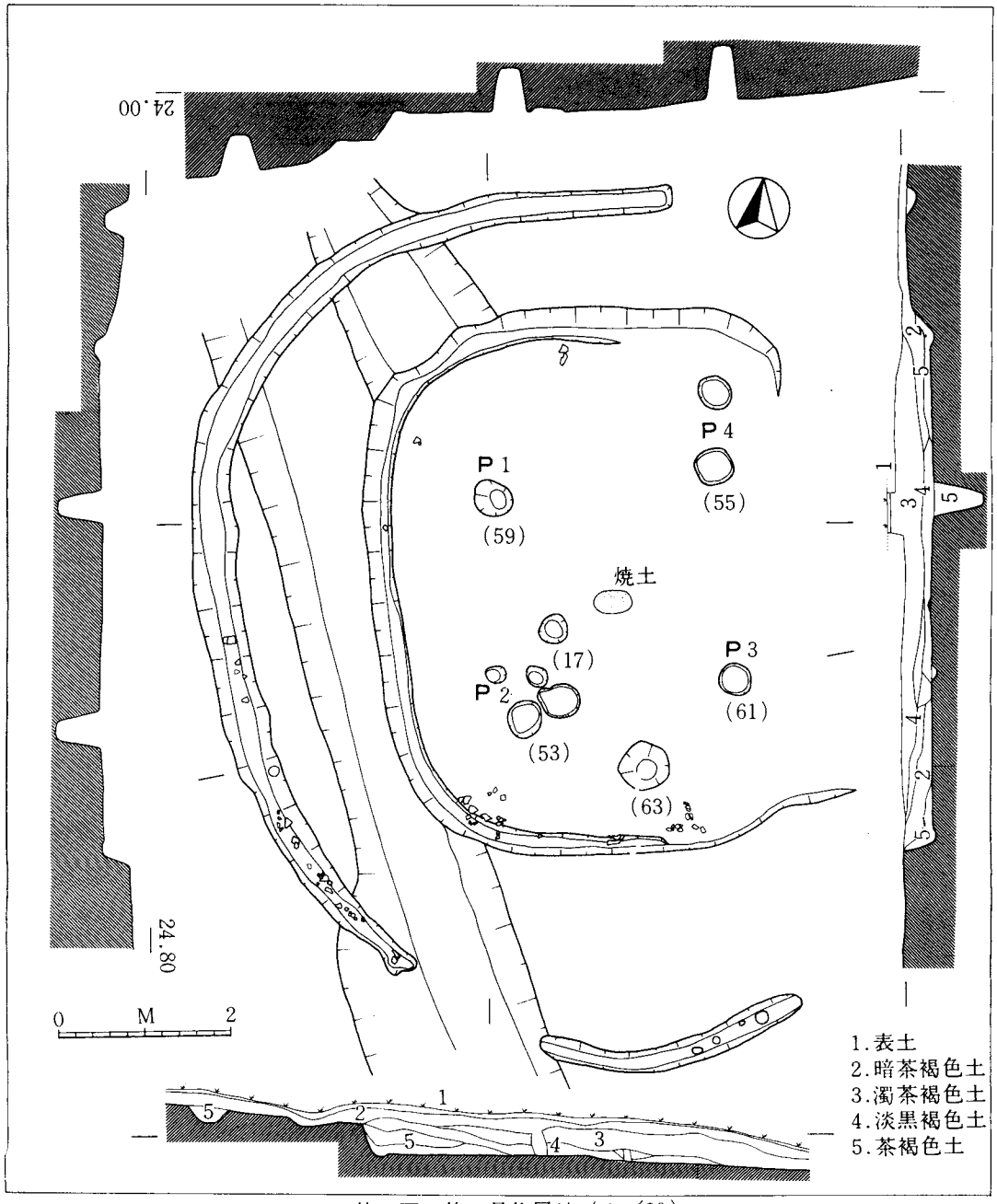
調整、肩部以下に幅1.5cmの工具によるナデ調整が入れられる。内面は磨耗のために調整は不明である。２は口径14cmの肩部の張らないもので、全体に焼成時のゆがみが著しい。外周には煤が付着している。色調は２例とも橙味褐色から赤褐色を呈し、１～３mmの砂粒を多量に混和させている。３は甕Ⅳ類に分類したもので、くの字に折れる口縁をもち内面が肥厚する。口径14.2cmで、器表面にハケナデ調整痕がかすかに見られる。底部径は4.2cmで内面に押圧痕が認められる。内面褐色、外周赤褐色を呈し、胎土に0.5～1.0mmの砂粒を多く含む。４は底径5.8cmで底部は指頭による押さえと横方向の刷毛ナデ、器表はハケ調整の後にナデ調整が入れられている。

鉢器形は１点を得た。口径21.6cmで外反度の弱い鉢Ⅱ類である。胎土は精選され、器表に研磨調整が知られる。

7、第7号住居址

検出状況（第42図、図版26）

発掘区の北端部、南北方向にのびる丘陵平坦面が東方に傾斜してゆく変換線上に位置している。検出されたのは竪穴住居址とそれをめぐる「コ」の字状の外郭溝で、14H、15Hの2つのグリッドの範囲内に含まれる。



第42図　第7号住居址（1／80）

住居址周辺には幅の狭い凹地が帯状に走行し、南端部分では外郭溝の一部を切り込んでいる。そして、住居址の北西隅にかかる溝は覆土に淡黒褐色土を含み、住居址床面にまでひろがっているところから、住居が営なわれた以前のものと想定され、斜面上の小さな谷間と考えられる。

住居址は平面プラン隅丸長方形状を呈し、東側辺を欠くのみで3辺を検出した。北辺部で長さ約5.5m、東辺部で約6mを測り、南北方向に長軸を置いている。周壁の高さは西半が高く、傾斜の強くなる東半部分では低くなってゆく。西辺で約32cmを測る。

壁溝は西半地区で検出され、幅約20cmで深さ3～5cmを測る。南西のコーナーに高坏が壁溝肩部にかかるようにして出土した。

主柱穴は4個が検出された。北西のP1と北東のP4との柱間は2.5m、P1と南西のP2との柱間は同じく2.5mを測り、正方形の配置を示していた。柱穴の深さは53～61cmの値を測る。

炉は住居址の南寄り、柱穴P2とP3の中間から約1m北の地点で焼土が検出された。平面楕円形プランを呈し、東西方向が約40cm、南北方向が約20cmであった。

床面は比較的平坦であるが、東半部分が若干傾斜を持っている。

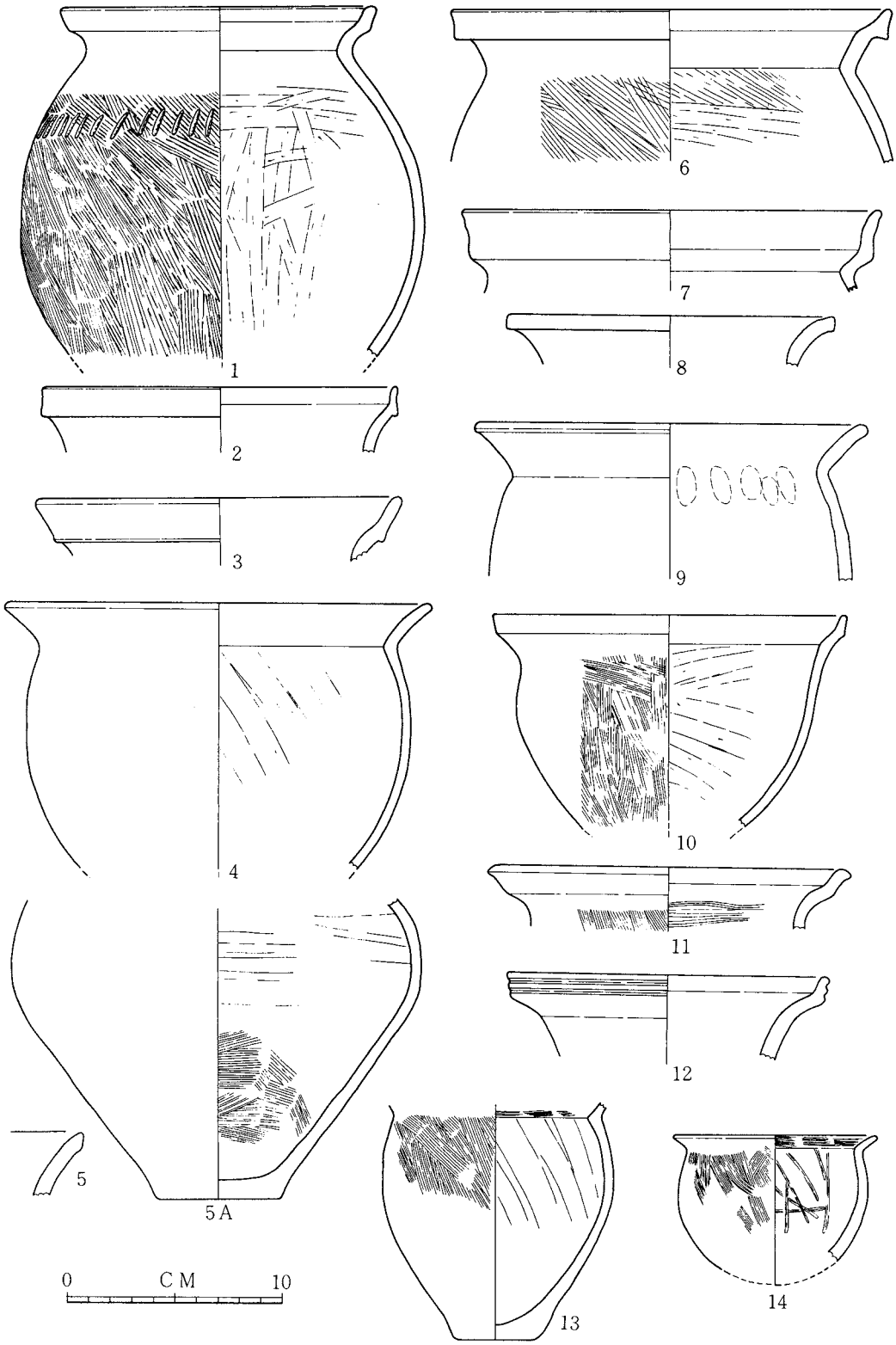
覆土は東半部分からの堆積を示すように、傾斜を持った暗茶褐色土、濁茶褐色土、淡黒褐色土、茶褐色土が見られ、住居址廃絶後の覆土の典型を見るようであった。なお、出土遺物は4・5層に多くが含まれている。

外郭溝は住居址の東側辺をのぞく三方において検出した。住居址外縁から1～2.3mの距離をおき、南方へゆくにしたがい間隔が大きくなる。幅30～45cm、深さは40cmを測る地点もあるが、住居址の床面からは約25cm程上のレベルに溝底がおかれている。掘り方は逆台形状を呈し、南半地区では「U」の字状となっていて、土器の包含が多く見られた。南端地区は攪乱溝によってとばされていて、約1.7m程が途切れている。なお、南半の外郭溝床面には4個の小ピットを検出している。

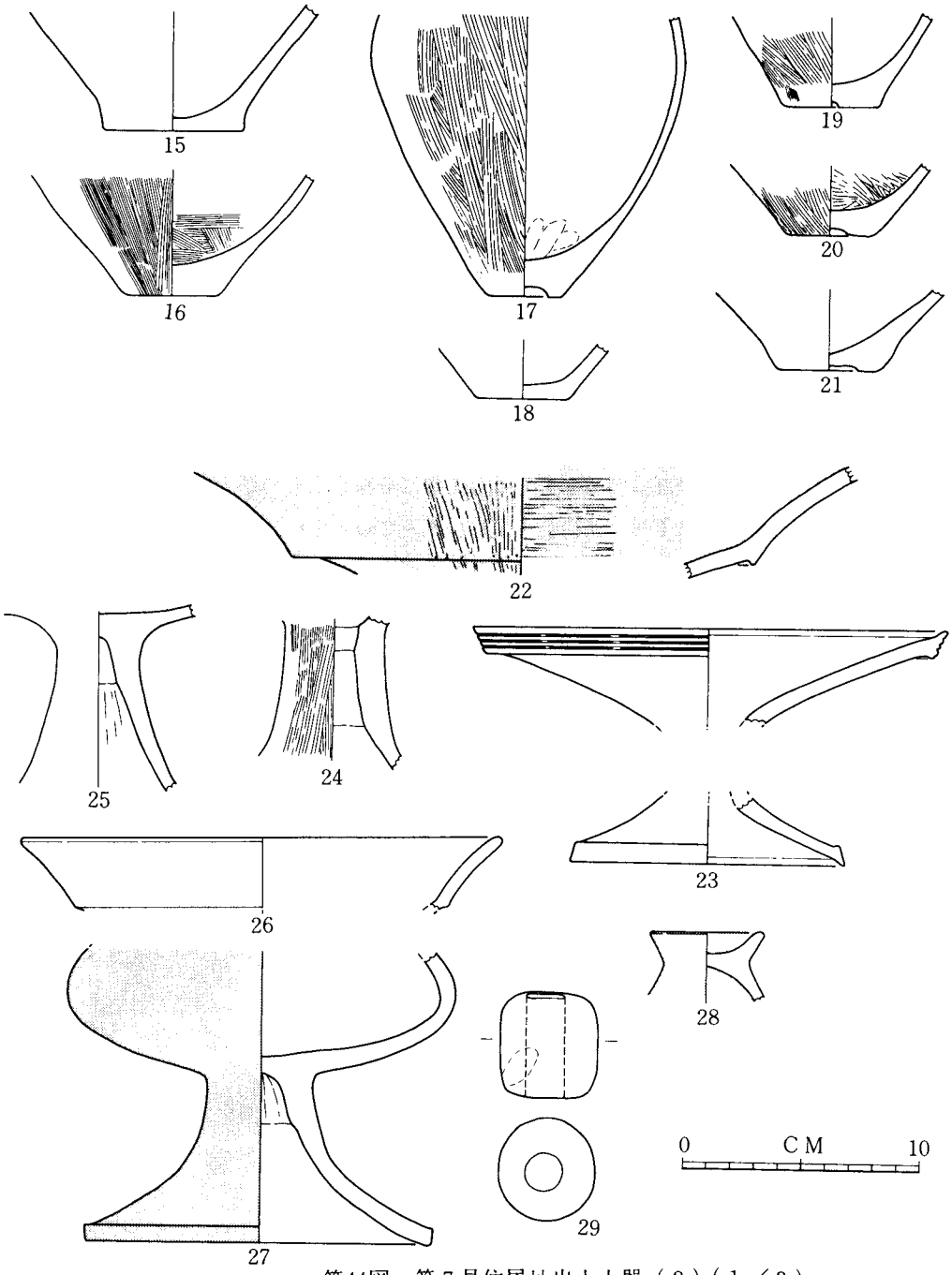
出土遺物（第43・44図）

住居址の床面上から出土した土器は、1・4～7・10・12～17・22・23・25～27があり、外郭溝からの出土品には3・9・11・28・29の5点が図示に耐えた。

甕類は比較的多く出土していて、分類した各類が出そろっている。1は甕II類Bのタイプで、口径14.6cm、現器高16.3cmをはかる。口縁内外面は横ナデ、以下器表面は単位1.2cmの刷毛ナデを行い、ゆるやかに下がる肩部に圧痕文を施文する。肩部の内面に指頭圧痕、以下胴部に砂粒が移動する程に強く押しつけてナデ調整が入れられる。色調は橙褐色を呈し、胎土・焼成とも普通。2と3は口縁下端が伸びる甕II類Gに分類したもので、口縁部の厚みや端部の違いからさらに細分されるようだ。口径16.4cm、17cmを測る。4・9はくの字に折れる口縁をつける甕IV類に含まれるもので、4は口径19.4cm、現器高12.4cmを測る肩のほとんど張らないタイプである。9は口径18.2cmで肩部に指頭圧痕が見られる。色調は紅味褐色から黒褐色を呈し、粗粒砂を混和していて、焼成はややあまい。6の甕はII類Fとしたもので、頸部内面に幅のある平坦面をつくる類例の乏しい器形である。口径20.4cmを測り、口縁部内外面とも横ナデ、内面頸部に刷毛調整、以下横方向に砂粒が移動する程強いナデが施されている。口縁部外周に煤の付着がある。色調は外周



第43図　第７号住居址出土土器（１）（１／３）



第44図　第７号住居址出土土器（２）（１／３）

明茶褐色、内面紅味褐色をなし、胎土に２～３㎜の砂粒を多量に含んでいる。７は甕II類Aのタイプで、幅の広い口縁部が若干外反気味に伸びてゆく。口径19.5cmを測る。肩部以下については破片は得られているが接合する事ができなかった。内面は横ナデと刷毛ナデ、器表面は斜め位置の刷毛ナデ調整が入れられている。10は口径16.4cmの甕II類Bで、外周に煤が付着している。肩を持たずに体部に移るタイプで、外周刷毛ナデ、内面に強い調子のナデが入る。紅味褐色をな

し、1～2㎜の砂粒の混和は少なく焼成と共に良好である。11には煤の付着が見られる。12は1点だけ出土した壺型土器Ⅰ類に分類するタイプで、口縁径15cmで狭い口縁部に2条の凹線を入れ、内外面横ナデを施す。橙褐色をなし、胎土・焼成とも良好である。5はくの字状に折れる口縁を持つものと想定されたが、小片のために接合できなかった。底部径6cm、現器高13.9cmである。13は底径約4cm、現器高10.9cmの小型品で頸部までが判断できる。内外周とも刷毛ナデ、内面はその後にナデ調整を施す。14は小型品で口径9.4cm、現器高6cmを測る。17は底径3cmのくぼみ底から立ち上がる小型の甕で、胴部最大径は13.5cm、現器高12cmを測る。紅味褐色をなし3～5㎜の礫をわずかに含むだけの胎土で、焼成は良。外周に煤が認められる。15は底径6cmの平底で、内面に指頭圧痕が見られる。16・18～21は底径3.6～4.2cmで、甕型土器につく底部片と考えられる。色調は紅味褐色から黒褐色までの幅を持ち、胎土に1～2㎜の砂粒を含む。

器台型土器は3点が得られた。22は大型品で口縁部下端径で19.8cmを測り、内外面と研磨調整のあと赤彩を施す。23は口縁部に凹線を引く器台Ⅰ類に分類したもので、口径20cm、脚径15.5cmを測る。磨耗のために調整は不明。淡褐色を呈し、1～2㎜の粗粒砂を混和している。24は脚柱部分で、最小径は4.2cmを測る。

高坏は1点の出土であった。25がそれで、紅褐色を呈し磨耗が進んでいる。

26は器台・高坏・鉢のいずれかの口縁部分であるが、判別できなかった。口径20.6cmを測る。

27は台付装飾壺の体部・脚部と見られ、外周に赤彩痕を見る。脚径14.6cm、現器高12.5cm、胴部最大径16.5cmを測る。色調は橙褐色を呈し、胎土は良、焼成はややあまい。磨耗のために、調整は不明。

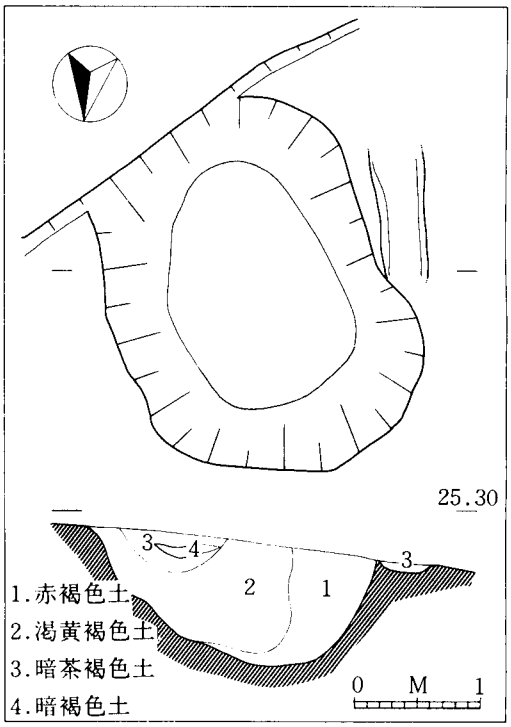
蓋と見られる28は、内外面とも丁寧に研磨され塗彩される。つまみの径は4.8cmである。

土錘は外郭溝上層位から出土した。円筒形をなし、長さ4.5cm、径4.2cm内径1.7cm、重さ80.5gをはかる完形品であった。濁黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良。

8、第1土坑

発掘区の南西隅、9Fグリッドに位置している。南側崖線にのぞんだ地点で、第2号住居址の西方約1.5mの距離にある。

平面プラン長楕円形をなし、長径約3.2m、短径2.2m、深さ1.0mを測る。床面は平坦ではなく舟底状を呈し、西方部分に傾斜してゆく。



第45図　第1号土坑（1／60）

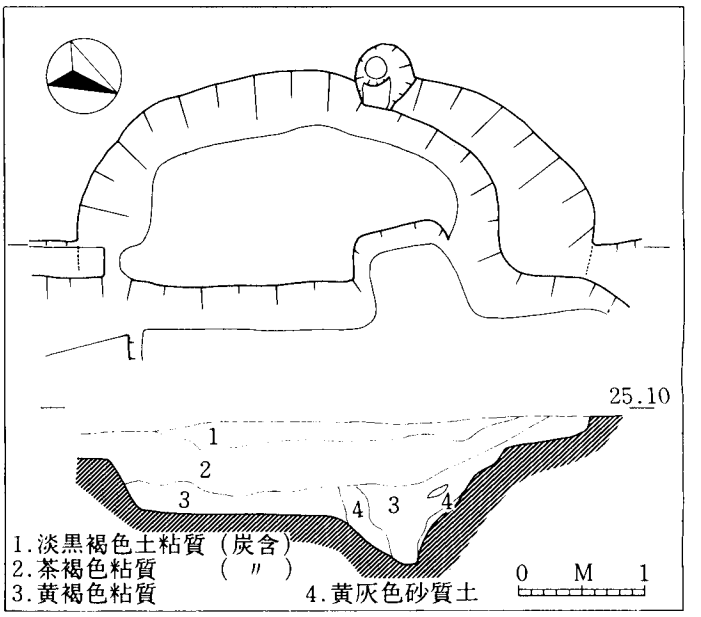
覆土は大きくみて３層に分層されるが、地山土に近い色調で炭化物の含有によって掘り下げていった。出土遺物は少なく、図示に耐えるものはない。奥原砂層の床面近くで縄文土器片１点を得ている。

９、第２号土坑

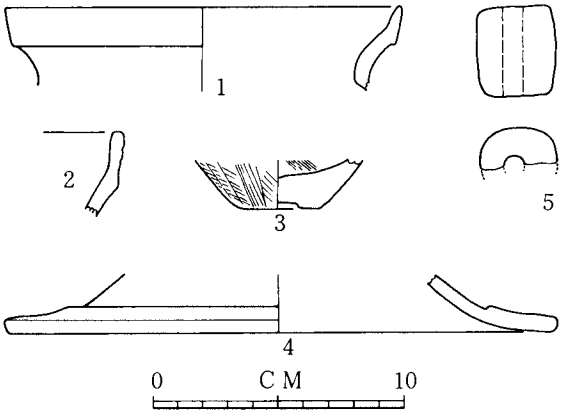
発掘区の中央部、丘陵平坦部の東側辺12Ｈグリッドに位置している。土坑の東側は攪乱溝によって大きく削平され、検出できたのは約３分の１強と考えられる。南方向約0.5ｍで、第３号住居址の肩部にとどく。

平面プランは楕円形と見られ、長軸を南北方向に置いている。長さ410cm、現況幅約200cm強、一段目までの深さ72cm、２段目までの深さ110cmを測る。一段目は平坦にならされ、北はじの２段目に傾斜してゆく。

覆土は大きく４つに分層され、１・２層に土器を包含していた。



第46図　第２号土坑（１／60）



第47図　第２号土坑出土土器（１／３）

出土遺物（第47図）

１は甕Ⅱ類Ｄに分類され、口径15.8cmを測り、褐色を呈し胎土に砂粒は少なく、焼成は良。外周に煤が付着している。２は口縁上半に浅い凹線をめぐらす、褐色を呈する甕である。３は甕底部片で底径3.2cmをはかる。器表面はヘラによる強いナデが入れられ、そのあとに刷毛調整が加えられる。４は脚径22cmを測る。肥厚する脚端部は横方向の研磨、上半部分は縦方向の研磨が入れられる。紅味褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。

５は約半分を欠いている土錘で、円柱状を呈している。長さ3.6cm、径3.1cm、内径0.8cm、重さ18.5ｇを測る。濁黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良である。

10、包含層からの出土遺物

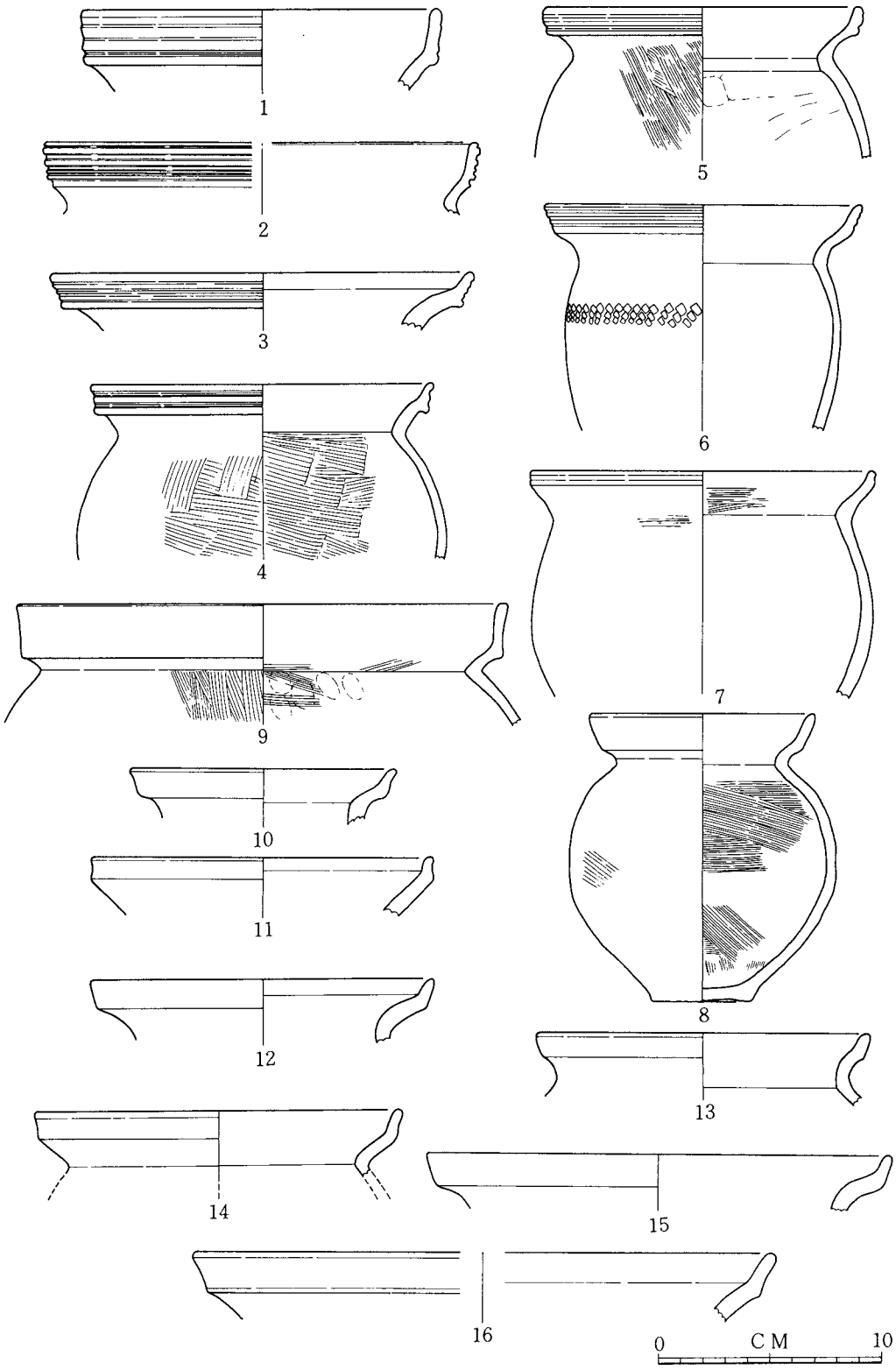
住居址および土坑から出土した土器を除いた遺物を一括して記述してゆく。第１～４号住居址にかこまれた丘陵平坦面に多数が検出されたピットから得られた遺物は小片となるものが多く、図示に耐えるものは極めて少なかった。包含層の層厚は各地点によって大きく異なり、丘陵斜面にかかるグリッドにおいて大部分の遺物が得られた。第１・２号住居址のあいだになる10Ｅグリッド、第３号住居址の東方の11Ｊ・Ｋグリッド、第７号住居址の東方にある14Ｉ・Ｊ、15Ｉ・Ｊグリッドを中心にして得られた遺物が多い。さらにその中で第７号住居址東方部の包含層からの出土量が多い。須恵器片は第１・３号住居址の上層位から得られている。縄文土器片は２片が得られている。

甕（第48～50図39）

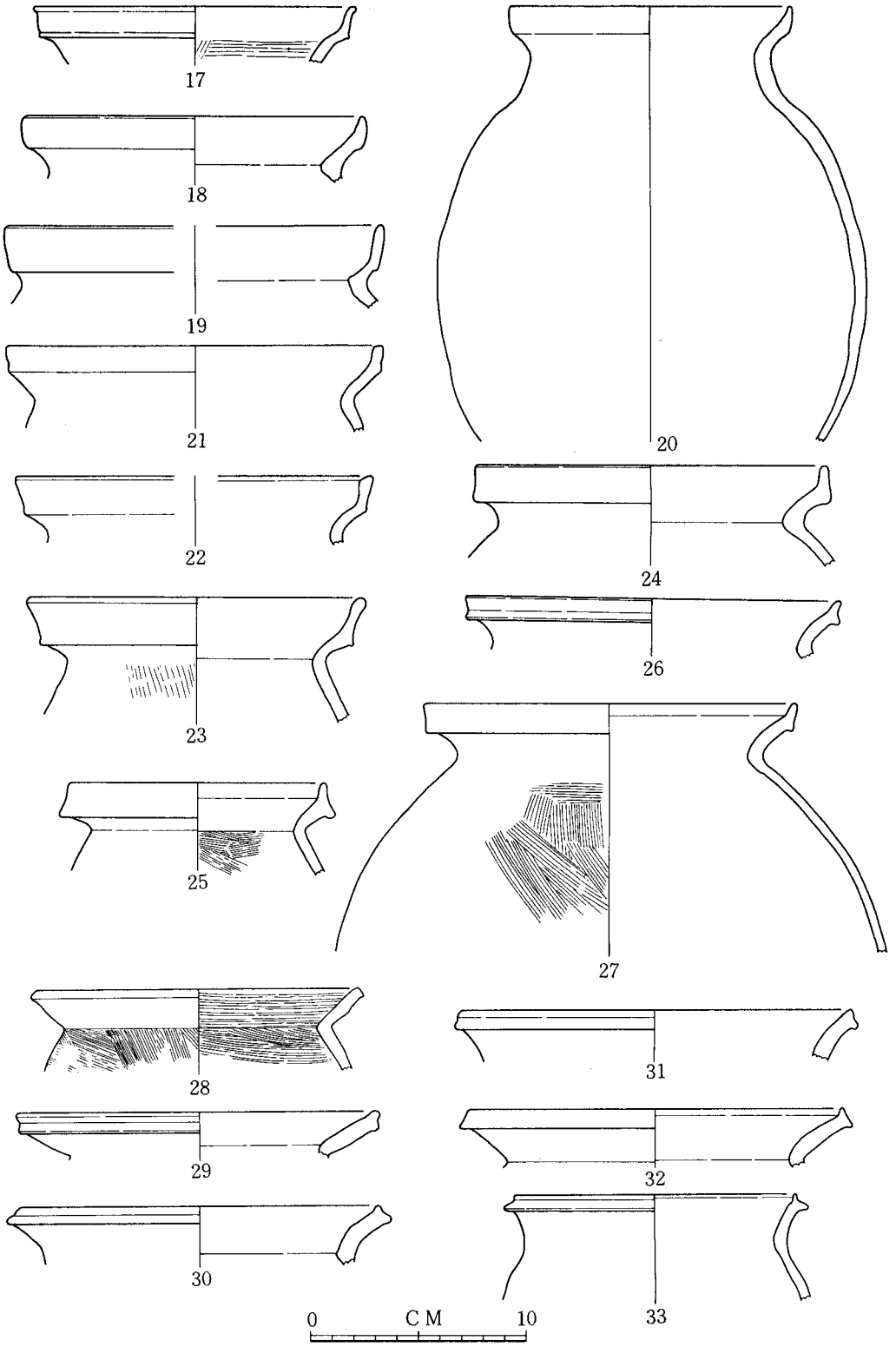
甕形態は大別して５類に分け、さらに１類を６種に細分した。

甕Ｉ類は凹線を口縁部に引くものを一括した。凹線はやや乱雑に引くものが多く、浅くなっているものが目立つ。住居址から出土したものを含めて15点がある。１は10Ｅグリッドから出土したもので、直立気味の口縁部を持つ。口径16cmを測り、内外面とも明黄褐色を呈している。胎土には１～２mmの砂粒が多く含まれ、焼成は良好。２は４cm程度の小片で口径に不安がある。外反気味の口縁部に彫の深い凹線が５条引かれる。凹線断面が微妙に異なっている。外周には煤が付着しており、褐色および黒褐色を呈している。胎土には0.1～1.0mmの砂粒が含まれ焼成は良い。３～７は外反気味に立ち上がる短かい口縁を持つもので、３は口径約19cmを測り、浅い凹線を持つ。４は口径15.5cm、現器高８cmを測る。短かい口縁に２条の凹線をめぐらし、体部内外面とも幅の広い刷毛調整を施す。口頸部および口縁内面はナデ調整が入れられる。頸部以下には煤が付着し、内面の下半には炭化物の付着が認められる。褐色から明灰色を呈し、胎土には２～３mmの砂粒を多く含む。焼成は良い。５は９Ｆグリッドおよび第１号住居址覆土から出土したもので、口径14cm、現器高 6.8 cmを測る。狭い口縁部下端に１条の凹線が引かれ、外周は刷毛ナデ調整、内面は強く押しつけてケズリ風となるナデが入れられる。明橙色を呈し、砂粒を多く含むが焼成は良好。６は９Ｋから出土した口径14.4cm、現器高10.2cmを測るもので、全体に磨耗が進行している。口縁には浅い凹線３条が引かれ、頸部には押圧文が認められる。調整は判別しがたい。色調は褐色を呈し、胎土に小砂粒を含む。７は10Ｅグリッドから出土した口径15.5cm、現器高10.5cmを測るもので、口縁部の凹線は不明瞭となっている。口縁内面は刷毛ナデのあと横ナデを入れる。体部内面はヘラによる軽いナデが入る。褐色を呈し、胎土に0.5～3.0mmの砂粒を若干含む。

甕II類は無文の有段口縁を持つものを一括したが、口縁部の形状によりさらに７種に細分類を行った。甕II類Ａは８点が出土している。肩の張らない体部から強く外反する頸部がつき、口縁部分は外反気味に直立するもので、他の類に比較して長い口縁部を持つタイプである。８と９がそれで、８は15Ｈグリッドから出土した。口径10.2cm、器高13.1cm、底部径4.5 cmを測る小型の土器で、内外面とも刷毛ナデが入れられ、外周はさらにナデが施こされる。橙味褐色を呈し、胎



第48図　包含層からの出土遺物（１）（１／３）



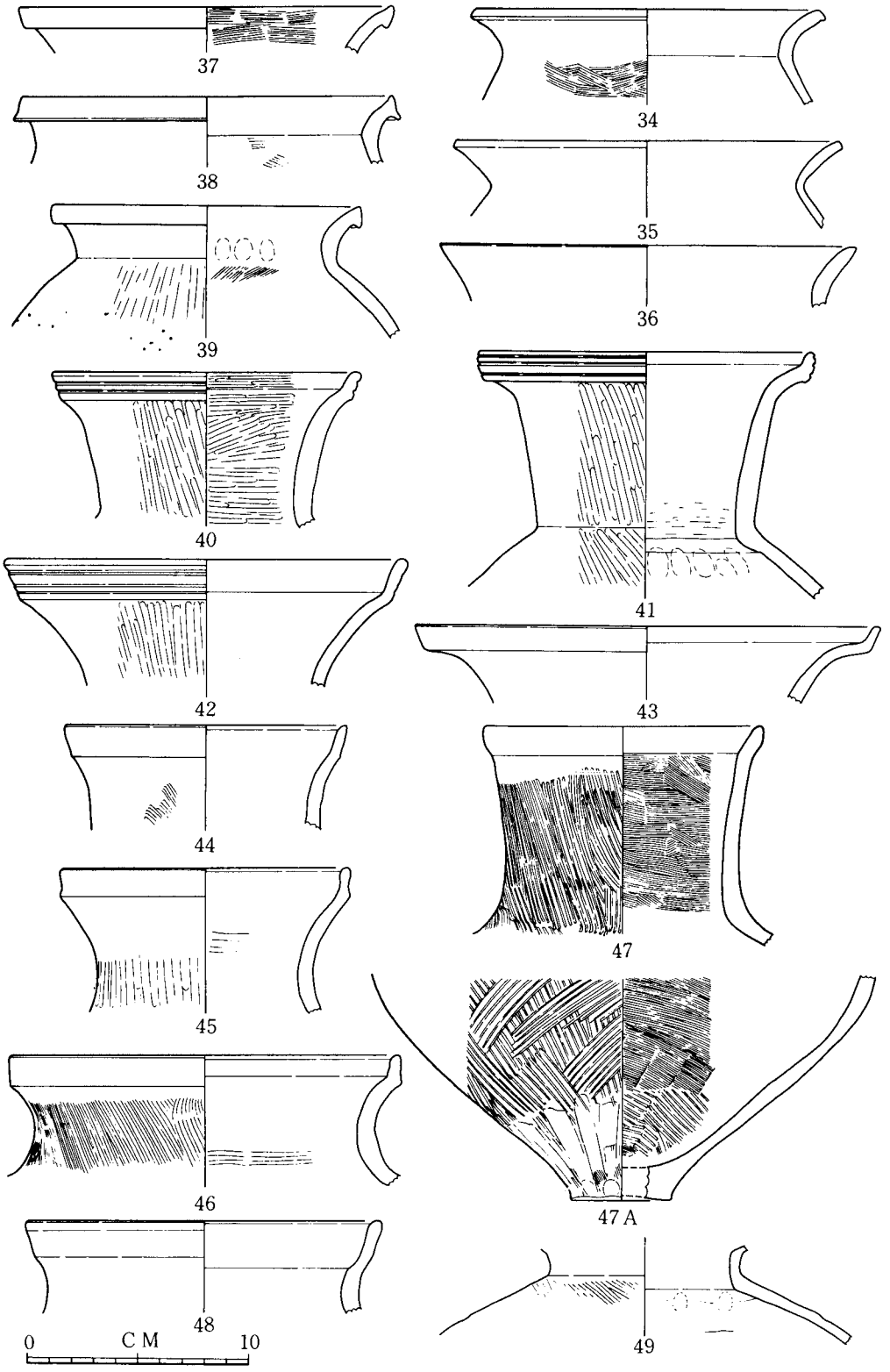
第49図　包含層からの出土遺物（２）（１／３）

土には砂粒は少なく良好で、焼成も良い。甕II類Bは総数で18点を数え、甕形能では最も多いタイプである。甕II類Aに比べて、口縁部分が低く押さえられている類を一括している。9は口径12cmの小型土器で12Hから出土している。褐色を呈し、胎土に0.5～2.0mmの砂粒を含み、焼成は良い。内外面ともナデ調整。10は10Iから得られた口縁径15.6cmを測るもので、外周に煤が付着している。胎土に砂粒は少なく、橙褐色を呈し焼成は良い。11は14Iから出土したもので、口径15.6cmを測る。12は口径15cmを測る13Iから出土した土器で、内外面とも横ナデ調整が入れられている。褐色を呈し、胎土に細礫をわずかに含む。焼成は良好。14は口径21cmの中型品で14Iから出土した。橙褐色を呈し、胎土に微礫を多量に含む。内外面とも横ナデを施す。15は口径に不安があるが、大型の土器で10Eから出土した。色調は橙褐色を呈し、内外面とも横ナデを入れる。甕II類Cは口縁部下端に稜線ができ、上端部が尖り気味になるタイプを一括した。16は13I出土、口径14.8cmをはかる。17は15Hから出土し、口径15.6cmを測る橙味褐色を呈する胎土、焼成とも良好な土器である。18は14I出土のもので、前2者とともに口縁内外面とも横ナデ調整が入れられている。Cとした以上3点の形状は若干の違いをみせ、他の類に含み得るものであるかもしれない。他に2点が第7号住居址より出土し、小片を含めて7点の出土であった。甕II類Dは口縁端部が尖り気味になり外反するタイプを一括した。全体では6点の出土であった。19は13Kから出土し、口径13cm、現器高20cm、胴部径19.6cmを測る。胴部最大径が中央にあり、肩がはらずに頸部にとりつき、 短かめの口縁部をつくり出す。 色調は褐色を呈し、胎土に0.5～2.0程度の砂粒を含む。調整は磨耗のため判然とはしない。甕II類Eは中型品の甕で、肩のはらない体部をつけ、有段口縁の内側は傾斜面となり、外反気味に立ち上がる口縁がつけられる。住居址出土例を含めて8点の出土を数えた。20は13Kから出土した磨耗の著しい土器であった。褐色、暗灰色を呈する。21は11Kから出土した口唇部分が平坦にならされる特徴を持つ。外内周とも横ナデ調整が入れられる。22は国道の南方丘陵から表採した資料で、口径15.5cmを測り器表面に煤が付着していた。口縁部内外面横ナデ、胴部に縦方向の刷毛ナデ、内面胴部には強いヘラナデが施されている。胎土にわずかに砂粒が入り焼成は良好である。23は10Eから出土、内屈する口縁がつけられている。口径16cmの磨耗の著しい土器である。甕II類Fは全体で13点の出土数を数えEに含むべきであるかもしれない。有段口縁の素文のもので、口縁下端がせり出し短かめの口縁でおさめるタイプである。24は13Iから出土した口径11.8cmの小振りの土器で、口縁部内外面とも横ナデ、胴部内面に刷毛ナデが施される。色調は橙褐色を呈し、2～3mmの細礫を混入させ焼成はやや良くない。25は11Iから出土し、口径17.2cmを測る。内面に段をほとんど持たず、ゆるやかに頸部を屈曲してゆく。内外面とも横ナデを入れる。26は14Iから出土した口径17cm、現器高11.3cmを測る、色調橙褐色を呈するものである。口縁部の内外面は横ナデ仕上げ、器表は乱雑な刷毛調整、内面は横方向の強いナデが入れられ砂粒が左右に移動しているのが観察される。ケズリと異なるという観点から図示は行わなかった。胎土には2～3mmの細礫が若干含まれるが焼成は良好。甕III類は「く」の字状に折れる口縁を持つものを一括したが、口縁端部の状況からさらに細分する事も可能であろう。住居址出土例を含めて20例の出土があり、甕形態のなかで大きな比重を占めるタイプである。27は12Jから出土したもので、頸部が鋭角的に折れる。口唇部

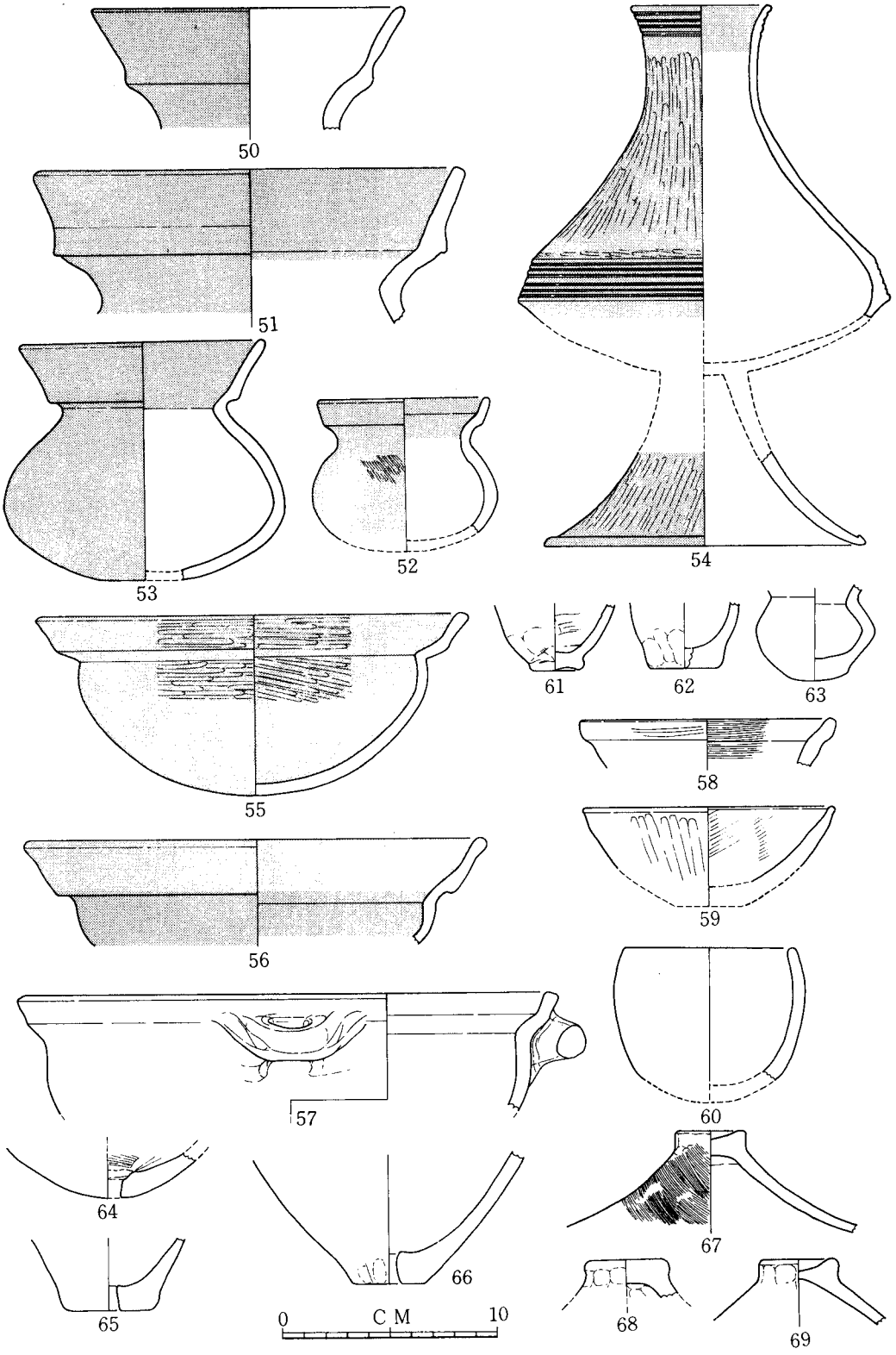
分の押さえはやや乱雑で粘土がはみ出したままの状態となっている。口径約15cmを測り、内外面とも強い調子の刷毛調整が入れられている。褐色を呈し、胎土、焼成とも良。28は口縁端部を押さえて上下に伸ばそうとしたもので、口径16.6cmを測る。頸部以下内面は横方向の刷毛ナデが見える。11Ⅰから出土。29は15Hから出土、口縁径17.6cmを測り、胎土には砂粒は少ない。30は口径18cmを測る。31、32はゆるやかに外湾する口縁端部が上下にのばされ、上端をつまみ上げたような形状をなす。31は13Ⅰから出土。色調は内外面とも暗茶褐色を呈し、胎土にわずかに礫を含むが良好で、焼成も良い。内外面とも横ナデを施す。32は9Kから出土し、口径12.8cmを測る。器表面には砂粒が目立つ程に磨耗が著しい。33、34はともに口唇が平坦にならされ、ゆるく外反する口縁をつける。82は14Ⅰから出土し、口径15.5cmを測る。口縁部内外面とも横ナデ、外周は肩部以下刷毛調整。色調は黒褐色を呈し、胎土に細礫を混入させる。焼成は良好。34は11Jから出土し、口縁外周に煤が付着しているものである。口径17.6cmを測る。35は口径18.8cmの淡褐色を呈する土器で、器表に煤が付着している。36は13Ⅰで検出したもので、口径17cmを測る。器表は横ナデ、内面は横方向の刷毛調整を行う。口縁に煤が付着していて、色調橙褐色を呈し、胎土焼成とも良い。37は口唇部を強く押して上下に端面が伸びひろがるもので、9Kから出土した。38は口唇下端部が広げられたタイプで、14Ⅰから出土した。口径14cmで外周は荒いナデ調整、頸部内面には指頭圧痕が見られる。口縁部内外面とも横ナデが施される。色調は褐色を呈し、胎土焼成とも良好。

壺（第50図40～第51図54）

壺形態は住居址出土例を含めて6類22個体が確認できた。長頸壺は4類に分類した。壺Ⅰ類は有段口縁を持ち、口縁に凹線を引くタイプを一括した。4個体を見る事ができる。40は13Kから出土したもので、外反気味に立ち上がる頸部から弱く外反して2条の粗い凹線を引く口縁がつく。頸部器表は斜め方向にヘラ磨き、内面は横方向の研磨を施こす。橙褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。41は同じ13Kから出土したもので、口縁径15cmを測る。強く外反する口縁には3条の粗い凹線が引かれ、内面は横ナデが入る。頸部下端内面には指頭圧痕が見られる。肩部は張りの弱いカーブを描いてとりつく。橙褐色を呈し、胎土に粗粒砂が多量に混和し、焼成は並。壺Ⅱ類は1点の出土があった。有段口縁の素文のもので14Ⅰから出土した。口縁内外面とも横ナデを施す。灰褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。壺Ⅲ類は1点のみで、第1号住居址から出土している。外湾して立ち上がる口縁の端部が上下に肥厚するタイプである。壺Ⅳ類は6点の出土があった。外湾する口頸部から短かい口縁部分が付けられ、直行ないし外傾しておさめる。42は9Kから出土した口径12.8cmを測るもので、頸部の調整は刷毛調整のあとヘラナデを施し、内面には横ナデが入る。褐色を呈し、砂粒は少なく焼成も良い。45は14Jから出土した。口径13.2cmを測り、橙味褐色を呈する良好品である。頸部下半にヘラ磨きが見られ、口縁を含む上半部分は丁寧な横ナデが施される。46は14Jから出土した口径17.8cmを測る大型品である。刷毛調整は頸部内面下半では横方向に入る。橙味褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。47は14Jから出土したもので胴部および47Aの底部も得られたが接合する事はできなかった。口頸部外面は粗い刷毛調整、肩部以下底部までは斜め方向の調整を右下がりに行い、後に左下りの調整を粗く行う。内面は細めの



第50図　包含層からの出土遺物（３）（１／３）



第51図　包含層からの出土遺物（４）（１／３）

刷毛調整が見られるが、底部内面に粗い刷毛調整が見られるところから重ねて調整を入れたものと想像される。底部外面には指頭による押さえが見られる。褐色を呈し、胎土、焼成は良好。48は口径16.2cmのもので、10Eから出土した。49は頸部の短かいタイプで、13Kから出土した。横へ大きくひろがる肩部には、刷毛調整のあと軽く研磨を入れる。頸部内面には接合痕と指頭圧痕が見える。有段口縁で長く伸びる口縁を持つものを壺V類としてまとめた。5点の出土がある。50は9Ⅰ、11Ⅰから出土した外周に赤彩を施すもので、口径14.4cmを測る。淡褐色を呈し、胎土には2～3mmの砂粒が目立つ程に、磨耗が進んでいる。51は14Jから出土した大型品の口縁である。口径20cmを測り外周および口縁部内面に赤彩を施す。52、53は小型品で全形を窺え資料である。52は口縁内面と外周全面に赤彩するもので、10Eから出土した。器表は刷毛調整のあと、磨きを施す。口径8cm、推定器高7cmを測り、胎土、焼成とも良好である。53は52と同様な赤彩が施される。13Ⅰ・14Ⅰからの出土品である。口径11.3cm、推定器高11cm、下位にある胴部最大径は13cmを測る。褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。54は台付装飾壺で、13Kから出土した。図上で復元した事をお断りしておきたい。口径6.5cmで胴部下半の径17cm、台径15cm、推定器高約25cmを測る。口縁には4条、胴部下半には若干の隆帯上に6条の浅い凹線を引く。器表両は入念に研磨が入り、赤彩を施す。

鉢（第51図55～57）

広口鉢を4類に分類した。鉢Ⅰ類は有段口縁で下端が伸びるタイプで、第2・4号住居址から4点の出土がある。鉢Ⅱ類は口縁部の稜線が弱くなるもので、6点の出土がある。55は13Ⅰから出土し、復元完形となった。口径20cm、器高8.3cmで丸底となる。内外面とも横方向に入念な研磨を施し、赤彩を入れる。橙褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。56は11Eから出土。口径21.5cmを測り、全体に磨耗が進行している。57は11Ⅰから出土し、図上復元を行なった。口径25cmで横方向にブリッジがつく。外反する口縁部内面は指頭によるナデと見られる。全体にナデ調整を入れる。内外面とも褐色を呈し、0.5～1.0mmの砂粒を多く含み、焼成は良好である。

小型土器（第51図58～63）

小型土器は12点の出土があった。58は外反する口縁をつけるもので、横方向に刷毛調整を入れる。口径は11.8cm。橙味褐色を呈し、胎土、焼成とも良い。59は外傾する口縁部にむけて器壁が薄くなるもので、口径11.6cmを測る。11Kから出土し、底部片を欠いており丸底となるかもしれない。内面刷毛ナデ、外周はヘラナデを入れる。60は10Eから出土した内屈する口縁を持つ。口径7.8cmを測り、内外面ともナデ調整が入る。明褐色を呈し、0.5～1.5mmの砂粒を多く含む。61～63は手づくね土器に近いもので、全体に粗雑なつくり方である。3点とも10Eからの出土で、指頭によるナデを見る事ができる。

甑（第51図64～66）

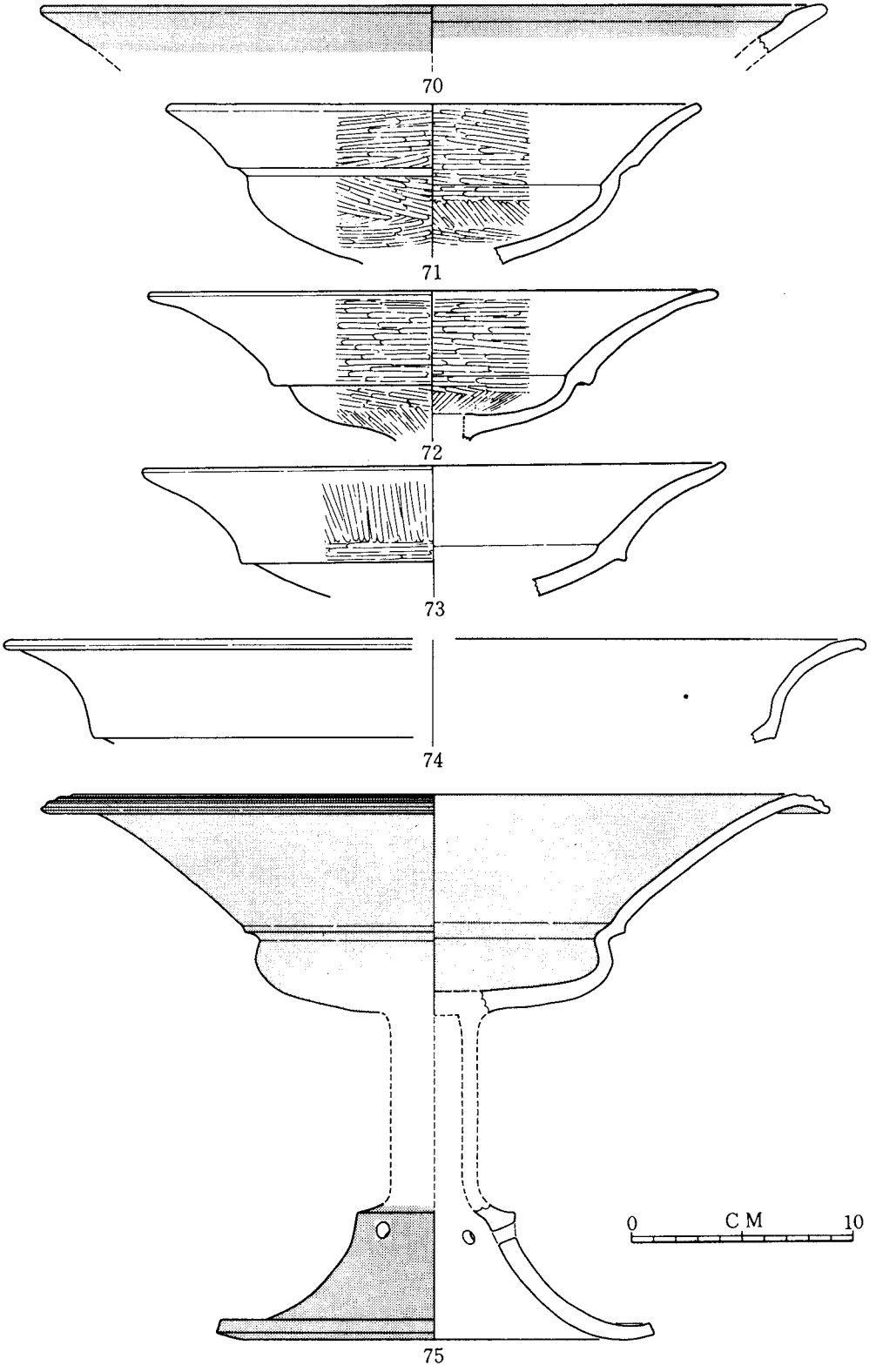
出土した点数は第2号住居址例を含めて4点であった。64は10Eから出土したもので丸底の中央に、内径1.2cmの穿孔が入る。65、66は平底となるタイプで、ともに13Kグリッドから出土した。内外面とも粗い調整で終えている。橙褐色ないし褐色を呈している。66は底部径3.4cm、穿孔径0.8cmをはかる。

蓋（第51図67～69）

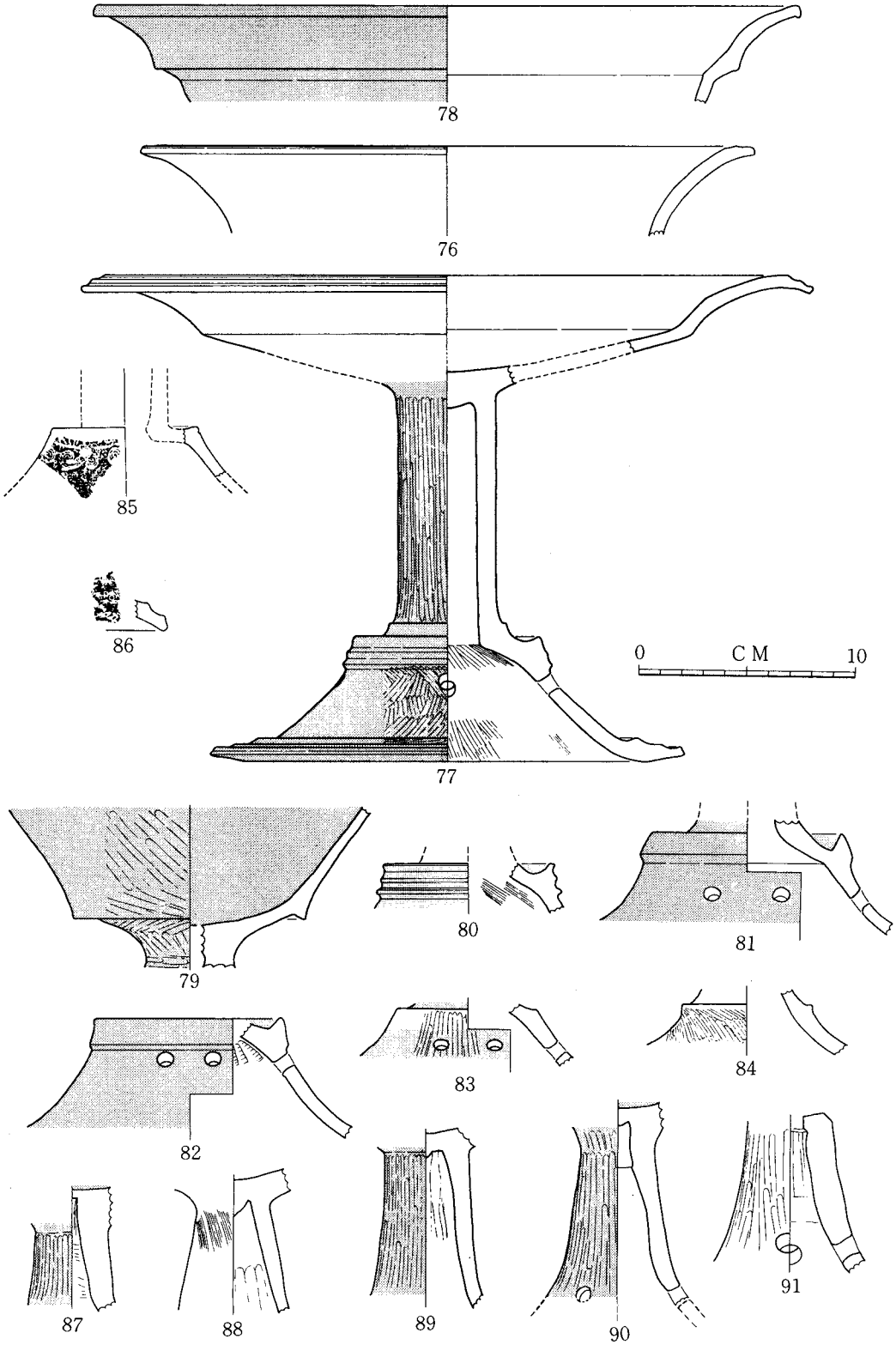
蓋型土器は全部で6点の出土で、3点が第2号住居址から得られている。67は10Eで検出されたもので、つまみの径は3.2cmを測る。赤褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。68、69もやはり10Eで検出したもので、つまみ部分を指で押さえ体部は丁寧なナデが施される。69のつまみ部分は凹みとなっている。橙色、赤褐色を呈し、焼成は良い。

高坏（第52図70～第54図98）

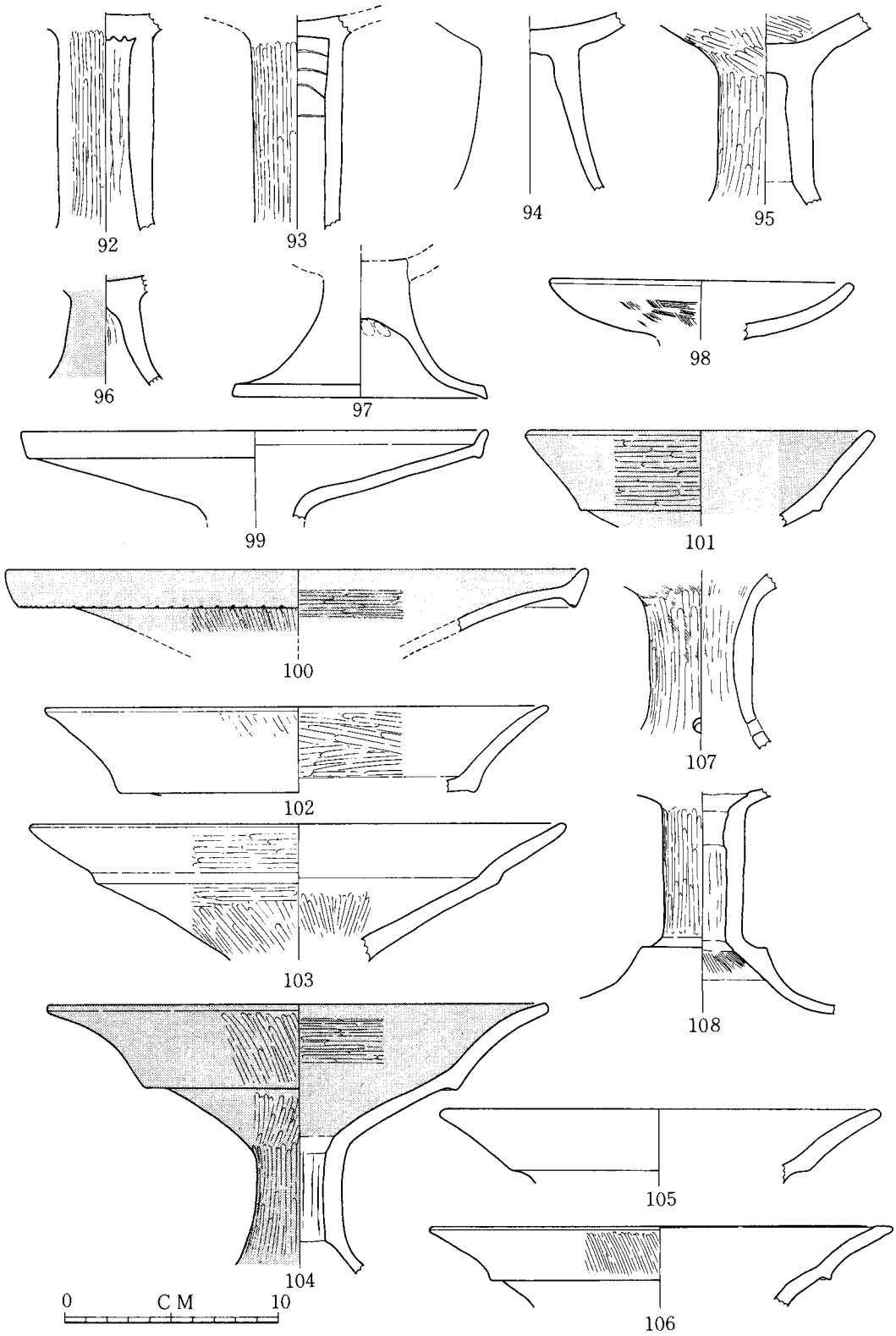
高坏と想定できる土器破片は比較的多く検出され43点を数えるものの、全体を見れる資料は極めて乏しい。口縁部のみで分類を行い5類に細別した。高坏Ⅰ類は口縁端部内面が肥厚するもので13Ⅰから出土した。口径36cmを測り、内外面ともに赤彩を施す。調整は丁寧な研磨が入る。高坏Ⅱ類は有段口縁をつける鉢Ⅰ・Ⅱ類と同様の器形に脚が付くもので、高坏のなかでは最も多いタイプである。71は14Jから出土した口径20.5cmを測るもので、やや乱雑なかたちで研磨が入る。赤彩された可能性がある。橙味褐色を呈し、胎土、焼成とも良。72は16Jから検出したもので、体部が小さく浅めで口縁が大きく伸びひろがる。口径26cmを測る。体部外周の研磨が雑な他は入念な調整が全体になされ、一部に赤彩を見るが範囲を確定する事はできなかった。明橙褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。脚につながる中央部分はソケット状につくられていて、剥離痕を見る。73は14Ⅰから出土した、口径26.6cmを測るもので、縦方向の研磨が注意される。74は口縁内面がわずかに肥厚して段状の平坦面をつけるもので、14Jから出土した。高坏Ⅲ類は口縁端部内面に凹線を入れ、大きく反り返る大きな特徴を持つ。住居址出土例を含めて4個体がある。75は口径36cmを測る口縁部が大きく外傾し、体部が小さくなるもので、16Jから出土した。脚柱部を欠いているが、台部があり図上復元を行なった。全体に研磨が入るが磨耗のために判然とはしない。全面に赤彩痕を見る。台部径は20cmで、透し穴は全体で5個が知られる。褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。76は11Jから出土した口径28.8cmをはかるもので、研磨の痕跡を見るが赤彩されたかどうかは判然とはしない。77は11J・14Ⅰ、14Jから出土したもので、坏部と脚柱との接合部分は図上復元を行った。外湾してのびる口縁上部に2条の凹線が引かれ、口径34cmを測る。脚柱は円筒に近く径4.6cm、高さ約10.5cmを測り、段を持つ台部につながる。台径22.2cmを測る。脚全体には工具幅が狭いヘラ研磨が入念に入れられ、赤彩が施される。脚台部内面は刷毛調整のあと横ナデが入る。橙褐色を呈し、胎土は精良で焼成も良い。78は高坏Ⅱ類に含まれる。13Kから出土し、口径32.8cmを測る。高坏Ⅳ類は器形的にはⅡ類に近く、凹線を引くタイプで第1号住居址出土の1例が知られる。高坏Ⅴ類は1点が表採された。国道南側の丘陵上で表採した資料で、口縁部および下半を欠いている全面赤彩されたものである。坏部口縁が長くのびて深くなるタイプで、器表面はヘラ研磨が行われる。褐色を呈し、焼成は堅緻である。80～85までの6点は脚台部の破片である。80は凹線をめぐらすもので14Jから出土した。81は14Ⅰから出土したもので、2孔一対が4組穿たれる。82は14Ⅰから出土。2孔1対3組と推定された。83も同じく14Ⅰ出土。段のつくあたりから1cmにわたって赤彩のかからない部が帯状にめぐるところから、突帯が剥離したものと推定できる。84は10Ⅰ出土。85は10E出土のスタンプ文を持つ台部である。沈線を1条引いて刻みを入れ、S字状スタンプを横位置に並置する。1個の長さは1.6cmを測る。86は脚端



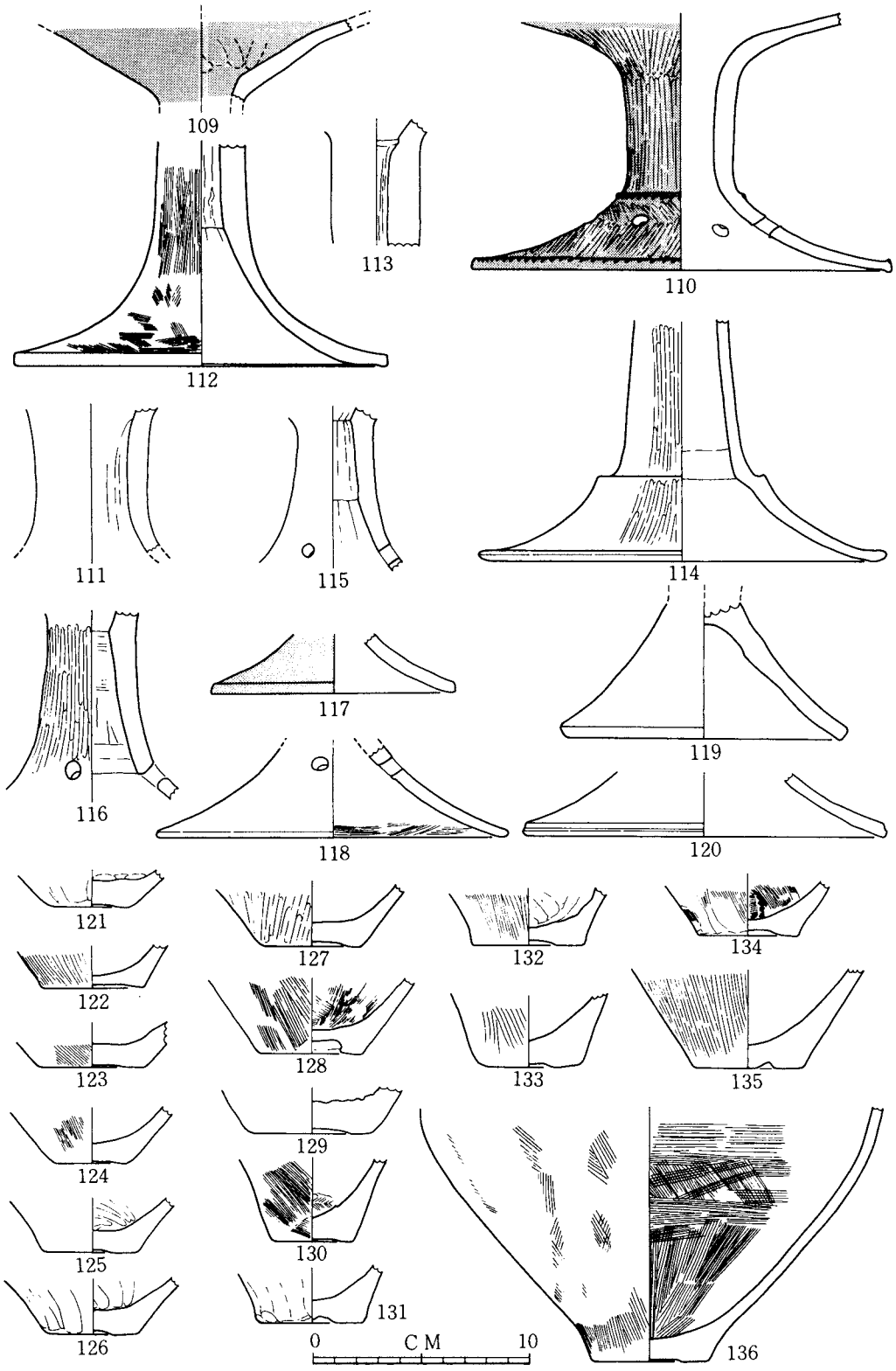
第52図　包含層からの出土遺物（５）（１／３）



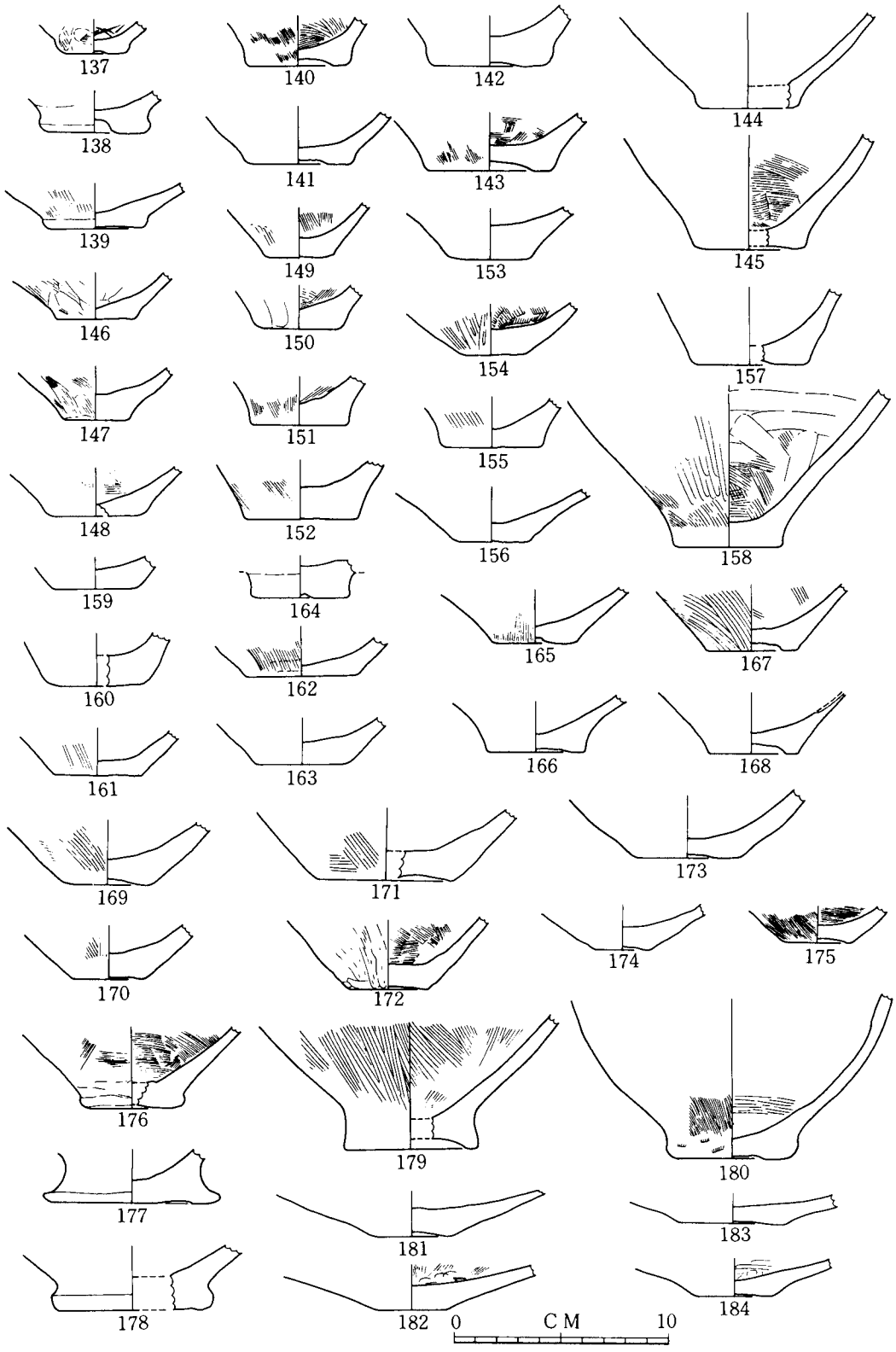
第53図　包含層からの出土遺物（６）（１／３）



第54図　包含層からの出土遺物（７）（１／３）



第55図　包含層からの出土遺物（８）（１／３）



第56図　包含層からの出土遺物（９）（１／３）

部片で上面に同心円スタンプが見える。11Kからの出土。ともに赤彩痕を見る。これらの胎土は精選されていて、細かく研磨が入れられ丁寧なつくりである。87～96は脚柱部分で、92、93が棒状脚である。87は14Ⅰ、以下11G、13K、14Ⅰ、10E、11K、13J、10E、9G、10Eから出土している。92の坏部の裏面には刺突痕が見える。褐色から橙味褐色を呈し、胎土は良好である。97は16Ⅰから出土した脚端径12cmをはかるもので、台付装飾壺につくものかもしれない。内面に指頭圧痕が見られる。98は13Kから出土した。口径14.2cmを測る浅いつくりの坏部である。外周は刷毛調整を入れ、内面にミガキを施す。橙褐色を呈し、胎土に砂粒が目立つが焼成は良好。

器台（第54図99～第55図120）

器台の出土も高坏と同様に数が多く、確認できただけで40点以上を数えるが、鉢、高坏、台付壺等と良く似た形態部分を持つところから判断しがたい破片が多々含まれている。坏部の形状から4類に分類したものの、台部を推定できる資料はわずかに1点があるだけで判然とはしない。器台Ⅰ類は直線的に斜めにのびる受部に、上下に引き伸ばされた口縁がつけられるタイプで3例の出土が知られた。99は受部径22cmを測り、9Ⅰから出土した。磨耗により調整は判別しにくいが、磨きが入れられているものと推定される。100は13K、14Ⅰ・Jから出土したもので、受部径27.4cmを測る。上下に肥厚させT字形になる下端に刻みが入れられる。口縁内外面とも横ナデ調整が入れられ以下研磨がなされる。全体に赤彩痕が認められる。高坏Ⅱ類は2点の出土である。101は口径16.4cmの小型土器である。外周は刷毛調整のあと磨きを入れ、内面は入念な研磨が入れられている。13Kからの出土で、褐色を呈し、胎土は精良であった。高坏Ⅲ類は最も多いタイプで8点の出土を数え、うち3点が第3号住居址より出土している。口縁部下端に段をつけるものをまとめた。稜線のみとなるのを高坏Ⅳ類とした。102は11Hから出土。口径23.8cmを測る。103は10Hから検出したもので、口縁径25.4cmを測る。外周は研磨、内面は横ナデを入れる。内面黒色、外面褐色を呈し、胎土は精選されている。104は器台Ⅲ類の典型的なタイプで、14Ⅰ、15Hから出土した。口径23.6cm、現器高12.5cmを測る。内外面とも入念なヘラ磨きが施され、赤彩を行う。橙味褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。107は本類に近いタイプの脚であろう。105、106は14Ⅰ、11Ⅰから出土。橙味褐色を呈し、焼成は良好である。108は円柱状の脚を持ち台部のあるところから、高坏の脚かとも思われる。14Ⅰから出土。台部内面は刷毛調整のあと、横ナデを入れる。109は全面に塗彩を施す15Hからの出土品である。内面脚柱近くは指ナデのあとが見られる他はヘラミガキが入る。110は14J出土品で、低い台部に段をもうけ、端部とともに刻み目が入れられる。外周の赤彩痕は明瞭であるものの、内面は判然としない。台部径19.2cm、現器高は11.7cm、柱状部径4.8cmを測る。透し孔は4個である。111は10E出土。112～116まで脚柱部分の破片は高坏との区別が困難な資料である。112は13K出土で、裾部径17cmを測る。径4cmの脚柱部内面に絞り痕を見る。外周は入念な刷毛調整がのこる。橙褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。114は13K・14Ⅰから出土。脚柱と台部に段をつける。台部径18.6cm、現器高10.8cm、脚柱径4.4cmを測る。内面の調整は不明。113・115・116は脚柱部分で上稜をおいて外展してゆく同じタイプである。12Ⅰ・13Ⅰ・14Ⅰから出土。117～120までの4点は台部のみで器形的には把握できなかった。117は9J出土の赤彩されたもので、内外ともナデ調整が入る。118は10Eから出土。台部径16.2cmを測

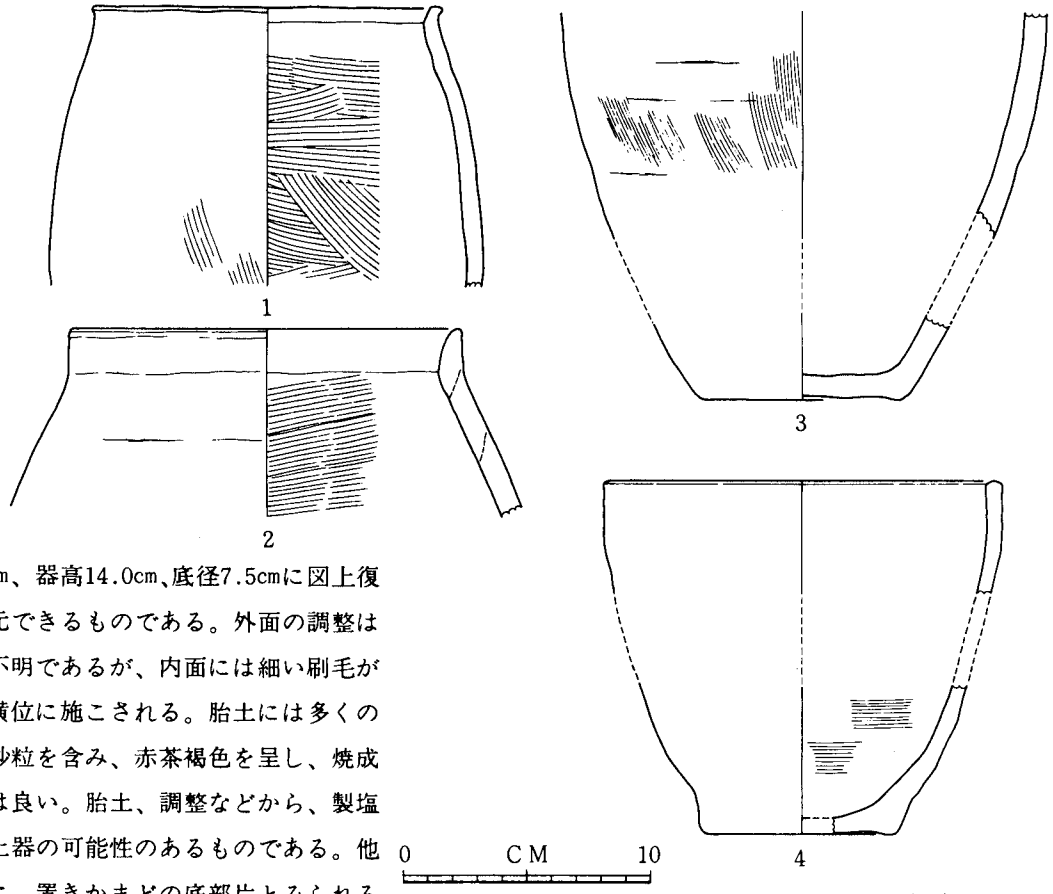
り、穿孔があるが数は不明。外周にはミガキが施され、内面は横ナデも加わる。119は13Ｊ出土。120は14Ｊから出土。橙味褐色を呈し、砂粒を若干含み、焼成は良好である。磨耗のために調整は不明。

底部（第55図121～第56図）

発掘で得られた甕、壺、鉢の資料で口縁から底部まで接合できるものは非常に少なく、各々として図示するにとどまった。底部片としては住居址出土例を含めて121点にのぼるものの、変化の少ない形状から、鉢形態をようやく判別するにすぎない。底部の形状と立ち上がりの角度から11種に分類したが、感覚的なものを呈示する事になろう。底部Ⅰ類は121～129までをまとめた。住居址例を含めると16点の出土である。底部はくぼみ底となり、外傾するような角度で立ち上がる。底径3.3～5.5cmまでの幅を持つ。底部Ⅱ類は径が比較的小振りのくぼみ底で、直立的な立ち上がりを持つものを一括した。130～135までがそれで、全体では９点の出土であった。底部Ⅲ類は全体で18点が得られた。136～145の点は底部がわずかにくぼみ、腰をおとして立ち上がるタイプで、底径の幅は大きい。136は14Ｊから出土。底径5.4cm、現器高11.5cm、胴部径21を測る。外周は刷毛調整のあとヘラナデを加え、内面は刷毛調整のままである。褐色を呈し、1.5～1mmの粗粒砂を含むが良好で、焼成は堅緻であった。底部Ⅳ類（146～158）は平底となり、底面から１cm強のあいだを直線的に立ち上がり、さらに外反してゆくものをまとめた。内面に刷毛調整痕を遺存するものが目立つ。158は13Ｉから出土、内外面とも茶褐色を呈している。外周は刷毛ナデのあとに縦方向にヘラナデが加えられる。内面は幅約１cmの工具でナデた状況が知られる。151には籾圧痕が認められる。底部Ⅴ類は平底でいきなり角度をつけて体部につながるタイプを一括した。159～163がそれである。底部Ⅵ類は164の１点だけである。高台風の底部の上位から体部が横方向にとりついてゆく。底部Ⅶ類は９点の出土がある。165～168はくぼみ底から外展気味の体部がとりついてゆく。底部Ⅷ類は14点の出土。169～175で図示したもので、くぼみ底で大きく外展する体部がつく。鉢につくものも含まれているようだ。底部Ⅸ類はくぼみ底でいったんくびれて大きく外展する体部につながるタイプで、176～180の５点の出土がある。底部Ⅹ類（181～184）は鉢の底部で４点があった。（西　野）

土師器（第57図１～４）

第57図に示した４点が検出された。１は口径13.5cm、現存高11.0cm、胴径17.4cmを測る甕形土器であろう。胴部の張り出しの小さい、丸底の底部をもつ器形と思われる。口縁端部は、つまみ出し、やや外反する。外面調整は磨耗のため不明であるが、内面は粗い刷毛状具（ササラ状工具）による横位の粗い刷毛が密に施されている。胎土には、少しの砂粒を含み、器表は茶褐色を呈し、焼成は良い。２も同様に、口径15.5cm、現存高7.5cmを測る甕形土器であろう。口縁端をやや外反させ、胴部も１と同様に張らない長目の丸底の底部をもつものと思われる。外面調整は不明であるが、粘土紐の接合痕を残す。内面頸部以下は、粗い刷毛を横位に施す。胎土には小石をかみ、赤茶褐色を呈し、焼成は普通である。３は底径8.0cm、現存高15.5cmを測る胴部から底部の破片である。器表が磨耗しているため詳細は不明であるが、外面には刷毛の痕跡が伺える。底部内面には指頭による押圧がみられる。赤茶褐色を呈し、胴土・焼成ともに普通である。４は、口径15.5



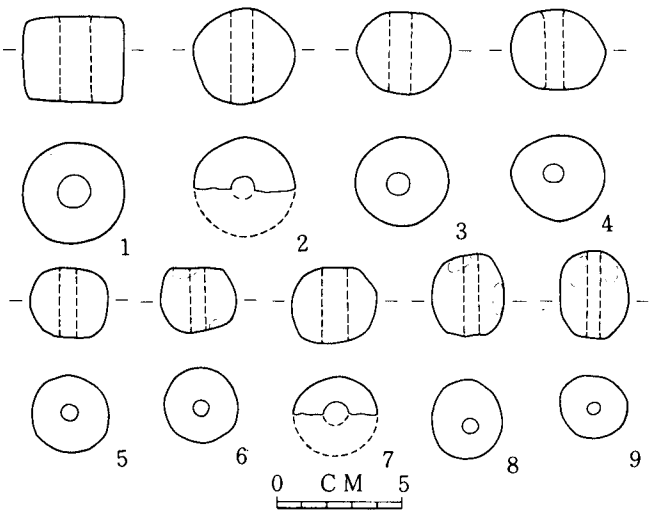
第57図　土師器（1／3）

cm、器高14.0cm、底径7.5cmに図上復元できるものである。外面の調整は不明であるが、内面には細い刷毛が横位に施こされる。胎土には多くの砂粒を含み、赤茶褐色を呈し、焼成は良い。胎土、調整などから、製塩土器の可能性のあるものである。他に、置きかまどの底部片とみられるものが1点存する。　（平　田）

土錘（第58図）

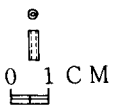
遺構から出土したものは少なく、包含層からの検出が多い。そして、まとまりを持って検出したものはなく、土器片に混在する状態となっている。

形態でみると大きく2種類に分けられる。円柱状をなすものと球形に近くなるもので、前者は少数で後者の比率が高い。さらに後者は平面形状が楕円形となるものに分けられる。



第58図　土錘（1／3）

1は15Hから出土した完形品で、4.1cm×3.4cm、69.5gを測る。色調は淡灰色を呈し、胎土、焼成も良い。全体に調整は丁寧で、平滑な面を持つところがある。2～7は球形をなすもので、4、6が完形品である。4は3.2cm×3.7cmで、重さ36.5gをはかる。12Iから出土。6はやや小振り



第59図
管玉(1/2)

のもので、11Ｉから出土。2.6cm×3.0cmで、重さ23ｇをはかる。色調は赤褐色から濁茶色を呈し、胎土は良いが、焼成があまい。8、9は楕円形をなすもので、11Ｈ、12Ｊから得られた。８は3.3cm×2.8cmで25ｇをはかる。９は3.5cm×2.7cm、21ｇをはかる。

管玉（第59図）

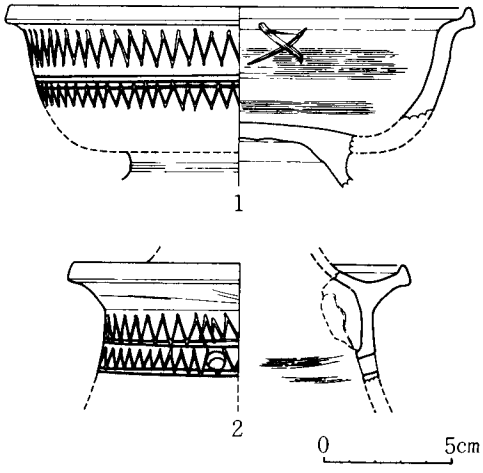
管玉は第３号住居址から２点の未成品が得られた他、分布調査時の試掘トレンチ（10Ｉグリッド)から1点の完成品が検出されている。色調は淡緑色を呈し、長さ0.83cm、径2.6mm、穿孔径1.2mmを測る。第３号住居址の未成品と同じ石質の石核を多数得ているところから、玉造を行なっていた事が推定される。（西　野）

須恵器・中世陶（第60図）

調査区全域にわたって散布する状況で検出したものであり、遺構等に伴出したものはない。出土地点は上部の平坦面と東側斜面では須恵器が多く西側斜面では珠洲が若干検出された。総数39点あり時代別に分けるとＩ古墳時代に属するも（坏身１点）、II奈良・平安時代に属するもの（坏Ａ６点、坏Ｂ７点、蓋６点、双身瓶１点、甕胴部片５点）、III珠洲（甕、壺胴部片７点、擂鉢片１点）、Ⅳ越前（胴部片１点）がある。以下、上記の分類に従って諸特徴等について述べる。

Ｉ（第60図１）　口径11.0cm、器高5.5cmに復元できるものである。第３号住居跡上面で検出したものである。焼成は不良で黄灰白色を呈しなまやけであり、胎土にはやや砂粒を含む。坏部中位より箆削りを施しているが、やや雑なものである（巾１cm程度）。その他はすべて刷毛状具によるヨコナデである。内面には巻き上げの際の凹凸が残る。坏部はやや深く、立上りは内傾し、端部内面に段（凹み）を有する。

（第60図の１）口径18.0cm、残存器高6.9cmを測るものである。体部外面には、二段以上の区画を設け、その内部には、鋭い箆先により鋸歯文を充塡している。内外面ともヨコナデによるが、内面は、１と同様に粗い刷毛状具によるものと思われる。内面には、軟い箆先状具による「Ｘ」の刻文が認められる。胎土には、やや砂粒を含み、暗青灰色を呈し、焼成は良い。



第60図　須恵器（1/3）

（第60図の２）受部径13.0cm、残存高4.5cmを測るものである。体部外面には、箆先により二段の区画を設け、その内部に鋭い鋸歯文を充塡している。胴部には円形の径0.7cmに復元できる透孔が一ケ所確認できる。内外面とも、ヨコナデにより調整されるが、内面のヨコナデは、外面のよりは粗く刷毛状具によるものと思われる。受部端部は、かるくつまみあげ、やや内傾気味である。受部から胴部内面にかけては耳朶状の突起が縦位に貼付されている。胎土には、やや砂粒を含み色調は青灰色を呈し、焼成は普通である。一部に黒褐色の自然釉が付着する。

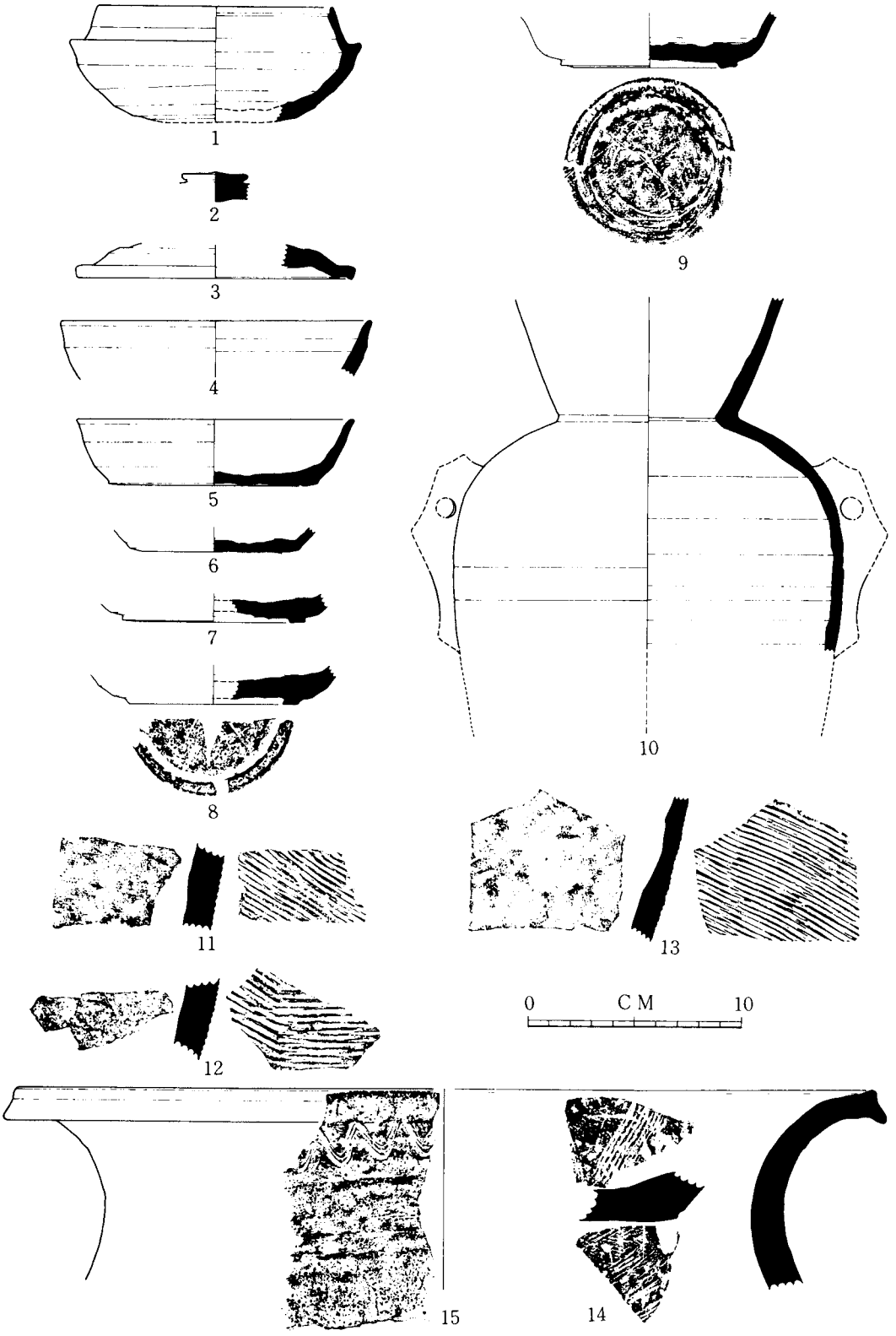
以上１、２について記したが、全形を知り得ることができない。調査区の11Ｈ区周辺で散発的

な出土をみているものである。また、成形技法、加飾技法等からみても同一個体となる可能性の高いものである。実測図では、左図のように図示したが、おのおのの図の天地逆さになる可能性も考えられる。器台の一部と考えられ、時期についても古墳時代後期六世紀代の所産と一応考えておきたい。

II（第60図２～ 10､15）　２は径 3.2cm、厚さ４㎜の扁平なつまみである。１と同様に焼成不良のために黄灰白色を呈するなまやけのものである。３は口径 7.0cmを測る蓋口縁部片である。器肉は厚く、口縁端部の屈曲もにぶく、調整は残存器全面にわたり刷毛状具によるヨコナデである。灰青色を呈し、天井部に降灰釉がみられ、胎土はやや大き目の砂粒を多く含む。4は口径14.6cmを測る坏口縁部の破片であるが、器肉は厚く端部を丸くおさめる通有のものである。灰黒色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むが、焼成は良い。４は口径13.0cm、器高3.7cm､底径8.4cmを測り灰青色を呈し、胎土にはやや多くの砂粒（長石）を含み焼成はややあまい。底部は篦切りののち再調整を施し、底部はほぼ平滑である。坏体部はやや内傾気味で口縁近くでわずかに外反する。内外面ともに、ヨコナデ痕が明瞭である。６も坏底部片で灰黒色を呈し胎土には若干砂粒を含むが焼成は良い。 底部は篦切りのままで他はヨコナデである。 全体に器肉は薄いと言える。７は高台径 7.2cmを測るものであるが、灰青色を呈し、胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良い。底部は篦切りののちに薄い高台を貼り付け、内側では指頭ナデにより貼り付ける。８は高台径 6.6cmを測る底部片であるが灰青色を呈し薄い高台を貼り付け外側から指頭ナデを施す。他はヨコナデである。底部には篦先による刻文がみられるが「×」と思われる。9は高台径6.6cmを測り灰青色を呈し、胎土は良く焼成は堅緻である。底部は篦切りののち再調整がみられ、低い高台を貼付し内外側より指頭ナデを加える。高台は内面で屈曲するもので、杯部は器肉厚く腰部もよく張り、胴中位で外反して口縁に至るものと思われる。内面には巻き上げ痕調整の凹凸が明瞭である。10は双身瓶である。口縁部、底部を欠失し、耳も一耳欠失する。器外面には降灰釉がみられ、焼成は堅緻である。胎土には砂粒を多く含み、所々に火ぶくれが認められる。口縁部と頸部の接ぎ目で径9.6cmを測り､通有のものよりは口縁は外反するようである。内外面ともに刷毛状具によるヨコナデで特に内面において器壁の凹凸が顕著である。胴部では器壁薄く、肩部より胴部にかけて耳を貼付し､径１cmの孔を穿孔しているが､耳の全形は欠損していて不明である。15は口径40cm以上を測る口縁部の破片であるが、器表は高火度焼成のために赤褐色を呈するが、器肉は灰黒色を呈する。胎土には砂粒を多く含む。口縁部は外反し、端部ではつまみ出している。端部近くに櫛３本による波状文を施す。

III（第60図11～14）11～13は甕、壺の胴部片であるが、いずれも外面には通有の条線状のタタキ、内面には楕円形のタタキ当具痕の痕跡が明瞭に認められる。11、13は右下りのタタキで、３cm巾に対して11、12本と割り合いと細いタタキで明瞭である。12は、羽状になるタタキで３cm巾に対して８本前後と先の11、12よりは粗い。14は擂鉢の底部片であり底径約10cm前後のものである。灰青色を呈するが焼成はややあまい。内面には12本の櫛歯結束による下し目が施される。

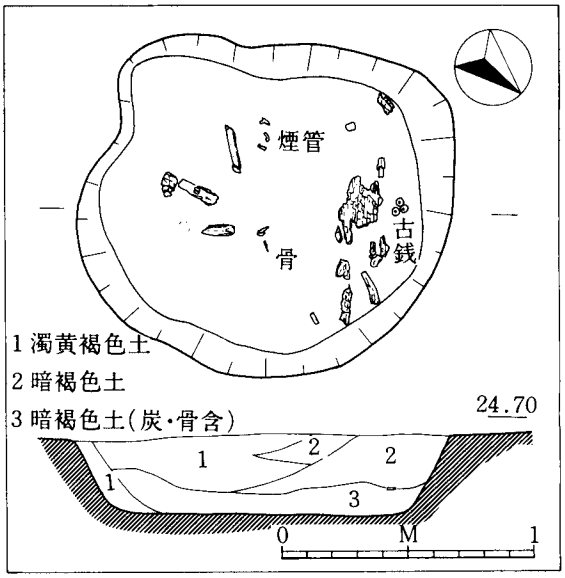
IV　越前の甕胴部片とみられるが細片のため図示することはできない。赤褐色を呈し焼成は良く器表にやや長石の吹き出しがみられる。　（平　田）



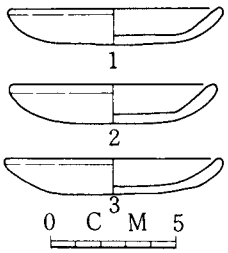
第61図　須恵器・中世陶（1／3）

11　近世火葬墓

発掘区の北西端部、丘陵平坦面上、15Hグリットに位置している。第7号住居址外郭溝から北方へ約10cmとわずかな間隔を持っているだけである。平面プランは略楕円形を呈していて、長径1.5m、短径1.3m、深さ31cmを測る。表土を除去した段階で、土師質土器および寛永通宝4枚が得られている。土坑の側壁の一部には火熱で赤変している部分も見られ、土坑内部に炭化物が多く見られるところから、土坑内で火葬を行った事は確実と見られる。覆土の上層が濁黄褐色を呈するところから、火葬が終わった後に埋めもどしを行なったと見られ、表土層中の出土遺物はそなえられたものと想定できる。火葬骨の遺存状況は悪く、頭部位置その他については不明である。なお、寛永通宝約32枚と煙管の火口および吸口が副葬されていたが、遺存状況は良くなかった。



第62図　近世火葬墓（1／30）



第63図　土師質土器（1／3）

第64図
拓影(1/2)

土師質土器は直径8.0～8.7cmと小振りのもので、ゆがみが大きい。器壁は薄く、立ち上がり部分は指で押さえられ、さらに薄くなる。口縁部分は若干肥厚気味におさめる。黒色ないし黒褐色を呈し胎土に若干砂粒を含む。

（西　野）

第4章　考　　察

第1節　奥原縄文遺跡の遺構と遺物

奥原縄文遺跡では、先の遺跡の状況でも述べたように、決して遺存状態の良いものではなかった。以前のイソライト用のために遺跡の中心部は、ほとんど削平され縁辺部がかろうじて遺存する状況であった。そのため住居跡などの検出はなく、わずかに土坑三基を検出したにとどまった。なかでも第3号土坑としたもの以外は、ほとんど遺物を伴出していない。

遺物の出土は、第3号土坑のものとその他の大半は、北側斜面における包含層の堆積より検出したものである。第8図1～3の楔形刻目文を有するものは、上山田貝塚（上山田貝塚・宇ノ気町教育委員会・昭54）の上山田第Ⅲ様式第6型式に、また、金沢市古府遺跡（金沢市古府遺跡・金沢市教育委員会・昭49）第Ⅱ群上山田Ⅰ式土器群第3類に類例がみられる。つぎに、刻目文、渦巻、三角形彫去文を有する第8図4～8は、上山田第Ⅳ様式第37型式、古府遺跡第Ⅲ群上山田Ⅱ式土器群第1類に、また第8図15、16、20は上山田第Ⅲ様式第18型式、古府遺跡第Ⅲ群上山田Ⅱ式土器群第3類に属するものと思われる。今、ここでこれら土器群の属する年代を考えてみる時、北陸地方の中期土器編年は、やや底着をみない感がするが、大筋では中期の前半から中葉にかけてのものと考えられる。

つぎに、第9図23～36の渦巻状文を有するものについてみると、上山田第Ⅲ様式41型式に、古府遺跡第Ⅵ群上山田Ⅲ式土器群第1類、第Ⅴ群古府Ⅰ式土器群第1類にあてはまるものとみられる。これらは、中期中葉前後に編年されるものとみられる。また、第9図37～47の平行半隆起線文を有するものは、上山田第Ⅲ様式第57～60型式、古府遺跡第Ⅵ群古府Ⅱ式土器群第2類に近似するものとみられる。第10図66～111の縄文を有するもの、第13図112～135の無文のものについても分類して説明すべきものであるが、筆者の力量不足でできなかった。また底部、石器などについても良好な資料に恵まれず報告のみに留める。本報告では、上山田貝塚（宇ノ気町教育委員会昭54）、金沢市古府遺跡（金沢市教育委員会・昭49）他多くの報告書を参考にさせていただいたが、十分に話しきれなかったのは筆者の勉強不足とお許し願いたい。　　（平　田）

奥原縄文遺跡の石器石材について

奥原縄文遺跡の石器の石質を見るに、それらすべての石材はこの遺跡周辺に分布する。すなわち、輝石安山岩が全体の約65％を占め、それは遺跡最寄りの和倉・大津・崎山半島中軸部に分布し、新第三紀中新世前期の熊淵安山岩類に属する岩体からのものであろう。中粒の砂岩も、前述の熊淵安山岩類の中に挾在する砂岩であり、産出数は少ないが石槍のフリント質石材も同安山岩類からのものであろう。石核の黒曜石は、現在までの地質学の知識によると、この遺跡の最寄り

の地点では、内浦町に産出が報告されているに過ぎない。しかし、黒曜石を産出する可能性のある岩体は、遺跡のある七尾周辺には存在していない。

以上のように、黒曜石については、その産出がやや遠方であるが、他の石材については、その殆んどが遺跡周辺にある岩石である。（藤　則雄）

第２節　奥原遺跡の遺構と遺物

土器について

奥原遺跡において発掘された土器は、遺物整理ケースで25個以上の多量であった。しかし、出土量に比較して土器全形を復元しえた資料は、図上復元を含めても極めて少ないと言わざるを得ない。これは、集落の存続期間が短かい事と集落の立地条件によるものと考えられる。

出土した土器は、６基の住居址および３基の土坑、多数のピット等の覆土に含まれていたものと、包含層から検出したものに大別される。各住居址の床面上、覆土中から得られた土器は、遺構の存続、廃棄、そして、土器編年上において重要な視点を読みとる事が出来うるのであるが、本遺跡にあっては各遺構に重複関係が認められなかったという結果から、遺構相互の対立的な存続期間を土器で表現する事は困難と考えざるを得ない。さらに、住居址等の遺構から出土した量と等量に近い包含層出土土器を通覧しても、現在的に考えられている大方の土器編年観のなかでも時期幅を広く考えなければならない必要性は低いものと思われる。本遺跡の出土土器は遺構から離した位置で全体を把握し、さらに、それを器種構成、出土量、出土状況とも大きな差異を持つ遺構に照応させるという、通例とは逆の方法で考えていきたい。

甕形態の出土が最も多く、図示したもので105点を数えた。やはり、図示しえた底部の総数が132点であり、壺、鉢の底部片を含むところから、全体としては全点を網羅しているものと見たい。甕は大きく５形態10細分を行なった。甕Ｉ類は複合口縁に凹線を引くものを一括している。15点の出土数で、甕形態の14.2％を占める。口縁幅が短かく、引かれる凹線も幅がそろわず粗雑な印象を受ける。口縁はゆるく外反気味になるものが多く、内面の段はほとんど形成されないのが特徴的である。内面の調整を窺い知れる資料は少ないが、第１号住居址（第26図１）、包含層出土（第48図４）では横方向の刷毛調整を見る事ができる。甕Ｉ類は該期においては指標となる器形で、本遺跡出土資料は土師器第１様式月影式（註１）とは若干の差を認める事ができよう。口縁端部での外反傾向や口縁内面の指頭圧痕等を見ない事等によるもので、羽咋市柳田うわの２号住居址出土例より先行するものと考えられる（註２）。また、甕形態のなかでＩ類の占める割合は従来から指摘されているように加賀地域に比べて低いものと言えよう。甕形態のなかで主体となるものは、有段口縁の素文のタイプである。全体での占める割合は57.1％、60点の出土数である。口縁部分の形状により６類に細分した。II類Ａは８点の出土がある。直立する幅広の口縁を持つもので、肩部の張りが弱く胴部最大径が中位に置かれる。口縁部下端の稜線が比較的明快に認められ、II類Ｂとは大きく異なる点と言えよう。類例としては富山県中山南遺跡（註３）、津幡町谷

内石山遺跡（註４）、志賀町倉垣遺跡（註５）で少数例を見るだけで、端正な口縁形態に今後注意を払ってゆく必要性を感じる。II類Ｂは18点が上げられ、甕形態ではＩ類を越える数量であった。強く外反する有段口縁で、幅の狭い口縁がつけられ下端稜線が、さほど目立たないタイプである。第７号住居址出土例（第43図１）は、肩部に刺突列点文をつける本遺跡では類例の少ないタイプで、頸部内面に指頭圧痕をつけ、強い調子の刷毛ナデを施こす。さらに、外周は肩部なかばまでナデを行なっているのは、注目しておくべきものと考えられる。II類Ｂとしたものは比較的類例の多く見られるタイプで、押水町上田出西山遺跡（註６）、羽咋市柳田うわの遺跡(註２）等で見る事ができる。甕II類Ｃは３点の出土を見るだけのもので、口縁端部を尖り気味に持ち上げ、下端に小さく段をつけるタイプである。第２号住居址（第30図15）が、その典型である。甕II類Ｄは口縁形状がＣと似ているが口唇部分が尖る形態を持つものをまとめた。６点の出土で、第２・４号住居址に各２点が見られる。上田出西山遺跡、中山南遺跡で少数例が認められる。甕II類Ｅは８点の出土がある。肩のはらない体部を持ち、口縁部下端が外方へせり出すように突出するもので、外反傾向になるものが多い。鹿島町徳前Ｃ遺跡（註７）で類例が知られる。甕II類Ｆは「く」の字状に折れる口頸部に短かい口縁がつけられるものを一括した。第２号住居址から良好な資料が出土しており、器形には大小が認められる。小型品は口径を越えない体部がつけられ、逆卵形を呈するのが特徴的である。第30図18の資料は、受け口状になる口縁部を持つものであるが、体部に幅広の工具によるナデ調整を施す本遺跡では唯一の土器であった。色調、胎土が他の土器と異なるところから、移入品である可能性が大きいと考えている。甕II類Ｆは６点の出土数で、第２号住居址に集中的に出土しているのは注目してよいであろう。類例としては徳前Ｃ遺跡で認める事ができる。甕III類と一括したものは、「く」の字状に折れて段を持たない形状のものであるが、強い角度をつけるものや口縁端部で小さな押さえをつけるものなど細部で見れば、さらに細分する事も可能であろう。全体では20点、19％の出土数を数える事ができ、本遺跡の甕形態の特色を示すものと考える事ができる。なお、甕Ⅳ類としたものは、同様の形状を示すものの口唇部分に押さえや面取りを施さないものを一括しているが、「く」の字口縁としてまとめれば、27点、25.7％となり、さらに大きな割合を占める事になる。甕III類の特色を最も良く表しているのは、第４号住居址（第39図４）と第49図28の２点の土器である。類似する資料として上げられるものは比較的乏しいもので、金沢市南新保Ｄ遺跡（註８）、加賀市敷地町後方遺跡（註９）にとどまるが、近年の能登地域の調査による資料は多量にのぼるところから類例は増加してゆくものと考えられる。なお、時期的な差に問題をもつが、中島町上町マンダラ１号墳周溝から、近似した口縁部片が得られている（註10）。その他の甕III類の資料および甕Ⅳ類は同時期の加賀地域の各遺跡から認められるものの、甕形態のなかでは少数例であると言え、本遺跡の甕形態の在り方は能登地域においての畿内色の影響をうつすものとして注意される。

壺形態は22点（口縁部片）が得られているが、大部分が長頸壺で占められているのが特色である。長頸壺は口縁部分の形状から４種に細分した。壺Ｉ類は有段口縁で擬凹線を引くもので４例の出土があった。外反気味に立つ口頸部から短かめの口縁がとりつくもので、内外面とも丁寧なヘラ研磨を施しているのが、他の壺形態と異なる点と言える。類例としては、羽咋市柳田うわの

遺跡（註２）、金沢市吉原七ツ塚墳墓群（註11）、松任市法仏遺跡（註12）を上げる事ができる。壺II・III類は各１点づつの出土で、金沢市塚崎遺跡21号竪穴（註１）にII類に近似するものを見るが、III類のタイプは類例を見るに至らなかった。壺IV類とした長頸壺は、口縁端部が内屈するものと、ゆるく外反するものに分けられ、３点づつの出土数を得た。類例として押水町上田出西山遺跡、羽咋市柳田うわの遺跡の出土例を上げる事ができる。甕形態の時期的な差異が微妙であるところから、長頸壺の在り方は遺跡の年代を判断するうえで大きな比重を占めうるものと言えよう。長頸壺はＩ～IV類を含めて12点、壺形態の約５割強を占めている。壺V類としたものは、広口壺となるタイプで５例の出土が見られた。そのうち２点が赤彩を施されているのが認められ、長頸壺と異なる使用状況を暗示している。近似した資料として、鹿島町徳前Ｃ遺跡下層出土土器、富山県中山南遺跡例を上げる事ができる。壺VI類としたものは、いわゆる台付装飾壺とされるタイプで３点の出土例があり、うち２点が全形を想定する事ができた。口頸部分が長く伸びて、体部との境界が明確ではなく、ゆるやかに体部にとりつくもので、体部の最大径は下位におかれるイチジク型を呈している。北陸東南部地域の該期遺跡に通例して見られるもので、現在までのところ富山県での出土例が多く紹介されている。北陸独特の器種で、塚崎II式期とIII式との変化としては口縁部と体部の境が明快になることと、体部が偏平な楕円形状になり、全体として小型化してゆく点を上げる事ができよう（註１）。壺VII類は小型品で２例の出土が知られ、ともに塗彩されていた。

鉢型土器は12点の（口縁部片）の出土があり、口縁形状から４類に分類した。しかし、Ｉ・II類の相違は微細なもので、同一に扱うべきかもしれない。とすれば10点が包括され、III・IV類としたものは各１点であり特異なタイプと考えられる。Ｉ・II類10点のうち８点が住居址から出土した。第３・７号住居址をのぞく４基から同タイプの鉢が出土している事は、集落の存続時期を判断するひとつの目やすとなろう。器形は高坏II類器台III類に分類した口縁形状と相似し、体部が深くなるという違いを上げるにとどまる。そして、高坏12点出土例のうち６例がII類に含められ、器台17例のうち10例が器台III類に分類される事から、鉢、高坏、器台の３器種に共通する器形が本遺跡での主体的な要素とする事ができよう。鉢Ｉ・II類に近似する資料としては、金沢市南新保Ｄ遺跡Ｔ－４、押水町上田出西山遺跡、志賀町倉垣遺跡で見る事ができる。なお、鉢III・IV類については類例を見い出せなかった。

器台形態をとると判断した口縁部片は、既述した如く17例であるが、全形を推定できる資料は２点にとどまる。そして、脚部片としてしか扱えなかったものが13例得られている。しかし、分類が頗雑になる事から口縁部片で細別を行なった。３種に分けられる。器台Ｉ類は、大きく広がる器受部端部が上方へ引きのばされ短かい口縁帯を形成するタイプで３例の出土である。口縁部分に刻み目を入れるものや、擬凹線を引くもの、素文のままのものなどがある。類例として上げられるものは少なく、富山県中山南遺跡、辰口町高座遺跡（註13）に近似した資料が見られる。器台II類は４点、III類は10点の出土である。器受部口縁部分の幅で分けたが同列に扱うべきかもしれない。受部がわずかにくびれて段状をなすが、直線的に外展する器受部を持ち、器高が前段階に比較して小振りとなるものである。

高坏と想定した口縁部片は13点である。全形を推定できた資料は１点のみで、一部の器形は器台との区別が困難なものも含まれている。脚部片は約28点得られていて、うち脚台部片は８点が含まれている。器台につけられていたとも考えられるものの、区分の手がかりがつかめない。高坏Ｉ類は１点だけであるが口縁端部が肥厚する器形で、羽咋市柳田うわの遺跡では主体的な器形であり、鹿島町徳前Ｃ遺跡Ｉ様式に類似する資料と認められる。高坏II類としたものは６点が得られていて、口縁部が大きく外湾して伸び、段をおいて小振りの体部がつけられる。本遺跡での主体的な器形である。辰口町高座遺跡等に類品が見られる。高坏III類としたものは、外展して伸びる口縁端がさらに外湾し、凹線を入れるものをまとめたが、体部の形の異なるものをも含める事となった。なお、脚端部が肥厚あるいは反展するタイプは５例が得られている。そのうち３例までが第１号住居址から出土した。高坏III類に含まれるスタンプ文を持つ例が、第４号住居址（第39図16）から出土している他、台部、脚端部片（第53図85・86）が得られている。谷内尾晋司氏（註14）がＳ字状スタンプ文を分類したなかのＡ－ｂタイプのものが台部片に施文されていた。その他のスタンプ文は、同心円文、鋸歯文と認められ、谷内尾氏の説かれる如く、ごく短期間のあいだに消長したものであるところから、本遺跡の時期的位置に手がかりを与えてくれる。高坏IV類としたものは１点のみで、口縁下端に凹線を引くタイプである。高坏V類は国道南丘陵で表採した資料で、口縁が大きく伸びて立ち上がり体部がほとんどなくなるタイプで後出的な様相を帯びている。金沢市南新保Ｄ遺跡ＢＧ－20号土坑等に類似例が見られる。高坏の脚柱部を見ると棒状脚となる例は３点だけで、他の10例はゆるやかに脚をひろげるタイプであった。有段脚の台部に２個１対の穿孔を施すもの４例が知られ、本遺跡での特色として上げられる。

柳田式土器の有段棒状脚の高坏は、本遺跡では完形としての把握が困難ではあるものの、有段脚破片として６点があり、それと組み合わされる脚台はやや低平化しているように見られ、数量的にも前者を越えている。

さて、代表的な器種についての全体的な概要を述べてきたが、各住居址から出土した土器の特長を見てゆきたい。第１号住居址では甕Ｉ類が２点、II類Ｅが１点、Ｖ類が２点という構成で、鉢、壺が１点づつ加わり、高坏が少なくとも３点加えられる。脚端部が肥厚、反転して加飾するタイプの過半以上が出土するという特色を持つ。第２号住居址では床面からの出土が比較的豊富ではあるが、覆土との差異を見い出すのは困難である。甕Ｉ類は１点だけで、「く」の字口縁のIII類が３点、II類Ｆとした有段ではあるがIII類に近似するものが３点と多いのが注目される。他の器種では蓋器形が３点と多いものの、鉢、壺は他の住居址と通底するものであった。本遺跡での代表的なセットを構成しているものと考えたい。第３号住居址では、甕Ｉ類が４点と多く、II類Ｂがそれにつぐ。第35図５は口縁端に面取りを入れて口縁帯をつくる、全形をうかがえる資料であったが、類品は見られなかった。壺には長頸壺、広口壺が各１点づつ見られ、器台が４点見られ、他に比して多いが、ともに器台III類に含めえるタイプのみである。第４号住居址では鉢２点、「く」の口縁の甕III類１点、スタンプ文を持つ高坏および棒状脚が共伴しており、他の遺跡との比較のうえで重要な位置を占める。第６号住居址では図上復元を行なった甕II類Ａ２点と甕IV類の共伴が注意される。第７号住居址では、甕II類のタイプに甕III・IV類のタイプが少数例加

わる。甕の内面調整には、ともにヘラ削りと見まちがえる程の強い刷毛ナデが行なわれており、北加賀で盛行するヘラ削り手法の歪曲した形ではないかと予想している。他の住居址では第1・第2号住居址から少数例が観察され、第7号住居址のみの特殊な手法とするよりは、本遺跡においての新しい手法としてとらえるべきと考えている。

住居址出土例を概観してみても、初めに述べた短期間における土器組成としての把握に、1、2の知見を加えるにとどまったが、筆者の取り組みに浅い面もあり、先輩諸兄の御批判を仰ぎたい。本遺跡で得られた土器の編年上に占める位置としては、羽咋市柳田うわの遺跡溝状遺構（柳田式土器）より新しく、同遺跡二号住居址出土土器（土師器第1様式）より先行するものと見られ、吉岡康暢氏の塚崎遺跡での編年と比較すると塚崎II式古に併行する能登地域における一型式と見て大過ないであろう。なお、近年の弥生終末から古墳時代初頭にかけての土器編年は、流動的な社会、政治情勢を地域的にとらえる方向を模索しているが（註15）、能登地域での一定程度のまとまりを持つ報告は少なく、加賀、富山県との比較をとおしての報文とならざるを得なかった。近年における発掘資料には目を見はるものがあり、その報告、研究のたたき台に本遺跡がなればと願う。

遺構について

本遺跡で検出された遺構は、竪穴式住居址6基、土坑3基、多数のピット、近世火葬墓1基、他数条の溝であった。その中心となるのが6基の住居址で、それぞれ遺存状態は異なるものの、一部を除いて完掘したと言えよう。住居址の平面プランで見ると5基までが隅丸方形で、1基のみが楕円形を呈しており、立地・規模とともに集落内での特殊性を想定させる。竪穴の規模の算出は掘り込み面の面積で行なってみた。概数ではあるが、第1～7号住居址の順で、36、23、77、28、25、33m²の値が得られ、第2号住居址が最小の竪穴で、中規模クラスが第1・4・6・7号住居址の4基が上げられる。柱穴数で見ると2本主柱は第2号住居址のみで、他は4本主柱の形態をとっている。塚崎遺跡での検討を見ると（註1）、隅丸方4型で40m²未満の床面積を有する普遍的な竪穴に含まれる事となるが、楕円4型となる第3号住居址は面積規模で見ると1クラス上の60～70m²台の隅丸方6型クラスと同様に扱う事ができよう。

壁溝は全ての住居址をとおして認められるものの、周壁部分の遺存している地点に遺存するものが大部分で、壁溝が全周していたものは第2号住居址1例だけであった。壁溝は幅が15～40cm、深さ2～10cm程度のもので、特別の掘り込みは見られなかった。壁溝内および周辺部分での出土遺物としては、第2号住居址の鉄器片、第3号住居址の管玉未製品2点、第4号住居址の鉢2点、第7号住居址の器台（第44図23）が目立った資料である。そのなかでも、第4号住居址の鉢2点（第39図11、12）は壁溝が意図的に止められた端に位置し、重ね置かれたようになって出土しているのが注意される。2点ともに赤彩されており、使用しない状態でのかたづけではないかと想定されるものの、壁溝内に物を置くとは常態では考えがたく速断はひかえたい。

外郭溝とは住居址掘り込み線から距離をおいた地点に、住居址の周囲をめぐるようにして掘り込まれている溝をさす。本遺跡においては、第4・7号住居址にともなうものとして2例が検出

されている。第４号住居址のものは、傾斜面の上位に孤状にのびて長さ5.6ｍ、深さ35cmの規模をはかり、溝内に含まれる遺物は少量であった。一方、第７号住居址は一部攪乱を受けている部分もあるが、住居址の掘り込み線の外側を１～2.3mの距離をおいて、幅30～45cm、深さ40cmの規模で「コ」の字状に掘り込まれていて、住居址床面より溝底面は＋25cmにあたる。注意されるのは南方側において溝底面に小ピット数個が検出され柵状のものが設置されていた可能性が認められる事である。出土した遺物は南半部分では豊富であった。外郭溝を伴なう住居址は近年増加しており、富山県小杉上野遺跡（註３）で４例、河北郡津幡町谷内石山遺跡（註４）で１例、加賀市小管波遺跡で数例が知られていて、排水施設としての機能だけではなく、溜水をもかねている状況が谷内石山遺跡で認められている。いずれにしても、住居址の全てに掘り込まれたものではなく、ごく少数例にのみ付属している在り方は、今後の追求課題となるであろう。

住居址床面ではっきりとした焼土（炉）を認めたのは、第３・７号住居址の２例だけである。

床面から検出した遺物量と、覆土から出土した遺物量を見ると、第２・４・６・７号住居址が比較的床面からの出土量が目立つという程度で、残りの２基との差は小さいものと思われる。

本遺跡の集落構造は、南北方向に長い丘陵平坦地を中心として南北方向約60ｍ、東西方向約60ｍの円形に近い形が想定されるものの、配置状況では同一等高線（約24ｍ）より上位に５例が集中する形となる。すなわち、丘陵上平坦地である南北約50ｍ、東西約25ｍが空地として残され(広場として機能？）、空地の外側で傾斜が強くなる変換線上に一定の間隔（約15～20ｍ）を持って住居が設定されたと見なされる。第６号住居址だけが高度を下げて単独に位置する事になるが、空地をとりまく２列目の住居址群として存立するのではないかと考えている。住居址の遺構としては検出できなかったが、第３号住居址の北東方向に位置するピット群および弧状溝をその片鱗として見る事もできなくはない。つまり、集落構成としては、空地を中心にして同心円形で、列状に住居が営なまれたものと解したい。北西方向の未調査区には、１基ないし２基の住居址が24ｍコンターより上位に存在しているものと考えている。とすれば、奥原集落址は７～10基で成っていたと推定される。

集落内部の構造としては、外郭溝の有無だけであるが東方と西方に双分されるのではないかと考えているが、土器の組成その他についての細かな検討が必要であり今後の課題としておきたい。

終りにあたり、様々な御教示をいただいた谷内尾晋司氏、三浦純夫氏に感謝の意を表しておきたい。また、本遺跡からの出土遺物の整理、実測作業は、石川県埋蔵文化財協会に委託したが、脆弱な土器類を精力的に整理下さった荒木繁行氏（事務局長）をはじめとする宮本洋子さん、浅野豊子さん、松田智恵子さん、浦　照子さん（協会職員）に深くお礼申し上げます。（西　野）

註１　吉岡康暢・小嶋芳孝　1976　「塚崎遺跡」　北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　石川県教育委員会

２　谷内尾晋司　1973　「弥生遺跡」『羽咋市史』　羽咋市

３　1972　「富山県史　考古編」　富山県

４　竹本　勝・滋井　真・西野秀和　1980　「津幡町谷内石山遺跡」　津幡町教育委員会

５　土肥富士夫氏の教示による。

６　三浦純夫氏の教示による。

7　湯尻修平　1978　「鹿島町徳前C遺跡　第1次調査報告書」　石川県教育委員会
8　宮本哲郎　1981　「金沢市南新保D遺跡」　金沢市教育委員会
9　小森秀三・田嶋正和・北野博司　1982　「敷地町後方遺跡発掘調査報告」　加賀市教育委員会
10　唐川明史氏の教示による。
11　谷内尾晋司・橋本澄夫　1976　「吉原七ツ塚墳墓群」　北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　石川県教育委員会
12　谷内尾晋司氏の教示による。
13　中島俊一　1978　「辰口町・高座遺跡発掘調査報告」　石川県教育委員会
14　谷内尾晋司　1981　「内浦町の集落遺跡と古墳」『内浦町史』　石川県内浦町
15　谷内尾晋司　1980　石川考古学研究会古墳部会　第2回例会報告

第3節　能登邑知地溝帯とその周辺の弥生文化

―― 四つの雑感を中心に ――

(一)　農耕文化と自然環境

日本海岸に面した北陸地方は、〝北国〟や〝雪国〟とも呼ばれる深雪地帯である。このことから、一般的にいって弥生文化の波及は、冬期も温暖な太平洋側の諸地域に比べて、かなり遅れたものと考えられてきた。これはイネが熱帯原産の植物であり、〝雪国〟の気候には容易に適応しなかっただろうという印象を与えてきたからである。すなわち、北九州地方に波及したイネ種子と水田耕作の技術は、瀬戸内・近畿・東海への太平洋側コースや日本海側でも山陰地方までは、かなりの速さで伝播するが、北陸地方に波及し定着するためには、イネそのものを寒さに適合するよう、かなりの期間をかけて改良する必要があった筈だと考えられたのである。

たしかに、北陸地方での稲作の開始は、北九州からみてほぼ同じ距離にある東海地方に比してやや遅れを示すことは事実といえるし、初期の弥生土器に縄文的要素をとどめる時期があり、狩猟採集生活から農耕生活への移行が、西日本ほど急速に進まなかったことも認めねばならない。しかし、熱帯原産といわれるイネも、中国江南地方で栽培植物として定着、さらに北上して黄海に突出する山東半島周辺に波及、さらに朝鮮半島南部に伝播しこの地で改良発達したとみられる水田耕作による方法が、北部九州に伝えられたものと考えられる。イネと共伴して流入したとみられる雑草種子（出土）を分析した結果、かつての安藤広太郎氏の説である江南から南朝鮮・北九州への同時波及（東進直接説）を妥当とする考えもあるが（笠原安夫「出土種子からみた縄文・弥生期の稲作」歴史公論74）、墓制・金属器や磨製石器（石庖丁・柱状抉入片刃石斧など）等の近縁性は、朝鮮南部と北九州地方の農耕文化が、極めて密接で不可分の関係にあることを物語っている。江南（揚子江下流域）から朝鮮南部に波及するには千年に近い歳月を経ていると考えられ北上するとともに、イネそのものも比較的涼しい気候にも適応できるようすでに改良されていたものとみられる。朝鮮南部で栽培されるようになったイネは、九州地方や本州西部に広がるに際

して、とくに品種の改良を要するものではなかったと考える。とくに、縄文中期末ごろから弥生時代末期にかけて、現在より約1～2℃冷涼化し、海水準も現在より約1m程度は下る海退現象がみられたという(藤則雄「内灘の自然」内灘町史)。北九州へのイネの伝播と日本各地へのイネ栽培の波及が、現在より冷涼な環境の中で進行していることにも注意をはらわねばならない。

付表(1)　関係地域の月平均気温（℃）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	年平均
木浦	11.5	16.6	20.7	24.9	26.1	21.8	13.4
福岡	14.2	18.4	22.0	26.7	27.3	23.4	16.0
奈良	13.0	17.5	21.3	25.5	26.3	22.2	14.3
金沢	11.9	16.8	20.7	25.0	26.2	22.0	14.0
新潟	10.7	15.9	20.0	24.2	25.7	21.4	13.1

付表(2)　関係地域の月平均降水量（mm）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	年
木浦	83	102	136	183	188	156	1126
福岡	145	144	273	273	177	186	1690
奈良	137	131	208	184	132	155	1390
金沢	157	146	203	256	196	250	2645
新潟	96	91	118	195	155	153	1822

付表(3)　月間日照時間の月別平均値(時間)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	年
福岡	175	196	164	189	221	172	1973
奈良	178	200	154	188	214	162	1963
金沢	181	213	165	179	214	154	1751
新潟	195	222	191	198	232	166	1824

付表(1)～(3)は、昭和57年版『理科年表』（東京天文台編・丸善KK刊）に依ったもので、朝鮮南西部の木浦と北九州の福岡、畿内の奈良、北陸の金沢とその北部の新潟の各都市に関する気象データーの一部である。イネの栽培は最大の幅をみて4月～9月の6ヶ月間である。自然的条件として地形・地質などの制約を受けることもあるが、最も重要なのは、(1)気温・(2)降水量・(3)日照時間であると考える。貯水技術が発達すれば、(2)降水量の調整は可能であるが、弥生時代など初期の段階では(1)(2)は特にイネ栽培の重要な条件だったとみられる。

まず、付表(1)月平均気温からみると、金沢は福岡に比べて各月とも1℃以上低いが、奈良との差は僅少である。木浦とでは若干ではあるが高温である。北陸とはいえ金沢の夏の暑さは、太平洋側に引けをとるものでない。一方、新潟はさすがにやや冷涼で、金沢より低いが、それでも1℃を超えるものではない。付表(2)月平均降水量では、金沢の年間降水量は最も多いが、これは9～2月ごろの秋から冬にかけての降水が著しく多いからで、意外にも冬の降水量は新潟を超えている。しかし、イネ栽培に関係の深い5～7月中でみる限り、福岡・奈良と大きく異るものとはいえない。新潟は4～6月に関しては他の地域より少いが、7～9月については木浦・奈良に近い雨量となっている。イネ栽培には適当な気温と水が必要であるが、降水量の多い金沢などにとっては、日照時間が不足するのではないかとの心配がある。付表(3)によれば、北陸の金沢・新潟は、4～6月については福岡・奈良よりも長く、新潟については9月の福岡に比べて短いものの全般に日照時間は長い方だといえる。むしろ金沢の7月が10時間程度短い点で目立っている。総括的にいえば、北陸が北九州や畿内と気候的に大きな差をもつのは、冬期を中心にした半年間であり、イネの成育期である4～9月の半年間については、その成育に大きな障害となるようなマイナス面はないといえる。とりあげた地域の中で最も北に位置する新潟の場合、気温では他地を

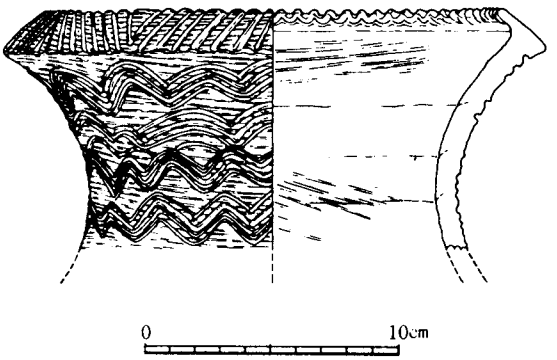
下廻るものの、降水量・日照時間については、金沢よりも福岡や奈良に近いものとなっている。〝米どころ越後〟を支える自然条件の一端を示すものであろう。結論的にいえば〝北国〟と呼ばれる北陸も、イネ栽培を中心とする農耕文化の受容に際し、その自然的条件は満されていたと考えたい。最も懸念される気温についても、南朝鮮の木浦に比べ、大きな差を示すものでないのである。なお、冬期の積雪は、貯水・虫害抑止などの面で有利な側面をもつとともに、雪に閉された生活の中から、〝雪国〟独特というべき文化を創造し育てていることはいうまでもない。

（二）　柴山出村式土器と有段石斧

北陸地方に出現する最古の弥生土器は、前期〝遠賀川式〟系の土器である。丹後半島や若狭湾岸・福井平野（福井市糞置遺跡）に次いで、近年は石川県手取段丘（鳥越村下吉谷遺跡）や富山県（上市町中小泉遺跡）でも存在することが確認されている。いずれの場合も、検出された遠賀川式の特徴を示す土器片は少量であり、この土器を使った人間がそこで新しい生活様式のもとで定住したものとは考え難い。それらの地域の最終段階の縄文人が、西日本初期農耕民と接触したことを示す痕跡とみられる。数片の遠賀川式土器が出土したからといって、直ちに水田耕作を開始したとか、弥生文化を受容したとはいえないと考える。現在この種の土器は、能登半島で発見されていないが、能登の晩期末縄文人も遠賀川期の農耕民と接触する機会はあり得た筈であり、今後検出されることは十分考えられる。なお、遠賀川式土器の搬入経路としては、山陰方面より日本海沿岸に沿って北上するコース、近畿地方より琵琶湖岸を経由するコース、伊勢湾・東海西部より琵琶湖岸もしくは山越えのコースをとる場合が考えられる。丹後・若狭の場合は海上コースの可能性が強く、能登半島海岸部で発見されるような場合も海上コースと考えてよいかも知れない。しかし、越前以北の内陸部で発見されるケースは、必ずしも海上コースをとったとはいい切れない。むしろ、太平洋側地域からの陸路を重視すべきであろう。

北陸で稲作農耕を最初にとり入れたのは、柴山出村式土器の段階だと考えられる。この土器は、東海地方の水神平式土器などに近似した弥生土器であるが、さきに挙げた遠賀川式土器が搬入品である可能性が強いのに対して、柴山出村式土器の多くは、その地で作られたものと考えられる。この土器の出土地は、遠賀川式土器のころよりかなり増加し、石川県下で約10遺跡をかぞえることができる。しかし、それらの遺跡での柴山出村式土器の出土量も僅少であり、これに伴う遺構や土器以外の遺物類の検出も極めて稀である。北陸最古の弥生土器であり、農耕文化の波及したことを認めることはできるが、その内容について判っていることは意外に少い。おそらく、耕作規模そのものが小さく、稲作はまだ、主たる生産活動としての地位を得ていなかったものと考えられる。柴山出村式土器が縄文的要素（大洞A式など）を色濃く残していることも、この土器が狩猟・採集から稲作農耕への移行期に当っていることを反映しているとみられる。北九州や本州西部において、縄文から弥生への転換が急速に行われたのと対照的で、北陸では生活様式の切り換えにやや長い移行期間を要している。これは、単に北陸だけの傾向でなく、太平洋側の東海地方などについても同様のことがいえる。〝北国〟の気候がイネ栽培の障害となって、冷涼地に適したイネに改良されるまでの期間を要したとみるのが、これまでの常識的な考え方ではあるが、

これのみを原因とするのは正しくないと考えている。稲作農耕を受け入れた当時（縄文晩期）の地域の状況、例えば食料資源となるものの種類や密度、獲得技術の差といったものも対比してみる必要があろう。北九州を中心とする地域の急速な転換をみせるのは、農耕民の移住という、強い外的要因が加わったからであろう。

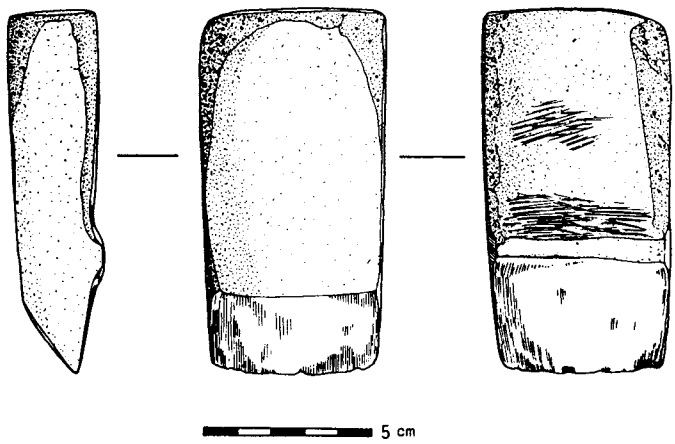


第65図　中島町小牧・外遺跡出土の柴山出村式土器

能登半島における初源的農耕文化の受容地は、半島基部に横たわる邑知地溝帯とりわけ羽咋川と邑知潟の周辺の低湿地だった可能性が強い。羽咋市次場・吉崎遺跡で行われた数次にわたる発掘調査で、条痕状の施文をもつ柴山出村式とみてよいかなりの土器が採集されている。邑知潟畔に拡がる低湿地で小規模な水田耕作が行われたものとみられる。邑知潟以北の地溝帯では今のところ検出例をみていないが、これは厚い堆積層下にあるため発見の機会に恵れないことも一因で将来、小河川による小規模な扇状地形の扇端部などで、初期農耕の痕跡を発見できるものとみている。一方、柴山出村式土器とみられるものは、志賀町北吉田地内の米町川河底や富来町高田遺跡・中島町小牧・外遺跡などでも発見されており、少くとも中能登付近までは、初期農耕の分布は拡がったものと推定される。しかし、小牧・外遺跡では壺形土器頸部１点のみの出土であり、集落の存在までを示すものでなかった（谷内尾晋司・米沢義光・浜野伸雄『中島町小牧・外遺跡』中島町教育委員会）。なお、柴山出村式土器は、加賀市柴山出村遺跡出土の一括資料を標式としており（中口裕他『柴山潟』片山津公民館）、条痕文で調整された粗製土器と縄文晩期精製土器の伝統的装飾文（工字文）を引き継いだ半精製土器からなっている。時期的には中期初頭ごろ（畿内第II様式併行）とみているが、小牧・外遺跡出土品や次場・吉崎遺跡出土品の一部は、厳密にいえば柴山出村式と区別すべきものと考える。小牧・外遺跡のものを例にとれば、ラッパ形に外反する口縁はその端部を内屈させ、外面は条痕調整の上に３本を単位とする櫛状具（棒状具もしくはコシの強い植物地上茎による）で荒い波状文を描いており、胎土にかなりの砂粒を含み黄褐色を呈して焼成は良い。県下における出土例は少いが、福井県糞置遺跡ではかなりの類品が一括出土している。いわゆる柴山出村式に後続する土器で、櫛描文土器が盛行期に入る直前に置けるものと考えている。ただし、その時期は畿内第II様式期の範囲におさまるもので、第III様式に降るものではないとみている。したがって、古いタイプの櫛描文土器（第II様式）とは共伴する関係にあるとみてよかろう。糞置遺跡の詳細が報告されている現時点では、柴山出村II式土器とでも称する外はないが、将来は一型式をたてるべきものと想う。

なお、初期の農耕文化と関係の深い遺物として、七尾市南藤橋町県立七尾高校の敷地内より出土した有段片刃石斧について触れておこう。これは、昭和31年６月に同校中庭（旧校舎当時）で

泉水を掘っていた折りに出土したもので、同校教諭加地浩氏（日本史・故人）によって採集されている。長さ10.8cm、最大幅5.5cm、最大厚2.7cmの安山岩製で、扁平片刃石斧に類するが抉りはなく刃と平行してわずかに突出した隆帯状の段を作り出している。刃は段のない側にけられるのが特徴で、柄を付して木工用の手斧としたものと考えられる（橋本澄夫「七尾高校中庭出土の扁平片刃石斧」石川考古学研究会々誌11）。有段石斧は「……有肩石斧と同じく、東南アジアから中国北部にかけての太平洋側地域および島嶼に分布する」（西谷真治「有段石斧」図解考古学辞典）、「中国南部海岸地帯から東南アジアに出土する」（堀晄「有段石斧」世界考古学辞典上）など、分布範囲についての表現は異るものの、中国で発達した磨製石斧として知られ、日本での出土例の多い柱状抉入石斧の祖形だともみられている。乙益重隆国学院大学教授は「……三角形の石庖丁と柱状抉入石斧というノミ形の石器は、朝鮮半島の所産で、中国ではその祖形とみられる片方に段のついた片刃の有段石斧しかない。おそらく中国の有段石斧が朝鮮半島で柱状抉入石斧に転化したらしい。つまり半島で三角形の石庖丁があらわれ、有段石斧が柱状石斧に転移したころ、稲作とともに日本にやってきたらしい……」と述べておられる（乙益重隆「弥生時代を概説する—談 話形式による—」歴史公論4—3）ように、日本への農耕文化波及前に有段石斧が柱状抉入石斧に変化したとすれば、有段石斧そのものが日本国内で作られた可能性はまずありえないことになる。事実、有段石斧の発見は熊本県など極めて例外的に出土が知られるのみである。大阪府池上遺跡1970年度発掘調査では、159点の磨製石斧を出土しているが（第2阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池 遺跡—1970—』）、1点の有段石斧も含んでいないのであり、日本の生産用具としては異例の石器であることを示している。



第66図　県立七尾高校敷地内出土の有段石斧

県立七尾高校出土の有段石斧は、出土層位や伴出遺物など不明である。かつての校舎建設の際の客土中から出た可能性すらなしとはしない。しかし、七尾湾に面した邑知地溝帯の北端から、国産品とは考え難い一個の磨製石斧が出土したことは事実である。そして、この石斧の製作地は遙かに海を隔てた中国大陸もしくは朝鮮半島であることが考えられ、とりわけ中国製である可能性が強い（乙益教授も中国からの搬入を示唆されたことがある）。日本列島への稲作を中心とした農耕文化は、南朝鮮から北九州へ伝わったとするのが定説であり、この大筋は今後も変ることはないとみられる。もとより、能登半島の一地点から中国製石斧の出土をみたからといって、この大筋に変化を招くものではない。ただ、北九州へ農耕文化が移入される以前に、能登半島へ有

段石斧を携えた異国の農耕民が渡来していたことも考えられるのである。当時の北陸はまだ縄文の世界だったとみられるが、このことによって、能登の文化に何等かの変化をみせたといった痕跡は見出せない。

（三）　櫛描文土器の盛行と方形周溝墓の出現

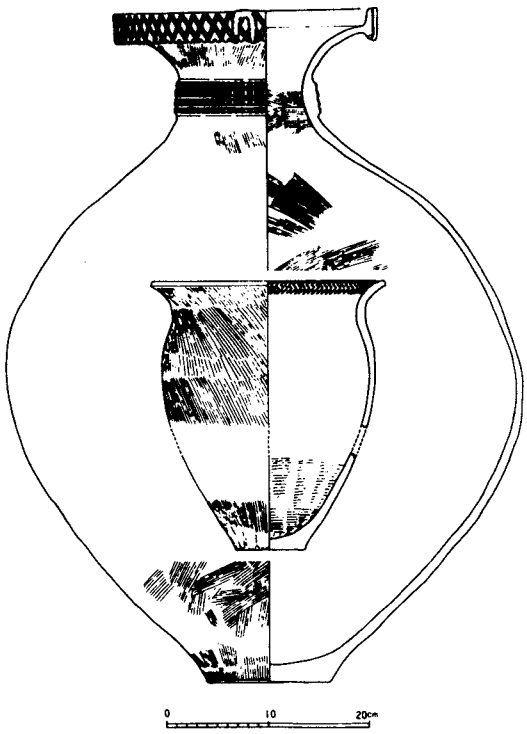
柴山出村式土器と汎称される最古の弥生土器にも、新古（II・I）の別があることを述べた。古式（I）は従来の柴山出村式であり、縄文臭の強い段階のものを指し、新式（II）は糞置遺跡で一括出土し、中島町の小牧・外遺跡で土坑状遺構より単独出土した類で、外面に荒い条痕状調整痕を全面に残すが、頸部には荒い櫛状具（？）で平行直線文や波状文を施して飾ることが多い。文様や器形には縄文臭は薄れる。縄文の伝統を強くとどめた柴山式土器が、近畿地方の弥生土器（畿内第II様式）の影響を受けて生みだした、北陸独自の中期前半の土器であり、荒い波状文や平行線文に櫛描文手法を摂り入れようとした跡がみられるとともに、関東などと異りこの時期までに縄文を施すことも大勢としては無くなる。柴山出村（II）と仮称した段階で、少くとも北陸の西部は農耕社会へ大きく斜傾したものと考えている。

北陸の弥生時代遺跡が、分布範囲を拡大しその密度が高まって、農耕文化が定着したことを示すのは、中期中ごろに近いころである。小松式土器と汎称されてきた櫛描文系土器が北陸で最も盛行をみせる時期であり、それは畿内第III様式と併行する関係にあるとみている。その分布は、佐渡を含む新潟県下にまでは確実に拡がりをみせるが、新潟県へは、東海から北関東など太平洋側を経由して南部東北地方に達した弥生文化が、群馬・福島県下を越えて入っていた地域である。日本海側経由の西日本的色彩の強い櫛描文土器と、縄文による装飾法を残す東北的な弥生土器が混合する地域なのである。なお、天王山式土器など南部東北地方に中心をもつ弥生土器は、断続的かつ僅少ではあるが、中～後期にわたって石川県下にまで出土例をみることがあり、西から東へという弥生文化波及の大きな流れの中にも、東から西へとい小さい流動のあったことを知ることができる（橋本澄夫「入門講座・弥生土器―北陸２―」考古学ジャーナル107）。

小松式土器に代表される櫛描文土器の段階で、金沢平野や邑知地溝帯周辺では、集落規模も大きくなり、その数も増加している。また、能登半島北部の小規模な河谷平地にも農耕集落が進出することになる。門前町深田遺跡や珠洲市高波ふるや遺跡などであり、七尾湾岸地域では、能登島町野崎前田遺跡・穴水町白山神社前遺跡などがある。穴水町沖波の通称三枚田で採集された柱状抉入片刃石斧（長谷進「穴水町沖波発見の抉入石斧」石川考古学研究会々誌12）もこの時期のものとみられる。ただ、能登半島での弥生時代中期集落については発掘事例は少く、なお不明の部分が多いが、金沢平野の寺中遺跡・畝田遺跡などに匹敵するほどの規模をもつものは、次場・吉崎遺跡を挙げ得るに過ぎない。邑知潟周辺部に比べ半島北・中部で発見される弥生遺跡は、なお、範囲も狭まく採集される遺物量も少いとの印象を与えるが、これは、現在でも深田（湿田）が多いなど地勢的な制約を受けたからともみられる。富来町高田遺跡や七尾市細口源田山遺跡などで該期遺跡の発掘を行っているが、いずれも墓域を中心とするものであり、住居域の規模等については十分な資料を得ていないのである。前者は内列砂丘、後者は洪積台地上に営まれた墳墓群であ

ったが、かなりの未調査部分を残しており将来、住居域の検出も不可能でないと考えている。

弥生時代中期の段階では、相当規模の水田を造成し比較的安定した経営を維持できたのは、①梯川など中河川の自然堤防と後背湿地帯、②海岸砂丘背後の湿地帯、③手取扇状地扇端部の自然湧水地帯、④邑知・柴山潟など潟湖の周辺湿地帯、⑤上記の複合する地域、とみてよい。県下の代表的弥生集落跡でいえば、①小松遺跡、②下安原海岸遺跡、③寺中・畝田遺跡、④新堀川遺跡、⑤次場・吉崎遺跡などが挙げられよう。①など洪水・冠水の危険をはらむものも含まれるが、この時期において比較的大規模な開田を可能としたのは、上記の条件を満す地域であったと考えるのである。一方、能登では邑知潟と羽咋川・長者川・子浦川など中小河川に恵まれた羽咋市域に大規模集落が集在し、相見川・宝達川・大坪川・前田川・大海川が流れ、海岸砂丘の発達している羽咋郡南部から河北郡北部にかけての地域でも発見の可能性は大きいと考えている。しかし、地溝帯地域を除く半島部では、於古・米町川下流域（志賀町）、富来・酒見川下流域（門前町）鳳至・河原田川下流域（輪島市）、町野川下流域（輪島市）、若山川下流域（珠洲市）、鵜飼川下流域（珠洲市）、松波・九里川尻川下流域（内浦町）、小又・山王川下流域（穴水町）、熊木・日用川下流域（中島町）、二宮川下流域（田鶴浜町）と七尾市域の御祓・鷹合・大谷川流域および赤浦潟周辺で、比較的広い低湿地域を形成し、これまで弥生時代遺跡を発見しているのも、そのほとんどが上記の地域においてであった。ただ、中期段階に限っていえば門前と穴水を結ぶ線から以南の中小川河流域に発見例が多く、それ以北では稀薄であり、水田耕作地拡散の能登半島における限界線とみることもできよう。また、この時期における人口分布の状態を示すことはいうまでもない。

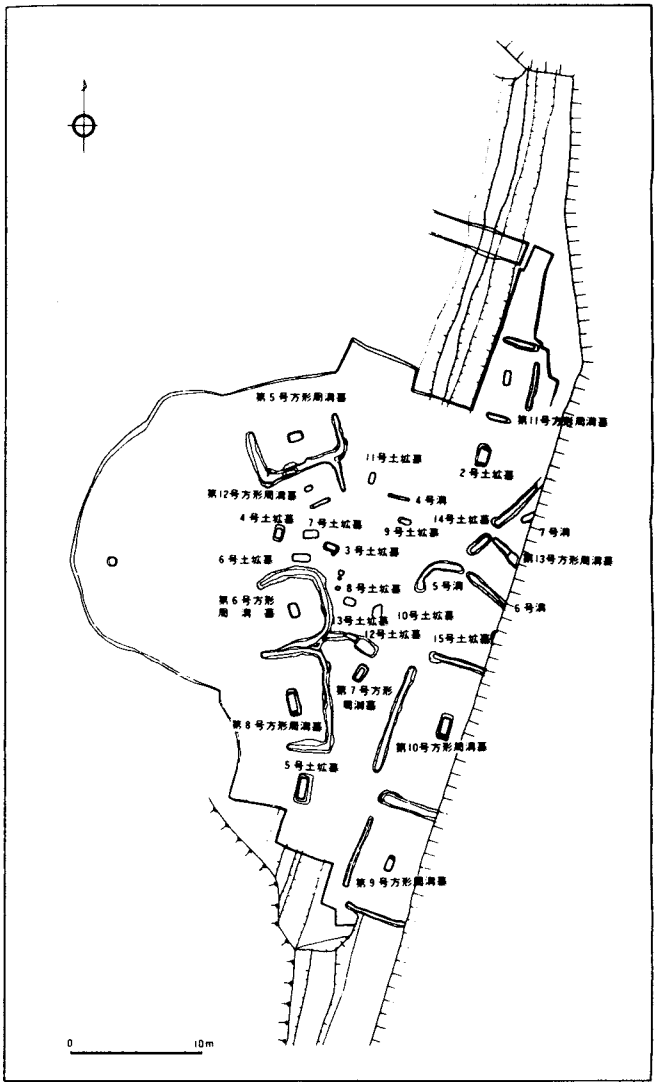


第67図　七尾市細口源田山遺跡出土の櫛描文土器

さて、北陸に櫛描文土器が盛行をみせて間もなく、方形周溝墓という新しいタイプの墳墓形式が採用されている。七尾市細口町源田山遺跡の発見と数次にわたる調査（浜岡賢太郎・桜井憲弘・土肥富士夫他『細口源田山遺跡』七尾市教育委員会）がこれを明かにしている。方形周溝墓は前期末ごろ畿内地方で出現した墳墓形式で、大阪府茨木市東奈良遺跡発見のものなどが最も古いとされる。北陸ではこれまで、金沢市吉原七ツ塚遺跡などの発掘を通じて弥生時代終末ごろには出現していることを確認していたが、細口源田山遺跡の発見により、少くとも中期後半にその造成が始

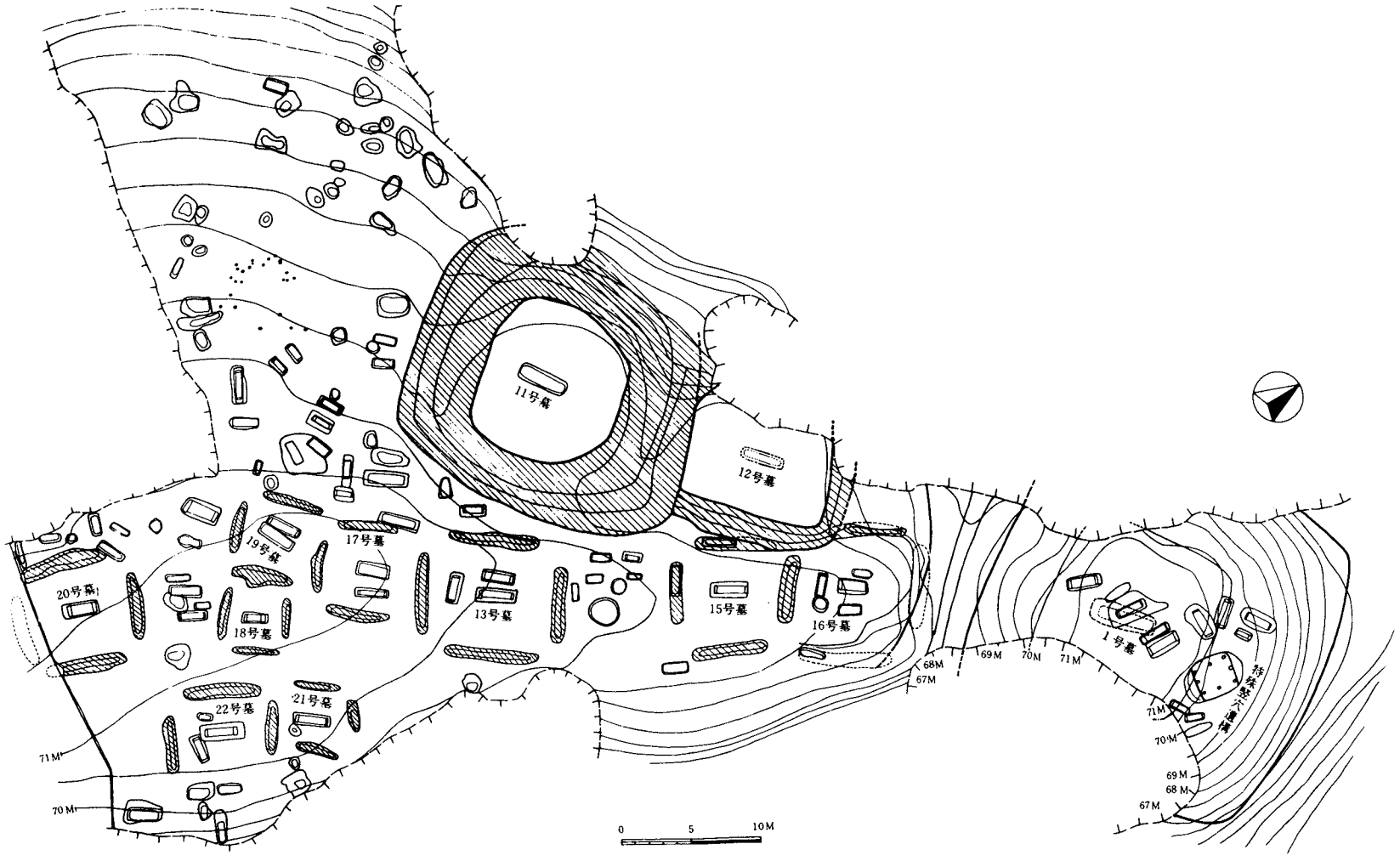
まっていたことを知ったのである。

源田山遺跡で検出した弥生中期の遺構は、方形周溝墓13基、土坑墓15基、土坑状遺構62基、竪穴住居跡3棟、小竪穴状遺構3棟であったが、発見時までにすでに破壊されたかなりの部分があり、遺構数も検出量をかなり上廻っていたものと想定している。谷内尾晋司氏は源田山の方形周溝墓の特色を次の4点にまとめている①単葬を原則とする。2基1対で構成され、周溝外に木棺墓・土坑墓を伴う。②周溝は連続したものと四隅を掘り残したものがある。溝の方向はほぼ二つに分かれる。規模は一辺14mを最大とし、最小は5mである。③周溝内側の主体部は木棺墓と推定され、坑底に木棺小口溝をもつものと無いものがある。1号墓(最大)以外は地山面から掘り込まれており、盛土はほとんどなかったとみられる。④主体部への副葬・供献は皆無である。1号以外は周溝内への土器供献もほとんどみられない。1号墓では溝内に約12個の土器と壺棺とみられるもの1個が納置されていられるもの1個が納置されている(前掲報告書による)。



第68図　七尾市細口源田山遺跡の方形周溝墓群

畿内地方で出現したとみられる方形周溝墓は、その前半においては複葬墓の形をとり、のち単葬墓へ変化している。北陸での方形周溝墓出現は、畿内第Ⅲ様式土器の波及でみられる影響の一つであり、安定したイネ栽培技術・農具の伝播による農耕生活の定着と拡大、鉄器や管玉製作技術(管玉製作技法は西日本型と東日本型に大別され、細身管玉を主とする北陸の管玉は東日本型に属するとされるが、東日本型の成立も北陸への攻玉法伝播とほぼ同時とみている)などの伝播にひき続くものであった。かつて、方形周溝墓は古墳の初現形態であり、首長層を被葬者(首長墓)と考えられたが(大塚初重・井上裕弘「方形周溝墓の研究」駿台史学24)、今日では農業共同体内の家父長世帯による一つの墓葬(都出比呂志「農業共同体と首長権」講座日本史1)とみるのが一般的となっている。古墳の成立に直接結びつくのは、かなりの墓丘を造り出しているいわゆる



第69図　金沢市吉原七ツ塚遺跡の方形周溝墓群

方形台状墓に求めるのが適切ではあるが、台状墓の被葬者が周溝墓形成集団を出自とすることも考えられるから、全く無関係と考えることも妥当ではない。

小松式土器を伴う源田山の方形周溝墓は、北陸に農耕文化が定着し、その分布と密度を高めて間もなく出現したことになる。方形周溝墓を首長墓と規定すると、本格的な農耕集落が形成されたと同時もしくはその直後に、かなりの権力を保持する首長層が出現したことになり、農耕生産の採用が極めて急速に社会的変化を顕現させたと考えねばならない。北陸の中期段階での方形周溝墓は新潟県柏崎市下谷地遺跡で発見されている(柏崎市史編さん委員会編『柏崎市史資料集・考古篇2』)。新潟県下は、北関東や東北地方に分布をもつ再葬墓が盛行する地域であるが、北陸を経由して櫛描文手法が波及するとともに、新しいタイプの墓葬も一部で採用されたことになる。新潟県中部における稲作農耕の定着化と方形周溝墓の出現が、ともに小松式土器期の期間であるとすれば、ここでも社会的変化を急激なものと考えねばならぬことになる。筆者としては、この段階における北陸では、共同体内部の分化はまだ首長層を生みだすほどに進行しておらず、村落共同体の中で有力な世帯共同体(複数)が現われた状態だと考え、源田山や下谷地の周溝区画内の被葬者も世帯共同体の家長層だとみている。こうした家長層の中から、村落を単位とする共同体を代表する首長が突出し、これが方形台状墓の出現へとつながると考えている。

中期後半の北陸に方形周溝墓が出現したころ、水田耕作が定着し北陸に適合した経営法も着実に整いつつあったものとみられる。当時の集落跡・水田跡の調査はまだ不十分で、他地域と比較するまでに至っていないが、羽咋市次場・吉崎遺跡などで検出された木器類からみて、鉄器がある程度普及していたことを物語っている。しかし、この段階での鉄器は、木器加工のための工具としてのものであり、農耕具など直接生産具の素材として用いるに至っていなかったことはいうまでもない。細口源田山遺跡の既往調査は、主として墓域部分であり、その出土遺物から生活用具や生産用具について論ずることは適当でないとも考えるが、かなりの量の石器を検出していることは事実である。報告者(土肥富士夫)のまとめによれば、狩猟具(石鏃・石槍)67点、農具(打製石庖丁—不定形刃器)3点、工具(石錐・磨製石斧・擦切具・砥石)24点、食物調理加工具(磨石・不定形刃器)7点の計101点であり、石鏃の多いことが目立っている。報告者のいうようにこれらの石鏃を狩猟用とすれば、この時期になお狩猟活動の盛んだったことを意味しよう。また、不定形刃器の一部を打製石庖丁とした点は興味深いが、今後は他遺跡での事例を検索し、検討を加える必要があろう。いずれにしても、後期後半ごろの弥生集落に比べ石器依存度がなお高いことを示している。とくに石錐やスクレッパー状の刃器などが多いことは、木器の細部加工用に石器が用いられたことを示すとも考えられ、この段階での鉄器保有量が、小型木工具としての必要を満すに至っていないことを物語るとみている。遺跡分布の飛躍的な拡大をみせた中期後半ではあったが、生産用具の面では石器への依存がまだ高く、水田規模の拡張などにはなお多くの困難を伴ったものと想定される。

(四) 北陸の高地性集落と奥原遺跡

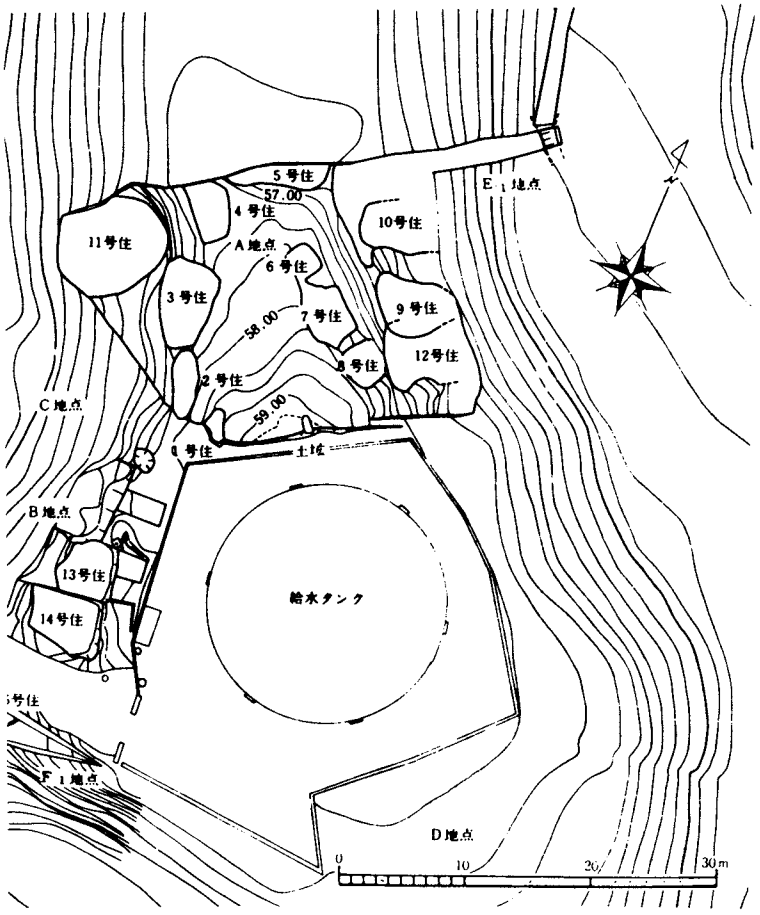
櫛描文で飾られた小松式土器のあと、壺・甕の口縁部や高坏の脚部などを平行凹線文で加飾し

た戸水Ｂ式土器（湯尻修平・梶幸夫『金沢市戸水Ｂ遺跡調査報告』石川県教育委員会）に移行する。凹線文土器は中国地方を中心に西日本一帯で盛行する土器であり、北陸では畿内第Ⅳ様式の影響を受けて現われるとみられるが、一部山陰からの海路による波及もあり得ると考える。中期後葉に位置づけられるが、退化した荒い櫛描波状文や口唇部の刻目文は残り、回転台の使用や箆削りによる器壁の調整が盛行をみせている。戸水Ｂ式土器を単純に出土する集落遺跡はまだ発見例が少なく、能登邑知平野でも次場・吉崎遺跡に見られる外は未発見である。北陸では畿内第Ⅲ様式の波及による櫛描文系土器が、比較的長期にわたって存続し、第Ⅳ様式の影響を受けた戸水Ｂ式が成立したあと、間もなく第Ⅴ様式（後期）の影響下に入ったとみられ、このことが戸水Ｂ式土器期の期間を比較的短いものとし、該期の集落跡数を少くしているものとみている。北陸では櫛描文手法が長く盛行を続けたことになり、小松式土器と汎称されてきたこの種の土器に対しては、これまでも細分化が試みられてきたが、なお明確に型式を設定するに至っていない。

戸水Ｂ式土器が用いられた比較的短い期間の後、畿内第Ⅴ様式の強い影響を受けて後期に入るが、これは、第Ⅲ様式櫛描文土器波及による画期をしのぐ大きな変化をもたらしている。県下では、加賀市猫橋遺跡、松任市法仏遺跡（現千代野ニュータウン）、羽咋市次場・吉崎（上層）遺跡、同柳田ウワノ遺跡などが代表的集落遺跡として知られるが、遺跡密度は濃密さを増して人口の増加を想わせる。中期の段階と大きく異るのは、全国的趨勢ともほぼ一致して石器がほとんど消滅し鉄器の普及が進んでいることである。かなりの面積で発掘を行っている次場・吉崎遺跡でも、いわゆる次場上層式土器と確実に共伴する石器はごく少く、小型仿製鏡などの青銅祭器の波及が認められる。工具としての鉄器は各集落の需要をほぼ満す程度に行きわたり、一部では、農具として使用されたものもあり得ると考える。木器は精巧さをさらに加え、その種類・数量も中期の段階をはるかにしのぐものとなっている。富山県上市町江上Ａ遺跡では、鍬・鋤・エブリ・田下駄などの農具を中心に１万点を超す木器を出土しているが、鍬・鋤でもその用途・土質などにより種々の形態を作り出しており、開田と耕作の技術が著しく向上していることを示している（橋本正他『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町遺構編―』上市町教育委員会）。鉄器の普及による生産用具の発達が、共同体内部の分化を促進し、また河川などの水利を共通とするような村落共同体相互の間にも不均衡を生み出す兆しが現われ、それとともに首長権を握るような特定階層が突出するに至るのであろう。金沢市吉原七ッ塚墳墓群でみられたように、弥生後期後葉のころまで、細口源田山とほぼ同様の方形周溝墓が形成され、この間における共同体内部での変化があまり大きくなかったことを示すとみられるが、その直後に出現する方形台状墓造成への社会的条件すなわち共同体内の分化は、後期後半ごろから急速に進行したものと考えている。

七尾市奥原遺跡は後期後半（塚崎Ⅱ古式）の代表的集落跡であった。厚い堆積土をもつ邑知平野では、まだ同期遺跡の発見数は少いが、やや先行するものとして羽咋市柳田ウワノ遺跡や鹿島町徳前Ｃ遺跡があり、やや後出的なものに安津見川流域の志賀町鹿首モリガフチ遺跡がある。土器型式からいえば鹿首モリガフチ遺跡出土の一括資料が最も近似し、その時期差も僅少だと考えられ、能登における塚崎Ⅱ式古段階を標示するものとして、奥原式もしくは鹿首式として一型式を設定することも可能である。

弥生時代中期までの集落は、一般的にいって沖積地の微高地に立地することが多い。一方、後期に入ると平地に臨んだ低丘陵・低台地上を選地するケースが多くなる。徳前C遺跡は邑知低地帯に臨んだ緩傾斜面上にあるが、柳田ウワノ遺跡は羽咋平野（地溝帯北部）を見下ろす柳田台地上に、鹿首モリガフチ遺跡は小河川に臨む舌状台地上に営まれている。奥原遺跡は標高約25mの台地上にあるが、丘上をほぼ円形にめぐる標高24mコンター上に推定6戸の竪穴住居が配され、さらにその外側の21mコンター線上にも住居を配した形跡が認められたという。中央に空間をもつ二重の環状集落ということになり、計画的村落を生み出した背景として共同体の分化が進行したことも挙げられよう。いずれにせよ、弥生後期とくにその後半には台地性の集落が増加する傾向をみせるのである。このような傾向は、奥原遺跡より後出的で弥生終末期に近い七尾市国分高井遺跡、押水町西山遺跡、津幡町谷内石山遺跡、金沢市塚崎遺跡（II新以降）など河北平地に臨んだ台地上にとくに顕著にみられる。中でも宇ノ気町鉢伏茶臼山の山頂付近で発見された集落跡は、標高約60mの高所に立地し、しかも大きな土木量を費した環濠を周らすことから、北陸における高地性集落の存在を示すものとして注目されている(米沢義光『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター)。水田経営はもとより、日常的水利などの面でも不利な高所へ一つの単位集団が移動しているのであり、一般にいわれるように社会的緊張が生み出した軍事上の目的があったものと考えられる。高城としての高地性集落は第一段階（弥生中期中葉～中期末、本州西端～関東）、第二段階（後期中葉、近畿地方）、第三段階（古墳時代前期、九州～関東）の三期に大別されており、いわゆる倭国大乱に当てられるのが第一段階であり、卑弥呼没後の動乱に当てられるのが第二段階である。第三段階はヤマト政権形成後の各地の動乱を示すと要約されている（石野博信『高地性集落のもつ意味』歴史公論 2－2）。近年、鉢伏茶臼山遺跡の発見に伴い、北陸地方における高地性集落跡の存在は各地でもそ



第70図　宇ノ気町鉢伏茶臼山の高地性集落跡

の可能性が指適されており、越前から越後にかけてのいわゆる〝越〟地域にも、独自の高地性集落が展開していたと予想される。北陸の弥生終末期にみられる高地性集落を、さきに挙げた三つの段階のいずれかに比定して、西日本を中心に繰りひろげられた大きな動乱に際し、北陸もその渦中に巻き込まれたものと考えることも可能であるが、むしろ、北陸を中心にしての大きな社会的緊張を考えるべきだとみている。

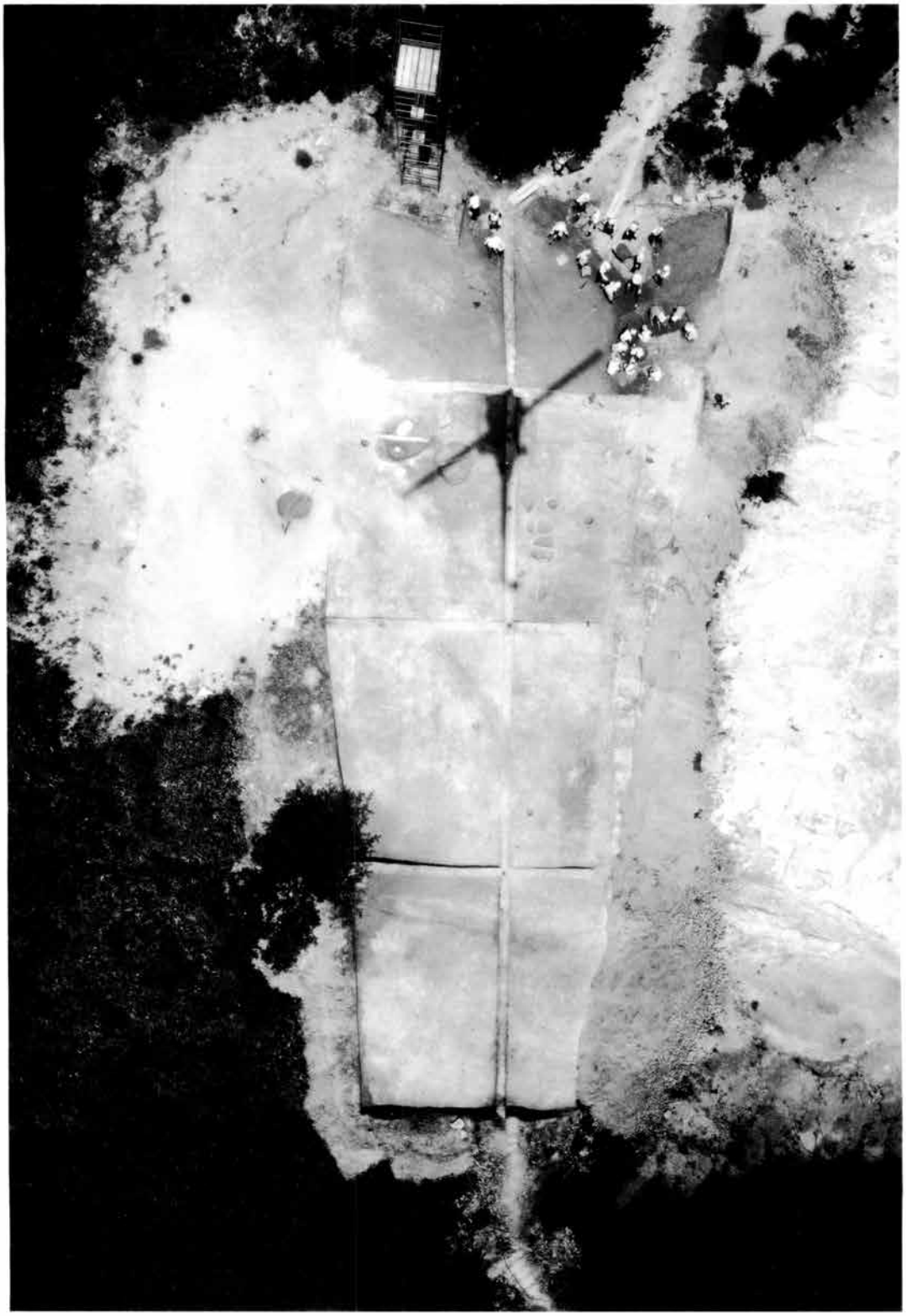
鉢伏茶臼山遺跡が軍事上の必要から生まれた古代の高城とみるならば、少くとも同遺跡の時期（塚崎II新式）に併行する加賀・能登の諸集落も緊張下に置かれていた筈であり、これが何等かの形となって現われているべきである。弥生後期後半以降に顕著となる台地・丘陵への集落占地をこのような視点で考えてよいのではあるまいか、少くとも標高20m程度以上を測り、集落の周りに比較的急峻な傾斜面を伴う場合はとくに防衛的な配慮の有無を検討すべきである。奥原遺跡・国分高井遺跡など邑知平野北部の諸遺跡もそうであるが、北加賀の代表的集落跡である金沢市塚崎遺跡などについてもその可能性が強いとみている。玉作りで象徴される一見平穏な集落生活の中に、集落防衛に気を配らざるを得ないような緊張感をも伴っていたのではなかろうか。そして、このような社会的緊張を経た結果として出現したのが方形台状墓であり、そこには、細口源田山から吉原七ッ塚にかけてみられたやや停滞的な社会状況から大きく変容したことが示されているのである。

（橋本澄夫）

図版1

航　空　写　真（セントラル航業㈱撮影）

図版2



奥原縄文遺跡航空写真（セントラル航業㈱撮影）

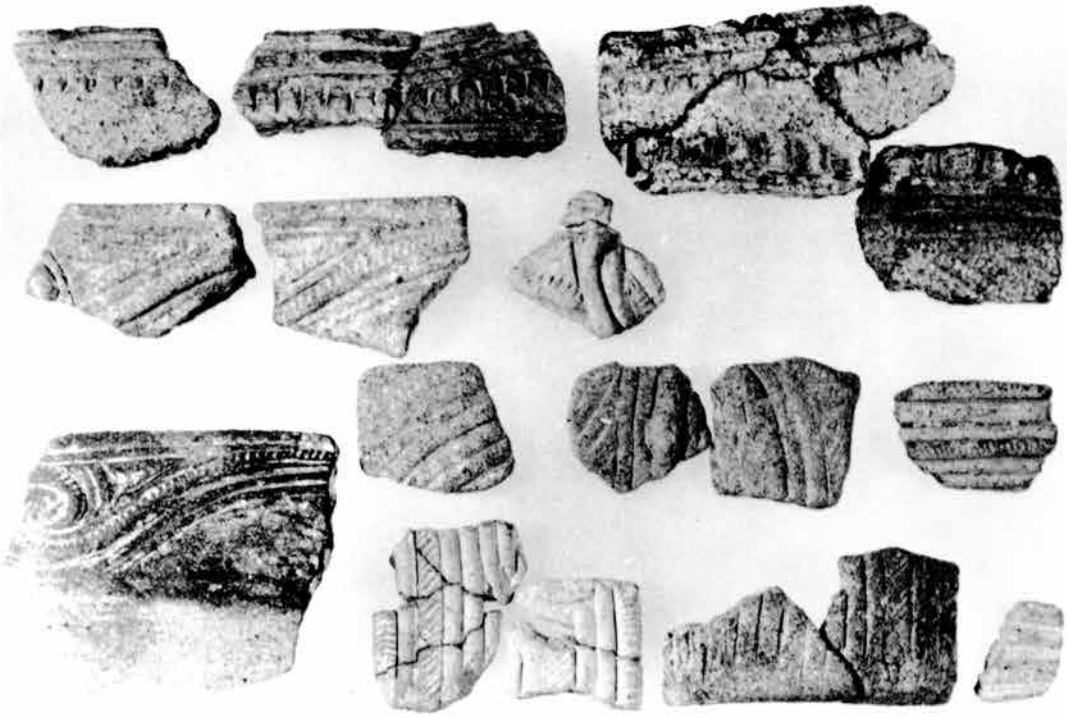
遺　跡　近　景（南からのぞむ）

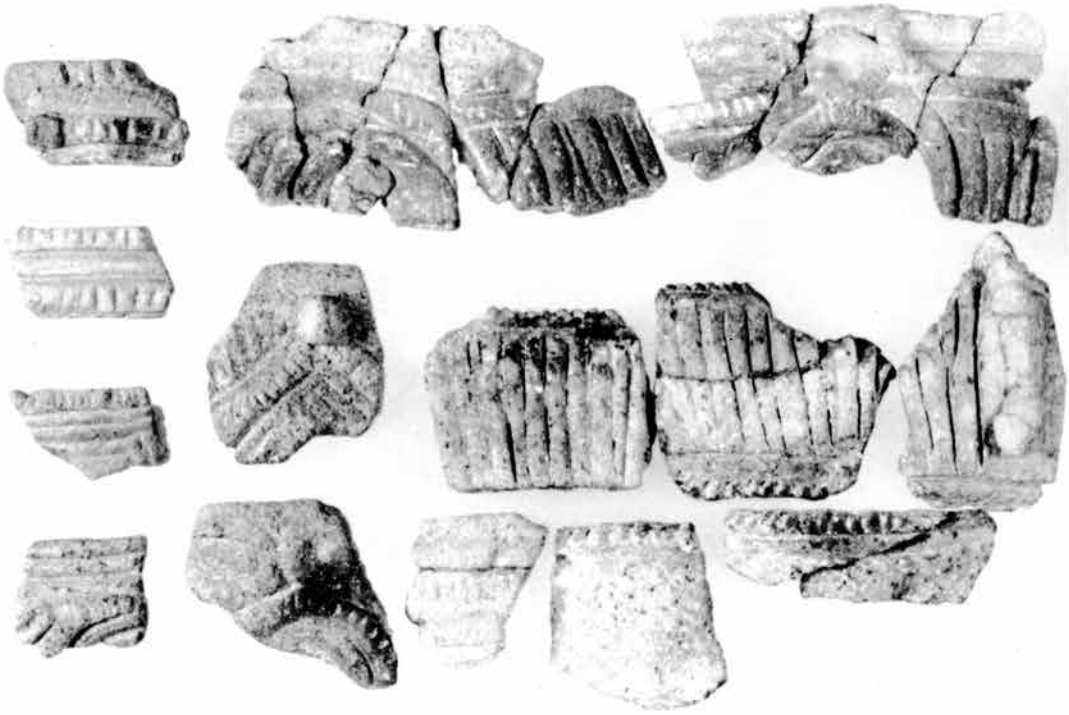
調　査　風　景（北からのぞむ）

図版4

遺　跡　全　景（北からのぞむ）

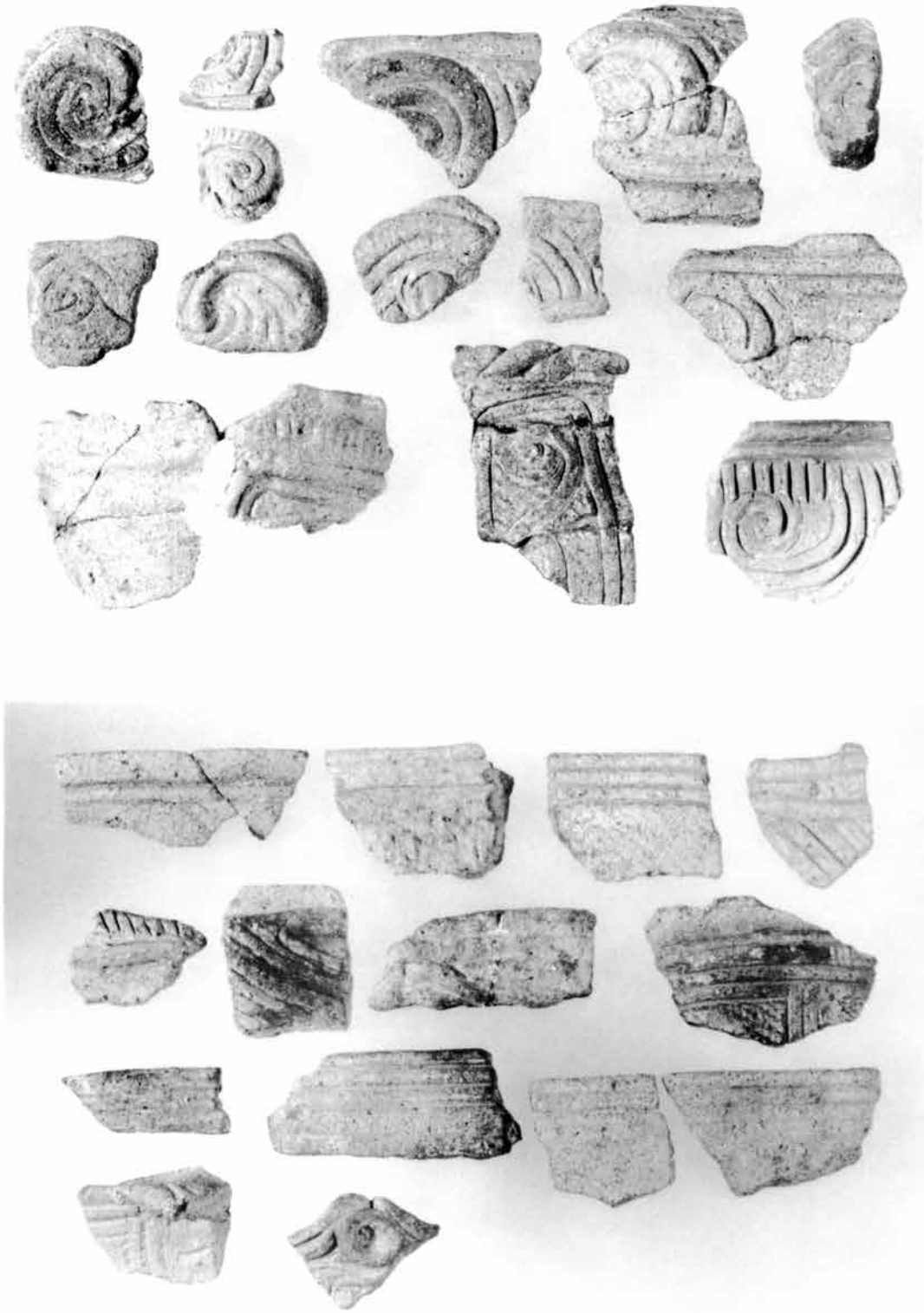
第　3　号　土　坑



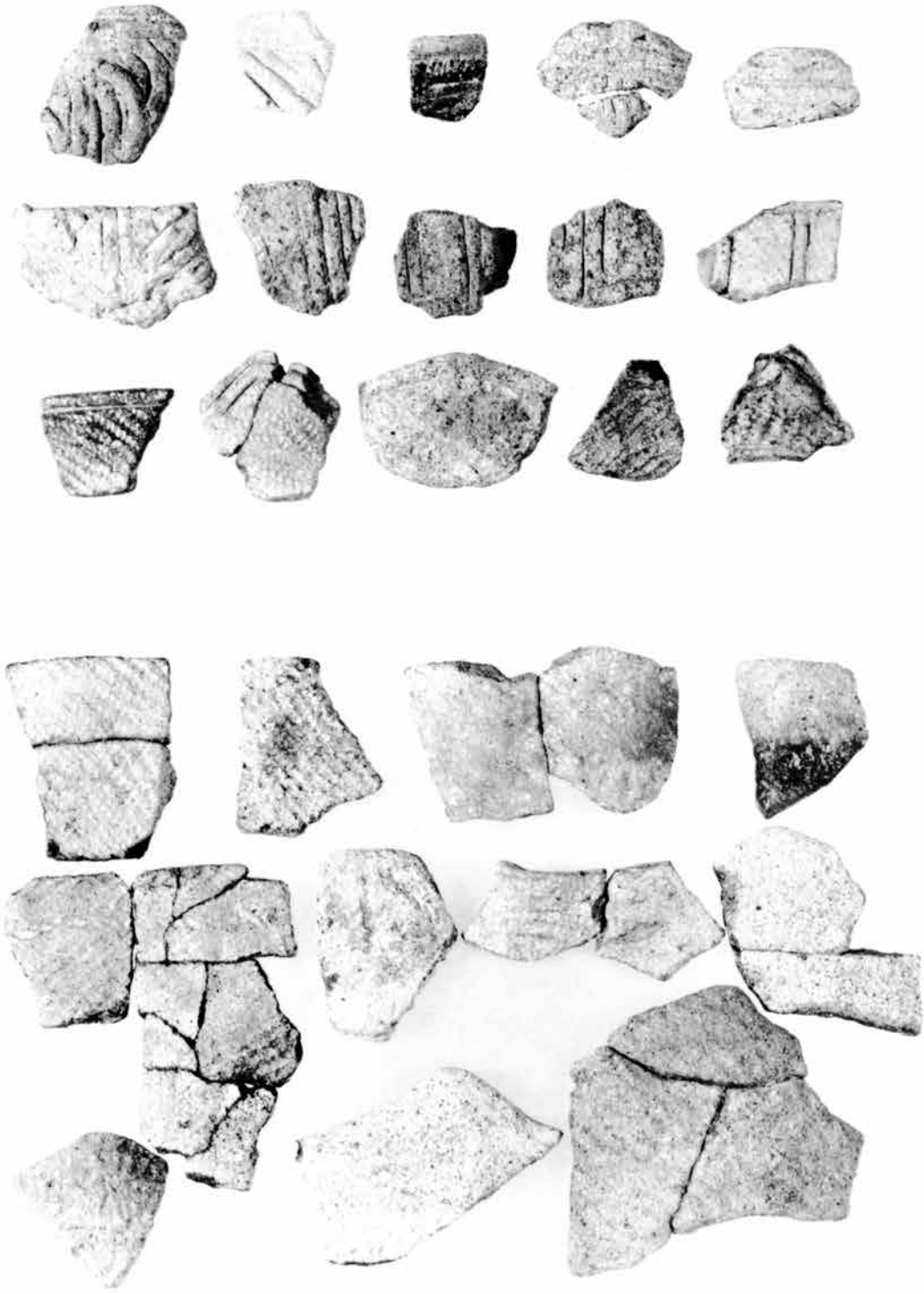


縄　文　土　器（1）

図版6

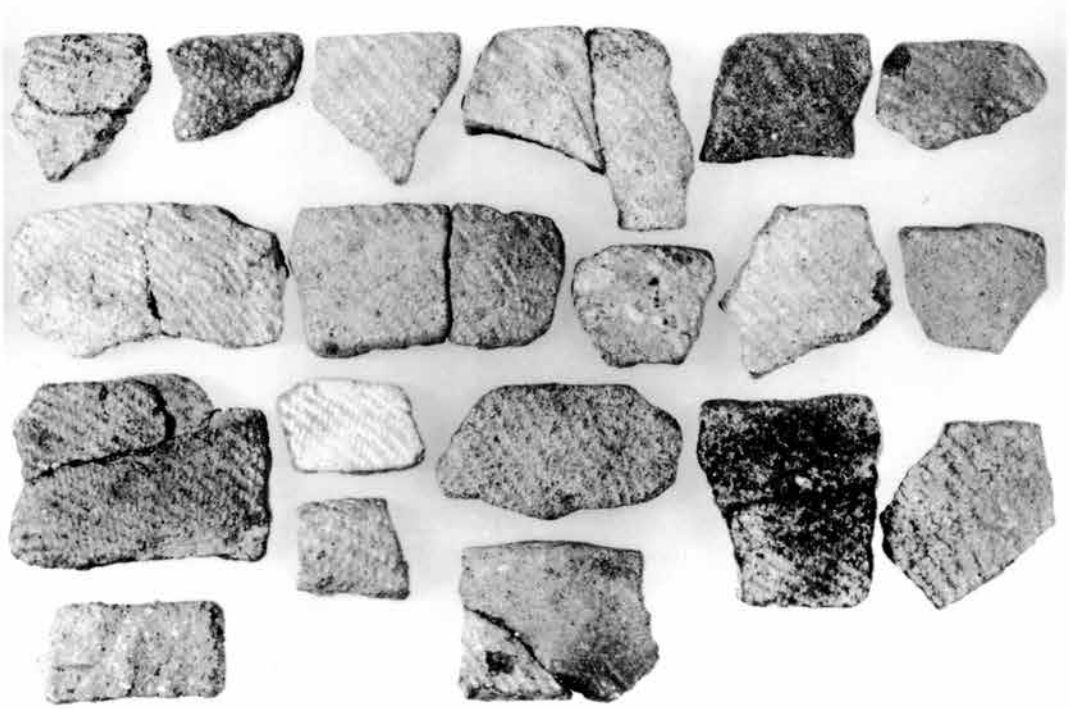


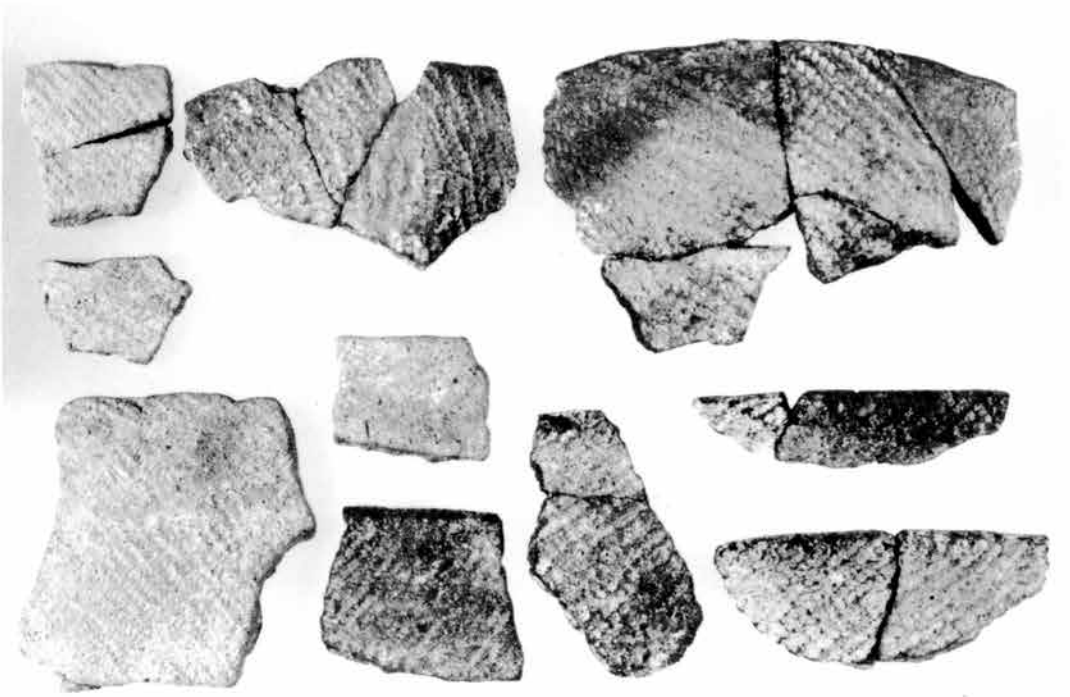
縄　文　土　器（2）



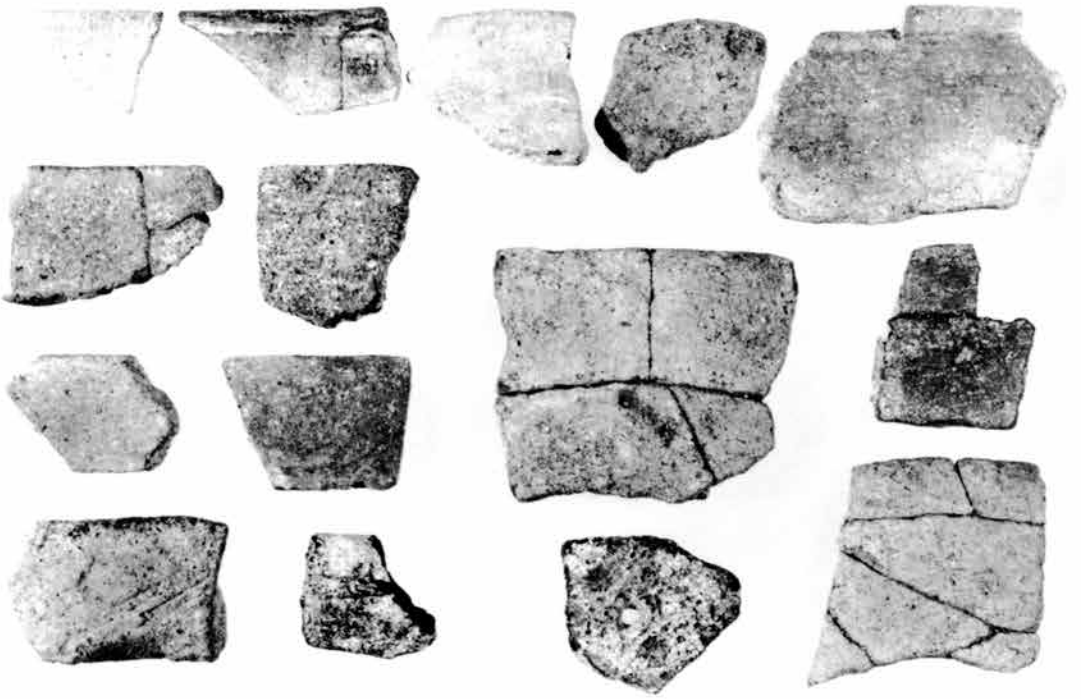
縄　文　土　器（3）

図版8



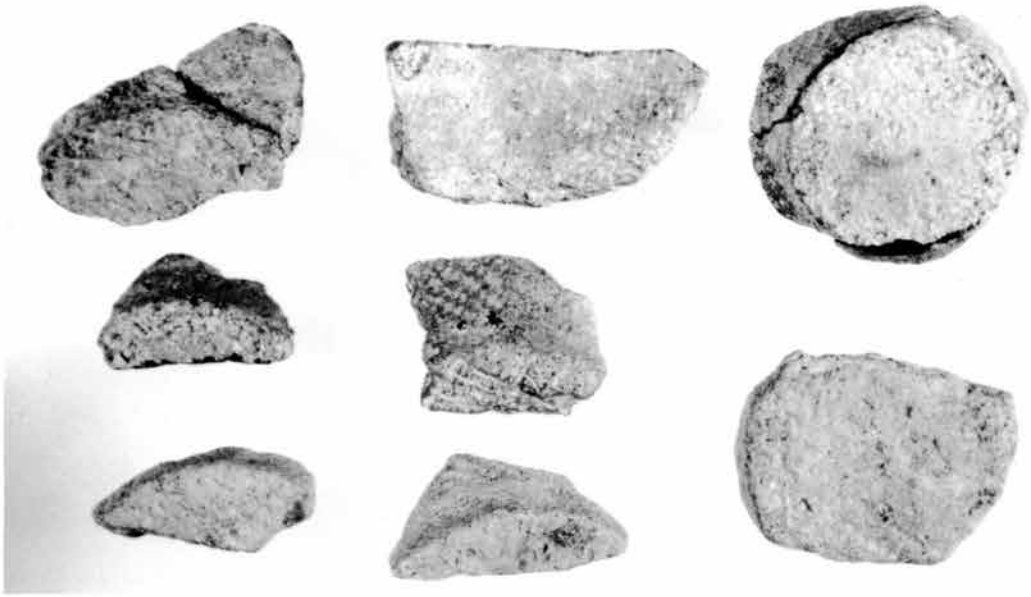


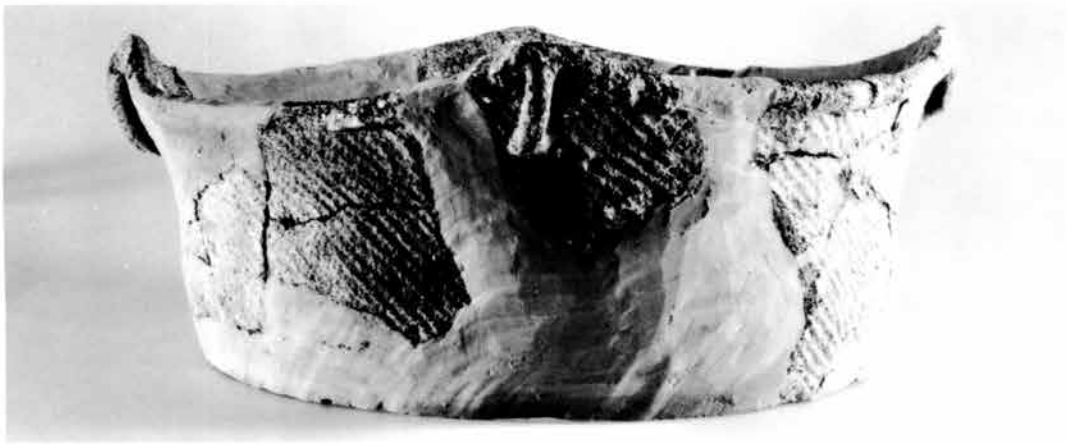
縄　文　土　器（4）



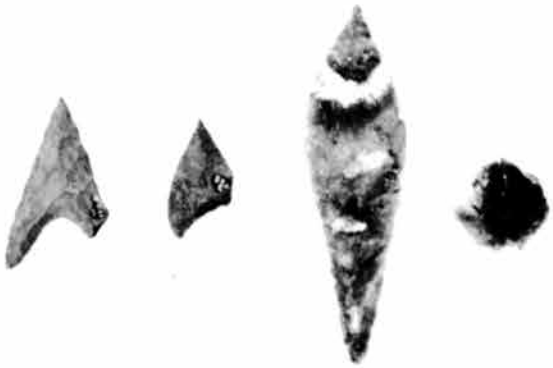
縄　文　土　器（5）

図版10



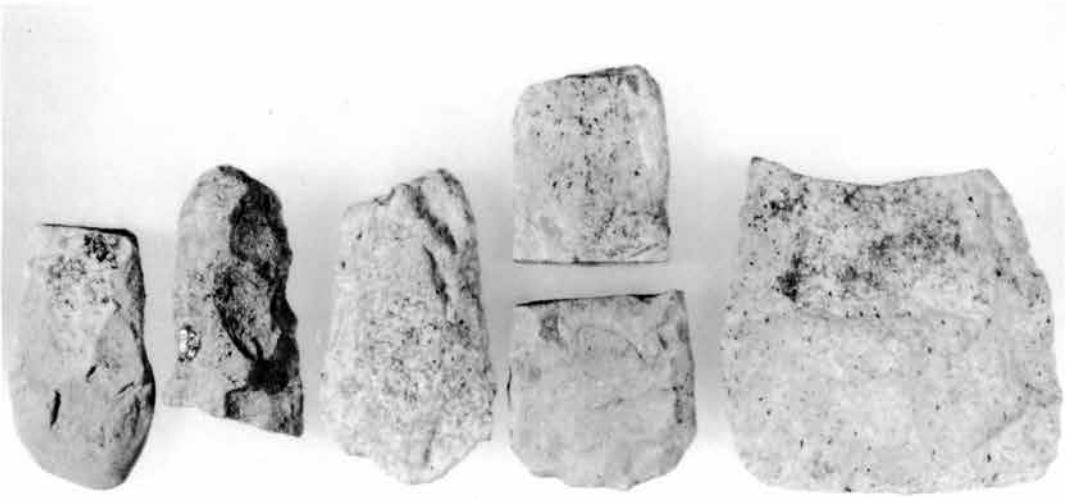


縄　文　土　器（6）



石　　器（石鏃・石槍・石核・磨製石斧）

図版12



石　　器（打製石斧・磨石・凹石・敲石・石皿）

奥原遺跡全景（セントラル航業㈱撮影）

遺跡遠景（東からのぞむ）

図版14

遺　跡　遠　景（西からのぞむ）

遺　跡　近　景（西をのぞむ）

遺　跡　近　景（北をのぞむ）

遺　跡　近　景（北からのぞむ）

図版16

発　掘　風　景

発　掘　風　景

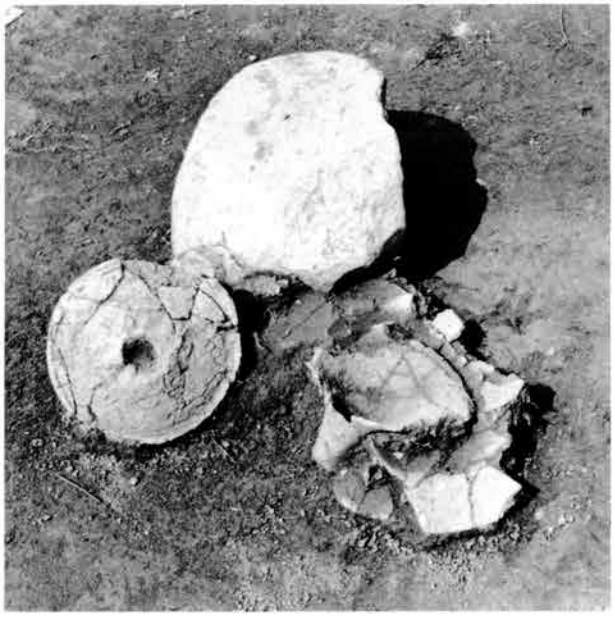
発　掘　風　景（ピットの発掘）

発　掘　風　景（住居址の発掘）

第１号住居址

第１号住居址土器出土状況

第２号住居址



第２号住居址土器出土状況

図版20

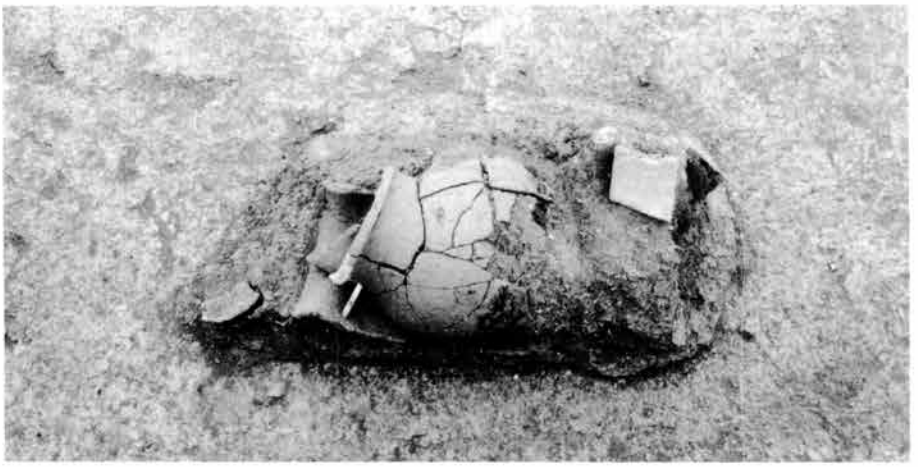
ピット群全景

ピット群全景

第 3 号住居址全景

第 3 号住居址全景

図版22



第3号住居址土器出土状況

第 4 号住居址全景

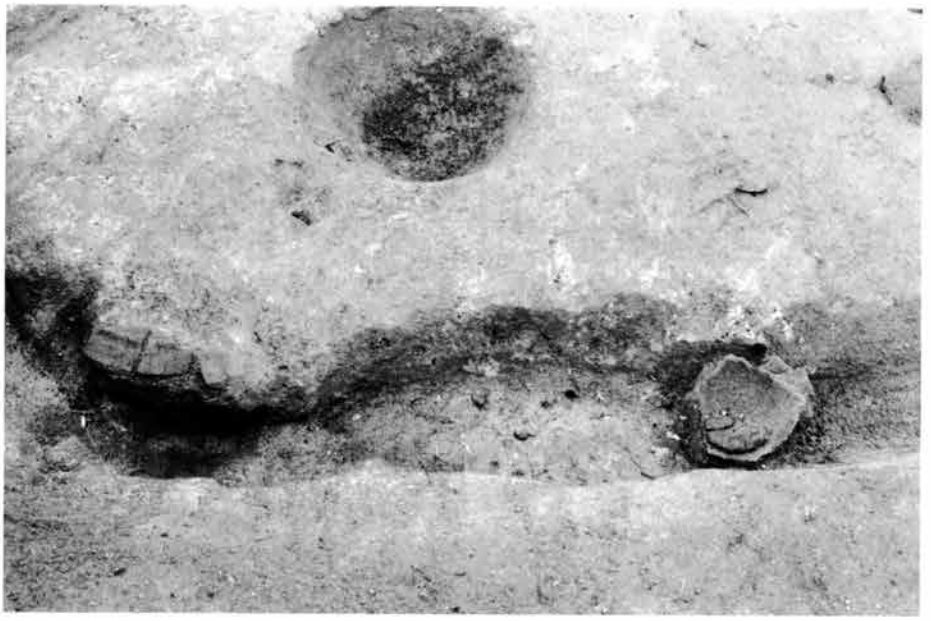
第 4 号住居址全景

第4号住居址土器出土状況

同上　外郭溝断面

同上　土器出土状況

第 6 号 住 居 址 全 景



同上　土器出土状況

第 7 号 住 居 址 全 景（南からのぞむ）

第 7 号 住 居 址 全 景（北からのぞむ）

第7号住居址調査風景

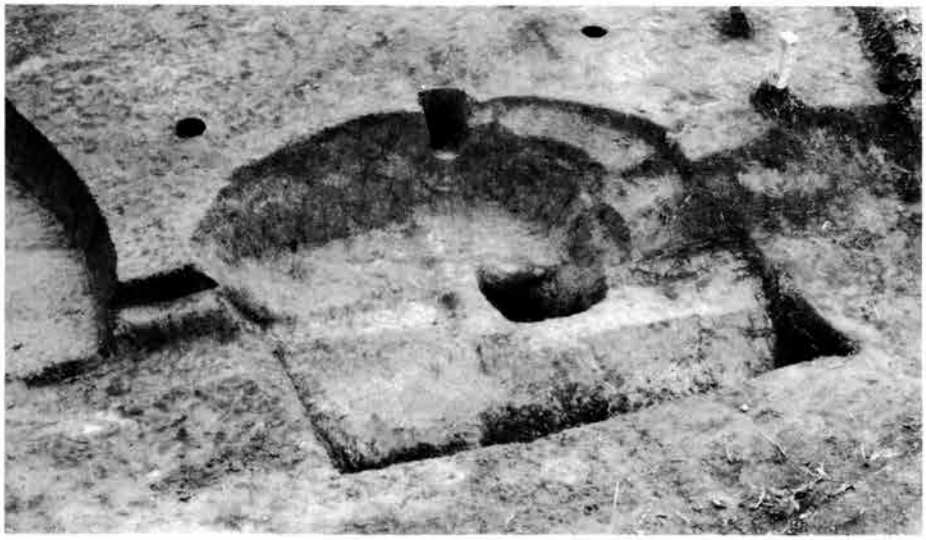
同上　床面上検出状況

同上

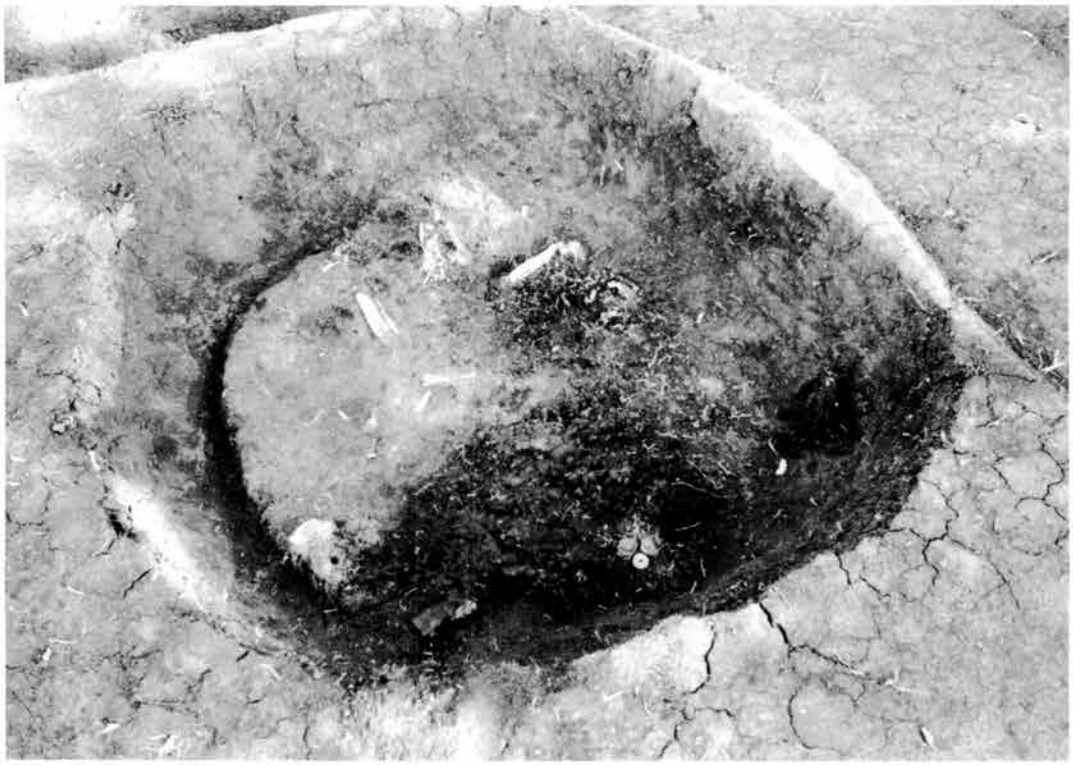
第7号住居址外郭溝内土器出土状況

第1号土坑

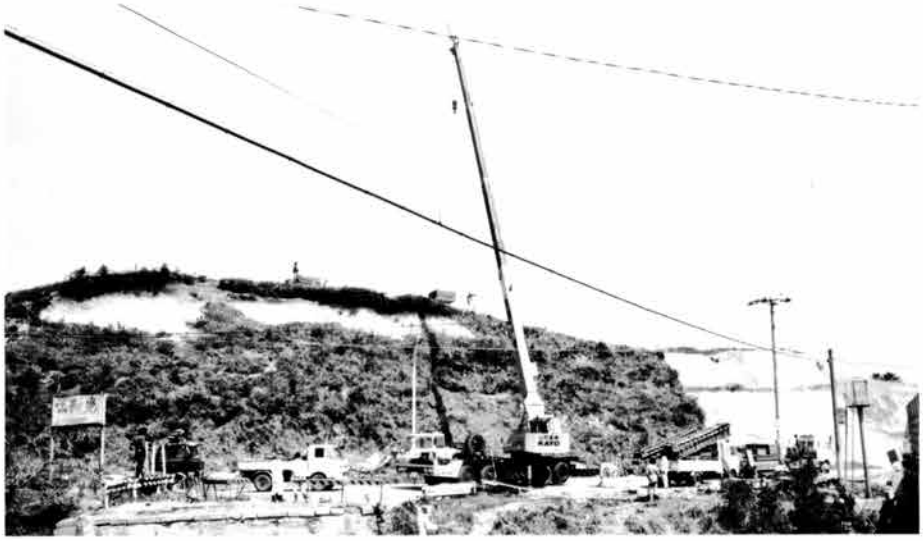
第2号土坑



同上



近世の火葬墓検出状況



調査の記録（器材搬入）

（丘陵裾部試掘トレンチ）

（表土除去）

図版32

調査の記録（遺構検出）

（住居址発掘）

（航空測量）

35－5

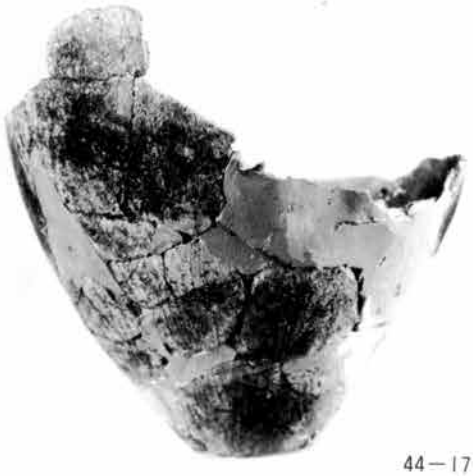
29－13

43－1

43－13

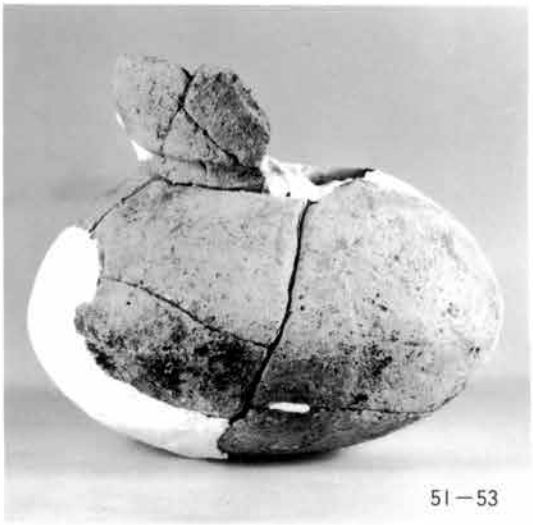
出　土　土　器（甕、台付壺）

43－10



44－17

55－136



51－53

48－8

51－52

出　土　土　器（甕、壺）

39－11

39－12

29－9

出　土　土　器（鉢）

図版36

35－12

36－35

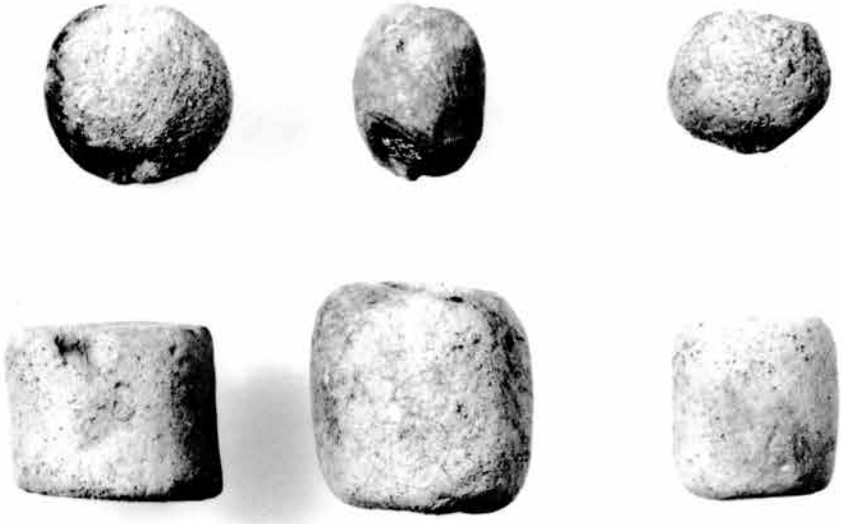
54－104

出　土　土　器（鉢、器台）

52－75

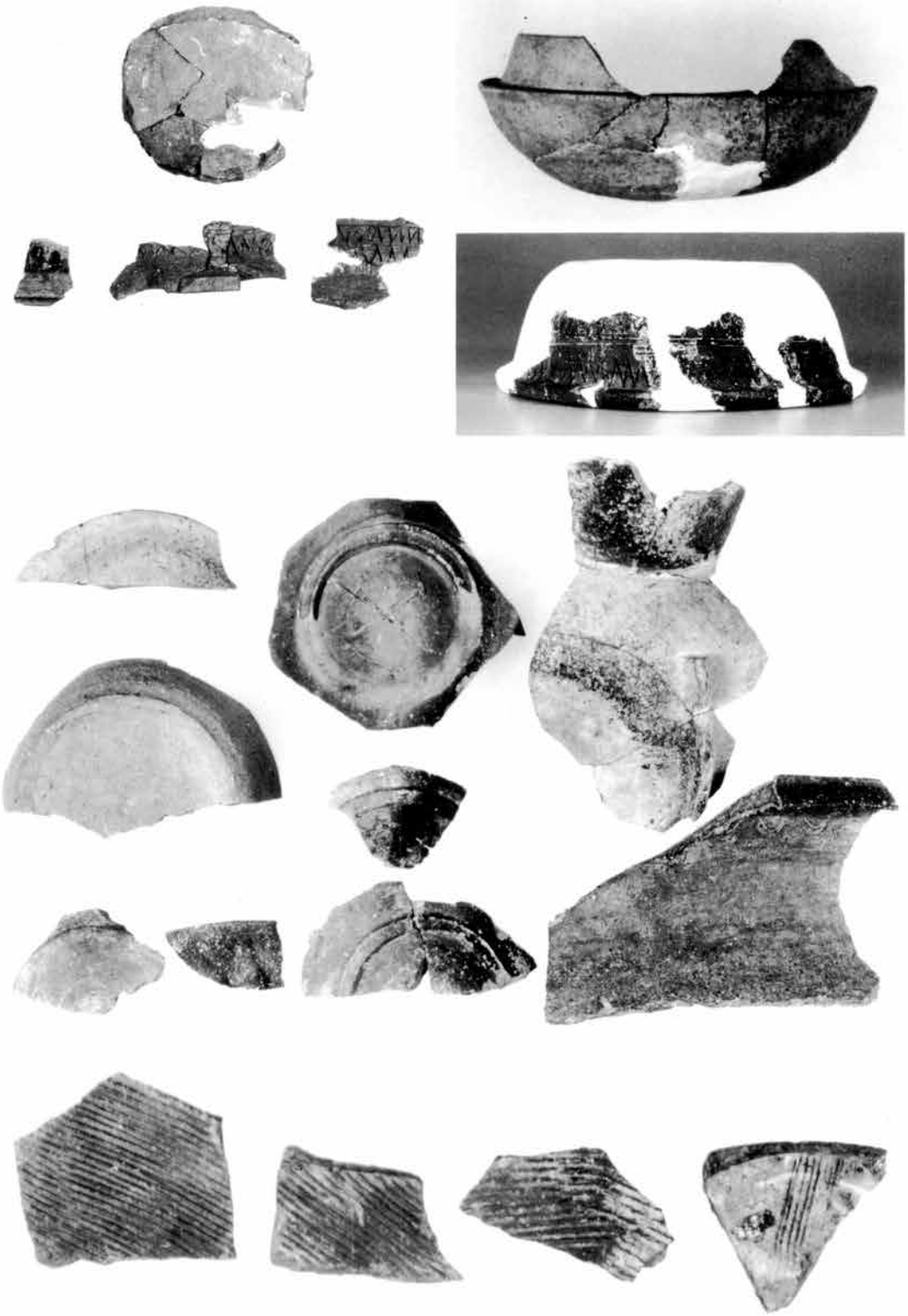
39－16　53－85

59　37－1・2



出土土器（高坏）スタンプ文、管玉、土錘

図版38

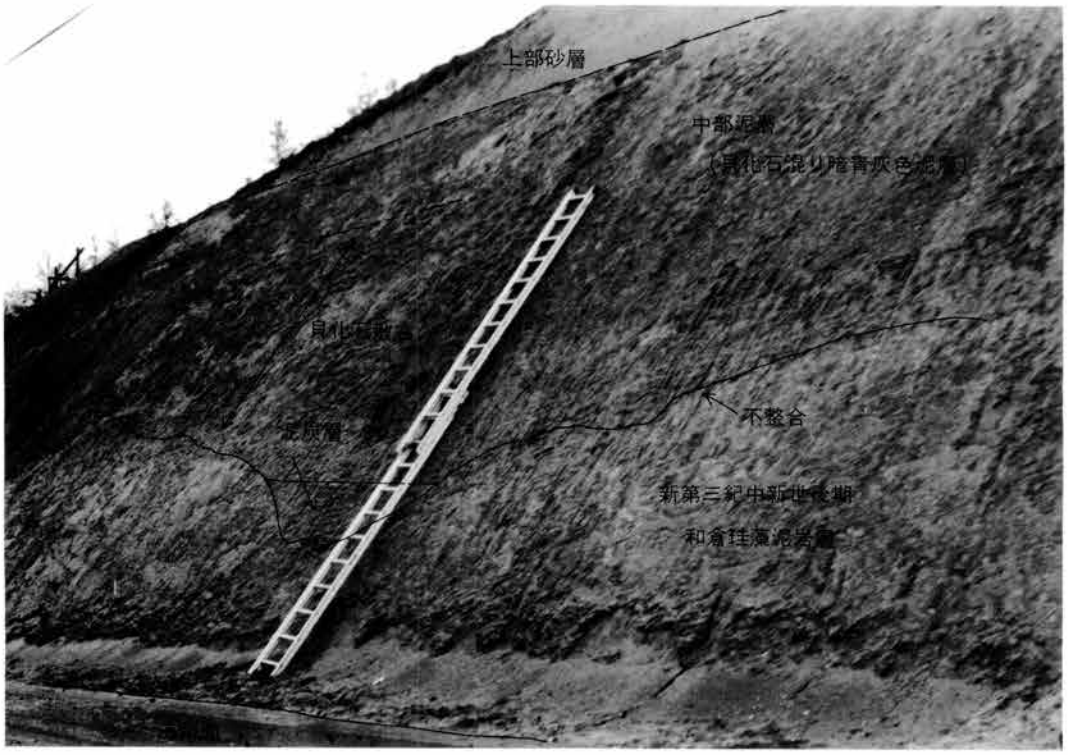


須恵器・珠洲焼

第5章　写真1　露頭写真（新第三紀中新世の和倉層―下部4分の1―と更新世後期の奥原層）

図版40

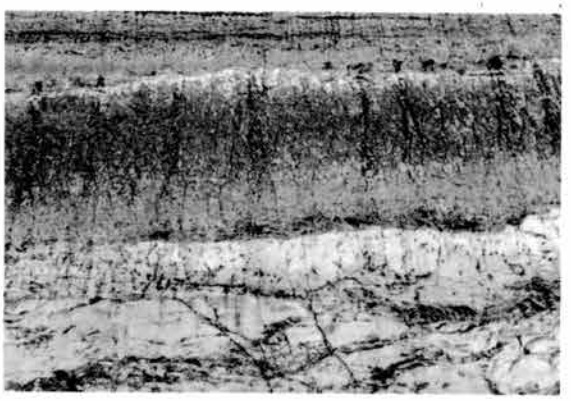
第５章　写真２　露頭写真　（写真１の左―西―側）、不整合より上が奥原層。



第５章　写真３　露頭写真　（写真２の左―西―側）、不整合より上が奥原層。

← 不整合面上の基底礫層

不整合面上の泥層 →

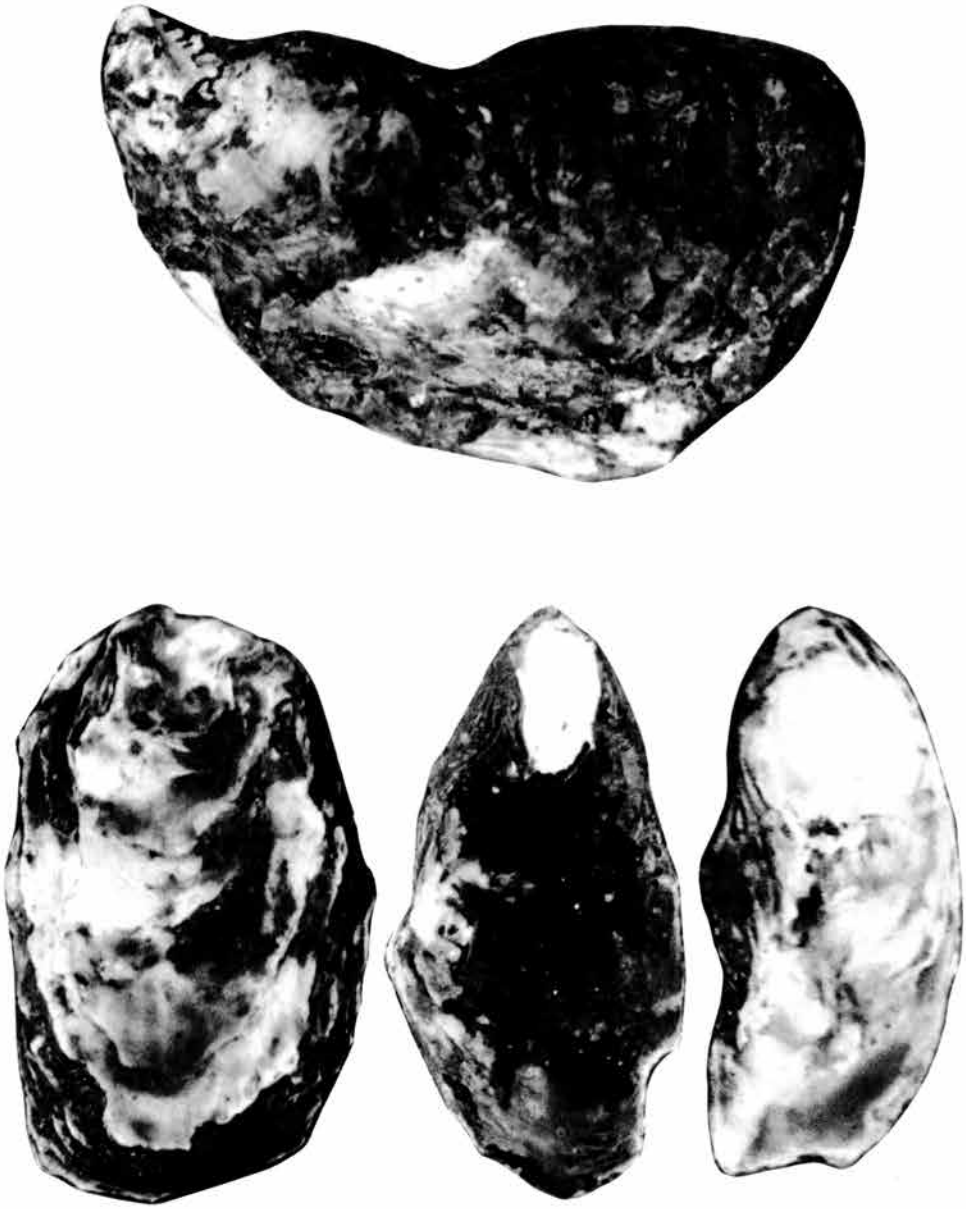


不整合面凹部の泥炭層 →

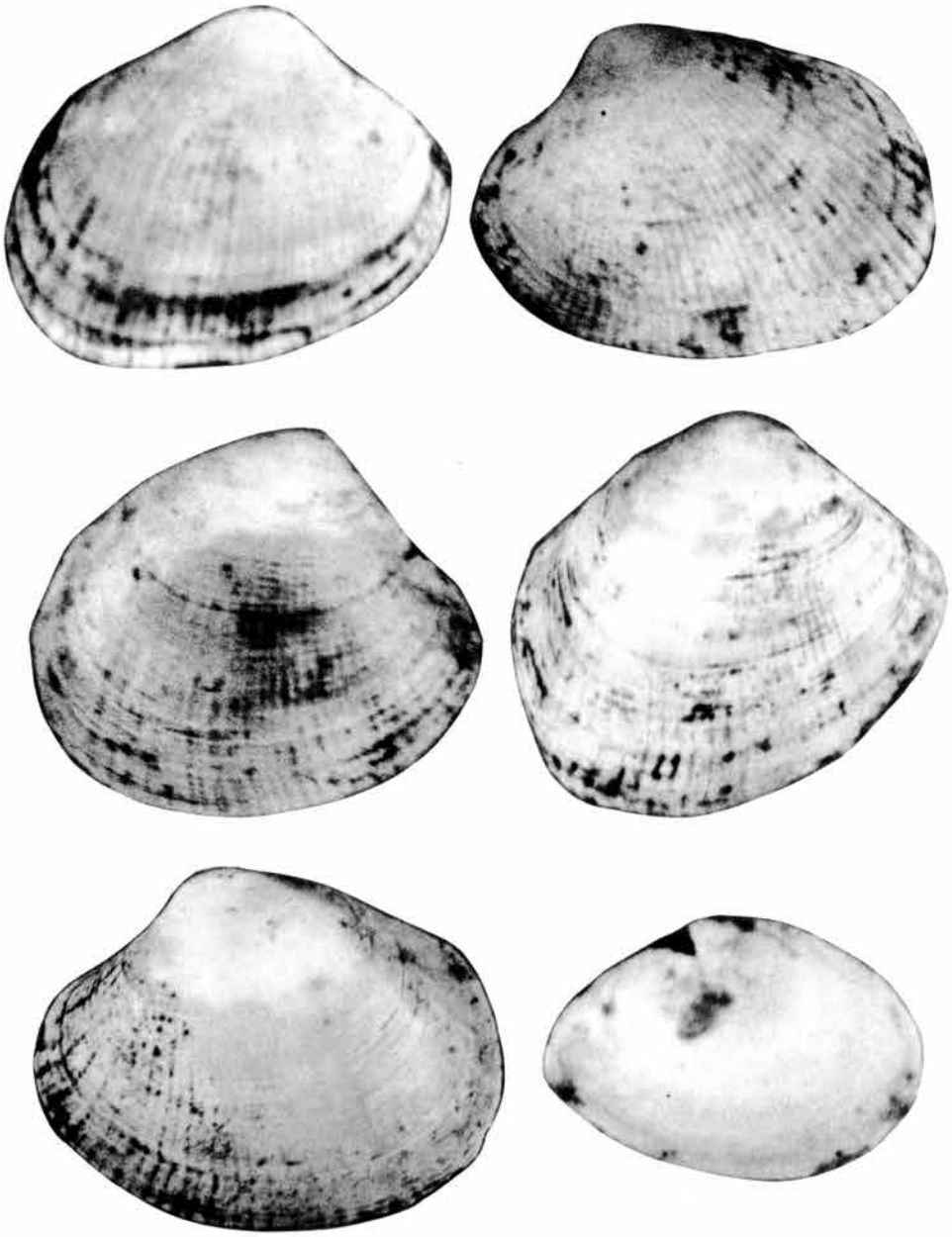
第5章　写真4　新第三紀中新世後期の和倉珪藻泥岩層(各写真の下部)
とそれを不整合におおう第四紀更新世後期の奥原層

第5章　写真5　更新世後期奥原層の中部泥層中に散在する二枚貝化石

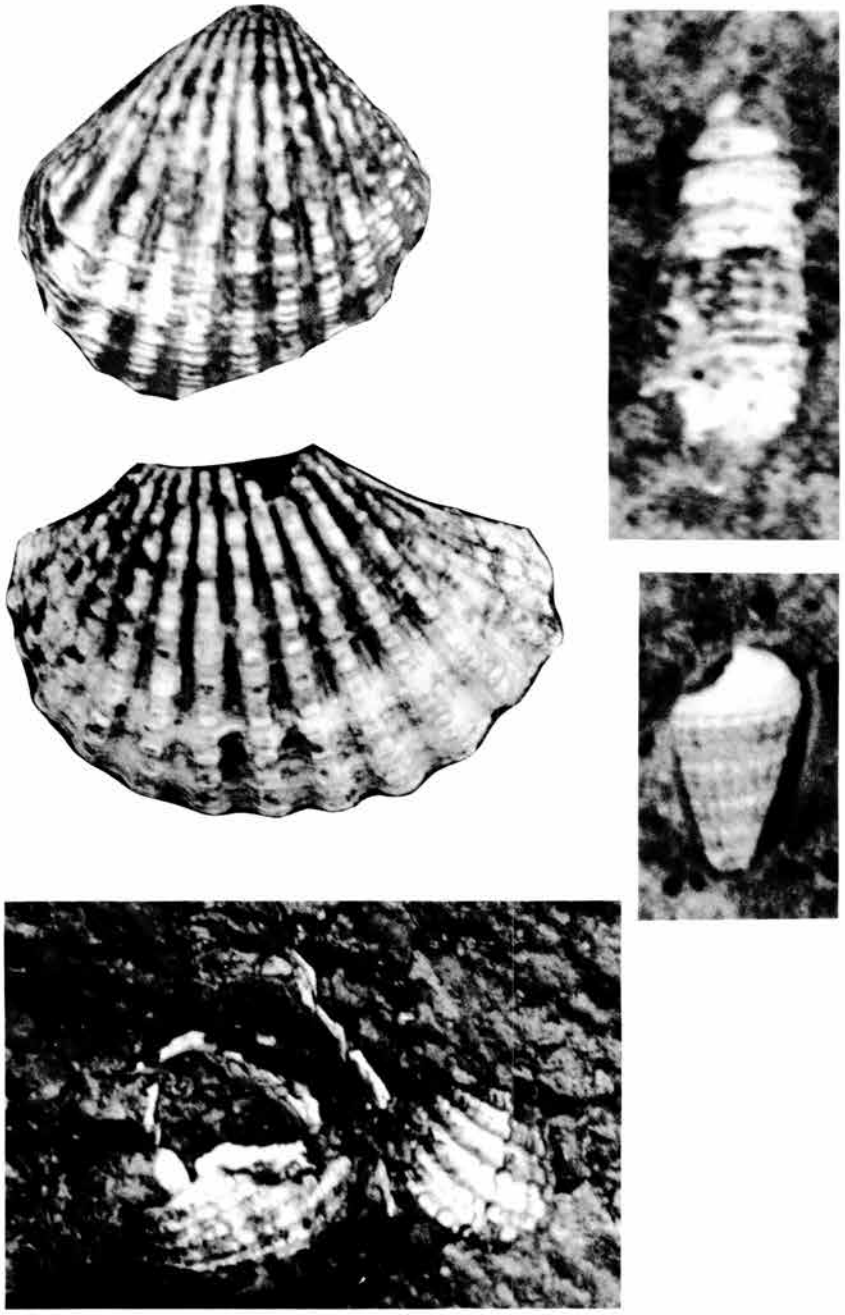
第5章　写真6　更新世後期奥原層の上部砂層の暗青灰色シルト質砂層



第5章　写真7　*Crassostrea gigas* の化石



第5章　写真8　右下：*Macoma tokyoensis* の化石
その他は *Tapes philippinarum* の化石



第5章　写真9　左側上・中・下：*Anadara granosa bisensis* の化石
右上：？ *Praclava pfefferi* の化石
右下：？ *Cerithideopsilla djadjariensis* の化石

七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡

県道能登島和倉線改良工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日　1982年3月30日

編集者
発行者　石川県立埋蔵文化財センター

〒921 金沢市米泉4—133
電話　0762－43－7692

印刷者　橋本確文堂㈱
〒920 金沢市大手町2－35
電話　0762－61－8221